

愛宕山遺跡

一般国道18号(松井田バイパス)改築
工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

2000

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

愛 宕 山 遺 跡

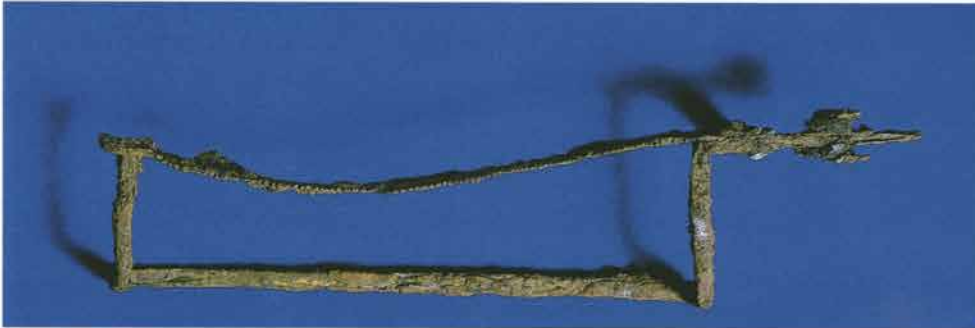
一般国道18号(松井田バイパス)改築
工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

2 0 0 0

群 馬 県 教 育 委 員 会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



第4号住居址出土土器



萬年通寶



腰帶具丸柄

第4号住居址出土鏢



腰帶具巡方

第4号住居址出土小刀

序

愛宕山遺跡は、碓氷郡松井田町松井田愛宕山に所在し、国道18号（松井田バイパス）改築工事に伴い、昭和46年に発掘調査された遺跡です。発掘は、建設省から委託を受けた群馬県教育委員会が行いましたが、この頃は、群馬県の埋蔵文化財保護行政の黎明期であり、群馬県教育委員会社会教育課の一係に文化財保護係が置かれ、その体制に、現在とは隔世の感があります。

発掘調査の結果、6軒の古墳時代から平安時代にかけての住居址が確認されましたが、特に火災にあった第4号住居址からは、土師器・須恵器のほか鋸・鑿・鉈・鎌・錐・紡錘車等の鉄製品が出土しているのが特徴です。発掘当時から古代の技術者集団の集落の一部として注目を集めた遺跡であります。

その後、諸般の事情で、体系的な整理作業が行われず今日に至っておりましたが、平成12年度、群馬県教育委員会から委託を受けた(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が整理作業を実施し、この度、報告書が刊行されるはこびとなった次第であります。

この遺跡は、古代の技術を解明できる遺物を出土した遺跡であるとともに、古代の東山道駅路の坂本駅と野尻駅を結ぶ推定経路上の中間に位置することから、当時の中央集権制度を知る上でも重要な遺跡であると認識しています。

このようなことから、この報告書は、考古学研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様の研究にも大いに役立つものと確信しております。

最後になりますが、当時の発掘調査を担当され多くの資料の提供や御教示を賜りました松島榮治先生をはじめ、地元の関係者の皆様、建設省・群馬県教育委員会・松井田町教育委員会の関係者に感謝の意を表し序といたします。

平成13年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例 言

- 1 本書は、国道18号（松井田バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財調査、愛宕山遺跡の報告である。
- 2 愛宕山遺跡は、群馬県松井田町大字松井田字愛宕山1060番地他に所在する。
- 3 発掘調査は、群馬県教育委員会が建設省から委託を受けて実施した。調査担当者及び調査期間は下記のとおりである。

調査期間 1971（昭和46）年7月21日～8月9日

調査担当者 松島榮治（群馬県立前橋工業高校教諭）

調査員 神保侑史（群馬県教育委員会社会教育課文化財保護係）

石塚久則（考古学研究者）

大江正行（駒沢大学学生）

神戸聖語（大正大学学生）

飯野邦彦（群馬県立前橋工業高校教諭）

小林二三雄（群馬県立松井田高校教諭）

上原富次（松井田町立第一小学校教諭）

春原 力（松井田町立北中学校教諭）

萩原公夫（松井田町教育委員会社会教育主事）

調査参加者 大塚幸宏、高橋 丈、永井 誠、坂口 一、飛田野正佳、新保 秀、矢野匡俊、野村勝弘、
稲村 正、清水政幸、茂木隆夫、山崎真二、小林守夫、木村 糾、太田己喜男、岩沼政喜、
大沢三良（以上群馬県立前橋工業高校歴史研究部員）

竹田紀子、中山孝代、柳沢澄子、小板橋恵美子、小板橋島子、梅沢一枝、吉田恵美子、
大野のり子（以上群馬県立松井田高校社会研究部員）

磯貝福七、岸 栄、原田恒弘、平野進一（群馬県教育委員会社会教育課文化財保護係）、
鈴木 哲（群馬県立高崎女子高校教諭）、松井孝宗（駒沢大学学生）

調査協力 建設省関東地方建設局高崎工事事務所碓氷出張所、東鉄工業k.k.高崎支店松井田バイパス作
業所

- 4 本書作成のための整理作業は、群馬県埋蔵文化財調査事業団が群馬県教育委員会より委託を受け、2000（平成12）年4月1日から2000（平成12）年9月29日まで実施した。

- 5 本書作成時の群馬県埋蔵文化財調査事業団組織及び担当者は以下のとおりである。

管理・指導 小野宇三郎／赤山容造／住谷 進／水田 稔・能登 健／坂本敏夫・西田健彦

事務担当 笠原秀樹・小山建夫／須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・森下弘美・片岡徳雄／大澤友治／
吉田恵子、並木綾子、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、
北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田 茂、蘓原正義

文章執筆 VII-2 松島榮治（嬭恋郷土資料館）

I～IV、V-2～4 神保侑史（群馬県立歴史博物館）

VII-1 桜岡正信（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

VI-1 植田弥生（パレオ・ラボ）

VI-2 石田一成（群馬県繊維工業試験場）

V-1・6～9、遺物観察表 徳江秀夫（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

編集 集 徳江秀夫

編集補助 桑原恵美子、須田育美、小池 縁、新井雅子、嶋崎しづ子、田中富美子、
佐藤美代子、田中富子、矢島三枝子、富沢スミ江（事業団整理補助員）

遺物写真 佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

保存処理 関 邦一／土橋まり子／小材浩一、高橋初美（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

6 分析等については以下のとおりである。

石器石材の同定 飯島静夫氏（群馬地質研究会）

繊維の分析 玉村日出隆氏、石田一成氏（群馬県繊維工業試験場）

炭化材の樹種同定 （株）パレオ・ラボ

7 墨書土器の一部については、高島英之氏（群馬県立歴史博物館）に釈読していただいた。

8 発掘調査時の記録類、出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

9 本書の作成にあたり、下記の諸氏、機関から御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表す。

壁 伸明氏（松井田町教育委員会）、平野進一氏、小池浩平氏（群馬県立歴史博物館）、

沖本 弘氏（竹中大工道具館）、松井田町教育委員会、群馬県立歴史博物館

凡 例

1 遺構の挿図中で使用した方位は、磁北である。

2 遺構及び遺物の挿図の縮尺率は各図中に表示した。他と縮尺の異なるものについては、随時その縮尺を付した。

3 挿図中で使用したスクリーントーンは次のことを表す。

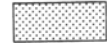
住居竈焼土



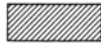
住居床面粘土



住居掘り方



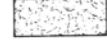
鉄の断面



木質



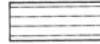
小刀樹皮状炭化物



石の断面



石の磨面



4 第1図は、建設省国土地理院発行の20万分の1地勢図（長野）を、第4図は、同発行の2万5千分の1地形図（松井田）を使用した。第2図は、松井田町発行の2千5百分の1現形図を使用した。

5 出土遺物については、土器を中心に出土遺構ごとに遺物観察表を作成した。観察表の記載については、以下のとおりである。

a 量目の項目中の口は、口径、高は器高、底は底径を表す。また、数値に（ ）のあるものは復元値を、
〈 〉のあるものは残存値を表す。

b 胎土中の砂粒の大きさ及び色調については、農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の『新土色帖』に基づいている。

6 写真図版PL1は、国土地理院発行の空中写真を使用した。

目 次

口 絵
序

例 言
凡 例

目 次
挿図目次

表 目 次
本文中写真目次

写真目次

I 調査経過

1. 調査に至るまでの経過 1
2. 発掘調査の経過（日誌含む） 1

II 遺跡地の自然的・歴史的環境 5

III 発掘調査の方法 11

IV 遺 構

1. 第1号住居址 14
2. 第2号住居址 15
3. 第3号住居址 16
4. 第4号住居址 21
5. 第5号住居址 36
6. 第6号住居址 40

V 遺 物

1. 土器類 43
 - (1) 住居址出土の土器 43
 - (2) 遺構外出土の土器 43
2. 鉄製品 45
3. 銅製品 47
4. 石製品 47

5. 木製品 48
6. 布、繊維製品 49
7. その他 49
8. 縄文時代の遺物 56
 - (1) 土器 56
 - (2) 石器 57
9. 弥生時代の遺物 57

VI 分 析

1. 愛宕山遺跡の第4号住居址出土炭化材の
樹種同定 64
2. 愛宕山遺跡出土繊維についての調査報告
..... 76

VII 成果と問題点

1. 愛宕山遺跡第4号住居址出土土器の再検討
..... 98
2. 愛宕山遺跡の調査成果 103

引用及び参考文献 105

遺物観察表 107

写真図版
抄 録

挿 図 目 次

第1図	愛宕山遺跡の位置	2	第29図	第5号住居址	36
第2図	愛宕山遺跡の位置	3	第30図	第5号住居址出土遺物(1)	37
第3図	愛宕山遺跡の土層堆積状況	8	第31図	第5号住居址出土遺物(2)	38
第4図	愛宕山遺跡周辺の遺跡	9	第32図	第5号住居址出土遺物(3)	39
第5図	愛宕山遺跡の地形と遺構配置	12	第33図	第6号住居址	40
第6図	愛宕山遺跡の遺構配置	13	第34図	第6号住居址出土遺物(1)	40
第7図	第1号住居址	14	第35図	第6号住居址出土遺物(2)	41
第8図	第1号住居址出土遺物	15	第36図	第6号住居址出土遺物(3)	42
第9図	第2号住居址	15	第37図	愛宕山遺跡の調査区配置	43
第10図	第3号住居址	16	第38図	遺構外出土遺物(1-須恵器)	51
第11図	第3号住居址出土遺物(1)	17	第39図	遺構外出土遺物(2-須恵器)	52
第12図	第3号住居址出土遺物(2)	18	第40図	遺構外出土遺物(3-須恵器)	53
第13図	第3号住居址出土遺物(3)	19	第41図	遺構外出土遺物(4-須恵器・土師器)	54
第14図	第3号住居址出土遺物(4)	20	第42図	遺構外出土遺物(5-土師器他)	55
第15図	第4号住居址	21	第43図	遺構外出土遺物(6-縄文土器)	59
第16図	第4号住居址遺物出土状況(1-土器)	23	第44図	遺構外出土遺物(7-縄文土器)	60
第17図	第4号住居址遺物出土状況 (2-石製品・木製品)	24	第45図	遺構外出土遺物(8-縄文石器)	61
第18図	第4号住居址遺物出土状況 (3-金属製品)	25	第46図	遺構外出土遺物(9-弥生土器)	62
第19図	第4号住居址出土遺物(1)	26	第47図	遺構外出土遺物(10-弥生土器)	63
第20図	第4号住居址出土遺物(2)	27	第48図	愛宕山遺跡第4号住居址出土炭化材の産状 と樹種	68
第21図	第4号住居址出土遺物(3)	28	第49図	資料108A 4糸の絡み方	87
第22図	第4号住居址出土遺物(4)	29	第50図	元素分析の結果、資料104	88
第23図	第4号住居址出土遺物(5)	30	第51図	元素分析の結果、資料107	88
第24図	第4号住居址出土遺物(6)	31	第52図	平織りの構造と組織図	89
第25図	第4号住居址出土遺物(7)	32	第53図	斜子織りの例	89
第26図	第4号住居址出土遺物(8)	33	第54図	資料104の組織図	90
第27図	第4号住居址出土遺物(9)	34	第55図	「富寿神宝」との共伴事例	101
第28図	第4号住居址出土遺物(10)	35	第56図	愛宕山遺跡第4号住居址出土土器と相当する土器群	102

表 目 次

第1表	愛宕山遺跡周辺の遺跡一覧	10	第7表	第4号住居址炭化材一覧	50
第2表	住居址出土の土器一覧	43	第8表	縄文時代土器出土一覧	56
第3表	遺構外出土土器一覧	44	第9表	縄文時代石器出土一覧	57
第4表	鉄製品出土一覧	45	第10表	愛宕山遺跡第4号住居址出土炭化材樹種	69
第5表	石製品出土一覧	47	第11表	愛宕山遺跡第4号住居址出土炭化材の用途 別樹種	70
第6表	その他の製品出土一覧	48			

本文中写真目次

図版 1 愛宕山遺跡第 4 号住居址出土炭化材樹種…… 71	図版 9 上 資料103 …………… 93
図版 2 愛宕山遺跡第 4 号住居址出土炭化材樹種…… 72	下 資料104 A.B.C …………… 93
図版 3 愛宕山遺跡第 4 号住居址出土炭化材樹種…… 73	図版10上 資料104 B …………… 94
図版 4 愛宕山遺跡第 4 号住居址出土炭化材樹種…… 74	下 資料104 C …………… 94
図版 5 愛宕山遺跡第 4 号住居址出土炭化材樹種…… 75	図版11上 資料105 …………… 95
図版 6 上 資料104 …………… 90	下 資料106 …………… 95
図版 7 上 資料97 …………… 91	図版12上 資料107 …………… 96
下 資料98(向かって左)および資料99(同右)… 91	下 資料108 …………… 96
図版 8 上 資料100(向かって左)および資料101(同右)	図版13上 資料109 …………… 97
…………… 92	下 資料110 …………… 97
下 資料102 …………… 92	

写真目次

P L 1 愛宕山遺跡の位置	2 第 4 号住居址全景 (南から)
P L 2 - 1 愛宕山遺跡遠景 (碓氷川右岸から)	P L 9 - 1 第 4 号住居址炭化材・遺物出土状況
2 愛宕山遺跡遠景 (調査前、東から)	(東から)
P L 3 - 1 A - I 区 ~ II 区 (南東から)	2 第 4 号住居址炭化材・遺物出土状況
2 A - I 区 (南東から)	(東から)
3 A - II 区北壁土層断面 (西から)	P L 10 - 1 第 4 号住居址遺物出土状況
4 A - II 区北壁土層断面 (南東から)	(鋸周辺、東から)
P L 4 - 1 A - III 区・IV 区各拡張区付近 (北西から)	2 第 4 号住居址遺物出土状況
2 A - I 区 (西から)	(鎌、腰帯具巡方・丸柄、西から)
3 A - III 区・IV 区各拡張区付近 (北西から)	P L 11 - 1 第 4 号住居址遺物出土状況
4 A - IV 区・V 区・VI 区付近 (北西から)	(小刀周辺、北から)
P L 5 - 1 B - II 区 ~ C - I 区北壁土層断面 (西から)	2 第 4 号住居址遺物出土状況
2 B - II 区土層断面 (南東から)	(吊手金具周辺、南から)
3 C - I 区 (南東から)	P L 12 - 1 第 4 号住居址竈検出状況 (南から)
4 C - II 区 (南東から)	2 第 4 号住居址竈検出状況 (南西から)
P L 6 - 1 第 1 号住居址全景 (北東から)	3 第 4 号住居址遺物出土状況
2 第 1 号住居址土層断面 (東から)	(吊手金具周辺、南から)
3 第 2 号住居址全景 (南西から)	4 第 4 号住居址遺物出土状況
P L 7 - 1 第 3 号住居址全景 (南東から)	(須恵器杯 4、北から)
2 第 3 号住居址遺物出土状況 (南東から)	5 第 4 号住居址遺物出土状況
3 第 3 号住居址遺物出土状況 (南東から)	(萬年通寶周辺、南東から)
4 第 3 号住居址竈検出状況 (東から)	6 第 4 号住居址遺物出土状況
5 第 3 号住居址竈検出状況 (北西から)	(萬年通寶、東から)
P L 8 - 1 第 4 号住居址全景 (北から)	7 第 4 号住居址遺物出土状況

- (鑿・鉋、北から)
- 8 第4号住居址遺物出土状況 (鑿、北から)
- P L 13-1 第4号住居址遺物出土状況
(須恵器杯16)
- 2 第4号住居址遺物出土状況
(須恵器長頸瓶29、東から)
- 3 第4号住居址遺物出土状況
(鉄製紡錘車54、西から)
- 4 第4号住居址遺物出土状況
(腰帯具丸鞆78、西から)
- 5 第4号住居址遺物出土状況
(鉄製紡錘車56、南西から)
- 6 第4号住居址遺物出土状況
(鉄斧、北から)
- 7 第4号住居址遺物出土状況
(刀子、南東から)
- 8 第4号住居址遺物出土状況
(石錘周辺、西から)
- P L 14-1 第5号住居址全景 (南から)
- 2 第5号住居址遺物出土状況 (北から)
- 3 第6号住居址電検出状況 (南東から)
- P L 15-1 第1号住居址出土遺物
- 2 第3号住居址出土遺物
- P L 16 第3号住居址出土遺物
- P L 17 第4号住居址出土遺物 (土器)
- P L 18 第4号住居址出土遺物 (土器)
- P L 19 第4号住居址出土遺物 (土器)
- P L 20 第4号住居址出土遺物 (土器)
- P L 21 第4号住居址出土遺物 (金属製品)
- P L 22 第4号住居址出土遺物 (金属製品・石製品)
- P L 23 第4号住居址出土遺物 (木製品)
- P L 24 第5号住居址出土遺物
- P L 25-1 第5号住居址出土遺物
- 2 第6号住居址出土遺物
- P L 26 遺構外出土遺物 (須恵器)
- P L 27 遺構外出土遺物 (須恵器)
- P L 28 遺構外出土遺物 (土師器・その他)
- P L 29-1 遺構外出土遺物 (縄文土器)
- 2 遺構外出土遺物 (縄文土器)
- P L 30 遺構外出土遺物 (縄文土器・石器)
- P L 31-1 遺構外出土遺物 (弥生土器)
- 2 遺構外出土遺物 (弥生土器)
- P L 32-1 バイパス開通後の遺跡 (2000年7月)
- 2 作業風景
- 3 作業風景

I 調査経過

1. 調査に至るまでの経過

群馬県碓氷郡松井田町は、上信国境の碓氷峠にほど近い旧中山道の宿場町である。その地は信濃国から上野国へ通ずる交通の要地として早くから開かれ、古代においては東山道、また近世においては中山道、そして現在では一般国道18号線及び上信越自動車道が通過する地である。一般国道18号線は、高崎市並榎町を起点とし、碓氷峠を経て長野県の上田、長野を通過し、新潟県の上越市で一般国道8号線と接する延長201.6kmの路線である。この18号線が通過する松井田町は、その背後に佐久、荒船、妙義国定公園、上信越国立公園等の観光地を控え、東京と信越を結ぶ幹線道路として、昭和40年代に交通量が増大している。しかも、松井田地内においては国道の車道巾員が7m～7.5mと狭く大型車による交通事故が多発しており、また交通渋滞をもきたしている。

この松井田町区域内における交通事故、交通渋滞の解消を図るため建設省は、1967（昭和42）年度より松井田バイパスの建設に着手し、70（45）年度において用地買収もほぼ終了したので、71（46）年度より工事に着手することになった。

松井田バイパスは松井田町大字松井田字琵琶窪地先から、国道18号線の右側の丘陵性台地を通過し、同町大字新堀地先の松井田警察署の西にて、再び18号線に接するものであり、全長3.7kmである。この松井田バイパス地域は1962（昭和37）年に県下一斉に行った遺跡の分布調査では、その存在が確認されなかった。そこで再確認のため群馬県教育委員会社会教育課文化財保護係が、バイパス地内の埋蔵文化財の分布調査を行ったところ、同所字愛宕山及び松井田警察署裏にて、古墳時代及び奈良時代の土師器片が散布していることが確認された。このため建設工事が急がれている愛宕山地内について、工事着工以前に発掘調査を実施し、遺跡の存在の有無を確認し

て、記録保存の措置を講ずることとなった。そこで1971（昭和46）年度に入り、5月より建設省関東地方建設局高崎工事事務所及び同碓氷出張所、群馬県教育委員会社会教育課文化財保護係との間で、遺跡についての取扱い協議が重ねられた。この結果6月30日に、建設省関東地方局長から群馬県教育委員会教育長あて、松井田バイパス地内の発掘を依頼され、事前発掘調査の委託契約を締結し、7月21日より8月9日まで、発掘調査費建設省負担のもとに発掘調査を実施することにした。この間、県教育委員会社会教育課文化財保護係では、

7月6日、発掘担当者松島榮治氏と共に遺跡地の確認、発掘調査の検討。

7月13日、遺跡地写真撮影。

7月14日、バイパス地内にて工事中、古墳一基が発見されたが、破壊がひどく調査をあきらめた。

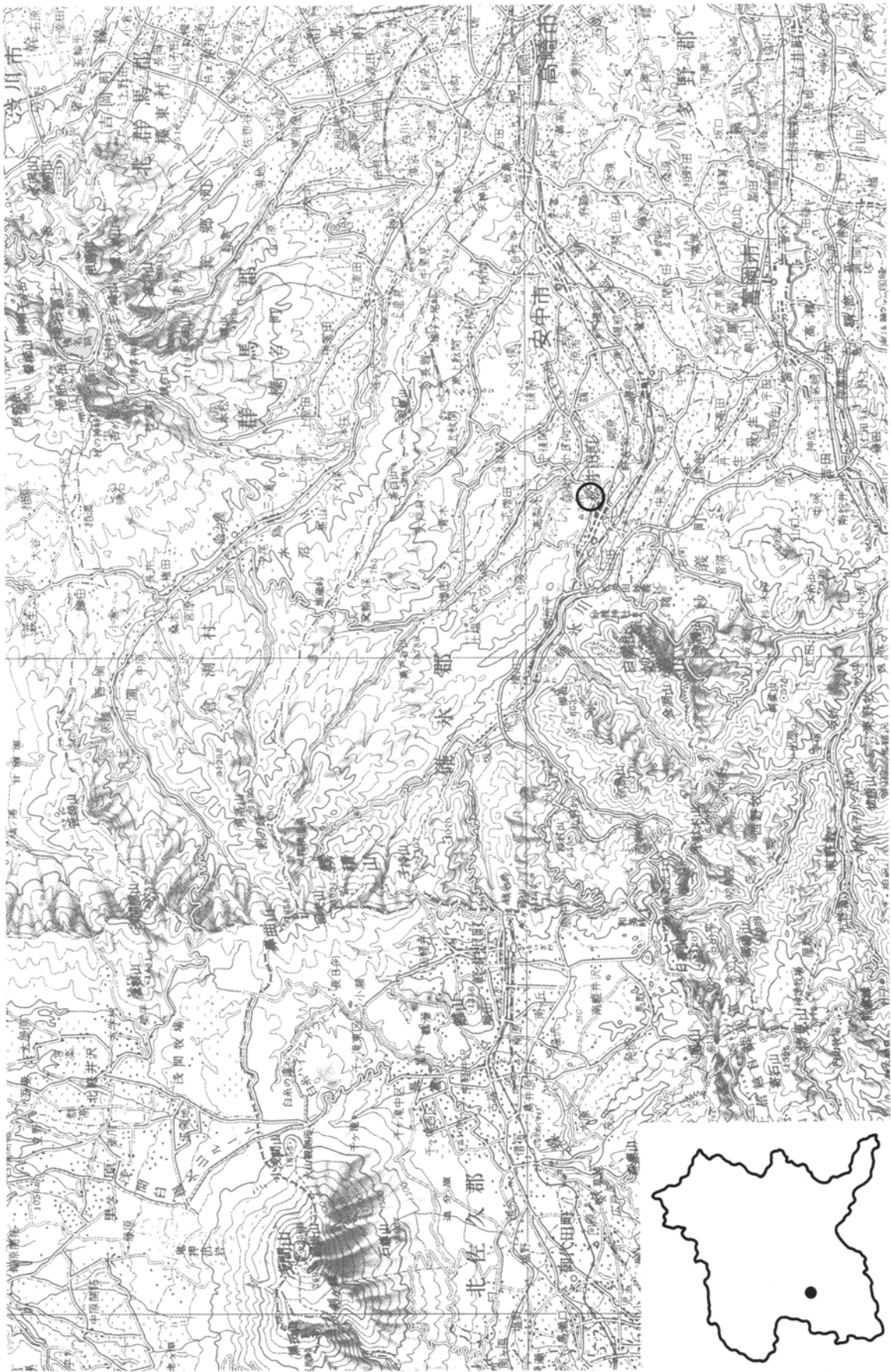
7月20日、発掘調査準備を行う。
等準備をすすめた。

発掘調査は群馬県立前橋工業高校教諭松島榮治氏の担当のもとに、松井田町教育委員会の協力を得て、調査団を編成し、群馬県教育委員会が主体となって実施した。

なお、報告書の刊行については、諸般の都合で刊行が遅れていたが、2000（平成12）年度の過年度公共事業出土品整理事業として群馬県教育委員会が報告書を刊行することとなり、事業を（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託し、調査終了後20年目に整理作業を行って本報告書をまとめた。

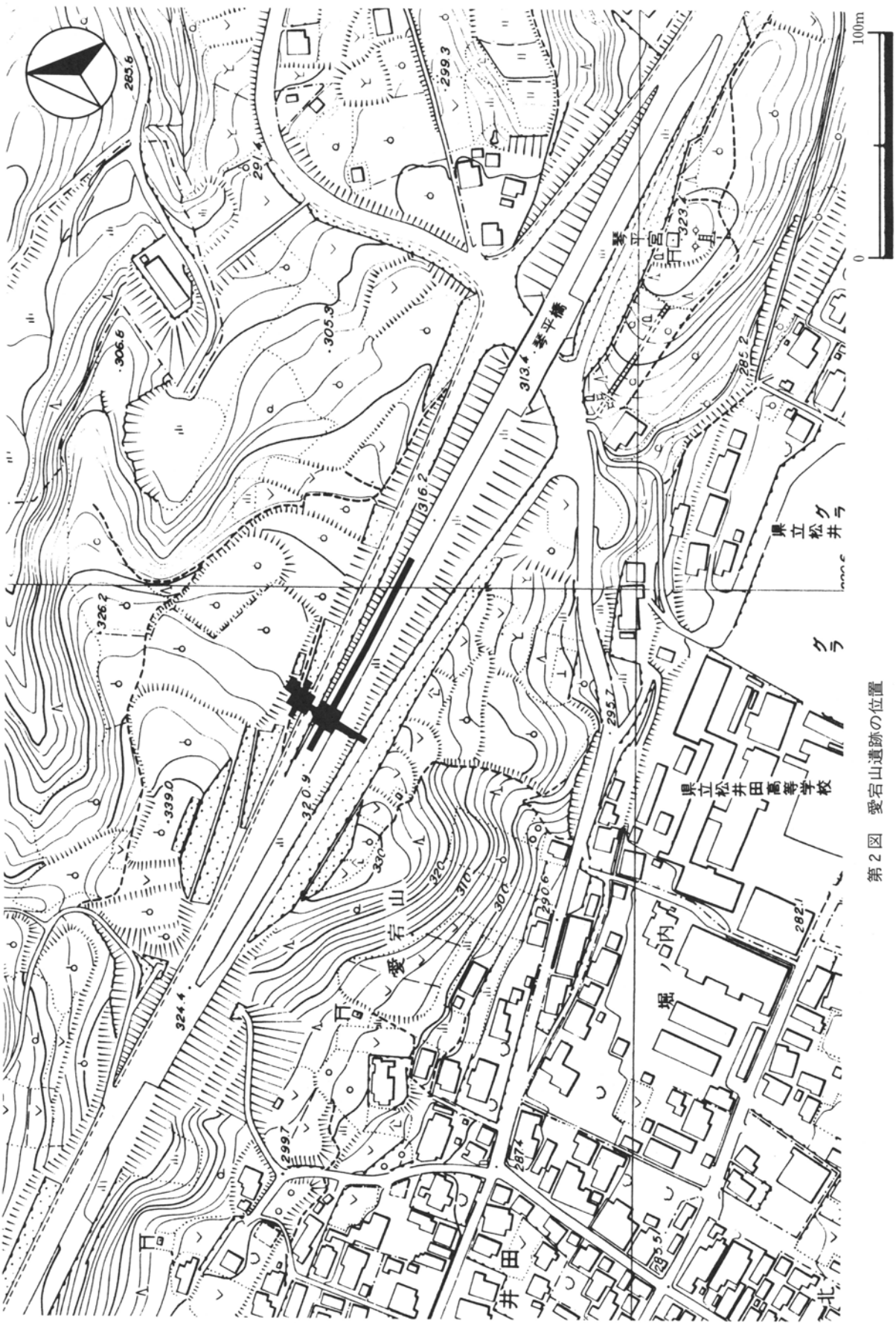
2. 発掘調査の経過

発掘調査は愛宕山遺跡にほど近い、同町の反町旅館を現地事務所及び合宿所として、調査員、同補助員の宿舎にあて、次の日程により実施した。



第1図 愛宕山遺跡の位置

2. 発掘調査の経過(日誌含む)



第2図 愛宕山遺跡の位置

I 調査経過

7月21日(水)、晴

松井田町大字松井田字愛宕山のバイパス予定路線に所在する愛宕山遺跡において、午前10時より発掘関係者が集合し、打合せ会議を行なう。午前10時40分より発掘作業開始、地形測量(1/500)を行ない、A、B、Cの三本のトレンチ(1.5×20m)を設定する。本日はAトレンチをI区、II区に分ち、発掘作業を行なう。A-I区最西端においてローム層の固い面が出る。遺物は土師器片出土。

7月22日(木)、曇時々雨

早朝雨天につき午前10時より作業開始。琴平宮の北側のバイパス建設工事現場で地層の検討を行なう。A-I区において昨日出土したロームの固い面は、人為でなく自然に形成されたものであることが琴平宮北側の地層検討の結果確認される。またA-I区東端において、住居址のカマド跡らしきものが出土する。A-II区についても発掘作業を開始したが、遺構らしきものは出土せず、次にBトレンチについてこれをI区とII区に分ちB-II区について、発掘作業を開始する。

7月23日(金)、雨時々曇

早朝より俄雨が断続的に降り、小雨をぬって作業を行なう。A-I区においては住居址の床面らしきものが出土し、土器片も多量に出土。更に住居址のたちあがりを確認したために、これを第1号住居址と称することに決定。A-II区、B-II区においては遺構らしきものが出土しないので、地層確認のための精査を行なう。今日よりCトレンチをI区、II区に分ちB-II区の発掘作業を行なう。黒色土層中より多量の土師器、須恵器片出土。

7月24日(土)、雨時々曇

早朝から俄雨が断続的に降る。作業は小雨を見て行ないA-II区、B-II区、C-II区の発掘作業を行なう。午後4時降雨の為作業中止。

7月25日(日)、晴

Aトレンチについて、第1号住居址が確認された為、トレンチの拡張を行ないIII区、IV区を設定し作業を行なう。A-I区、A-II区についてはセ

クション実測を行なう(1/20)、B-II区、C-II区については遺構が確認されない為、地層の精査を行なう。

7月26日(月)、雨

雨天のため作業中止。

7月27日(火)、晴

A-I区、A-III区、A-IV区についての作業を行なう。A-IV区の南側で住居址らしきもの出土。A-II区セクション実測、A、B、Cの各トレンチの平板測量を行なう。

B-II区、C-II区の地層の精査。今日より東鉄工業作業員4名、発掘作業に協力する。

7月28日(水)、晴

A-III区、A-IV区において第1号住居址の規模確認のための拡張区を設定し、これを発掘した結果、第1号住居址の規模が確認される。B-II区、C-II区のセクション実測終了。

7月29日(木)、晴

A-III区の拡張区の発掘作業を行ない第1号住居址の南壁、東壁を確認、A-IV区を発掘中、第2号住居址出土。またA-IV拡張区を更に拡張し、表土除去作業を行なう。

7月30日(金)、晴

第1号住居址の全面発掘作業を行なう。A-IV区にて第2号住居址確認。A-IV区セクション実測を行なう。

建設省関東地方建設局高崎工事事務所村上工務係長他見学。

松井田町文化財専門委員、県教委社教課文化財保護係磯貝福七係長見学。

7月31日(土)、晴

A-III区、A-IV区セクション実測。第2号住居址の規模を確認する為にA-V区、A-VI区を設定し、この土砂排除作業をブルドーザーにより実施し、作業を行ったところ、第2号住居址に重複する第3号住居址を発見する。第1号住居址については全面調査を実施したところ重複する住居址の壁を確認し、これを第4号住居址と称すること

2. 発掘調査の経過(日誌含む)

にする。

建設省関東地方建設局高崎工事事務所工務課長、松井田町教育委員会教育長等見学。

8月1日(日)、晴

第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址の全面発掘調査。各住居址の規模確認。第3号住居址調査中、第5号住居址を発見する。前橋市成人学級歴史学科生8名見学に来る。

8月2日(月)、晴

第2号住居址の全景出土する。出土遺物なし。第3号住居址を精査し、ほぼ全景を出す。出土遺物として石製模造品、土師器片等出土。第4号住居址精査、遺構面がかなりはっきりし、遺物が豊富に出土する。

8月3日(火)、晴

第1号住居址床面精査、ピット状遺構出土。第2号住居址平面実測、第3号住居址精査、砥石、鉄製金具、須恵器杯等の遺物出土、第4号住居址床面精査、紡錘車等出土、第5号住居址発掘作業。群大新井房夫教授、西部教育事務所石坂所長等見学。

8月4日(水)、晴

第1号住居址床面精査、第3号住居址平面、断面実測、第4号住居址床面精査、鉈、鋸、楔等の遺物出土、出土遺物については今日から実測を始める。第5号住居址発掘作業を続ける。

8月5日(木)、晴

第1号住居址床面精査。第3号住居址床面精査、

土師器甕完形品出土。第4号住居址床面精査、第5号住居址床面精査、土師器の杯、甕等の遺物出土。第3号、第5号住居址平面実測。

県教委社教課長戸所文太郎他2名、群馬テレビ「碓氷坂」取材のため見学、撮影、西部教育事務所塚越社教課長見学。

8月6日(金)

第5号住居址平面実測、柱穴4個確認。第3号住居址3個確認実測。第4号住居址遺物精査、遺物実測。県立高崎女子高校鈴木哲教諭第4号住居址出土炭化材調査のため見学、調査。

8月7日(土)、晴

第3号住居址、第5号住居址平面実測、第5号住居址基線下断面実測、第4号住居址出土遺物平面実測を行なう。第3号住居址床面切断発掘作業、第4号住居址の出土遺物について一部取上開始中、炭化した建築材の下より万年通寶出土。

8月8日(日)、晴

第5号住居址床面切断発掘作業、同実測を行なう。第4号住居址出土遺物取上げ、同住居址平面、断面実測を行なう。同住居址柱穴発見されず。第1号住居址平面、断面実測を行なう。

8月9日(月)、晴

第1号住居址断面実測を行なう。発掘用具について整理し、撤収を行なう。発掘関係者、協力者各位への発掘終了についての挨拶を行なう。午前3時発掘調査終了する。

II 遺跡地の自然的・歴史的環境

愛宕山遺跡は、碓氷郡松井田町大字松井田字愛宕山に所在する。この地は上信国境にほど近い地域に位置し、旧中山道の宿場町として、古来から交通の要地として開けてきたところである。このことは当然、本遺跡についても直接・間接に関連するものが

あり、改めて本地域の自然的・歴史的環境について触れておく必要がある。

まず、自然的環境についてみてみよう。上信国境の標高約1300mの霧積山系にその源を発する碓氷川と九十九川は、安中市下野尻の地にて合流する。こ

II 遺跡地の自然的・歴史的環境

の両河にはさまれた地域は、上流地域においては標高500m以上の急峻なる山々が連なり、それが中流地域においては標高400m～300m位の丘陵性の山地となる。両河においては、それぞれ河岸段丘を発達せしめている。中流の丘陵性の山地は漸次低くなり、下流地域においては標高200～150mの丘陵性の平坦な台地として舌状に発達し、更には河岸段丘平野も広範となっていつている。

愛宕山遺跡は、この碓氷川と九十九川にはさまれた両河の中流地域の丘陵性の山地に位置する。即ち、遺跡地の南方を流れる碓氷川は、松井田町大字新堀から同二軒在野にかけて大きく蛇行するが、北に蛇行する左岸の河岸段丘上の松井田町街の北方背後にある標高340mの通称“愛宕山”の東南斜面（碓氷川との比高約45m）に位置する。この丘陵性の山地はほぼ南北に約800mにわたる広がりをもっている。碓氷川に面した南斜面の地は、河岸段丘平野に対して急斜面を形成しているが、東南から東にかけては比較的緩い傾斜面となっている。緩傾斜面は現在開墾され、畑地として利用されている。北斜面は九十九川に面する地であるが、丘陵から九十九川にかけて舌状にのびる尾根は比較的、傾斜の緩い斜面で、東南、東同様に畑地として利用されている。舌状にのびる尾根と尾根との間は浸食浸蝕谷が発達し、谷に面した地は急斜面となっている。谷は水田に利用されている。かかる丘陵に位置する遺跡地の最も高い所は標高330m、低い所は310mであり、遺跡はその中間の東から東南にかけての斜面に集中している。遺跡地東端の低い鞍部は、県道松井田～八本松線が走っており、その東は愛宕山同様の丘陵性山地が連っている。

かかる地に所在する愛宕山遺跡の層序は、調査及び愛宕山東方の琴平宮が鎮座する標高322mの殿山の切り通し面の観察の結果、基本的には次のように形成されていることから明らかとなった。即ち

第I層 現耕作土層で、天明3年（西暦1783年）の浅間山大爆発の軽石（As-A）を含む。

第II層 一説にAs-Bと称している浅間火山噴出物。

第III層 黒色土層である。浅間火山噴出物を含む（As-Cか?）、この土層は明度をもって2層に分けられる。上層は黒褐色を呈し、粘質の層である。下層は暗褐色を呈し、浅間火山噴出物を多く含む。

第IV層 ローム層。

である。この内、遺跡地における遺物包含層は第III層中であり、遺構は第III層及び第IV層を切って作られていた。

次に歴史的環境については、本地域が信濃国に対する上毛野国の西の玄関口として、古来畿内と東国を結ぶ交通の要地として開けてきたことは、延喜式その他に見えるところであり、周知されている事実である。このことは既に自然的環境のところで触れたように、霧積山系からのびる標高200～300mの丘陵性の山地の緩傾斜面、碓氷川、九十九川の形成する河岸段丘平野の地は自然条件に恵まれており、古くから人々が居住するのに好適な地域として知られてきている。即ち、この地域では一部の山地を除いては、ほとんどの地域に土器片、石器の散布、出土をみる。

古くは縄文時代前期から晩期にかけての遺跡が存在する。中期から後期の住居の発見された仁田遺跡、暮井遺跡や縄文時代の前期、中期、後期、晩期、弥生時代中期、後期、古墳時代前期、中期の遺物を出土した千駄木岩蔭遺跡は、当該地域では早くに調査が実施された遺跡である。碓氷川右岸では、上信越自動車道の開通に伴い、行田大道北遺跡、八城二本杉遺跡、古立東山遺跡などで縄文時代各期の住居が検出されている。また、八城三日市遺跡や二軒在家東光寺遺跡も当該時代の遺跡として知られている。これに対し、碓氷川左岸では愛宕山遺跡の調査後も遺跡数はあまり増加していない。本遺跡の南東約500mに松井田塚越遺跡があり、敷石住居と考えられる遺構、土坑が検出されている。九十九川流域では、高梨子三次郎遺跡で前期の、下増田上田中遺跡で中期

の、下増田下原遺跡で前期の、国衙森朝日遺跡では後期の住居がそれぞれ検出されている。

松井田町域における弥生時代の遺跡としては上人見遺跡で再葬墓と考えられる遺構から出土した中期の土器群が早くから知られている。他に小竹、こしき平等の各遺跡が知られていたが、近年の調査で、八城二本杉東遺跡で中期の土坑が検出され、上人見遺跡とほぼ同時期の土器が出土している。また、本遺跡に近接する事例としては、国衙遺跡群の調査で、中期後半と後期の住居が各1軒ずつ検出され、沈線文、櫛描文施文の甕、壺が出土している。また、後期になると遺跡数は数を増している。その大部分は、いわゆる“樽式土器”を伴う遺跡である。国衙周辺はそれが顕著である。

古墳時代には初期の文化の様相が、国衙周辺及び入山地区に散見される。中期を経て後期になると碓氷川兩岸、九十九川流域等には古墳群が出現する。人見に所在する塚原古墳群、旧九十九村（大字下増田、小日向、国衙等）に所在する古墳群、近接して安中市郷原に所在する郷原古墳群等その数は多い。しかし、これら古墳はいずれも円墳で、前方後円墳は近接して安中市築瀬字八幡平にある軸長76mの二子塚古墳を見る他は存在しない。円墳の中では下増田上田中遺跡1号墳は、平面T字形プランの横穴式石室を有するもので、6世紀前半の築造と考えられる。前述の築瀬二子塚古墳との関係が注目される。これら古墳を営んだ人々の遺跡も、古墳を中心にしてあまり遠くない所に営まれている。また、この時代この地域に所在する遺跡として、上信国境の入山峠に所在する入山峠祭祀遺跡は、全国的に著名なものであり、古代の東山道を考える上で貴重な遺跡である。

奈良・平安時代の律令体制下においては、本地域は碓氷郡石馬郷と坂本郷に組み入れられたものとみられる。これら郷名は和名類聚抄の上野国碓氷郡の条に「石馬、坂本佐加毛上」と見えており、更に坂本なる名称は、延喜式巻第28の兵部省式に「上野國驛屋坂本十五疋」と見える。坂本の原遺跡では布堀

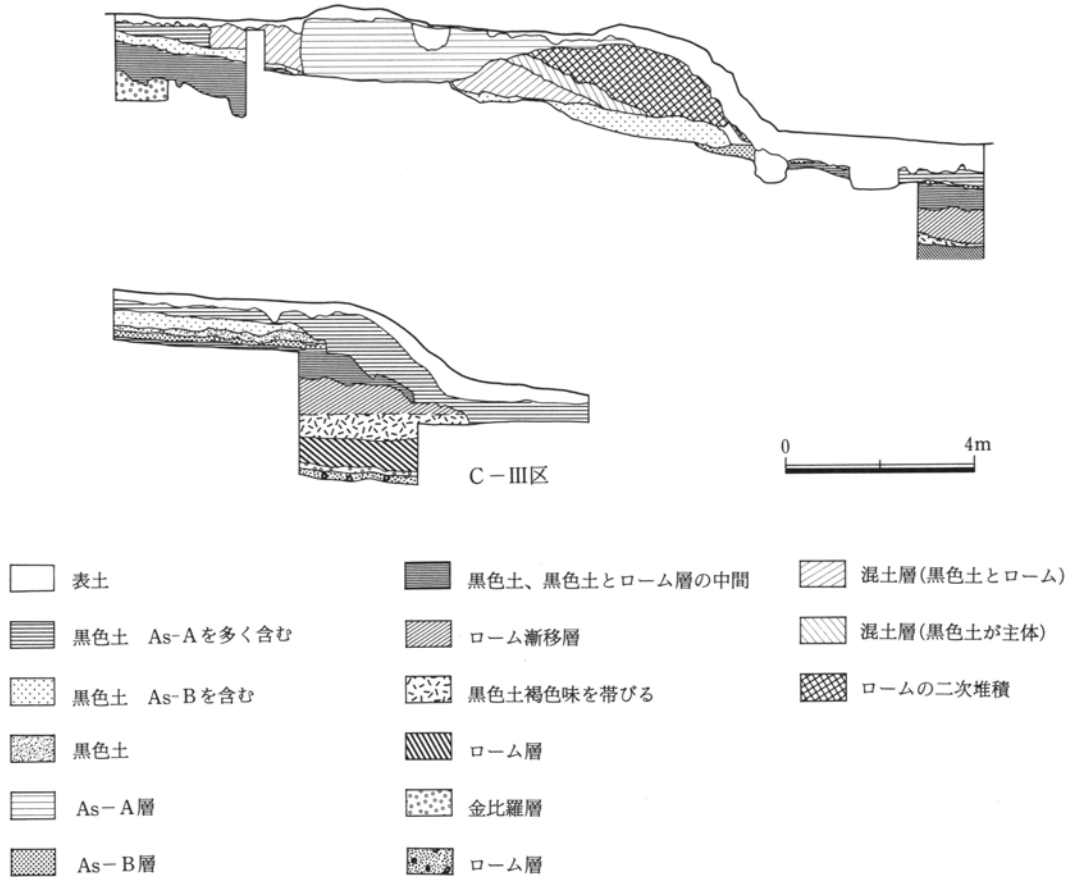
りの掘立柱建物跡が検出され、このことから調査地が坂本駅の一部と想定されている。また続日本紀天平勝宝5年秋七月戊午の条及び同神護景雲元年3月乙卯の条に「坂本公」「坂本朝臣」なる名称がみえる。いずれも碓氷郡に関係あるものである。また、続日本紀天平勝宝元年五月戊寅の条には、石上部氏が上野国分寺建立に功績があり、授位されている。

このように、この時代にはこの地域に坂本氏や石上部氏を中心とする氏族が、居住していたことが知られるのであるが、重要な官道である東山道は、信濃国から上野国へ入った際この地域を通過し坂本、野後、群馬、佐位新田の5駅を経て下野国へ抜けた。坂本駅屋は坂本郷の中に設置されたと考えられている。現に“坂本”なる地名は、大字坂本として碓氷峠の坂下に現存しているし、またここは江戸時代中山道の宿場でもあった。恐らく、坂本郷はこの地域からそう遠く離れないところに存したのであろう。また、石馬郷はこれを具体的に証明する史料は何等ないが、他の碓氷郡内の郷名からして、現在は大字松井田を中心とした地域に比定されている。

この時代の遺跡の調査事例としては、九十九川流域の高梨子三次郎遺跡や下増田天神原遺跡で住居が検出されている。新堀東下原遺跡でも住居が調査されている。また、新堀陣馬遺跡ではAs-B下から水田址を、高梨子碓貝戸ではAs-B下から畠址を検出している。

中世・近世になると松井田なる名称が始めて登場してくる。平治物語を始めとして、碓氷峠の熊野神社の正応5年（1292年）銘のある古鐘（県指定重要文化財）には「松井田一結衆云々」なる銘がみえる。この頃より松井田の名称が使用され始めたのであろう。また、松井田の不動寺には鎌倉時代の作と推定されている不動明王像、観応5年銘（1354年）の石塔婆、桃山期風の手法がみられる仁王門（いずれも県指定重要文化財）がある。室町時代の1487年には安中忠親が、遺跡の西方に続く丘陵性の山並の一峰の虚空蔵山（大字新堀所在）に松井田城を築城したのに始まり、松井田は宿場町としての形態をとり始

II 遺跡地の自然的・歴史的環境



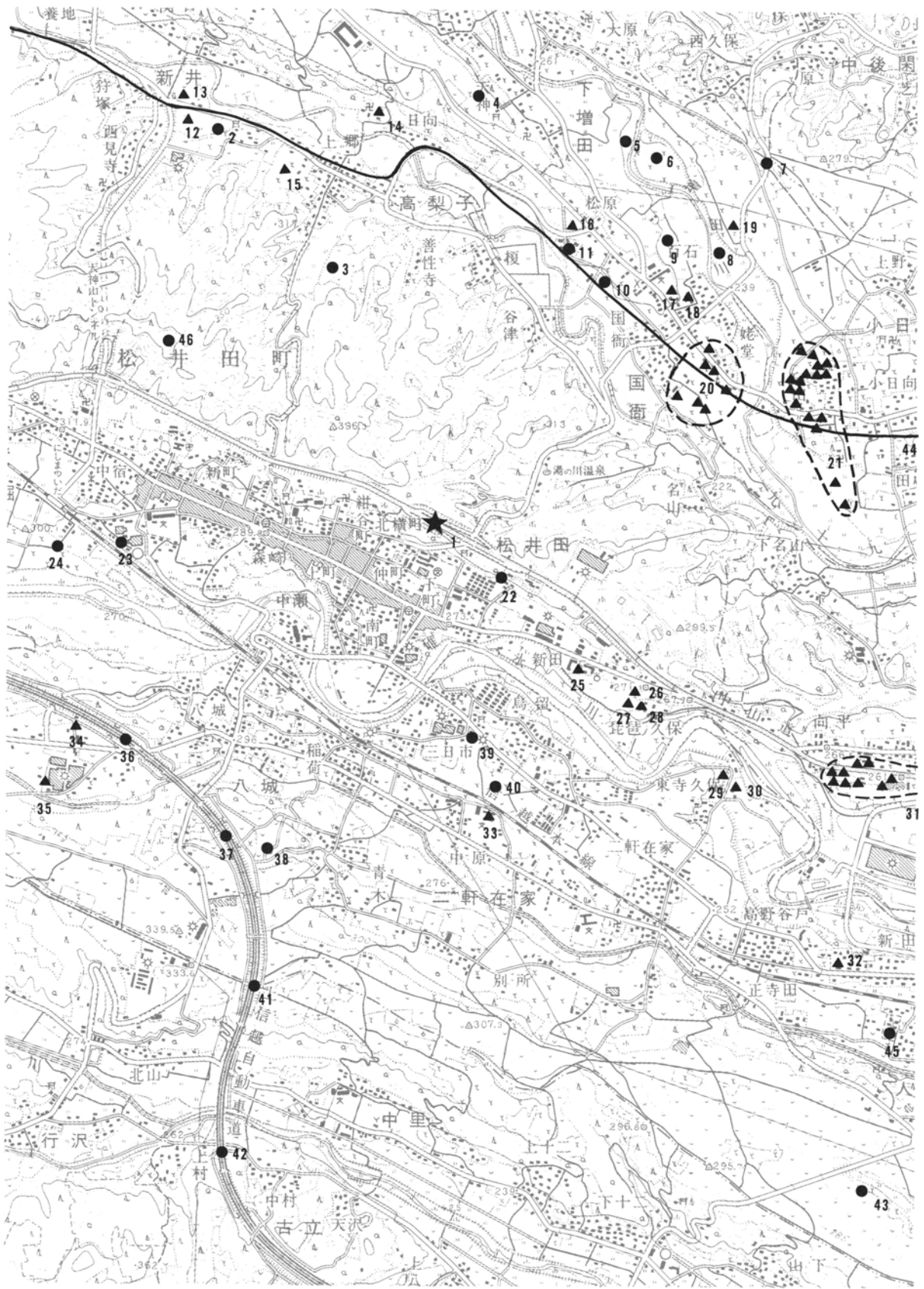
第3図 愛宕山遺跡の土層堆積状況

めた。松井田城は県内の代表的な山城形式を伝えるもので、保存状態の良い名城である。幾度となく安中、武田、北条氏等の戦国武将の戦乱の舞台となり、或る時は守勢に、或る時は上州攻略のための橋頭堡となった城である。大道寺政繁が最後の城主で、天正18年（1590年）に豊臣秀吉が天下統一をなした際際廃城となった。

松井田城が戦乱の舞台となっている頃より、従来町の北側の山、丘陵地帯を通過していたと推定される京都と東国を結ぶ街道（東山道）は、徐々に現在の国道18号線沿いにルートが変更され、これが街道として重要視されるようになった。そして、慶長7年（1602年）に江戸幕府より五街道の一つの中山道として指定され、更に同8年には伝馬制がしかれ、宿駅としての松井田宿、坂本宿が制度化された。ま

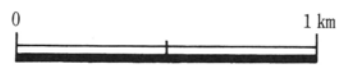
た元和9年（1623年）には大字横川に「碓氷の関所」が設置された。現在も中山道の面影を残すものとして松井田、坂本には宿場町の形態が、また横川、大字五料には茶屋本陣（県指定史跡）が残っている。

かようにみえてくると、本地域は恵まれた自然条件を背景として、極めて古い時期から人間の生活する舞台として開発され、以後発展の道をたどり畿内と東国を結ぶ交通の要地として開け、数々の文化遺産を残してきたことが知れる。東山道、中山道はこの地域の歴史を考える上で不可欠の要素である。律令体制下の古代豪族である坂本氏、石上部氏は、この地域ばかりでなく県内の歴史を考える上でも重要な氏族である。かかる環境の地域に所在する愛宕山遺跡は、種々の歴史的問題を提起するものを有しているといえよう。



★ 愛宕山遺跡 ● 集落 ▲ 古墳

第4図 愛宕山遺跡周辺の遺跡



II 遺跡地の自然的・歴史的環境

第1表 愛宕山遺跡周辺の遺跡一覧

凡例 時代区分中の○は住居、△は古墳・墓、□は水田・畠の検出を表す

No.	遺跡名	所在地	縄文	弥生	古墳	奈・平	備考	文献
1	愛宕山遺跡	松井田町松井田字愛宕山				○	本報告の遺跡。	
2	高梨子碓貝戸遺跡	松井田町大字高梨子字碓貝戸		○		□	As-B下水田。	1
3	高梨子三次郎遺跡	松井田町大字高梨子字三次郎	○			○	縄文前期住居。奈良・平安集落15軒。	2
4	下増田天神原遺跡	松井田町大字下増田字天神原				○	縄文前期包蔵地及び平安住居1軒。	3
5	下増田上田中遺跡	松井田町大字下増田字上田中	○		△	○	縄文中期住居(柄鏡形住居)。古墳2基。1号墳は、「T字形横穴式石室」。	4
6	下増田十二平遺跡	松井田町大字下増田字十二平				○	奈良・平安住居。	1
7	下増田下原遺跡	松井田町大字下増田字下原	○			○	縄文時代前期住居跡。平安時代住居跡。	5
8	下増田百石遺跡	松井田町大字下増田字百石			○		As-A下水田跡。	1
9	下増田下田中遺跡	松井田町大字下増田字下田中			○		古墳住居。古墳周掘。	1
10	国衙遺跡群	松井田町大字国衙	○	○	○	○	縄文時代から近世にかけて、国衙～下増田にまたがり広範な分布、及び遺跡が確認。弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代の住居。	6
11	国衙森浦朝日遺跡	松井田町大字国衙字森浦・朝日	○	○	△		縄文後期住居(柄鏡形敷石住居)。円墳2基。江戸末期寺院跡。国衙遺跡群に包括される。	6
12	細野7号古墳	松井田町大字新井字森下			△		【上毛古墳総覧】では、帆立貝式古墳とされるが現状では不明。	7
13	細野8号古墳	松井田町大字新井字森下			△		前方後円墳とされるが詳細不明。	7
14	九十九23号古墳	松井田町大字高梨子字日向			△		愛宕塚。前方後円墳。主体部は横穴式石室。	7
15	九十九24号古墳	松井田町大字高梨子字行庵			△		円墳。横穴式石室。太刀出土。	7
16	九十九22号古墳	松井田町大字国衙字森北			△		円墳。横穴式石室。	7
17	九十九38号古墳	松井田町大字下増田			△		横穴式石室。太刀出土。	7
18	九十九39号古墳	松井田町大字下増田			△		円墳。	7
19	九十九40号古墳	松井田町大字下増田字下原			△		横穴式石室。	7
20	国衙古墳群	松井田町大字国衙			△		横穴式石室を主体部とする円墳群。	7
21	小日向古墳群	松井田町大字小日向字白田			△		15基前後の小円墳が密集。前方後円墳も存在か。	7
22	松井田塚越遺跡	松井田町大字松井田字塚越	○				敷石住居跡か。	1
23	新堀陣場遺跡	松井田町大字新堀字陣場				□	As-B下水田。	1
24	新堀東下原遺跡	松井田町大字新堀字下原				○	平安住居。	8
25	松井田5号古墳	松井田町大字松井田字下原			△		小円墳。石室部分が少々残存。	7
26	松井田4号古墳	松井田町大字松井田字下原			△		円墳か。	7
27	松井田3号古墳	松井田町大字松井田字琵琶ノ窪			△		小円墳。石室の一部が残存。直刀出土。	7
28	松井田2号古墳	松井田町大字松井田字琵琶ノ窪			△		小円墳。石室部分が少々残存。	7
29	西横野20号古墳	松井田町大字二軒在家字東寺久保			△		小円墳。石室の一部が残存。	7
30	西横野21号古墳	松井田町大字二軒在家字北久保			△		横穴式石室の一部が残存。	7
31	郷原古墳群	安中市郷原上平			△		字上平内に10基前後の円墳が散在する。	9
32	西横野6号古墳	松井田町大字人見字新田			△		横穴式石室の一部が残存。直刀出土。	7
33	西横野5号古墳	松井田町大字二軒在家字上中原			△		畑塚古墳。横穴式石室の一部が残存。	7
34	西横野4号古墳	松井田町大字行田字大道北			△		円墳。	7
35	西横野2号古墳	松井田町大字行田字大道南			△		円墳。カネノ塚古墳。古墳ではないとの記述もあり。	7
36	行田大道北遺跡	松井田町大字行田字大道北	○				縄文早期・前期・後期住居。	10
37	八城二本杉東遺跡	松井田町大字八城字二本杉東	○	○		○	縄文前期住居。弥生中期土坑。	10
38	二軒在家二本杉遺跡	松井田町大字二軒在家字二本杉	○			○	縄文後期住居(柄鏡形敷石住居)。平安住居。	11
39	八城三日市遺跡	松井田町大字八城地内	○			○	縄文中期・平安時代住居。	1
40	二軒在家東光寺遺跡	松井田町大字二軒在家字東光寺	○			○	縄文中期住居。平安掘立柱建物。	12
41	行田二本杉・ 行沢二本杉遺跡	松井田町大字行田字二本杉原東・ 妙義町大字行沢字二本杉	○	○		○	縄文前期住居・集石土坑・土坑、古墳前期住居。	13
42	古立東山遺跡	妙義町大字古立字東山	○	○	○	○	縄文前期～中期住居。弥生中期～後期住居。古墳～平安住居。	14
43	上人見遺跡	松井田町大字人見字向原		○			弥生中期再葬墓2基。	15
44	東山道駅路						坂本駅から野尻駅の間が通過。	6
45	大王寺城	松井田町大字人見字大王寺					一辺約100mの塁址。戦国時代の築造か。	16
46	松井田城	松井田町大字高梨子					中世城館跡。	17

参考文献

- 1 『五料平(五料I)遺跡 五料野ヶ久保(五料II)遺跡 五料稲荷谷戸(高墓)遺跡』1997 松井田町遺跡調査会
- 2 『高梨子三次郎遺跡』1998 松井田町埋蔵文化財調査会
- 3 『下増田天神原遺跡』1993 松井田町埋蔵文化財調査会
- 4 『群馬県遺跡大事典』1999 群埋文
- 5 『年報17』1998 群埋文
- 6 『国衙遺跡群II』1992 松井田町教育委員会
- 7 『松井田町誌』1985 松井田町誌編さん委員会
- 8 『年報14』1995 群埋文
- 9 『安中市の遺跡』1992 安中市教育委員会
- 10 『八城二本杉東遺跡 行田大道北遺跡』1997 松井田町遺跡調査会
- 11 『二軒在家二本杉遺跡』1992 松井田町埋蔵文化財調査会
- 12 『二軒在家東光寺遺跡』1997 松井田町埋蔵文化財調査会
- 13 『行田二本杉遺跡』1997 松井田町遺跡調査会
- 14 『古立東山遺跡 古立中村遺跡 八木連狸沢遺跡』1990 妙義町遺跡調査会
- 15 『群馬県史』資料編2 1986 群馬県史編さん委員会
- 16 『群馬県古城壘址の研究』補遺編上巻 1979 群馬県文化事業振興会
- 17 『群馬県古城壘址の研究』下巻 1978 群馬県文化事業振興会

III 発掘調査の方法

愛宕山の東南斜面に位置する愛宕山遺跡は、事前調査の結果、果樹園（梅林、桃）と畑地をもって大部分の面積を占めていた。土器片の散布は、傾斜地の中央部より頂上部にかけての段差のある三段の開墾された畑地面にみられた。上段の畑地は梅、桃の果樹園として利用されていたが、ここには縄文土器片及び土師器片、須恵器片が、中段及び下段の畑地には土師器片、須恵器片が少量であるがみられた。このため発掘調査については、傾斜地の下部の方は土器片がなく、しかも既に現在の畑地面がローム層であることからして、遺構の存在は認められないと判断し、中央部より頂上部へかけての土器片のみられる地を調査対象とすることにした。

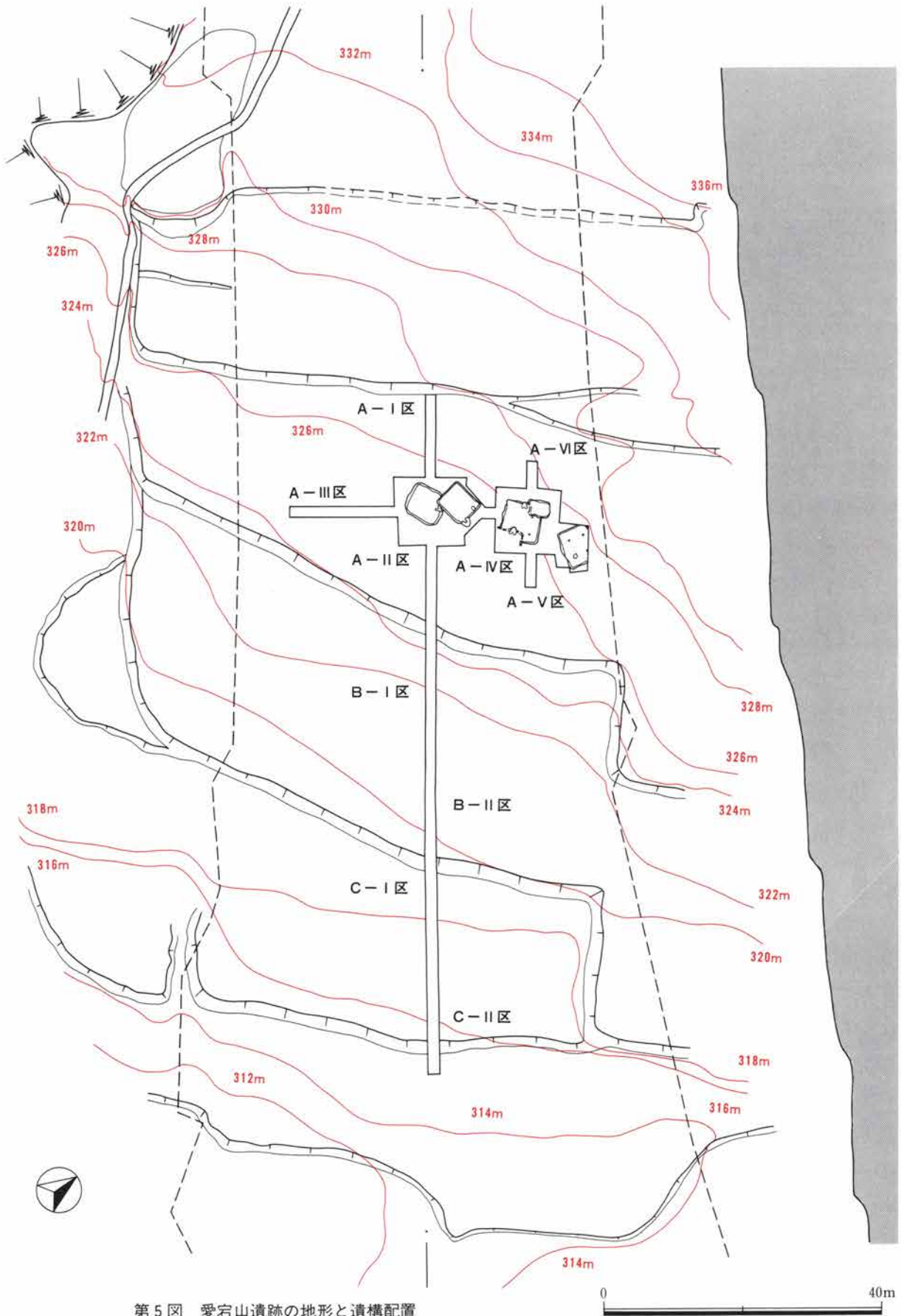
調査はトレンチ法で実施することにし、道路予定敷地のほぼ中央部に、傾斜地の等高線に直交する形で幅1.5mのトレンチを設定した。そしてこれを便宜上、上段の畑地をA区、中段をB区、下段をC区と称することにし、調査区域全体の傾向一特に現状の地形は原地形を相当変更している様相のためこれを把握すべく実施した。(第5図) 各トレンチは各区のほぼ中央部で二つに分け、上方をI区、下方をII区とした。

発掘を始めると、初期の予想よりはるかに黒色土の堆積が厚く、調査に困難を極める区もあったが、全体的には開墾の際かなり土層が移動されているこ

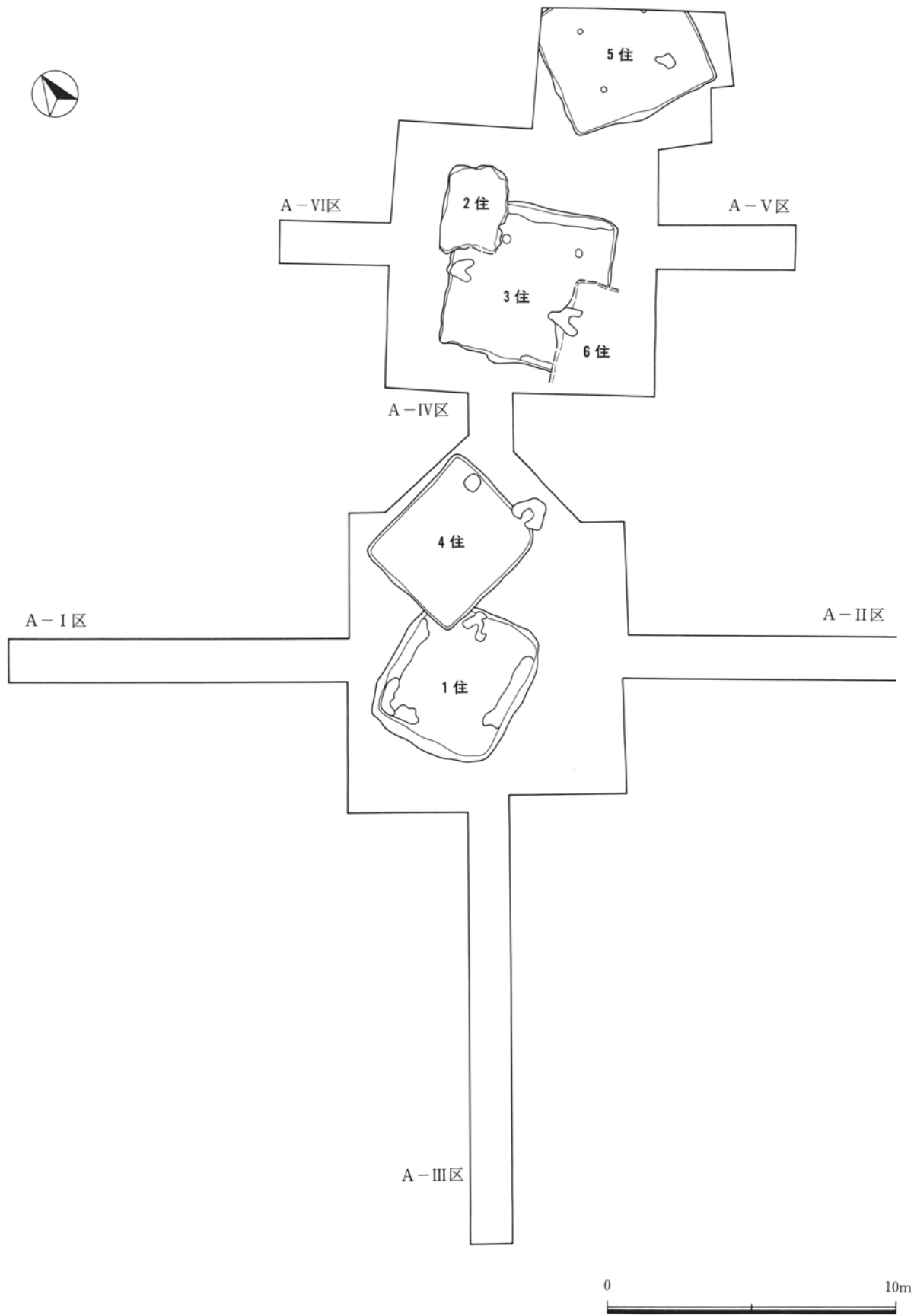
とがわかった。遺構確認に努めた結果、A区においてはA-I区側を中心にして、住居址が第IV層の黒色土層を切って作っている住居のあることがわかった。B-I区、II区、C-I区、II区では部分的には縄文土器片、土師器片、須恵器片を含む層が確認されたが、遺構と断定されるものは発掘区域内では把握されず、むしろ畑地開墾、造成の際かなり原地形が破壊され、この折住居址その他の遺構も破壊されたのではないかということが推察された。このため調査は、遺構の確認されたA区の調査に全力を注いだ。その方法として、既に設定されているトレンチに対して直交する形で、幅1.5mのトレンチを道路幅の長さで設定し、南側をA-III区、北側をA-IV区と称することにした。

A-III区では第I層から第IV層（ローム層）までが浅く、開墾により地形が変更されたのか、遺構は確認できなかった。A-IV区ではほぼ中央部に遺構が確認されたため、更にこれに直交する形でトレンチを設定し、上方をA-V区、下方をA-VI区と称することにした。しかる後にA区の各トレンチ、各区の所見に基づいて遺構がかかった部分から拡張を行なった。その結果、6軒の住居址が確認され、うち5軒を調査した。各住居址は発見された順序に基づき、第1号住居址から第6号住居址まで命名した。これら住居の詳細についてはIVの項で述べる。

III 発掘調査の方法

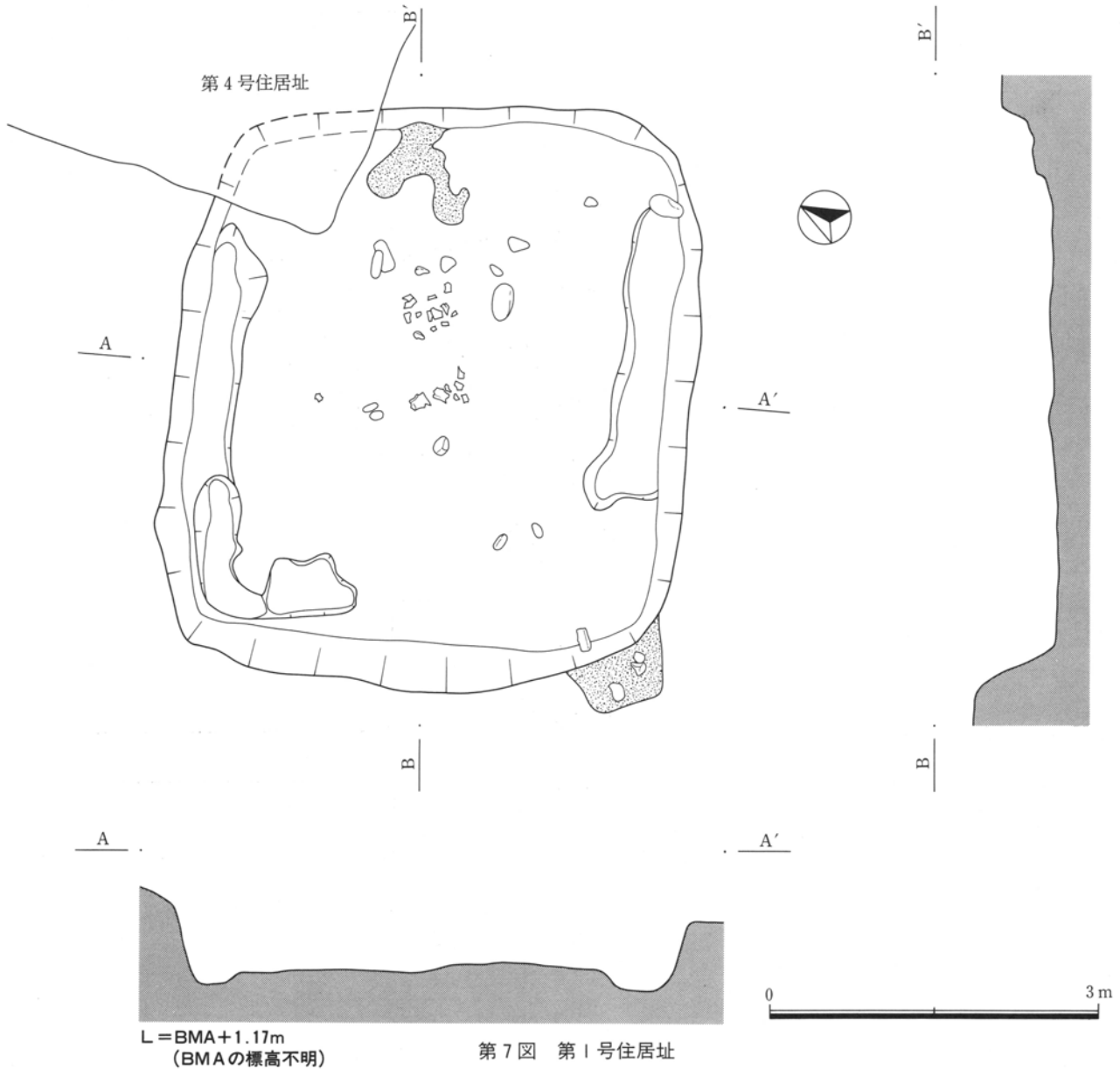


第5図 愛宕山遺跡の地形と遺構配置



第6図 愛宕山遺跡の遺構配置

IV 遺構



IV 遺構

1. 第1号住居址 (P L 6・15)

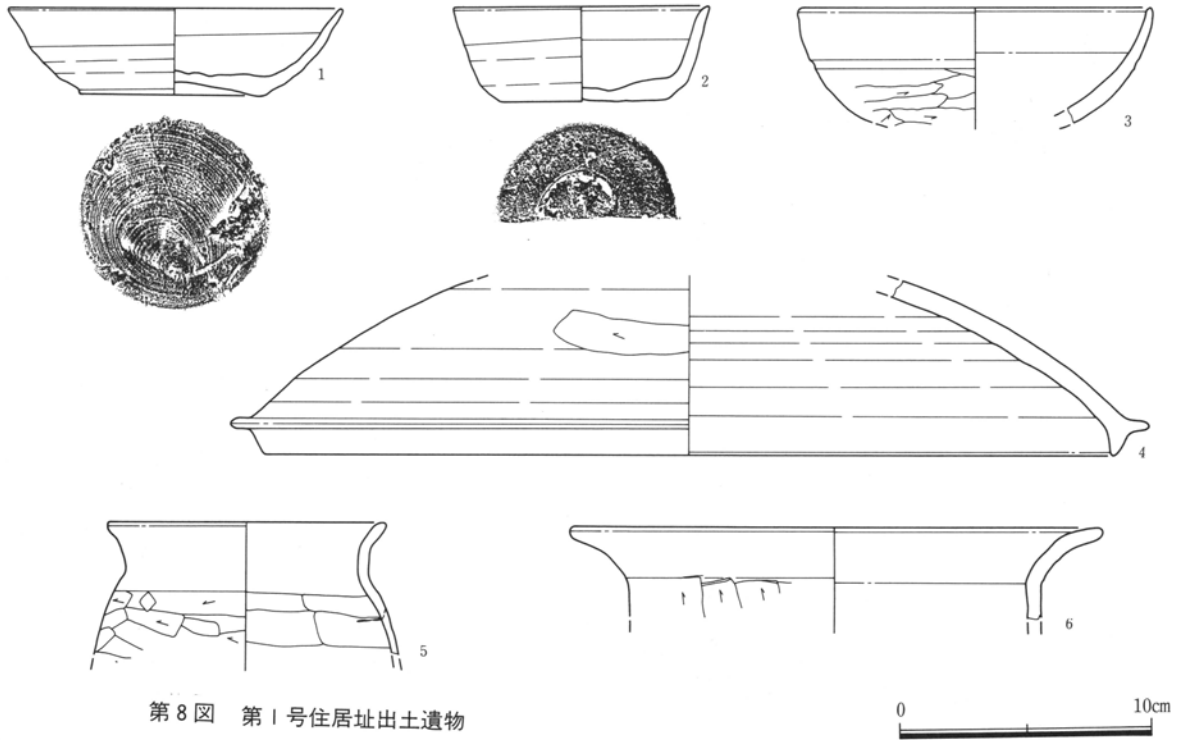
本発掘区中の最南端に位置する住居址であり、第4号住居址と重複している。南北4.73×東西5.30mのほぼ隅丸方形のプランを呈し、住居址北東隅は第4号住居址によって切られている。床面積は、19.30㎡である。長軸の方向は、N-68°-Eである。住居は、第Ⅲ層の黒色土を切って作られており、残存壁高は、西壁で70cmを測った。

竈は、東壁の中央部に粘土を構築材として燃焼部

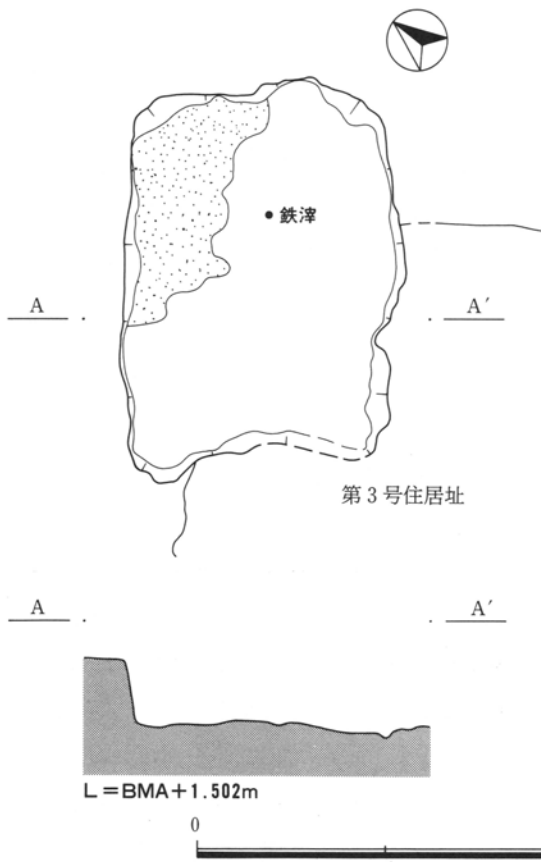
を壁内に造り付けたところのものが、崩壊した状態で認められた。粘土は焼けて赤褐色を呈し、付近には焼土が一定の広がりをもって存在していた。竈の中には土師器の甕の破片が落ちこんでいた。

床面は、中央部の1.5m四方が堅くつき固められていた。周溝はそれと考えられるものが、北壁・南壁に沿って存在していたが全周はしていない。北壁際のそれは幅40cm、深さ12cm、南壁際は、幅48cm、深さ22cmであり、他の調査事例と比較して幅広であ

1. 第1号住居址・2. 第2号住居址



第8図 第1号住居址出土遺物



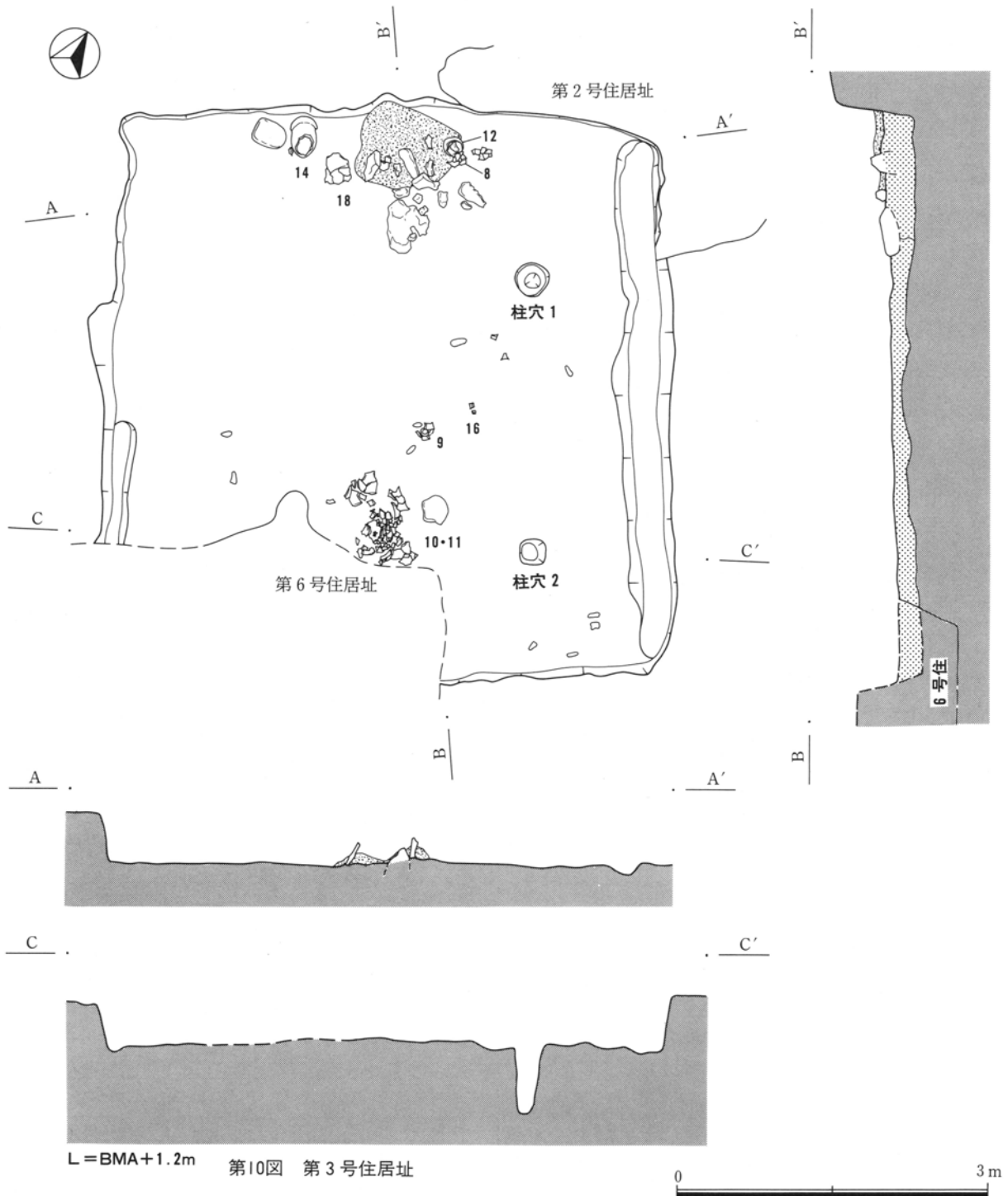
第9図 第2号住居址

る。柱穴は、住居址内外とも発見できなかった。

また、住居址西南の角には凝灰岩質の焼けた加工石材 (15×15×35cm) と共に多量の焼土、粘土を含む層が本住居址内に流れこむような形で認められた。本住居址破棄後に投げこまれたものか、或いは西南隅に重複して住居址があったかを裏付ける資料は検出されず不明である。出土遺物としては土師器の甕 (5・6)、坏 (3)、須恵器の坏 (1・2)、蓋 (4) の破片があった。(遺物観察表P109)

2. 第2号住居址 (PL6)

第3号住居址と重複して発見された南北2.85×東西2.25mの隅丸の長方形を呈する住居である。長軸の方向はN-40°-E、床面積は5.34m²が推定される。住居は第1号住居址同様に第III層の黒色土を切って作っている。残存壁高は東壁で約50cmを測る。住居、東南限は第3号住居址によって切られている。柱穴、竈址は認められなかった。出土遺物は、床面に密着して鉄滓の小片が出土した他は土師器、須恵器とも発見されなかった。



3. 第3号住居址 (P L 7・15・16)

第2号住居址と重複して発見された南北5.50×東西5.45mの規模を有するほぼ方形のプランを呈する住居址であり、長軸の方向は、N-43°-Wである。床面積は27.81m²が推定される。南東隅は、第6号住居址と重複し、これに切られている。本発掘区中最大規模のものである。住居は、第IV層のローム層

を切りこんで作っているが、住居の各コーナーは比較的新しい時期に掘りこまれた遺構により破壊されており、床面上約15cmの位置で掘り込みの底面が留まっていたので、辛うじて住居址全体のプランを明らかにすることができた。残存壁高は50cm前後である。

柱穴は2個確認され、垂直に掘り込まれていた。それぞれの規模は、柱穴1の上端径が32×32cm、深

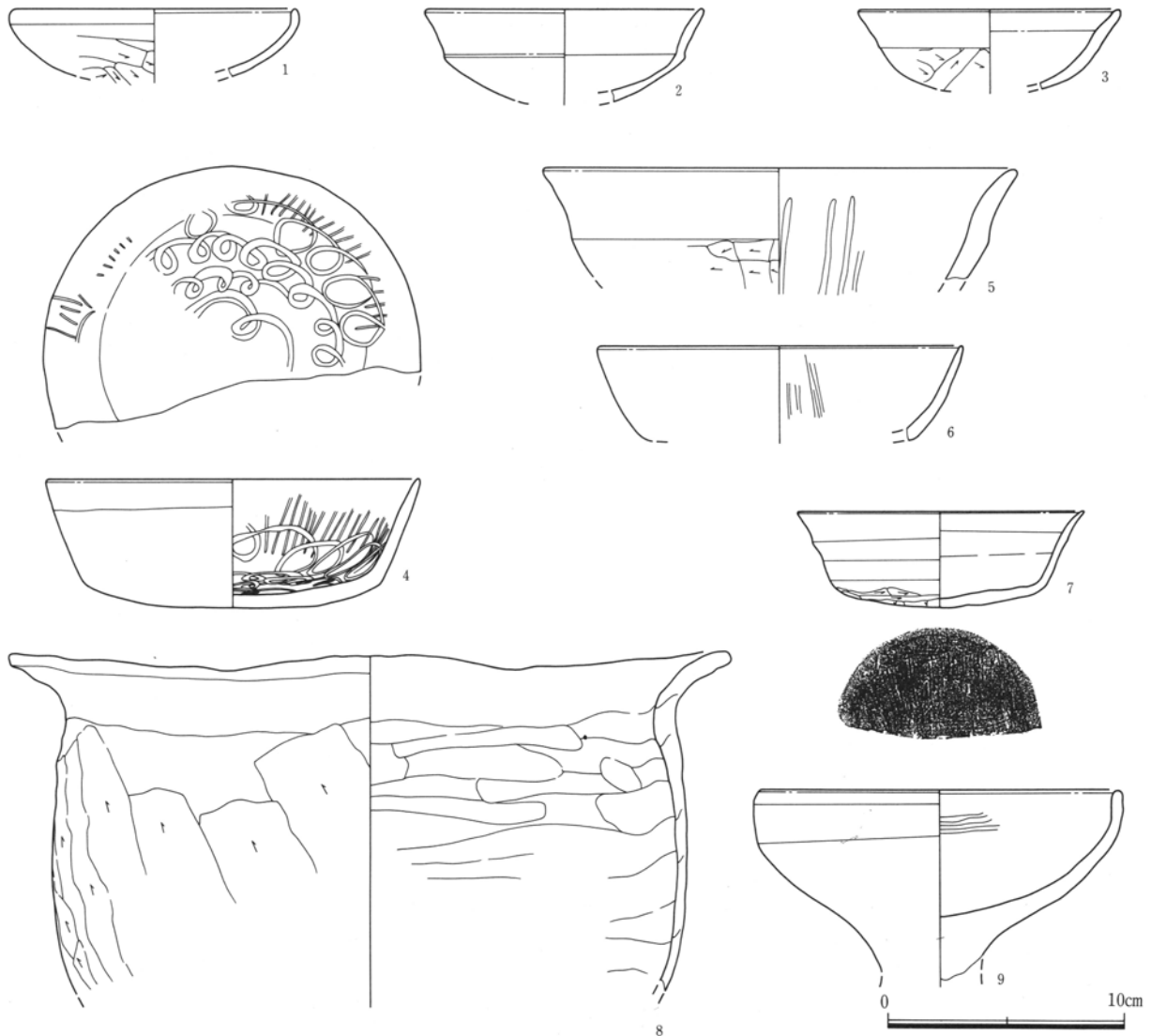
さ50cm、柱穴2が26×24cm、深さ68cmである。

竈は、西壁中央部に壁を切りこまずに、住居址壁内に張り出すような形で燃烧部が造られており、焼土、焼けた粘土塊、炎のあたったと考えられる川原石などが散乱した状態で認められた。しかし、竈の形態を積極的に復元しようとする資料は確認できなかったが、焼土、粘土塊、長大な川原石の位置などから袖部先端に川原石を2個配置して袖部の芯材および壁の保護材とし、この2石の上に礫を懸架、焚口天井部としていたものと考えられる。袖部は粘土を用い、住居の内部に竈全体が長く敷設されたもの

と推定することができる。

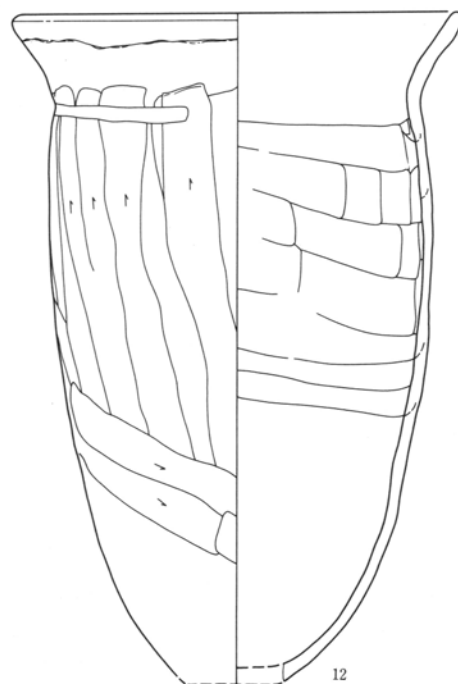
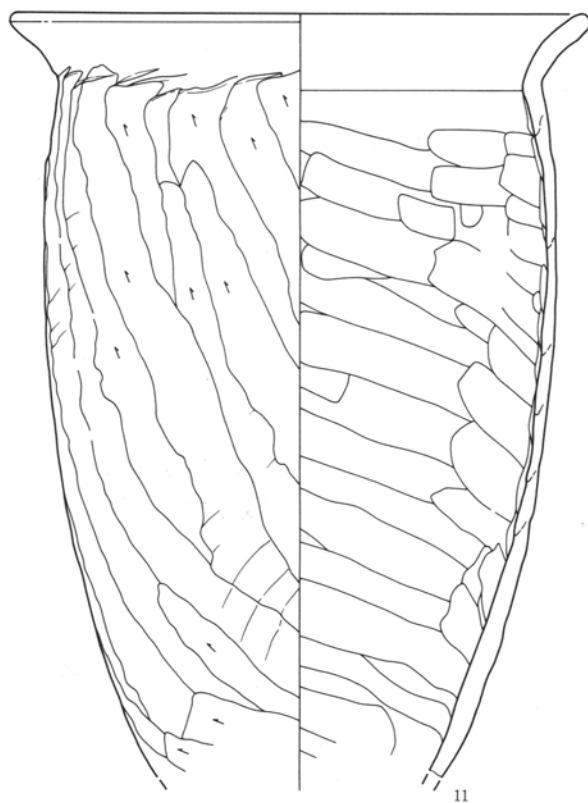
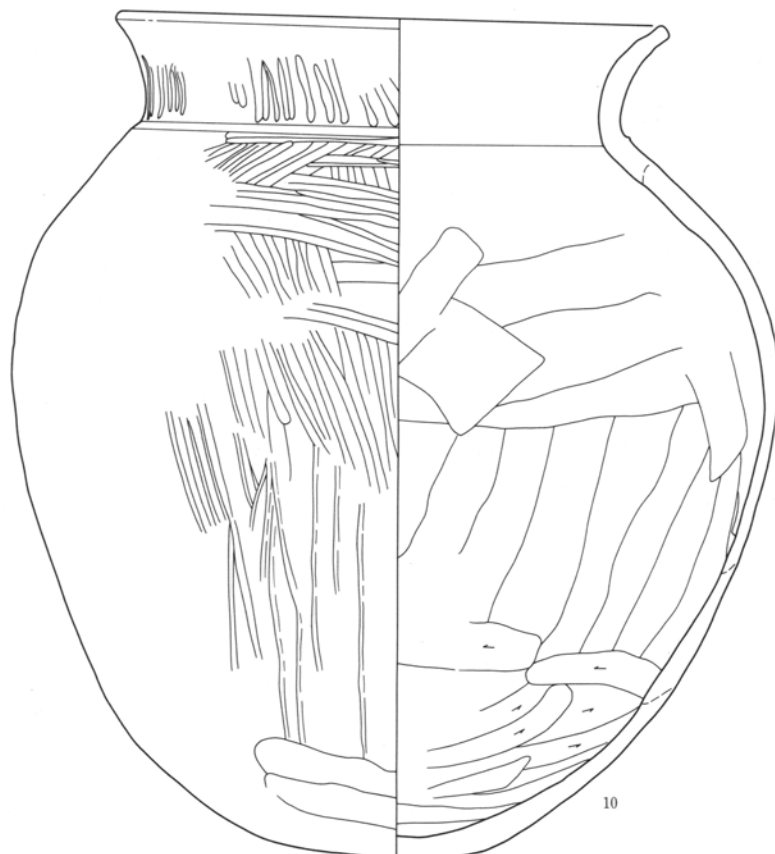
床面は壁に近い部分を除いては、堅く踏みつけられた状態で出土した。周溝は、北壁際で幅約38cm、深さ約12cm、南壁際で幅約18cm、深さ約8cmである。

出土遺物としては、竈の左側から土師器の長甕(14)が、竈の右側から長甕(12)が、それぞれ口縁部を床面に、底部を上にして完形に近い状態で出土した。また、床面中央のやや南寄りから、高坏(9)が床面直上で出土している。その他としては須恵器坏破片、石製紡錘車(16)、角閃石安山岩製の砥石(19)等が出土している。(遺物観察表P109~111)

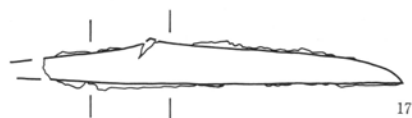
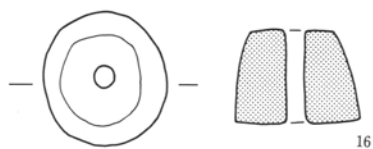
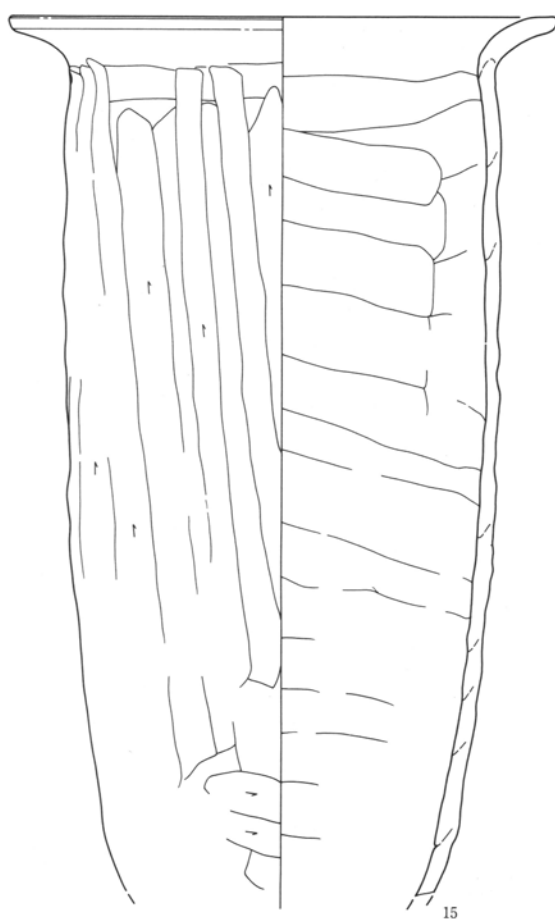
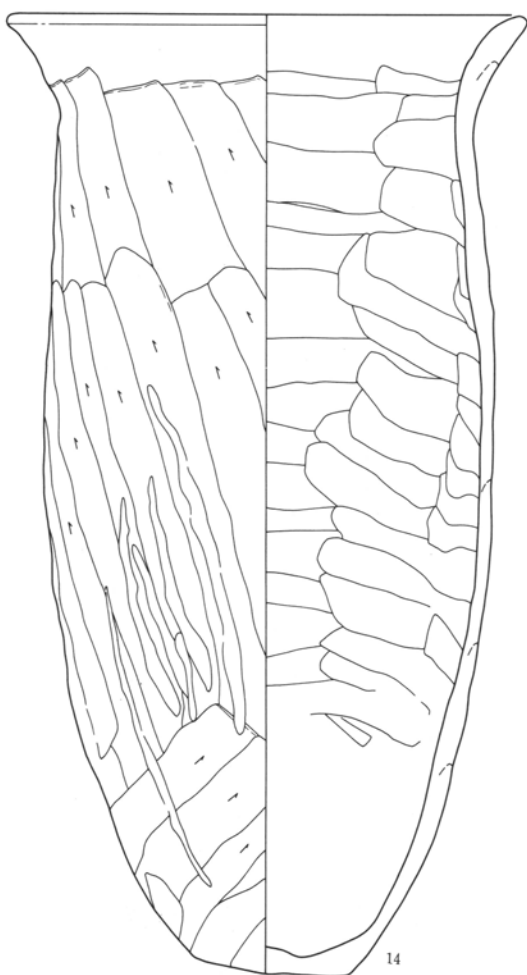
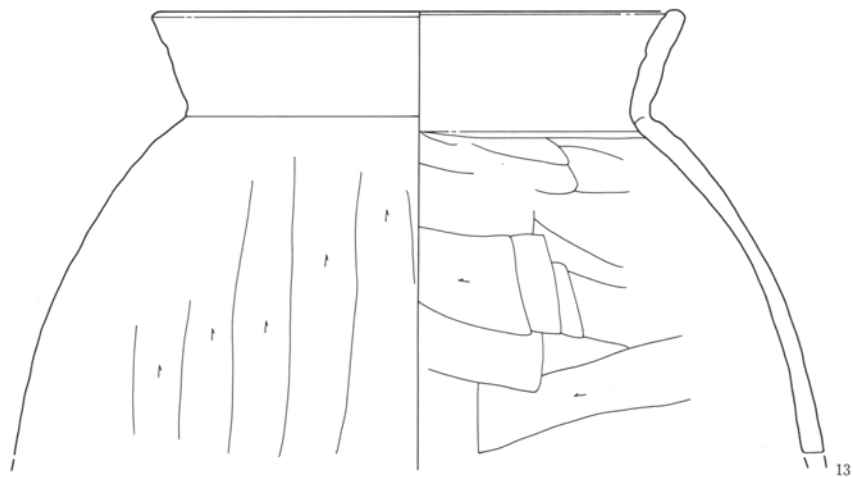


第11図 第3号住居址出土遺物(1)

IV 遺構

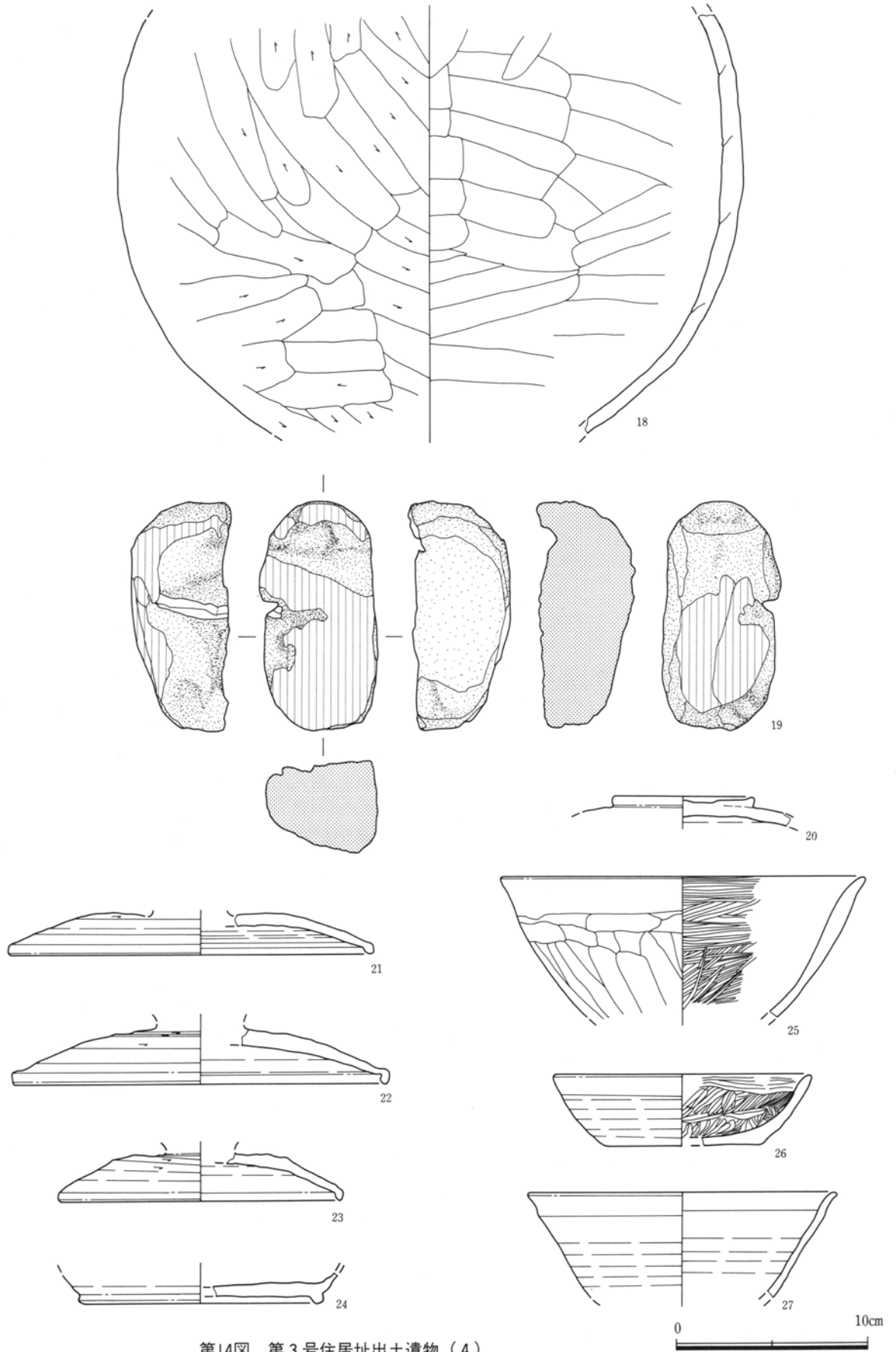


第12図 第3号住居址出土遺物(2)

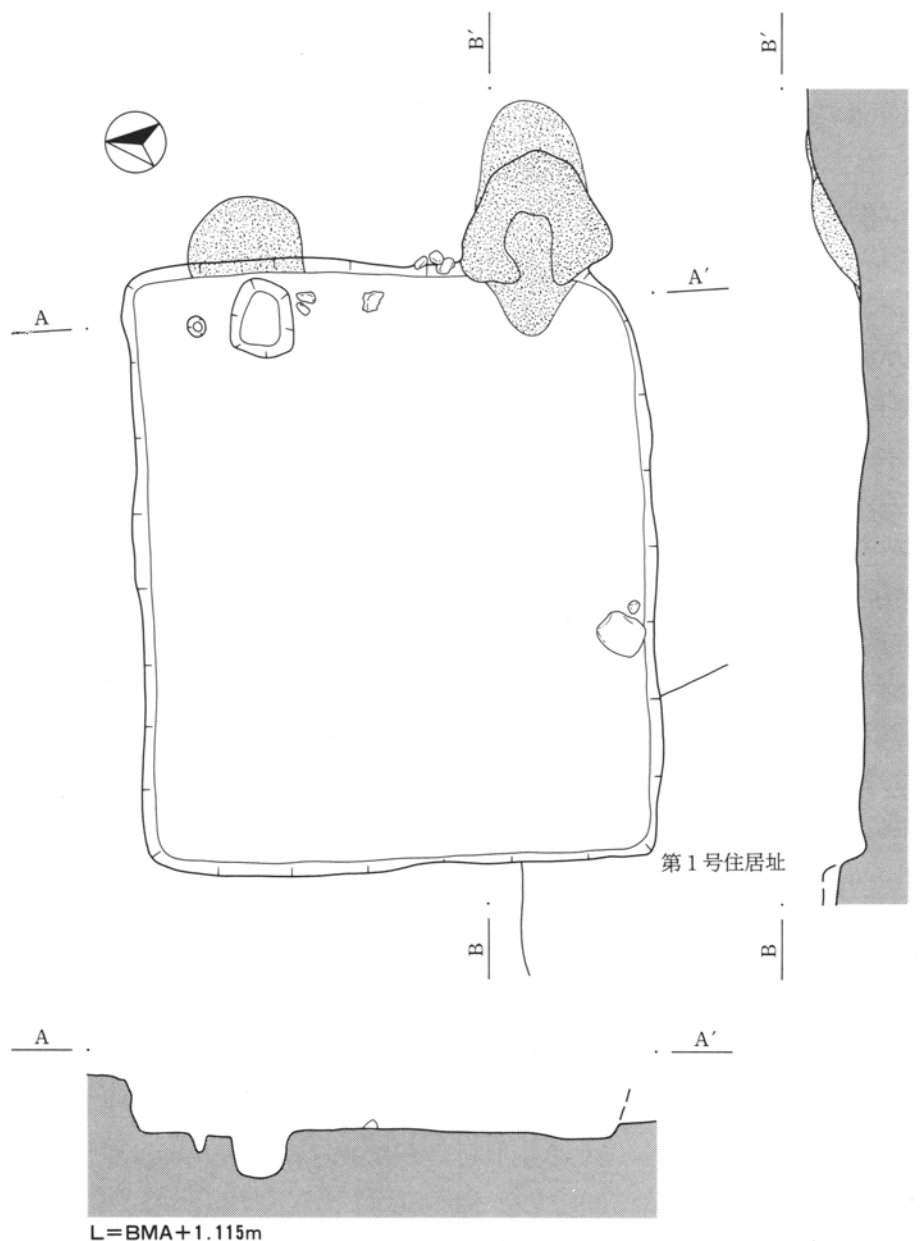


第13图 第3号住居址出土遗物(3)

IV 遺構



第14図 第3号住居址出土遺物(4)



第15図 第4号住居址

4. 第4号住居址(PL8~13・17~23)

第1号住居址発掘中に炭化物を多量に含んだ層が確認され、重複の可能性が考えられたので拡張した結果、発見されたのが本住居址である。第1号住居址と重複する。重複関係については、第1号住居址で既に述べたとおりである。

本住居は南北4.15×東西4.80mの規模を有するやや方形のプランを呈したものであり、長軸の方向はN-85°-E、床面積は18.08㎡である。第1号住居

址同様に第IV層の黒色土を切って作っている。残存壁高は約42cmである。周溝は認められなかった。

竈は東壁の南壁寄り及び北壁寄りの二箇所に検出された。前者は住居壁を掘り込んで燃焼部が構築されている。粘土により敷設されており、全体的に赤く焼け、火床は焼土と灰の混入層が約3cmの厚さで堆積していた。竈内部には土師器の長甕の破片が埋没していた。後者は粘土と焼土がつき固められたような状態で検出された。検出時の状況から、本住居

IV 遺構

の竈は、東壁の北壁寄りの位置から南壁寄りの位置に造り変えられたと考えられる。

柱穴は、住居の内外とも検出することができなかった。恐らくは床面に直接建てられたものと推定される。

ピットは東北隅に認められた。規模は上端径55×50cm、深さ26cmである。

床面は住居全体にわたって堅く踏み固められていた。本住居は火災に遭遇したものとみられ、家屋材が炭化した状態で床面に良好に残存して検出された。炭化材は住居の各隅より中央に向かって、径10cm程の主柱が倒壊し、各主柱の間に径7～8cmのものが多数入り組んだ状態で検出された。炭化材中、太い材木については一部檜が認められたが、大部分は広葉樹であると推定された。住居の西南隅寄りからは、屋根材である萱が炭化した状態で、また床面には壁に沿って部分的に「萱」、若しくは「篠竹」を簾状に編んだ敷物と推定されるものが、やはり炭化した状態で検出された。また、南壁の西寄りに最大幅36×30cmの川原石が置かれてあり、この付近には、樗、檜等の堅い木材と、それに加工を加えた痕跡を残す炭化材が集中して検出された。

かような本住居は、焼失後は住居の跡かたづけは全くなされておらず、そのまま破棄されたとみえて、住居内で使用されていたものが、そのままの状態で見つかった。発見された出土遺物及び出土状態は、次のとおりである。

(1)土師器長甕一竈の焼土の中より出土。破片である。

(2)須恵器長頸瓶2点—いずれも住居の西北隅から出土。完形品である。29は北壁に近い部分から底部を壁に、口縁部を住居址内に向けて横倒しの状態で、30は炭化材の残片の下から口縁部を西壁に向けて、横倒しの状態で出土する。30の器面は火災のため黒ずんでおり、煤が付着していた。近接して鋸(58)・鎌(59・60)が出土している。

(3)須恵器杯6点—住居址内東南隅付近より2点(1点は4)が床面に密着した状態で2枚重なって出

土し、南壁中央部付近の比較的大きい川原石付近より2点(10・13)が炭化材の下より、また住居の中央付近より西壁に寄った地点より2点(1・3)が重なった状態で炭化材の下より出土し、その上部には木製の杯(91)が炭化した状態で重ねられてあった。いずれも完形品である。その他、床面に密着して破片が出土している。

(4)須恵器蓋1点(23)—住居の東北隅付近の北壁に面して、表を床面に密着した状態で出土する。裏面には煤が多量に付着していた。硯として使用されたものであろうか。

(5)木製の杯1点(91)—(3)で述べたとおりである。

(6)鉄製鋸1点(58)—住居の西北隅付近の西壁に面して、鋸歯を住居内部に、弓の部分を壁に向けて、壁と並行した状態で出土する。鎌と重なって出土する。付近より須恵器長頸瓶(30)、楔形石製品(79)等が出土している。

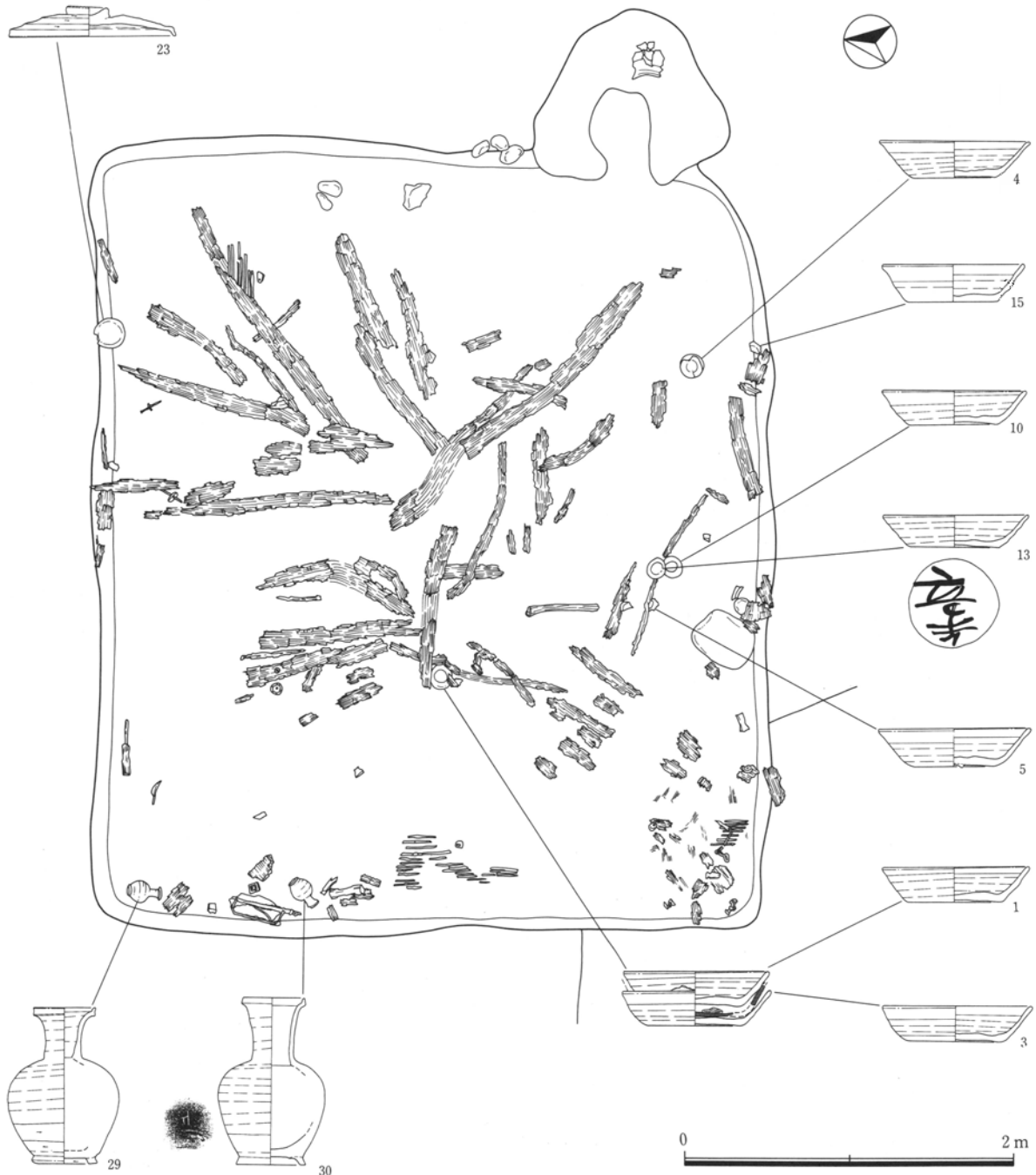
(7)鉄製鑿1点—62は床面に密着した状態で北壁の中央部の西壁に寄った地点より、北壁に並行して刃先を東壁に、柄を西壁に向けて出土する。柄は炭化した状態で残っており、その柄頭は使用痕跡が認められた。

(8)鉄製鈍1点(67)—鑿(62)の西約40cmのところより床面に密着した状態で出土する。

(9)小刀一振(61)—住居のほぼ中央部の北壁寄りに茎を北壁に、鋒を南壁に、棟を西壁に向けた状態で、比較的良好に残存している炭化材の間にはさまれて出土する。付近より萬年通寶(96)、石製紡錘車(81)が出土している。

(10)鉄製鎌2丁(59・60)—西壁に面して鋸の下より2丁重なった状態で、刀鋒を南に、柄部を北に、刃部を西に向けて出土する。上面にあった鎌は完形品であるが、下面のは腐食して刃の中央部付近より鋒にかけて残存しているのみであった。鎌の上には用途不明の鉄製品があった。

(11)鉄製紡錘車3点(54～56)—54・56は北壁中央部に近い付近より出土。南北方向に倒れた炭化材



第16図 第4号住居址遺物出土状況（I - 土器）

の間より出土する。

(12) 鉄斧 1点 (57) — 南壁の西壁寄りから約1.5m程東へ寄った付近の炭化材の下より出土する。

(13) 用途不明の鉄製品 2点 — 鋸、鎌の出土した地点より出土する。

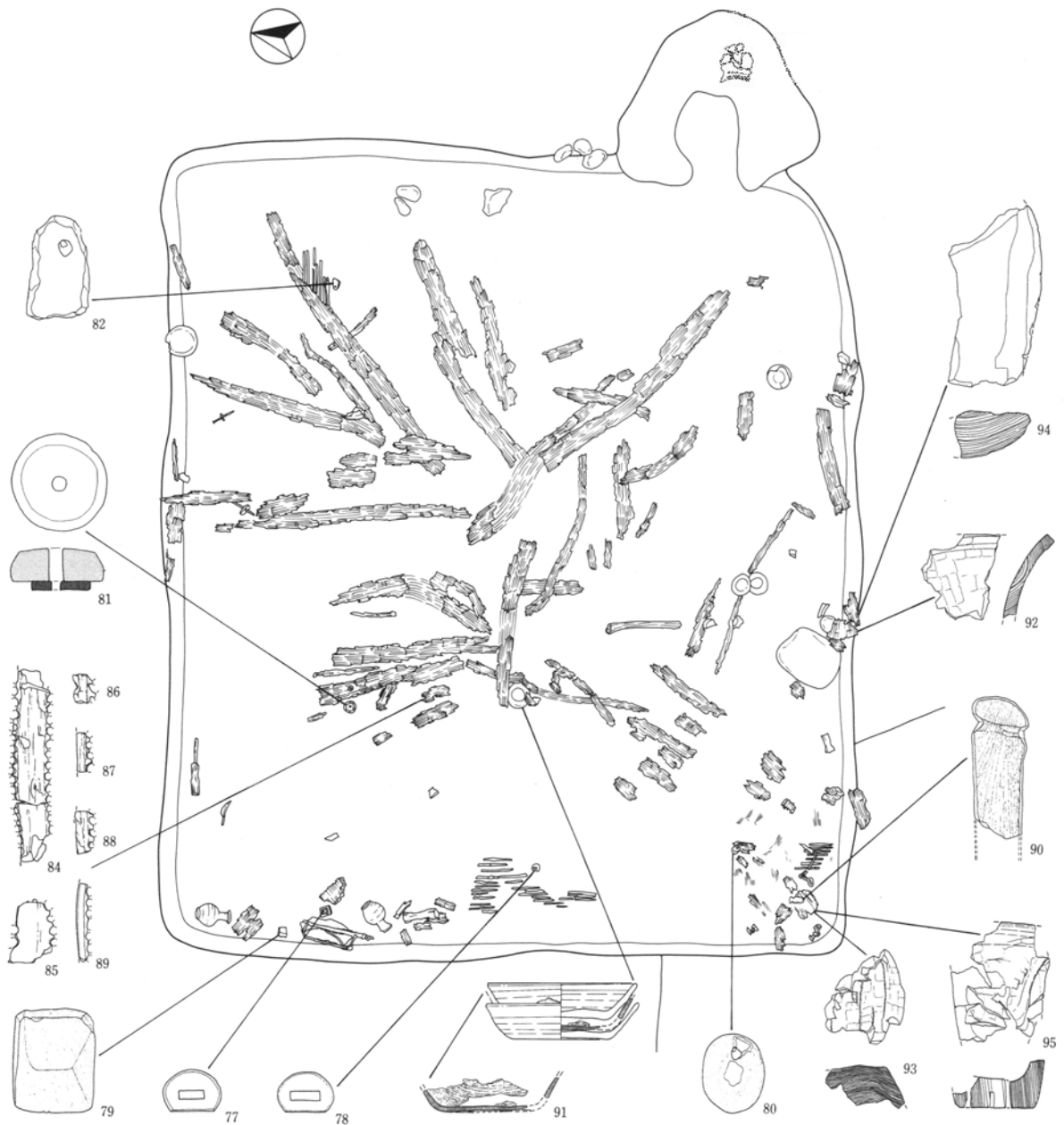
(14) 石製紡錘車 1点 (81) — 直刀の西壁寄り40cm付近にて、炭化材に混って出土する。

(15) 石錘 1点 (80) — 住居南西隅近くの屋根材と

考えられる炭化した萱の下より出土する。

(16) 刀子 1点 (68) — 吊手金具の出土している付近の炭化材の下より出土する。

(17) 腰帯具巡方 1点 (76) — 鋸の東約10cmの付近より、床面に表面を密着し、裏面に石製の腰帯具丸柄 (77) が付着した状態で出土する。巡方と丸柄の間には紙片があり、墨書銘らしきものがあった。解読は不可であった。



第17図 第4号住居址遺物出土状況(2-石製品・木製品)

(18) 腰帯具丸鞆 2点—77は巡方と共に出土する。78は西壁寄りに近い付近にて出土する。

(19) 古銭(萬年通寶) 1点(96)—石製紡錘車(81)及び小刀(61)との中間にある直径20cmほどの炭化材と床面との中間より出土する。銭は何か皮革らしき袋に大切にいられていたので、銭を囲んで有機物質の炭化物が存在していた。また、布片が認められた。

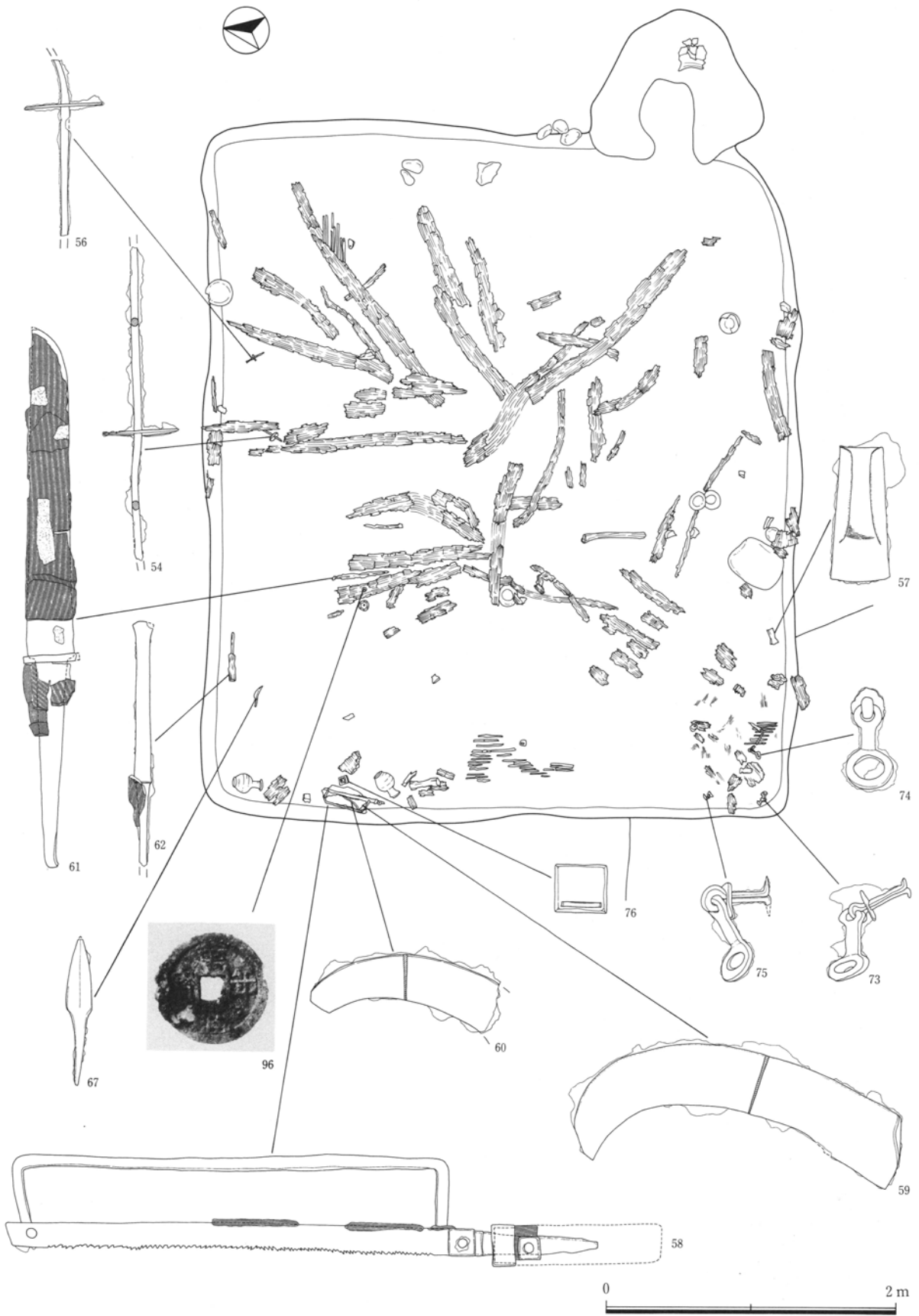
(20) 鉄製吊手金具 3点(73~75)—住居の西南隅

付近の南壁に接するところより炭化した萱、加工痕のある炭化材に混じって出土する。

(21) 砥石 2点—82は東北隅から出土する。83は住居址覆土の中より出土。

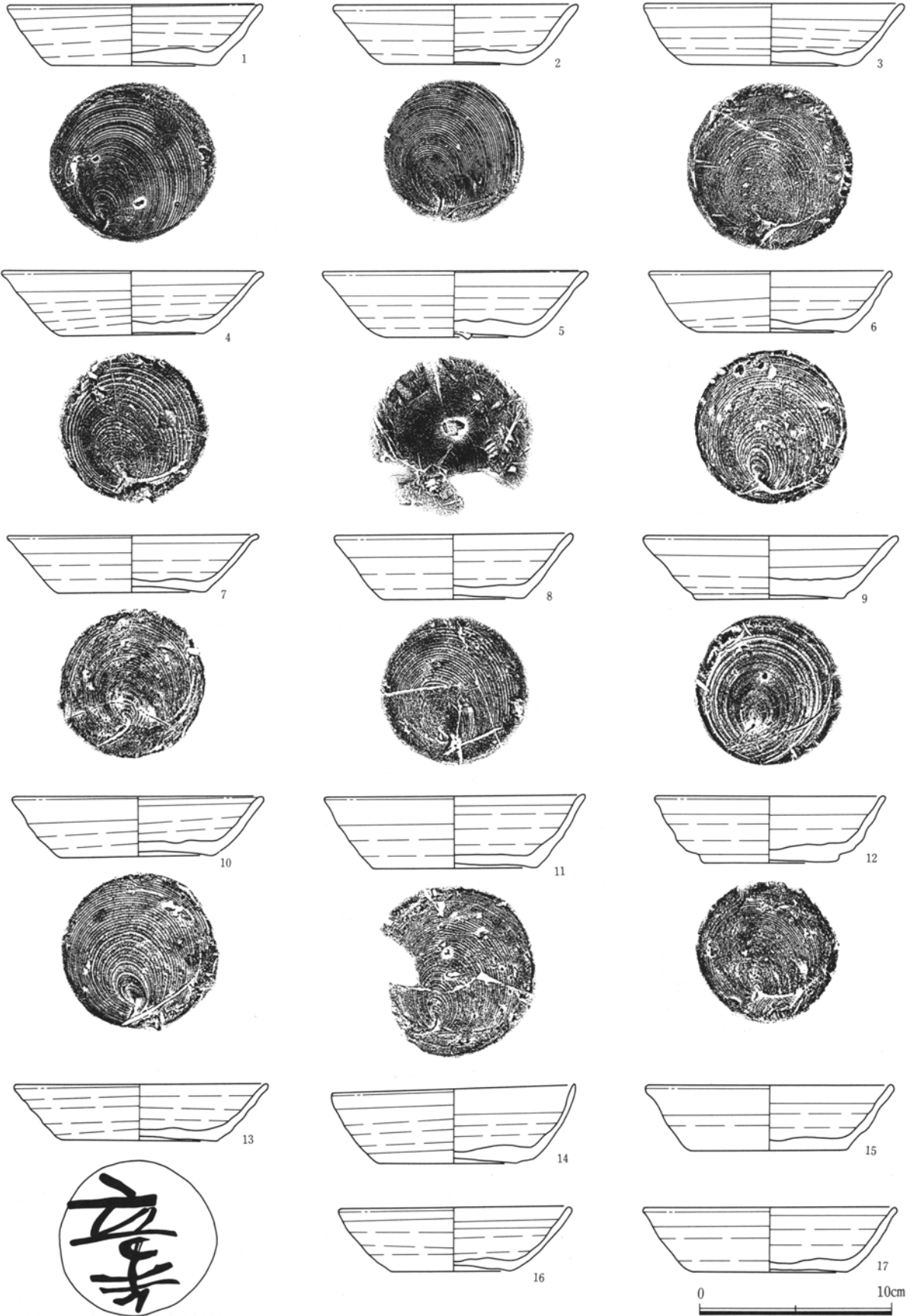
(22) 楔形石製品 1点(79)—西壁に面して、鋸(58)の右10cm付近より出土する。

(23) その他—多量の炭化した家屋材、萱、布片、糸等が出土する。(遺物観察表P111~117)



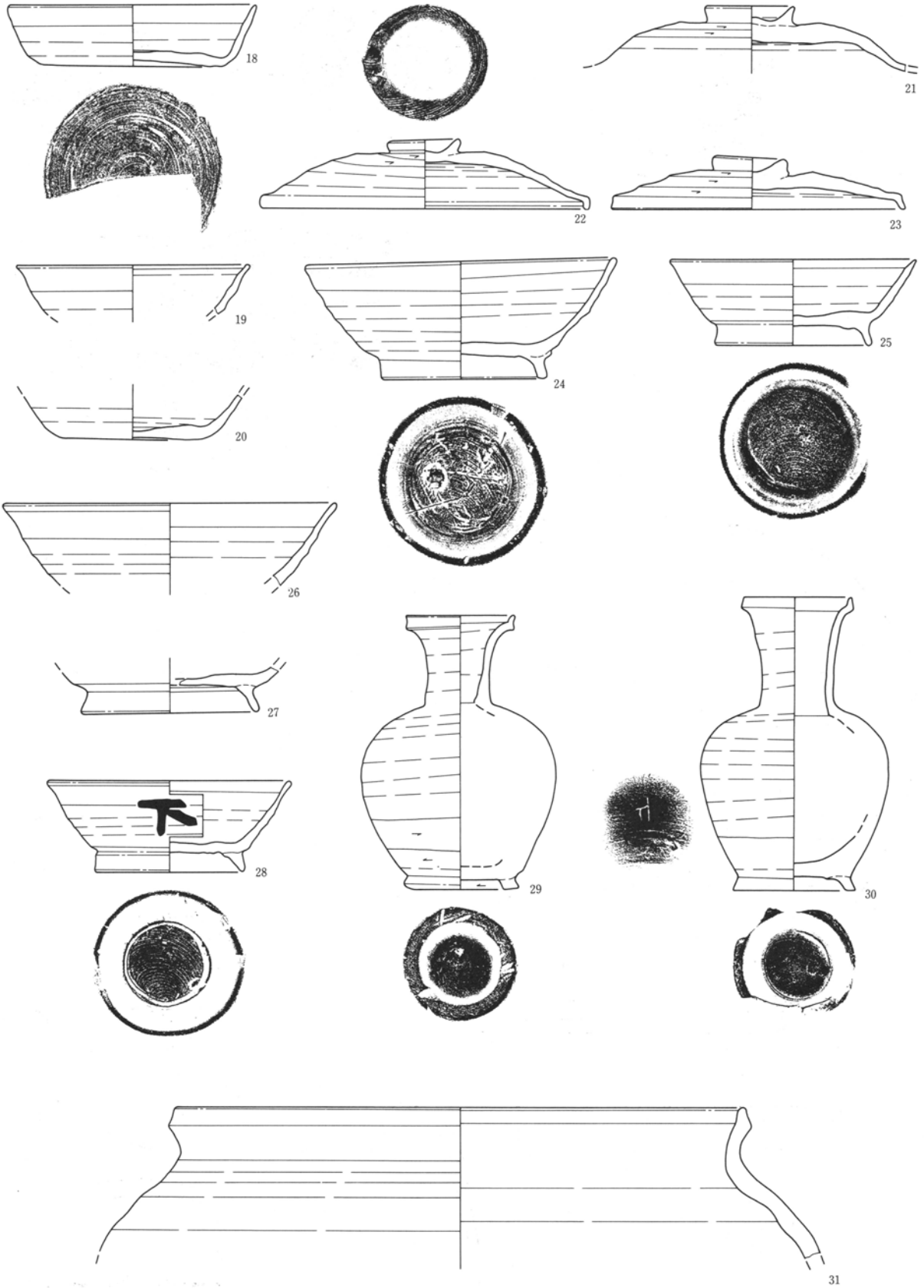
第18図 第4号住居址遺物出土状況（3-金属製品）

IV 遺構



第19図 第4号住居址出土遺物(1)

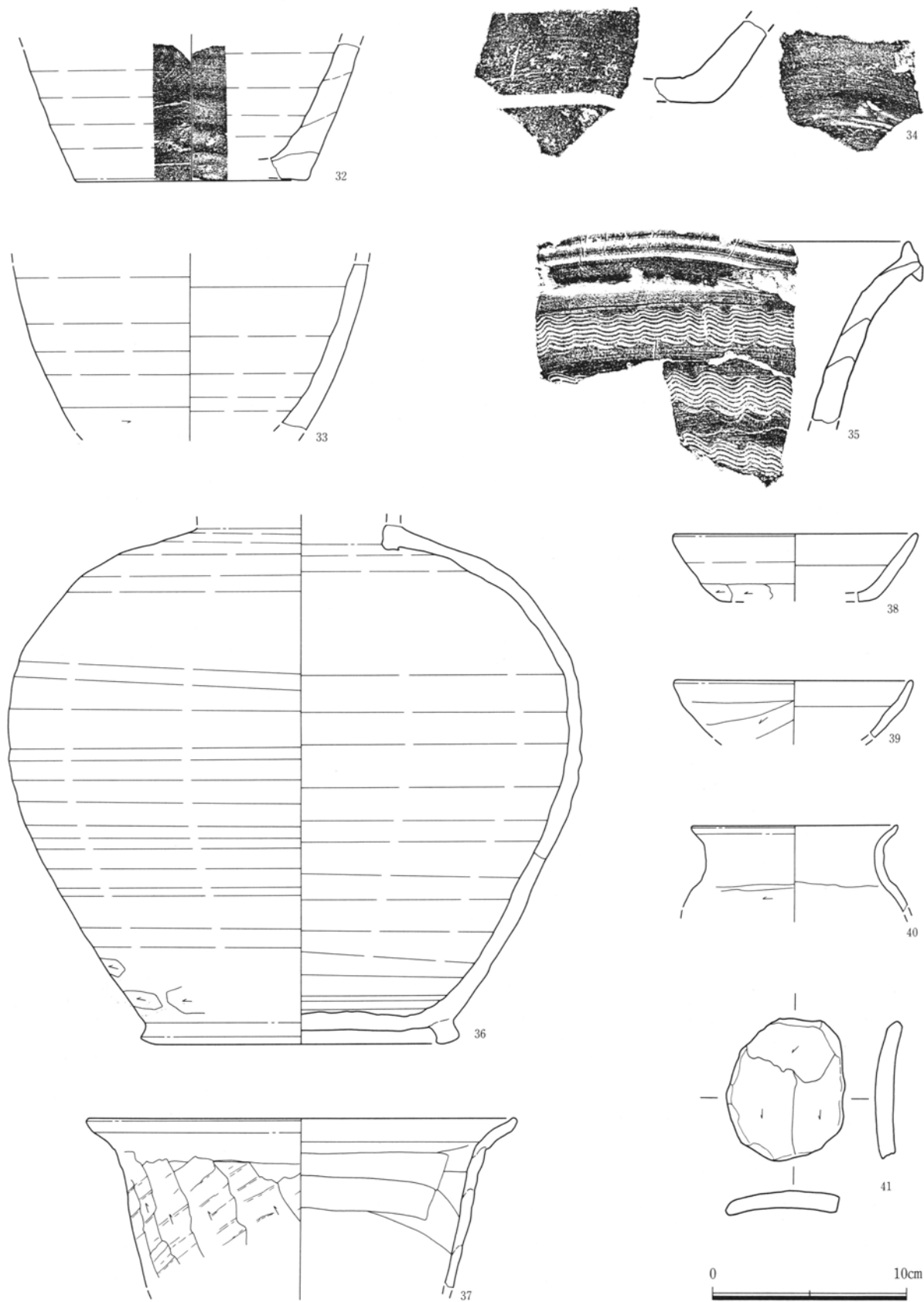
4. 第4号住居址



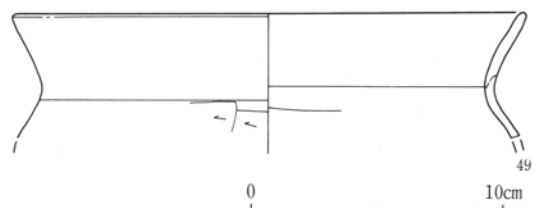
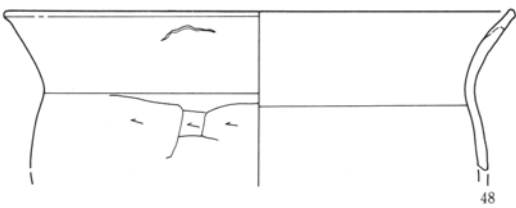
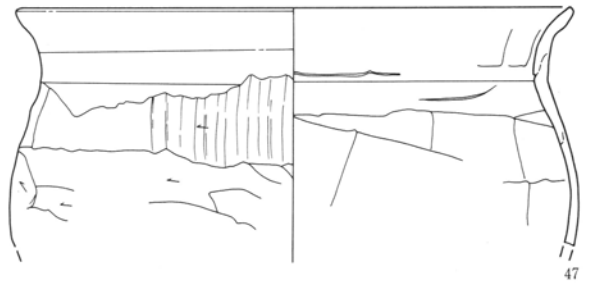
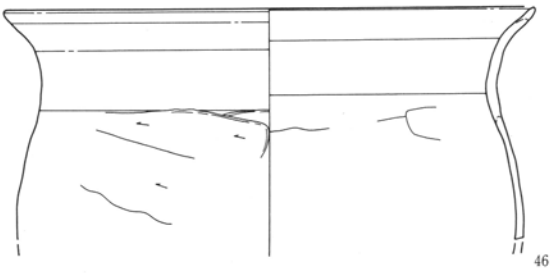
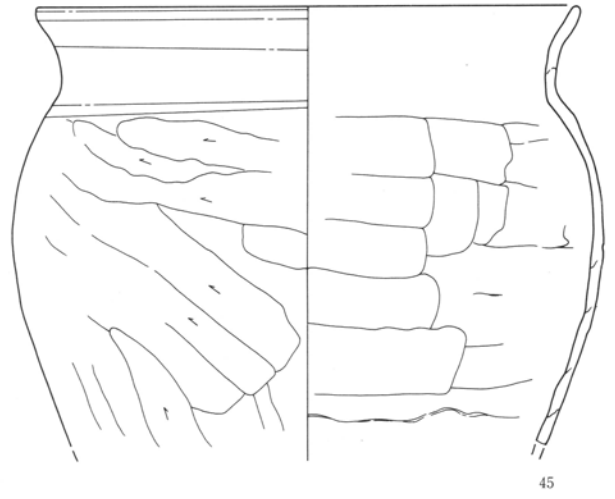
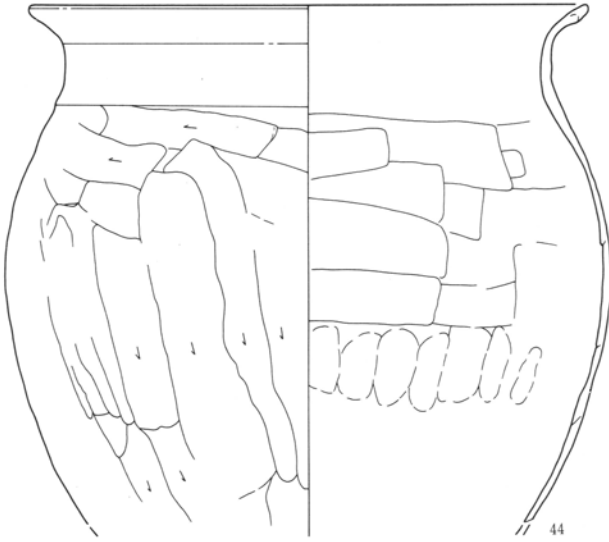
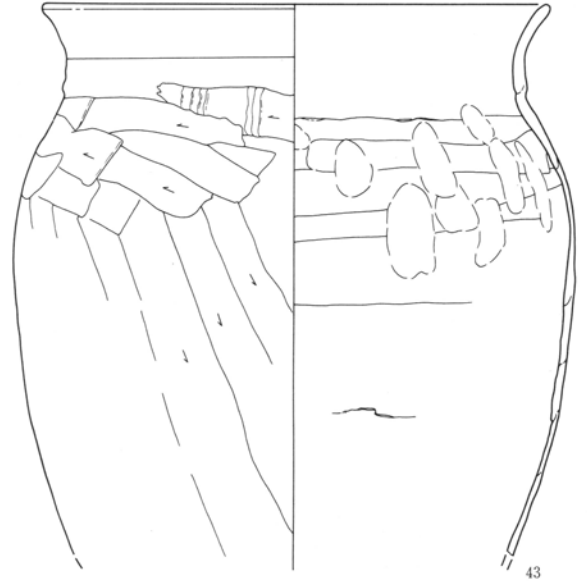
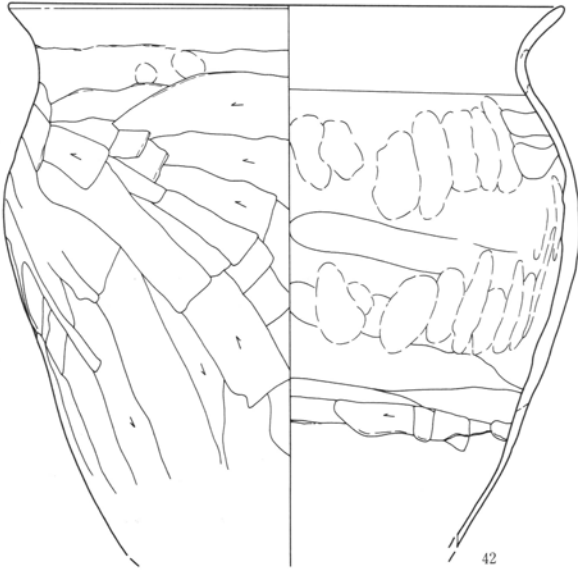
第20图 第4号住居址出土遗物(2)

0 10cm

IV 遺構



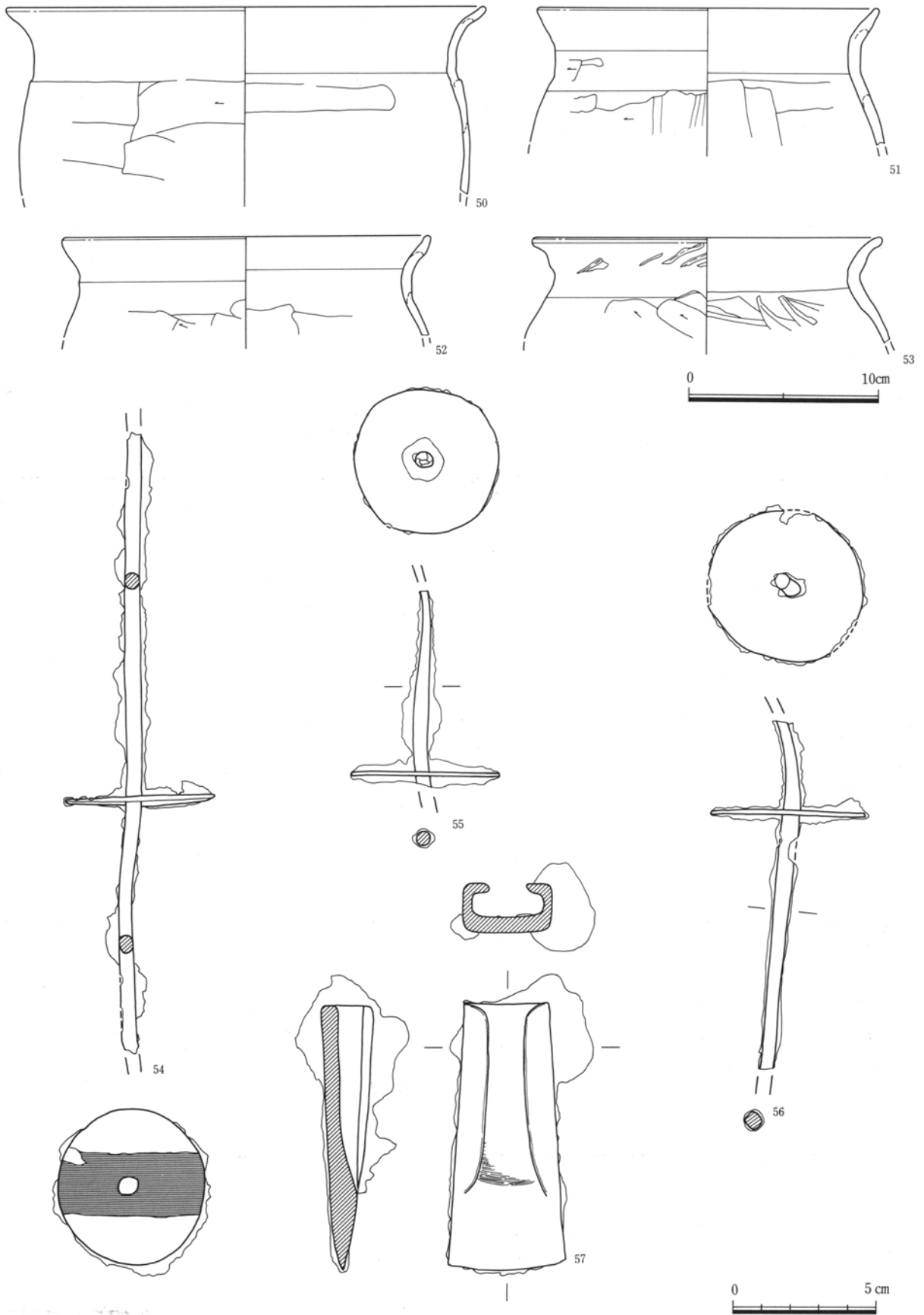
第21図 第4号住居址出土遺物(3)



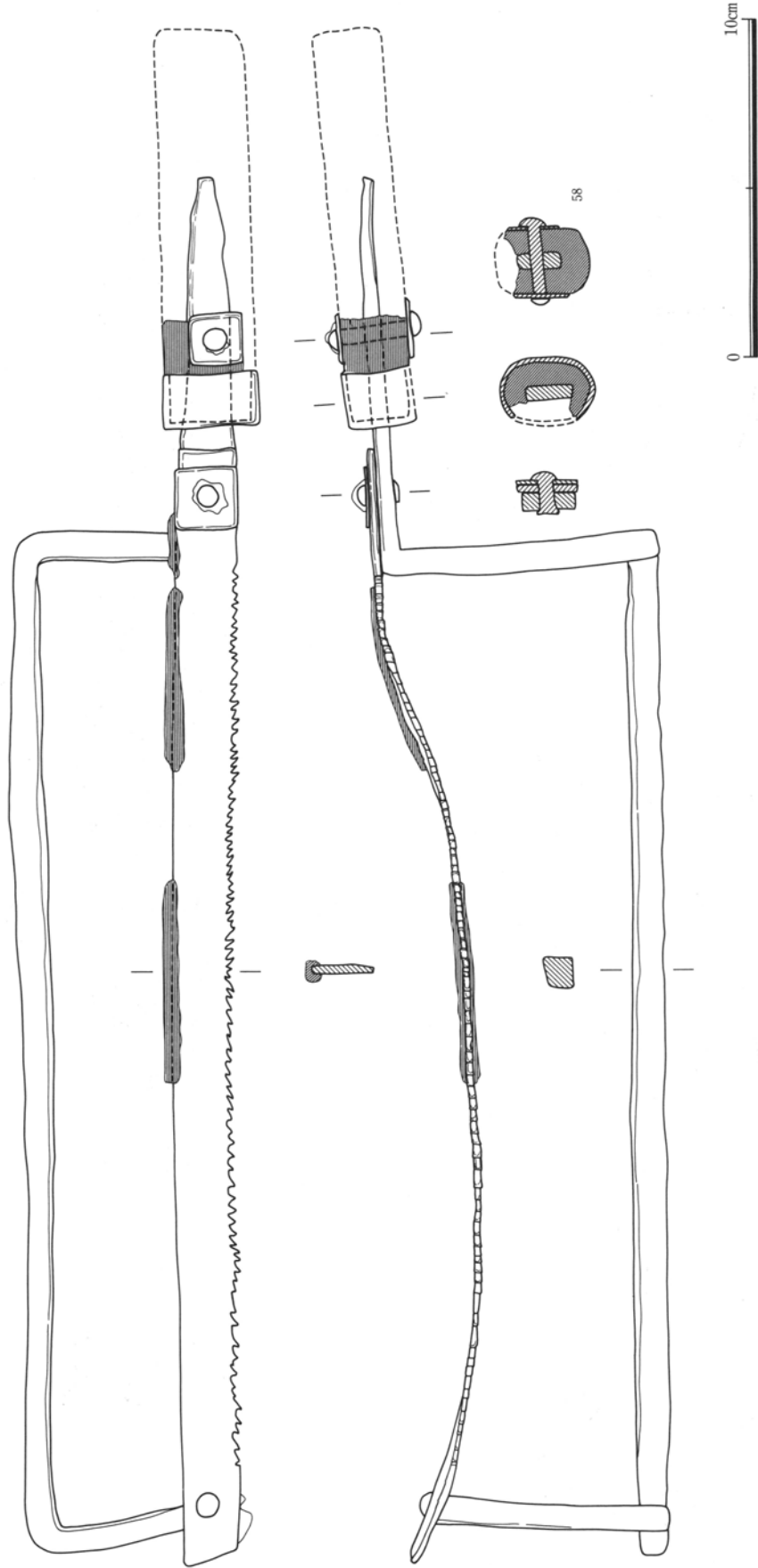
0 10cm

第22图 第4号住居址出土遗物(4)

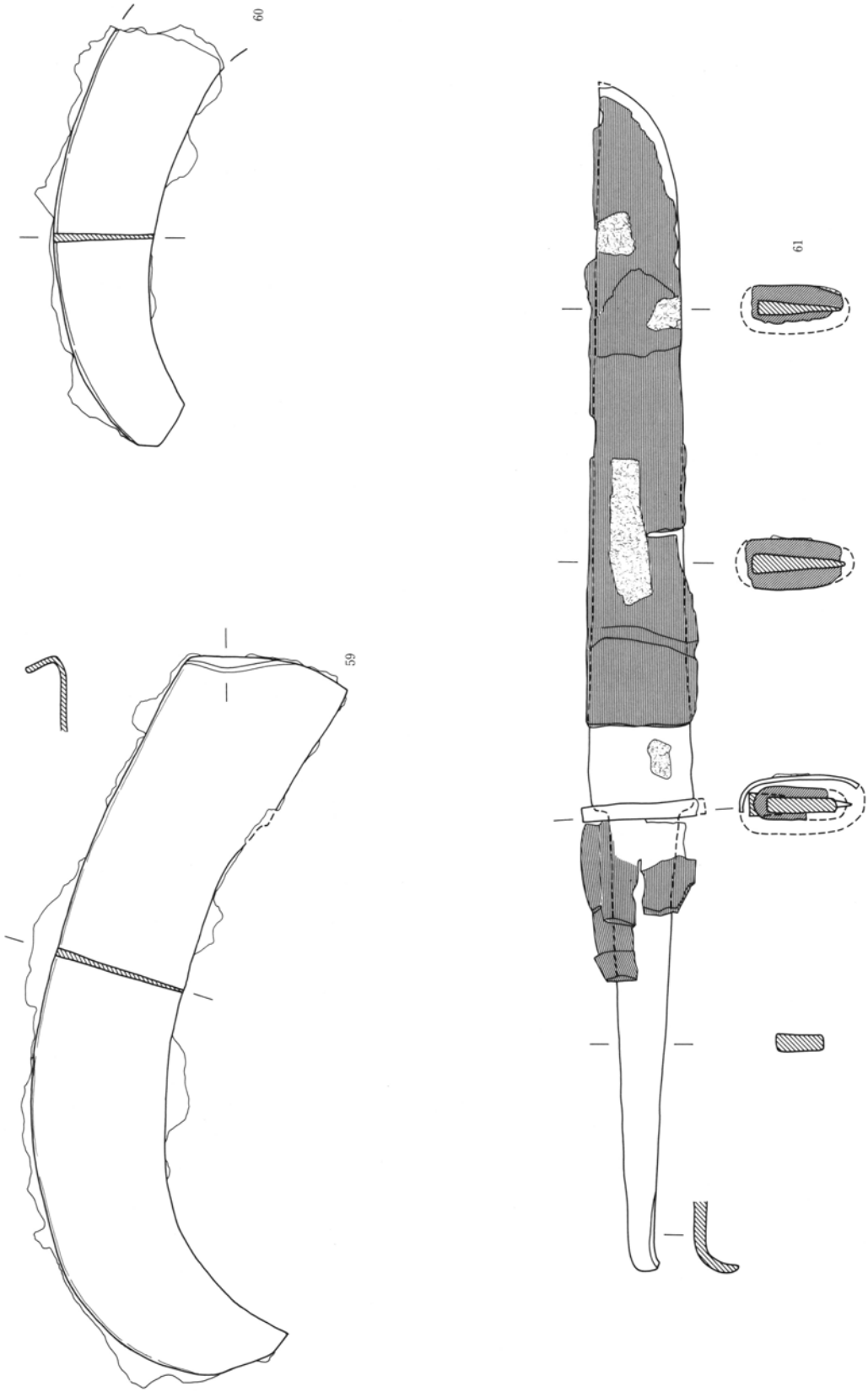
IV 遺構



第23図 第4号住居址出土遺物(5)

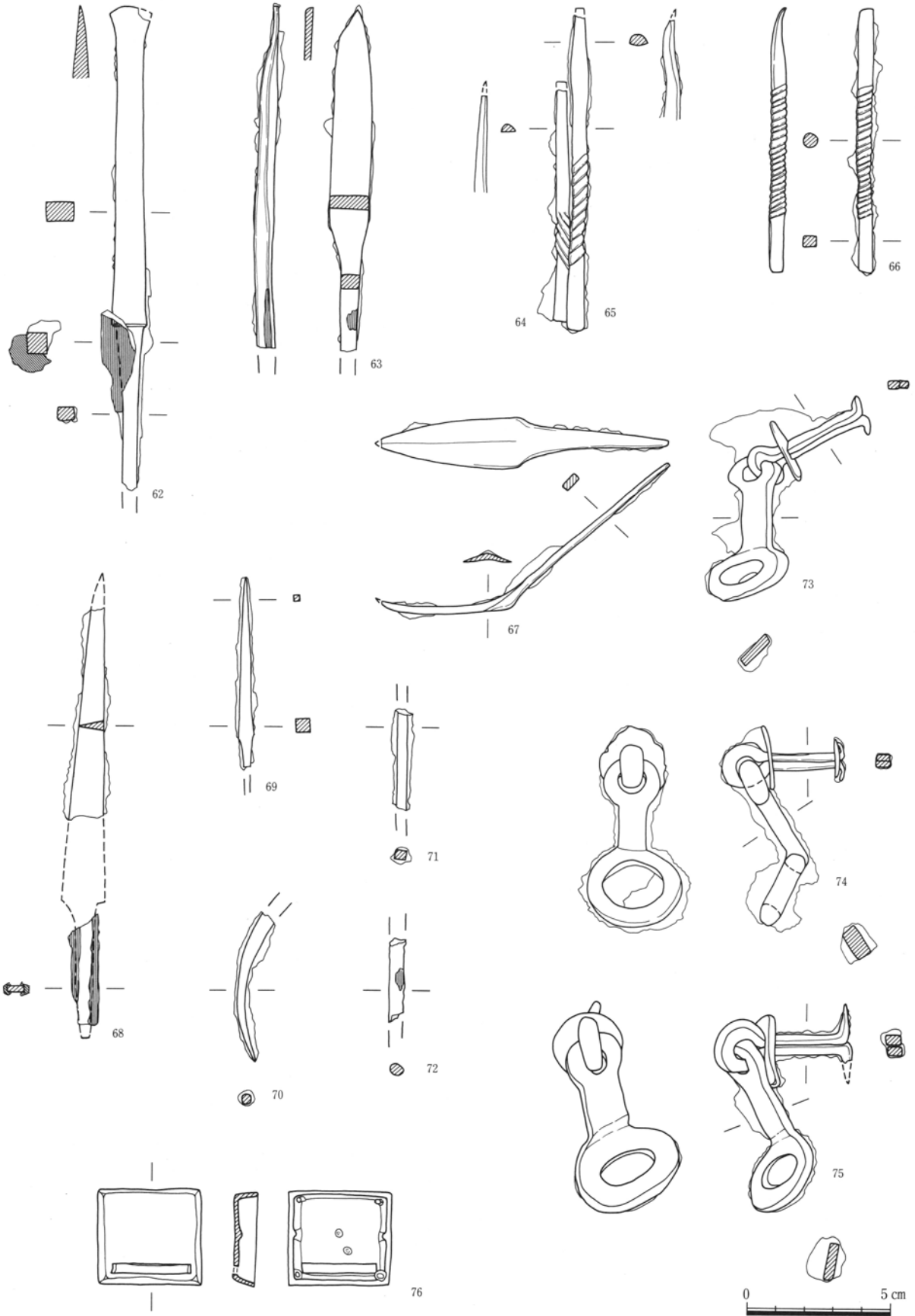


第24図 第4号住居址出土遺物(6)



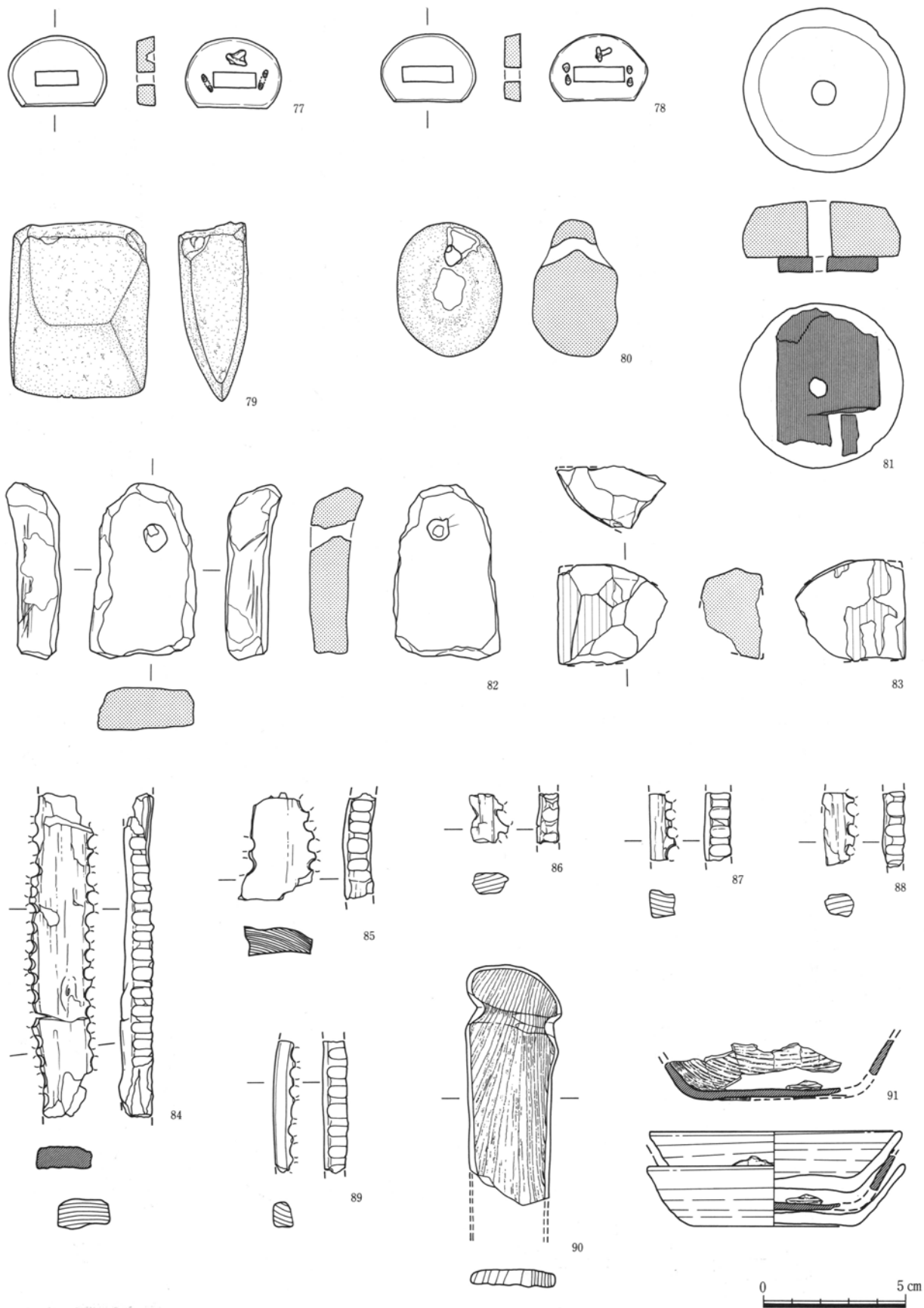
第25図 第4号住居址出土遺物(7)

4. 第4号住居址

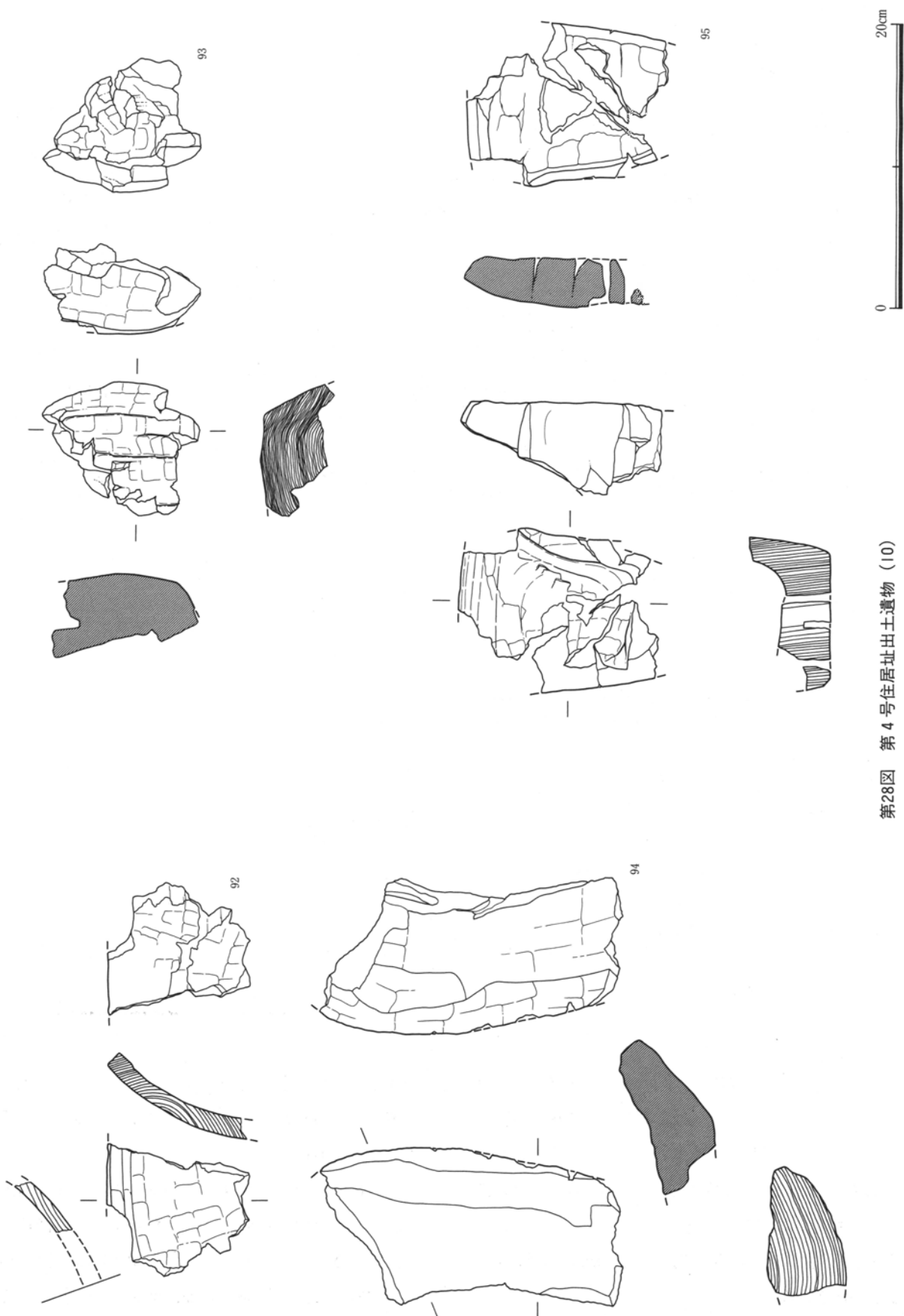


第26图 第4号住居址出土遗物(8)

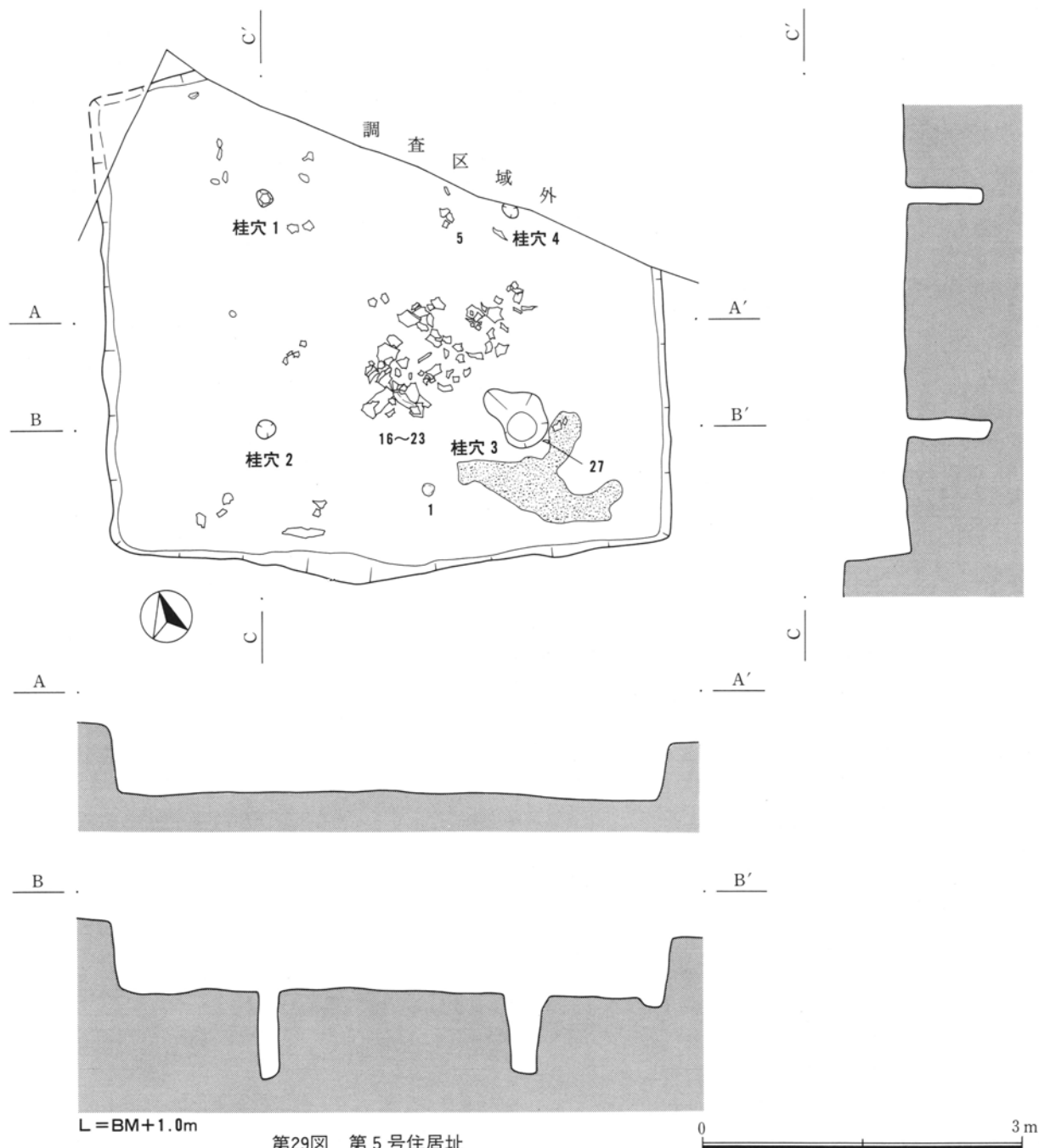
IV 遺構



第27图 第4号住居址出土遗物(9)



第28图 第4号住居址出土遺物(10)



第29図 第5号住居址

5. 第5号住居址 (P L 14・24・25)

本発掘区中の最北端に位置する住居である。住居全体の4分の1程(北壁寄り)は調査区域外に及んだため未発掘である。本住居は、南北4.55×東西5.25mの規模を有するほぼ方形のプランを呈した住居である。長軸の方向はN-73°-W、床面積の推定は22.77㎡である。

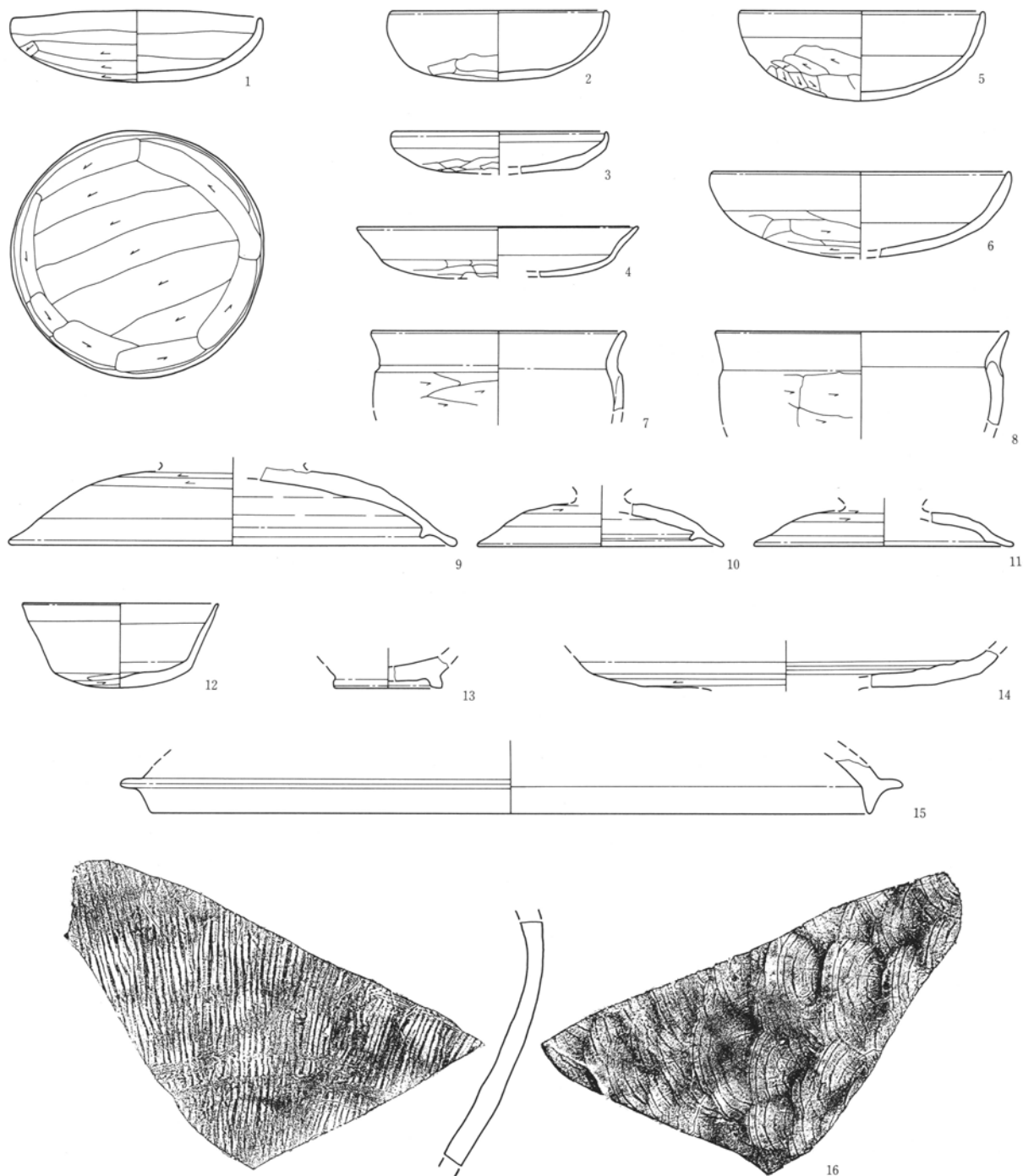
竈は発掘内では検出することができなかったが、

未発掘である北壁に近い部分より、埋土中に混入する焼土がみられたので、恐らくは北壁に接して敷設されているものとみられる。

柱穴は、ほぼ垂直に穿ってある4本の主柱が検出された。各々の柱穴の規模は、柱穴1で上端径17×14cm、深さ72cm、柱穴2で上端径18×17cm、深さ80cm、柱穴3で上端径68×44cm、深さ73cm、柱穴4で上端径17×13cmである。

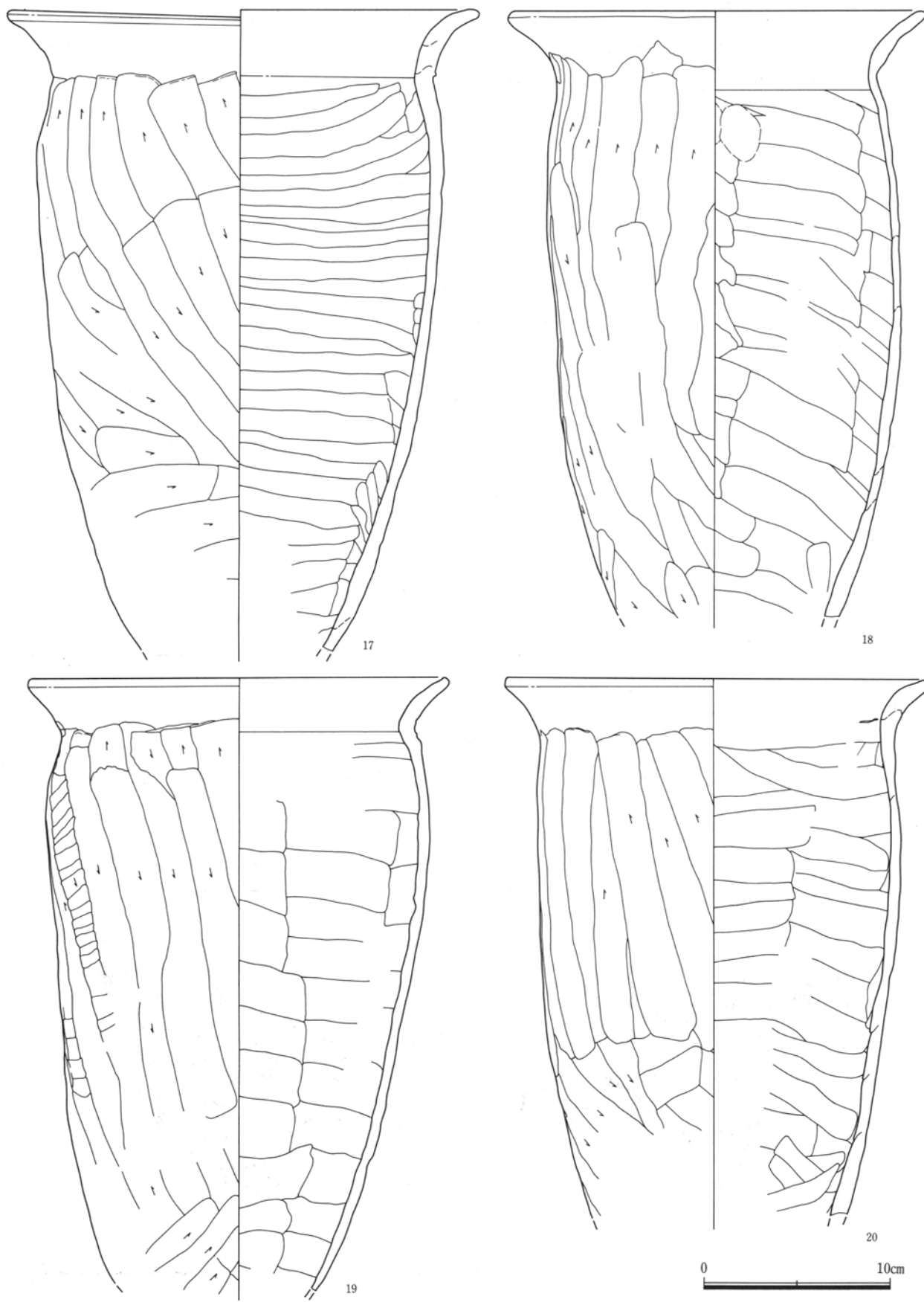
床面は全体にわたって、ほぼ踏み固められていた。
 出土遺物としては、完形の土師器の坏1点（1）
 が床面に密着した状態で、また長甕（16・21・23）

が押しつぶされた状態で出土している。（遺物観察
 表P117～119）

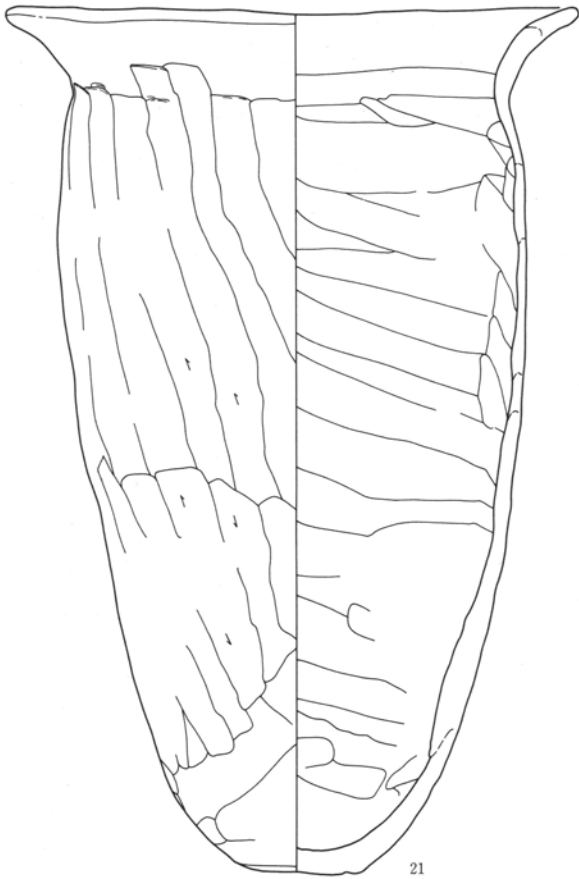


第30図 第5号住居址出土遺物（1）

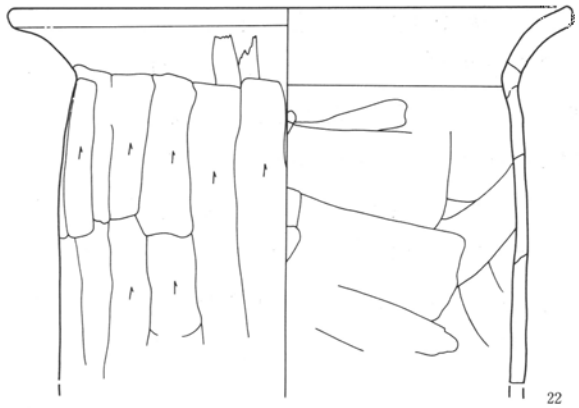
IV 遺構



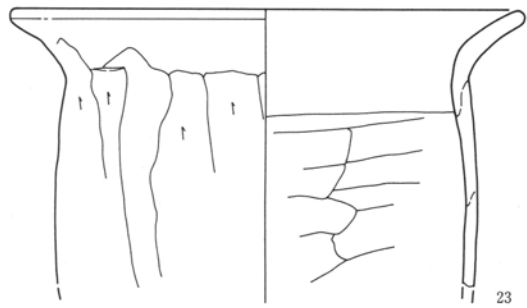
第31图 第5号住居址出土遗物(2)



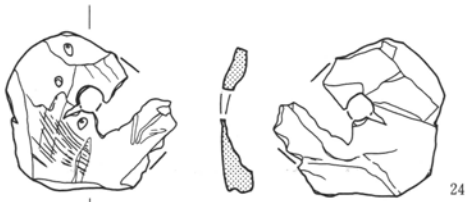
21



22



23



24



25

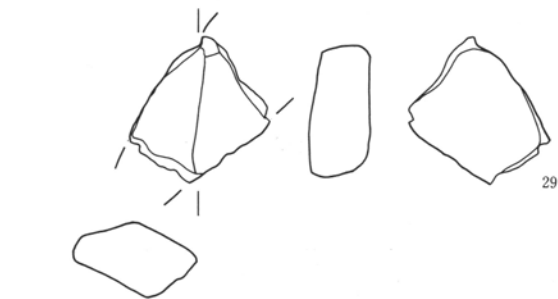
26



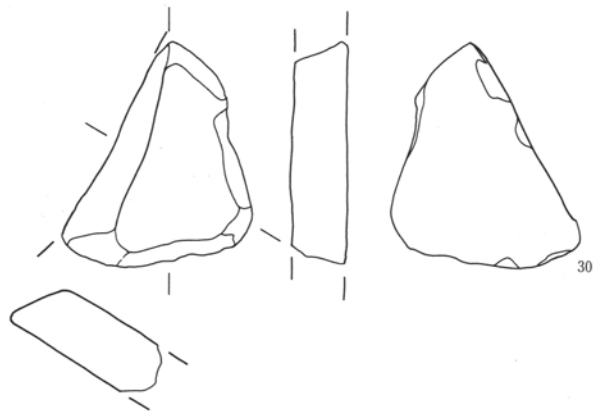
27



28



29



30



第32图 第5号住居址出土遗物(3)

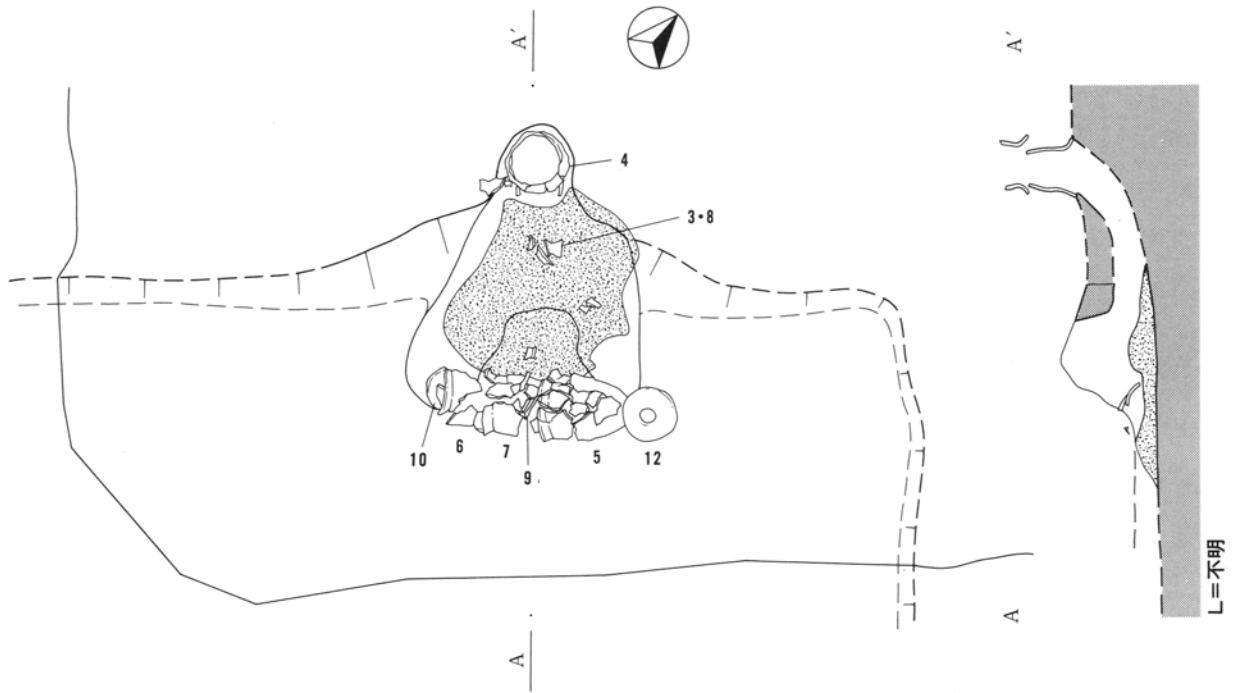
IV 遺構

6. 第6号住居址 (P L14・25)

第3号住居址の調査が終了した後、住居址を断ち割ったところ発見された住居である。諸般の事情で、調査を断念せざるを得なかった。

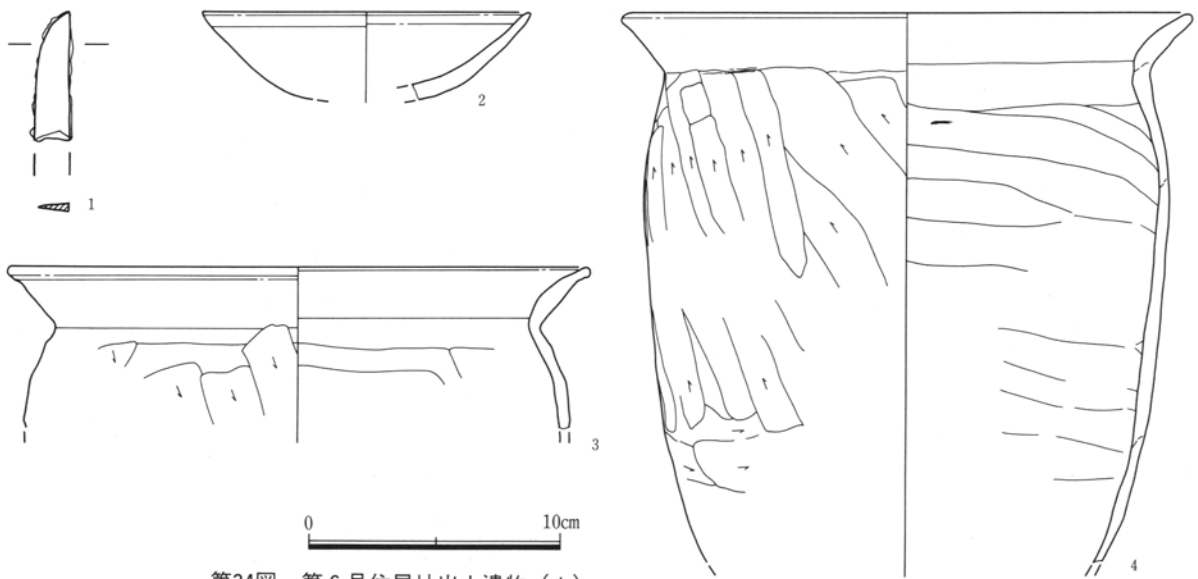
竈とこれが付設された北壁の一部を検出した。竈は、燃烧部を住居壁内に設けたもので、粘土を構築材とした左右袖部の先端には長胴甕(左側-10、右

側-12)を倒立させて据えている。これらを焚口部の芯材とした上に長胴甕3個(5・6・7)を入れ子の状態で組み合わせ、横たわせ焚口天井部を造っている。煙出し部分には底部を打ち欠いた長胴甕2個(内1点は4)を連結・倒立させている。(遺物観察表P119・120)

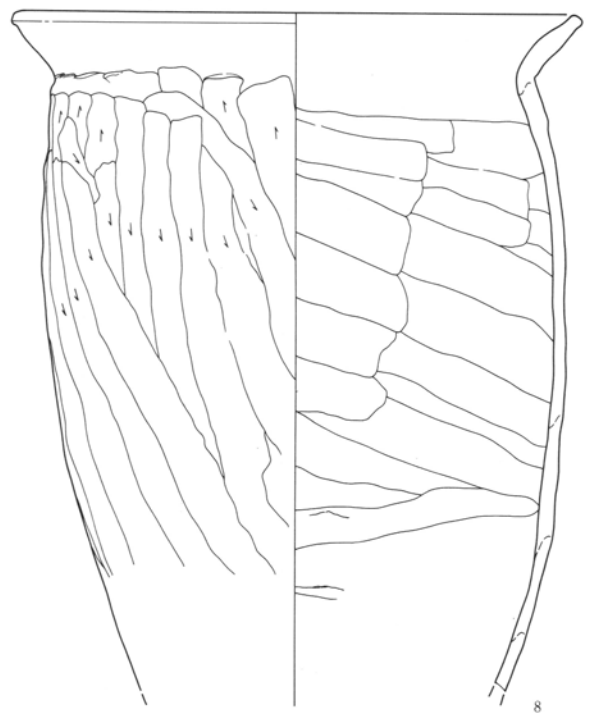
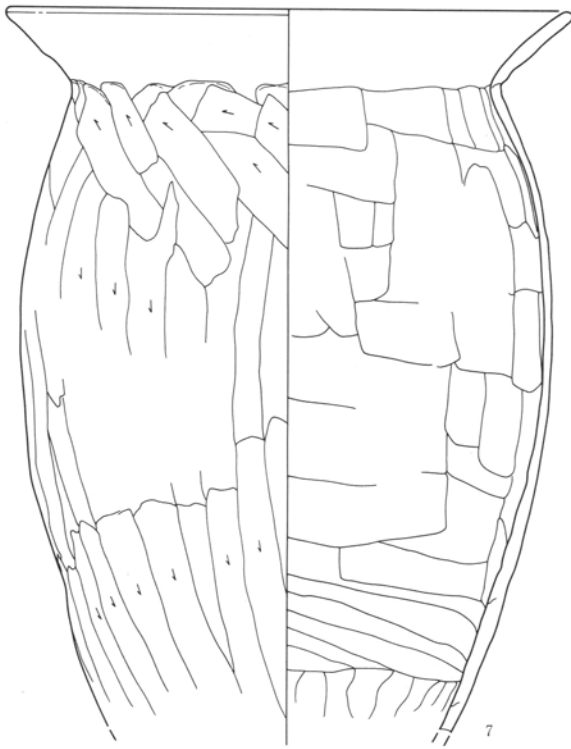
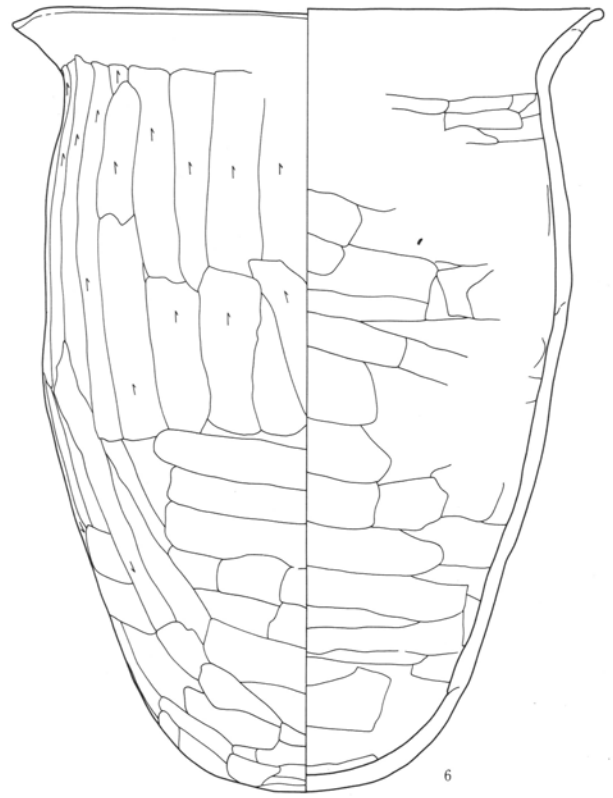
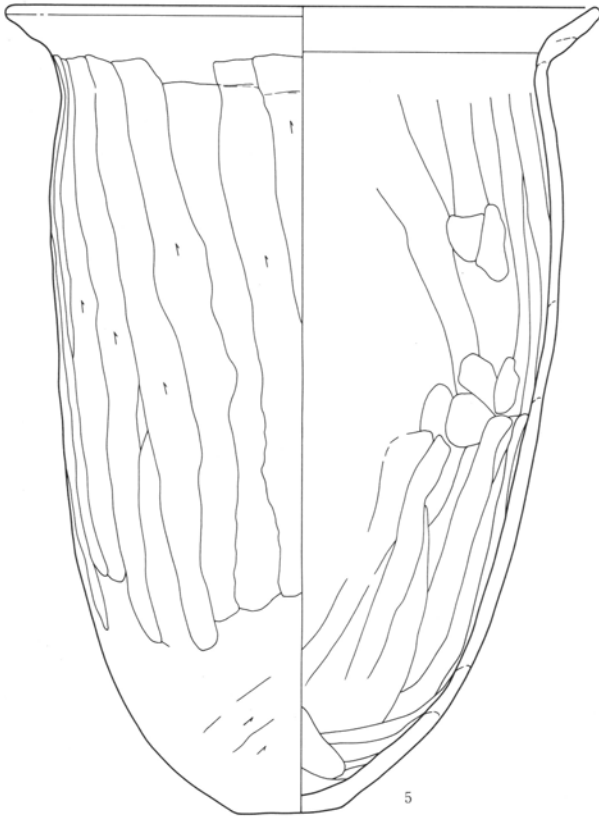


第33図 第6号住居址

0 1.5m



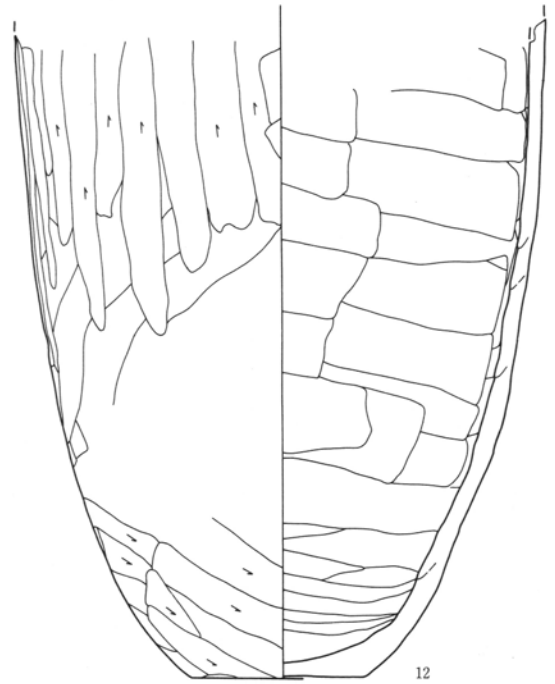
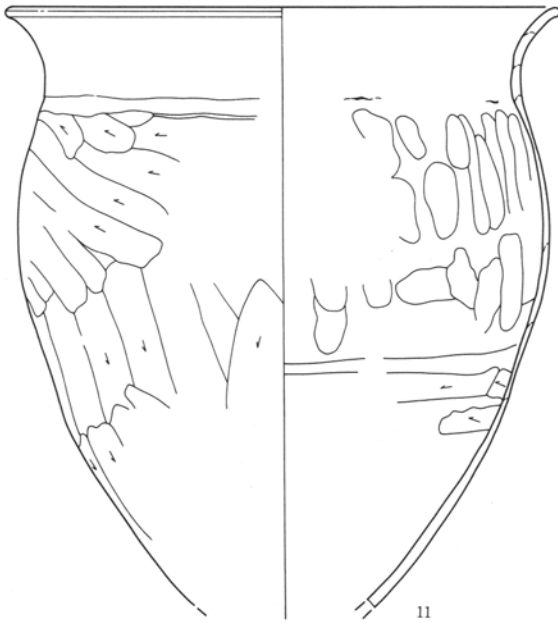
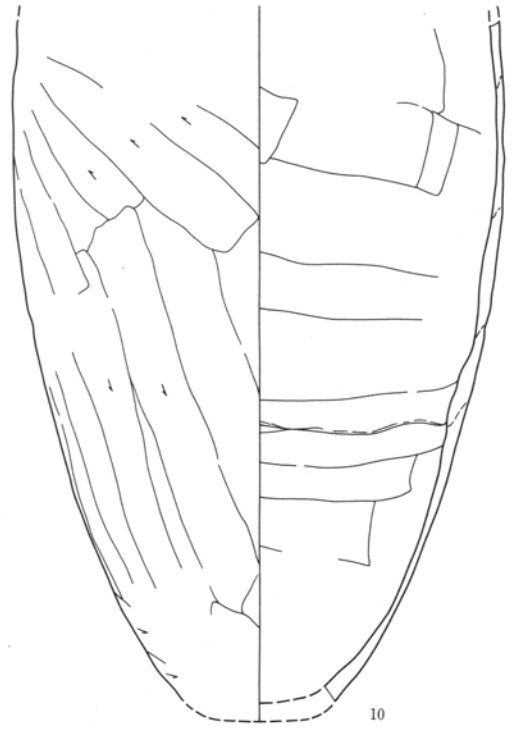
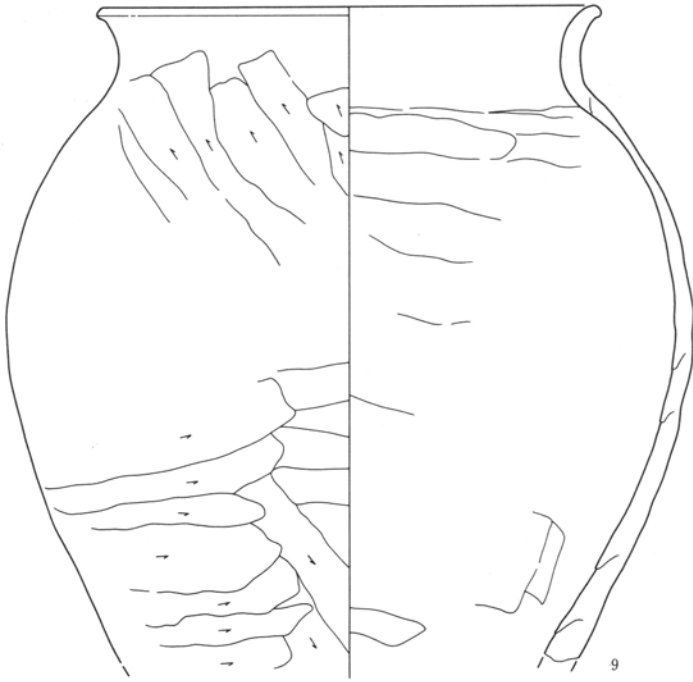
第34図 第6号住居址出土遺物(1)



0 10cm

第35图 第6号住居址出土遗物(2)

IV 遺構



0 10cm

第36図 第6号住居址出土遺物(3)

V 遺 物

1. 土器類

(1) 住居址出土の土器

第2号住居址を除く、第1号から第6号の各住居址から出土している。これらについてはIV 遺構の報告にあわせ挿図を作成、掲載した。また、各資料に対する観察内容については巻末の遺物観察表にその内容を報告してある。

(2) 遺構外出土の土器

愛宕山遺跡の調査においては遺物収納箱（縦62×横42×厚さ15cm）12箱分の遺物が出土している。これらの出土遺物は前述の6軒の竪穴住居からその大半が出土しているが、IIIでその経過を記した遺構確認調査時に各トレンチから出土した資料も少なくない。資料の種類は須恵器、土師器、陶磁器、鉄製品、石製品、縄文土器、石器、弥生土器である。以下、順次その内容を記す。これらの遺物の出土状況は竪穴住居の検出されたA区に設定されたA-I区からA-VI区までの調査区からその大半が出土している。その中でも平安時代の須恵器の出土量が多数である。これらトレンチ出土資料については整理作業の段階で各住居址出土資料との接合関係を確認したが、好結果の得られなかったものであり、その中の一部を本項で報告するものである。挿図は、調査区の近接するものをまとめて配している。また、各資料の詳細については、住居址出土の土器同様、巻末の遺物観察表を参照願いたい。

- ・須恵器（1～55-第38～41図、P L 26・27）

1は、A-I区出土の杯である。成形は底部回転糸切り離しである。

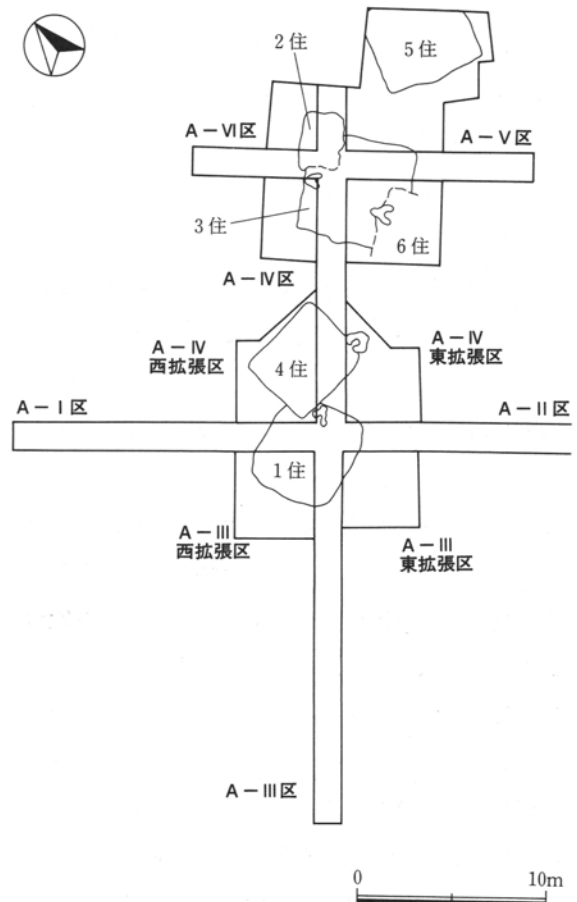
2・6・8・11はA-III区、3～5・7・9・10はA-III西拡張区の出土である。器種別にみると2～4は蓋である。2は小径。3は内面に弱いかえりを残す形状である。4は鈕部の周辺に成形時のロクロからの回転を伴う糸切り離し痕を残しており、第4号住居址22（第20図）と共通する技法が認められ

る。5～10は杯で、6は口縁部の立ち上がりが他例と比較して急である。9・10は口径に比して底径が大きな形状であり、第4号住居址出土資料（第19図）に類似する。

8は底部外面に墨書が施されている。残存が一部分であるため内容の判断はできない。本遺跡出土の墨書資料は、この資料の他に第4号住居址13の杯（第19図）・28の高台付椀（第20図）、A-IV東拡張区出

第2表 住居址出土の土器一覧

住居址名	挿図番号	写真図版	遺物観察表
第1号住居址	第8図	P L 15	P 109
第2号住居址	—	—	—
第3号住居址	第11図～第14図	P L 15・P L 16	P 109～111
第4号住居址	第19図～第23図	P L 17～P L 20	P 111～115
第5号住居址	第30図～第32図	P L 24	P 117～119
第6号住居址	第34図～第36図	P L 25	P 119～120



第37図 愛宕山遺跡の調査区配置

V 遺物

土の杯20の合計4例である。

11は華奢な高台部を有する椀である。

12～35は、A-IV区とその東西拡張区からの出土である。20・27・29・30・33がA-IV東拡張区からの出土、14～16・21・35がA-IV西拡張区出土である。12は小径の蓋である。

13～17・20は、杯である。13は小径で、底部の成形は手持ちヘラケズリである。14～16の底部は回転を伴う糸切り離し後無調整である。17は回転を伴うヘラ切り離し成形である。

20を除く18～23は高台付椀である。18は大径で、第4号住居址24(第20図)に類似する。21は小径である。

24は高台付の瓶あるいは甕であろうか。断面台形の低い高台部が付く。25は盤である。斜め上方に向かって立ち上がるが、小破片による復元である。

26～30・33は甕である。26・27は口縁部の破片である。29は丸底の資料、30・33は平底の資料である。

31は瓶の口縁部破片であるが、基部の状況から平瓶のそれと推想される。32は肩に丸味を有する。瓶の破片であろうか。

34は甕の胴部破片の周縁を二次調整した円板である。

35は、円面硯の陸部分の破片である。脚部はその大半が欠損しているが、幅の異なる2種類の長方形の透かしが配置されていた痕跡が確認できる。

36～44は、41がA-V東拡張区の他はA-V区出土の資料である。37～41の杯のうち40は回転ヘラ切り離し、39は回転糸切り離し後ナデ調整を加えている。他の3点は回転糸切り離し後無調整である。

43は椀の口縁部破片であるが、外面にロクロ成形によるカキ目状の横線がめぐっている。

44～55は、整理作業の段階で、出土地点の詳細を把握できなかった資料である。45は、蓋と考えられる。天井部は手持ちヘラケズリを施す。47～49の成形は回転糸切り離し後無調整である。50・51は高台付椀である。52・53は低い高台部が取り付くことから瓶の一部と考えたい。54は台付壺の破片である。

55は大甕の胴部破片である。内面の当目に一部、米の字状の刻みが認められることは稀少である。(遺物観察表P120～123)

• 土師器 (56～70-第41・42図、P L28)

56はA-I区出土の甕の口縁部破片である。57～59はA-III区出土の杯である。57・58はともに残存状況が不良であるが、平底を呈する破片である。

60・62・63はA-IV区、61・64はA-IV東拡張区出土である。60は器肉の厚い平底の杯で、57と類似する形状である。61・62は両者とも口縁部内面に棒状工具による放射状暗文が施されている。61は細線による表現で、2cmの幅に8本の間隔であるのに対し、62は幅2mm程の整形跡である。63の杯は不安定な平底状を呈している。64は口縁部が屈曲して立ち上がる長胴の甕である。

A-V区からは66・67が出土した。66の高台付椀は、内面、みこみ部分に放射状に延びる6条の暗文が認められる。67は台付甕の台部である。

68・69はC-II区出土の杯である。68は丸底の底部から彎曲して立ち上がる形状である。内面には棒状工具による暗文が施されている。口縁部には放射状に、みこみ部分には螺旋状の文様が配されている。69は直線的に立ち上がる口縁部を有する。口縁部内面に放射状の暗文が施されている。

65・70は出土地点が不詳の個体である。70には「西拡」の注記があることからA-IIIあるいはA-IVの拡張区の出土と思われる。(遺物観察表P123・124)

第3表 遺構外出土土器一覧

時期	須恵器	土師器
7世紀	3・13・25・31・42・45	61・62・64・65・67・70
8世紀	39・40・54	59・63・68
9世紀以降	1・2・4～12・14～24・26～30・33・35～38・44・46～53	56～58・60・66・69
不明	32・34・55	

• 陶磁器 (71・72-第42図、P L28)

71は青磁の破片である。内面に陰花文が施される。15・16世紀の中国産と考えられる。72は片口部分の破片である。江戸時代末期の下仁田焼の陶器で、全体形状は雪平状を呈していたと想定される。(遺物観察表P124)

2. 鉄製品

鉄製品は第3号・第4号・第5号・第6号住居址からそれぞれ出土している。出土状況は第4表のとおりである。以下、器種別に観察内容を記述する。

(1) 鋸 (第24図58、P L21) — 第4号住居址出土。全長40.8cm、柄部は9.3cm、弦部は32.3cm、このうち鋸歯のある部分は25.7cmである。こみは前方で2.0cm、中央で1.8cm、後方1.7cmで、厚さは2mm位である。鋸歯は全体で88枚が確認できる。中央部より柄部に近い方で2cmに8枚で下向き、その反対側では6枚で上向きである。中央部付近は歯はやや細く、上向きである。鋸歯には「あせり」がみられる。「なげし」は不明である。弦の柄部から中央部付近にかけては、木質が残存している。恐らくは弦の背面に鞆状のものが装着されていたのではないかと推定される。柄部には目釘穴が2箇所見られる。その1は

こみに近い部分にあり、あて金は1.8cm四方、厚さ1mm、目釘穴径5mm、厚さ1.2cmである。2は柄頭に近い方で、あて金は1.4×1.5cm、厚さ1mm、目釘穴径4mm、厚さ2.8cmである。二つの目釘穴の間には径2.8×2.0cm、幅1.5cmの楕円を呈す「かつら」がみられる。弓の部分は弦に対して、L字状の支えの部分に付けられている。弦に対する部分の長さは径30.0cm、厚さ1.0cm、これを支える部分は柄部に近い方で長さ8.2cm、厚さ0.7cmで弦と接触する部分は、鋸状に留められている。他は柄部に近い部分は長さ4.0cm、厚さ8mm、弦鋒に近い部分は長さ3.8cm、厚さ6mmである。

(2) 紡錘車 (第23図54・55・56、P L21) — 第4号住居址出土。

紡錘車は3点の出土をみたが、いずれも軸部の欠損が著しい。円盤部分はほぼ同形、同規模である。やや完全なものは54で、軸部の長さ21.4cm、厚さ5mm、円盤部分の径5.4cm、厚さ2mmである。円盤部分の重さについては腐食しており、これを知ることが不可である。全体の現重量は48gである。軸部、円盤部分には布片が錆とともに付着している。55は、軸部の残存が長さ6.8cmで直径5mmを測る。円盤部分の直径は5.1cm、厚さ1mmであった。現重量は38gである。56は、軸部の残存が長さ12.1cm、直径5mm、円盤部分の直径は5.3cm、厚さ2mmであった。現重量は31gである。

(3) 鎌 (第25図59・60、P L21) — 第4号住居址出土。2丁の出土をみる。

59は完形品で長さ22.5cm、幅4.2cm、厚さは刃の部分1.5mm、背の部分2.5mmである。着柄部は直角に曲がっており、刃鋒は内側に約110度反っている。現重量は123gである。60は刃の中央部から刃鋒にかけての破片である。残存長は13.0cm、幅3.1cm、厚さは背で2.5mmを測った。

(4) 鉄斧 (第23図57、P L21) — 第4号住居址出土。全長9.2cm、刃幅4.0cmの短冊型を呈する鉄斧頭である。着柄部は袋状になっており、それは鉄板の左右を折り曲げたもので閉じていない。折りかえし

第4表 鉄製品出土一覧

出土地点	器種	挿図番号	写真図版番号
第3号住居址	刀子	第13図 17	P L16
第4号住居址	鋸	第24図 58	P L21
第4号住居址	紡錘車	第23図 54	P L21
第4号住居址	紡錘車	第23図 55	P L21
第4号住居址	紡錘車	第23図 56	P L21
第4号住居址	鎌	第25図 59	P L21
第4号住居址	鎌	第25図 60	P L21
第4号住居址	斧	第23図 57	P L21
第4号住居址	小刀	第25図 61	P L21
第4号住居址	鑿	第26図 62	P L22
第4号住居址	鉈	第26図 67	P L21
第4号住居址	刀子	第26図 68	P L22
第4号住居址	吊手金具	第26図 73	P L22
第4号住居址	吊手金具	第26図 74	P L22
第4号住居址	吊手金具	第26図 75	P L22
第4号住居址	工具 鑿状	第26図 63	P L22
第4号住居址	工具 錐状	第26図 64	P L22
第4号住居址	工具 錐状	第26図 65	P L22
第4号住居址	工具 錐状	第26図 66	P L22
第4号住居址	工具 錐状	第26図 69	P L22
第4号住居址	器種不明	第26図 70	—
第4号住居址	器種不明	第26図 71	—
第4号住居址	器種不明	第26図 72	—
第5号住居址	刀子	第32図 26	P L25
第5号住居址	器種不明	第32図 27	—
第5号住居址	器種不明	第32図 28	—
第6号住居址	刀子	第34図 1	P L25
出土地不明	器種不明	第42図 75	—
出土地不明	器種不明	第42図 76	—
出土地不明	器種不明	第42図 77	—
出土地不明	器種不明	第42図 78	—

V 遺物

部分は長さ6.6cm、幅1.0cm、厚さ3mmである。刃は両刃である。現重量123gである。

(5)小刀 (第25図61、P L 21) —第4号住居址出土。全長36.8cm、刃長22.6cm、茎長14.2cmの平棟平造の直刀である。身幅は茎に近い部分では2.9cm、重ねは6mm、切先に近い部分では2.6cm、重ねは5mmである。茎は刃区、棟区の部分では2.3cm、中央で1.4cm、重ね5mm、忠尻で7mmである。茎は忠尻で約135度ほど反っている。刃区、棟区には長径3.9cm、短径1.8cm、厚さ5mmの楕円を呈す鞘留とみられるものが残存している。刃部には木質が付着している。鞘の残部と考えられる。その一部には樹皮状を呈するものがある。また、茎の切歯に近い部分にも木質が付着して残っている。目釘穴は見られない。茎の忠尻の反っている部分が、目釘穴の代用を果したものと考えられる。

(6)鑿 (第26図62、P L 22) —第4号住居址出土。全長16.7cmの両刃彎曲型の鑿である。茎は全長5.7cmで、断面は4×6mmの長方形を呈す。刃幅は1.4cm、厚さは刃先で1mm、上端で5mmであり、彎曲している部分は扇形に開いている。その長さは1.1cmである。身は長さ11.0cmで、その断面は0.7×1.0cmの長方形を呈している。茎には発掘時に長さ15.0cm、径3.5cmの円味をおびた木製の柄が炭化した状態で残っており、その柄頭には明らかに使用痕がみられた。柄は茎を四角にとがらせて、柄に孔を穿ちさしこんだようにみられる。口金は着いていなかった。柄頭から刃先までは全長26.0cmの法量である。現重量は52gである。

(7)鉞 (第26図67、P L 21) —第4号住居址出土。全長10.2cm、茎部の長さ5.3cmで刃部は柳葉形を成し、先端及び側線に刃が着いている。刃部先端は若干上反りしている。現重量は16gである。

(8)刀子 (第13図17・第26図68・第32図26・第34図1、P L 16・22・25) —第3号住居址から第6号住居址にいたる各住居址から各1点ずつ出土している。

第3号住居址17 (第13図、P L 16) は、茎尻の一

部を欠損するが残存長9.6cmを測る。刃区部分も欠損している。刃幅1.1cm、背の厚さは2mmである。

第4号住居址68 (第26図、P L 22) は刃部と茎部の2片に分離しており、2片は直接の接合点を有さない。刃部は鋒を欠損、残存長は7.2cmである。幅は茎部寄りでは1.1cmである。茎部の残存長は3.9cm、幅0.6cmである。柄木の一部と思われる木質が付着している。

(9)吊手金具 (第26図73・74・75、P L 22) —第4号住居址出土。3点出土。73・75の2点は対になる。対になるものは尾錠の長さ約4.5cmで、先端はT字状に開いている。頭部は環となっており、これに長さ約6cmの遊環がついている。尾錠には径2.5cm程の座金がついている。74は尾錠の長さ約4cmで先端はT字状に開いており、先端には径1.3cmの鉄製の座金、頭部には径2.2cmの花弁状を呈した銅製の座金がついている。頭部は環になっており、これに長さ約6cm程の遊環がついている。座金と遊環の間には、木質が一部残存している。

(10)器種不明の遺物

上記鉄製品の他に、器種を断定できない資料が第4号住居址から出土している。(第26図63～66・69～72、P L 22)

63 (第26図、P L 22) は残部の長さ11.7cm、茎の断面4×6mm、身の断面1.4×0.4cmの長方形を呈す。身の先端は三角状になっている。一見して刀子に見えるが、刃部を有していない。形からして鑿状工具の一種ではないかと考えられる。現重量は22gである。

64・65 (第26図、P L 22) は2点重なって出土する。区から刃部にかけて螺旋状になっており、その先端の刃部は内に反っている。64は、残存長8.0cmである。65は、残存長10.8cm、断面形は先端で半円形である。66同様錐状工具の一種ではないかと考えられる。

66 (第26図、P L 22) は全長9.1cm、先端部は尖って内に反っている。区の部分から刃先にかけての4.3cmは、右巻の螺旋状に作られており、その断面

は径5mm程の円を呈している。茎部の断面は4×6mmの長方形である。錐状工具の一種ではないかと考えられる。

69(第26図、P L 22)は、残存長6.8cmを測る。先端は錐のように鋭く尖る。図下端に向かって徐々にその幅を増す。断面は四角形である。先端から5.5cmの位置に変換点を有し、弱く割り込まれている。

70~72(第26図)は、いずれも棒状を呈した小破片である。70は断面円形、弧状を呈し先端は尖る。71は断面四角形、72は断面円形である。

第5号住居址からは27・28(第32図)の板状品が出土している。27は厚さ1mmを測る。平面形は大刀の鋒状を呈すが刃部は備えられていない。28は小孔が2箇所に穿たれている。いずれも器種が特定できないものである。

最後に、出土地点の特定できない資料4点を遺構外出土遺物として掲載した。75~78(第42図)はいずれも棒状の破片である。75は図、上端が勾手状を呈するようであり、紡錘車の軸部の可能性がある。76~78は器種を特定することは困難である。76は断面四角形、77は断面円形、78は断面扁平な四角形である。

3. 銅製品

(1) 腰帯具 巡方(第26図76、P L 22) — 第4号住居址出土。石製の丸軋と伴出する。3.3×3.6cm、高さ7mm、厚さ約2mmのものである。下辺近くに3mm×2.6cmの長方形の透孔が作られている。銅地に銀張り(?)をしたものではないかとみられる。

(2) 万年通寶(96、P L 22) — 第4号住居址出土。径2.6cm、厚さ1mmである。

4. 石製品

石製品は、第3号・第4号・第5号住居址から出土している。その一覧は、第5表のとおりである。以下、器種別にその概要を記述する。

(1) 腰帯具 丸軋(第27図77・78、P L 22) — 第4号住居址出土。2点出土。77は巡方と伴出する。

長径3.4cm、短径2.4cm、厚さ6mmで楕円を呈す。下辺は垂直に切られている。下辺に近く1.5×0.5cmの長方形の透孔が作られている。裏面は透孔を中にはさんで、左右両端及び上辺に、紐を通すための孔3個が穿たれている。石材は素悪な蛇紋岩で、表面は研磨されているが、裏面は研磨されてない。78は長径3.4cm、短径2.3cm、厚さ5mmで77とほぼ同型である。透孔は1.8×0.5cmである。裏面は77同様に3個の孔がある。表面、裏面とも77同様である。石材は強い火に遭遇して、焼けただけに変色しているが、蛇紋岩と推定される。

(2) 紡錘車(第13図16・第27図81・第42図74、P L 16・22・28) — 第3号住居址1点、第4号住居址1点、A-IV区出土1点である。

第3号住居址出土の16(第13図、P L 16)は、滑石製で截頭円錐形を呈す。上面径2.4×2.1cm、下面径3.5×3.3cm、厚さ2.4cm、貫通孔径4mmである。重量は40gである。

第4号住居址出土の81(第27図、P L 22)は上面径4.5cm、下面径5.7cm、厚さ1.9cm、貫通孔径上面9mm、下面6mmである。下面には貫通孔を中心にして、木質が付着している。木質の部分も貫通孔がある。このことから考えられることは、石に付着して木製の紡織関係の機具(木製の輪か)が、着いていたことが予測される。重量は71gである。

A-IV区出土資料の74(第42図、P L 28)は約2分の1ほどの残存である。上面径は、2.4cmが推定

第5表 石製品出土一覧

出土地点	器種	挿図番号	写真図版番号
第3号住居址	紡錘車	第13図 16	P L 16
第3号住居址	砥石	第14図 19	P L 16
第4号住居址	腰帯具 丸軋	第27図 77	P L 22
第4号住居址	腰帯具 丸軋	第27図 78	P L 22
第4号住居址	紡錘車	第27図 81	P L 22
第4号住居址	楔形石製品	第27図 79	P L 22
第4号住居址	石錘	第27図 80	P L 22
第4号住居址	砥石	第27図 82	P L 22
第4号住居址	砥石	第27図 83	—
第5号住居址	滑石製模造品	第32図 24	P L 24
第5号住居址	滑石製模造品	第32図 25	P L 24
A-IV区	紡錘車	第42図 74	P L 28
A-V区	砥石	第42図 73	—

V 遺物

される。

(3) 楔形石製品 (第27図79、P L22) — 第4号住居址出土、頭部幅4.6cm、頭部厚2.4cm、刃幅4.6cmの法量である。各面とも比較的ていねいに調整、研磨されている。火災に遭遇して火を受けているため、石面は全体に黒色を呈している。このため、石材は表面観察からは不明である。頭部は叩かれた痕跡がみられる。重量は104gである。

(4) 石錘 (第27図80、P L22) — 第4号住居址出土。長径4.7cm、短径3.6cm、厚さ(中心部)2.8cmで卵形をなしている。線に近い部分を穿ち1×3mmほどの紐を通すための孔がある。石材は表面観察からは不明である。重量は50gである。

(5) 砥石 (第14図19・第27図82・83・第42図73、P L16・22) — 第3号住居址1点、第4号住居址2点、トレンチ1点の合計4点が出土した。

第3号住居址出土の19(第14図、P L16)は、長さ11.9cm、幅5.8cm、厚さ5.0cmの荒砥である。石材は角閃石安山岩である。重量は233g。

第4号住居址出土の82(第27図、P L22)は、長さ6.1cm、最大幅3.7cm、厚さ1.6cmの板状品で、平面形は撥形を呈している。上位に直径4mmの小孔が穿たれている。重量は47gである。83(第27図)は、4号住居址埋没土からの出土である。原形は直方体状を呈していたか。現状では長さ3.8cm、幅3.5cm、厚さ2.1cmの三角柱状を呈する。重量は24gである。

73(第42図)はA-V区の出土である。全長11.2cmで撥形をしている。最小幅は2.5cm、最大幅6.7cmで、中間の断面は2.3×3.6cmである。

(6) 滑石製模造品 (第32図24・25、P L24) — 第5号住居址出土。ともに円盤状を呈し、小孔を穿つが定型化した器種ではない。24は、長さ4.2cm、幅4.5cm、厚さ9.5mmである。25は、長さ2.5cm、幅2.3cm、厚さ4mmである。

5. 木製品

第4号住居址出土。焼失した建築部材と考えられる大量の炭化材とともに炭化状態で出土した。

91と92は容器である。84から89は、その特徴的な形状から同一個体あるいは同一形状の個体の一部位である可能性が高いが、器種、機能等を特定するにいたらなかった。90、93から95も器面に明瞭な加工痕を残す資料であるが器種は不明である。なお、材質については、VIの樹種同定の分析内容を合わせて参照願いたい。

91(第27図、P L23)は2個の須恵器1・3(第19図、P L17)の間に挟まれた状態で出土した。出土時には既に炭化が進行しており、現存はしない。杯あるいは碗形を呈した平底の容器と考えられ、器肉も土器のそれとほぼ同様の厚さである。

92(第28図、P L23)は先端が外反して立ち上がる容器である。両面が整形されて加工してある。部分的に皮革の炭化したものらしい有機物質が、附着して残存している。吊手金具の出土した地点に近接出土している。

84(第27図、P L23)は残存長11.3cm、上幅1.7~2.0cm、下幅1.8~1.9cm、厚さ7~10mmの板状品である。天地、表裏は不明である。断面形は底面が平坦であるのに対し、表面はやや弧状をなし、蒲鉾状を呈している。両側面には直径5mmほどの半円形状の割り込みが連続して並んでいる。穿孔部分には特

第6表 その他の製品出土一覧

出土地点	器種	挿図番号	写真図版番号
第4号住居址	銅製品 腰帯具 巡方	第26図 76	P L22
第4号住居址	銅製品 銭(万年通寶)	未掲載 96	P L22
第4号住居址	木製品	第27図 84	P L23
第4号住居址	木製品	第27図 85	—
第4号住居址	木製品	第27図 86	—
第4号住居址	木製品	第27図 87	P L23
第4号住居址	木製品	第27図 88	P L23
第4号住居址	木製品	第27図 89	P L23
第4号住居址	木製品	第27図 90	P L23
第4号住居址	木製品	第27図 91	P L23
第4号住居址	木製品	第28図 92	P L23
第4号住居址	木製品	第28図 93	P L23
第4号住居址	木製品	第28図 94	P L23
第4号住居址	木製品	第28図 95	P L23
第5号住居址	鋳型	第32図 29	P L25
A-II区	鋳型	第32図 30	P L25
第2号住居址	鉄滓	未掲載	—
A-IV区	鉄滓	未掲載168	P L28
A-IV拡張区	鉄滓	未掲載169	P L28
第4号住居址	布	VI-2参照	

段の磨耗痕等は観察できない。縁部の原形については二つの想定案が考えられる。一つは半円形の割り込みが連続した。もう一つは円形の穿孔が両縁辺近くに連続して配置された（85～89は84と同一個体を形成していた部位の一つとし、円形の穿孔部分が破損、遊離したと考える）との考え方であるが、現状の観察から結論づけることは困難である。

85～89（第27図、P L 23）は断面四角形の棒状品の破片である。残存長は1.7～4.6cmである。いずれも一方の側面に半円形の割り込みを有する。他方の側面は直線を保っている点が極似している。割り込みの状況、裏面の断面が平坦である点が84と共通する。

90（第27図、P L 23）は、幅2.9cm、厚さ5mm、長さ8.4cm（現状）である。上部は円味をおびている。上部より1.5cm程の両端には、縄掛状の加工が施しており、使用痕がみられる。表面は整形されているが、裏面は荒削りで、不整形である。用途不明である。

93（第28図、P L 23）は、平面長円形が想定されるが、欠損部分が多く原形は不明である。断面、亀の甲あるいは舟底形を呈する。天地、表裏ともに不明である。現状、残存長11.1cm、残存幅9.3cm、厚さ6.3cmを測る。図示表面側には明瞭な稜を有し、加工面が観察できる。もう一面には器面を割り込んだ様子が確認できる。用途不明である。

94（第28図、P L 23）は、残存長21.4cm、残存幅11.0cm、厚さ5.5cmを測る。原形の想定は困難であるが側面に明瞭な加工面を有している。材質からも建築部材とは異なる木製品の一部であった可能性が高い。天地、用途等は不明である。

95（第28図、P L 23）は、残存長14.0cm、残存幅11.5cm、厚さ6.3cmを測る。芯持材を裁断、図、裏面は平面形をなし、わずかな幅で面取りがなされている。表面は欠損が著しいが、三方がコの字状に高まりを有していたものと思われる。天地、用途等は不明である。

6. 布、繊維製品

第4号住居址出土。石製紡錘車、鉄製紡錘車の出土した地点を中心に多量出土した。鉄製紡錘車（第23図54、P L 21）の円盤部分には現在も布の付着が認められる。布片及び糸は炭化した状態で出土する。これらについては群馬県繊維工業試験場に分析を依頼した。その結果についてはVI-2に掲載してあるので参照を願いたい。

7. その他

(1) 鋳型（第32図29・30、P L 25）—第5号住居址から小破片2点が出土した。またA-I区から1点、A-II区から2点、B-II区から1点の出土があった。第5号住居址出土の29（第32図、P L 25）は、残存長3.9cm、残存幅3.7cm、厚さ1.7cmの破片である。A-II区出土の30（第32図、P L 25—参考のため第5号住居址出土遺物と併載）は、残存長6.0cm、残存幅5.0cm、厚さ1.6cmである。

(2) 鉄滓（P L 28）—第2号住居址から長さ1.9cm、重量2gの小品が1点出土した。他にトレンチ調査中にA-IV区から168（P L 28）、A-IV拡張区から169（P L 28）が出土した。168は長さ10.5cm、現重量275gである。169は長さ4.2cm、現重量32gである。

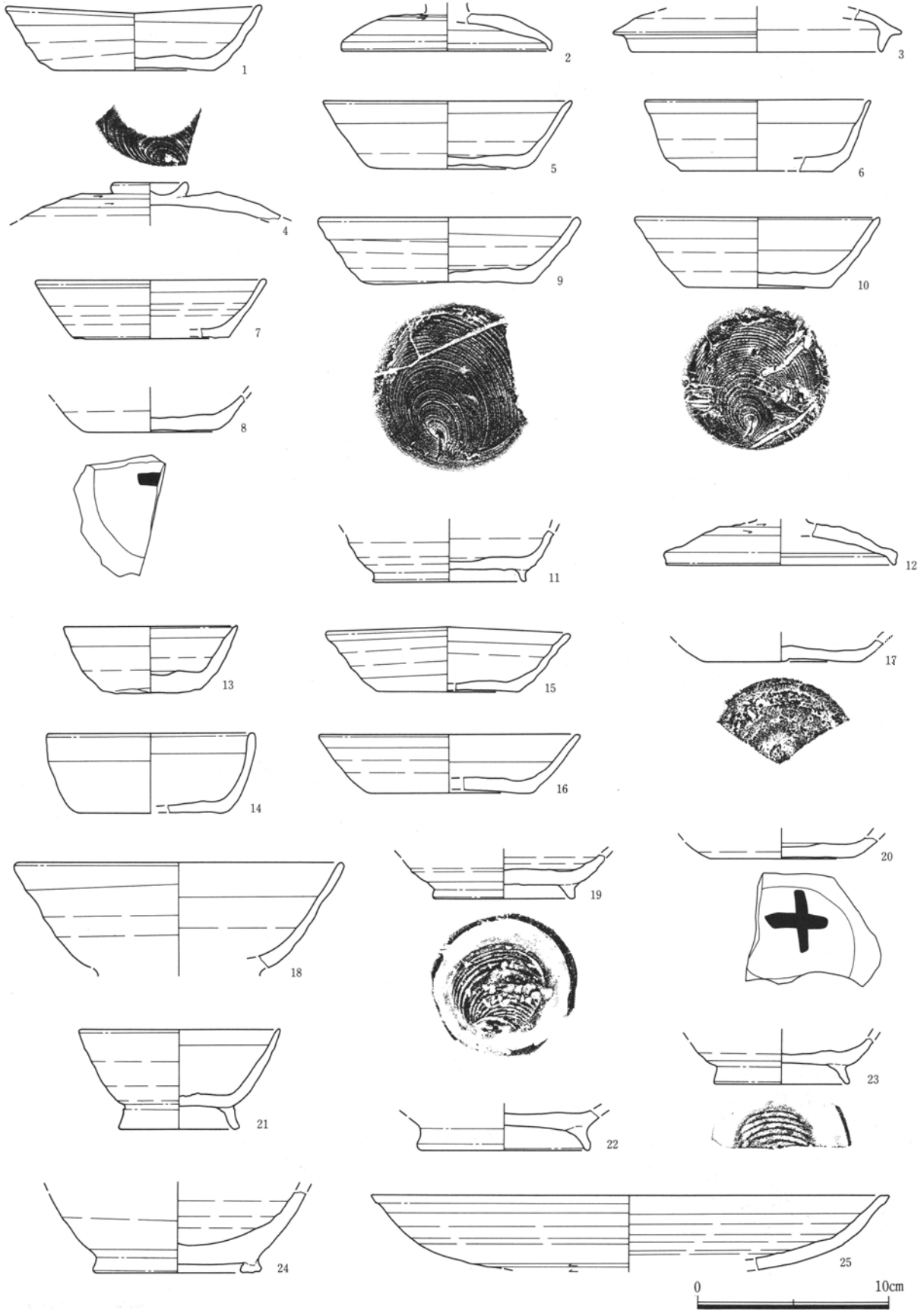
V 遺物

第7表 第4号住居址炭化材一覧

収納箱の法量41×26×7cm

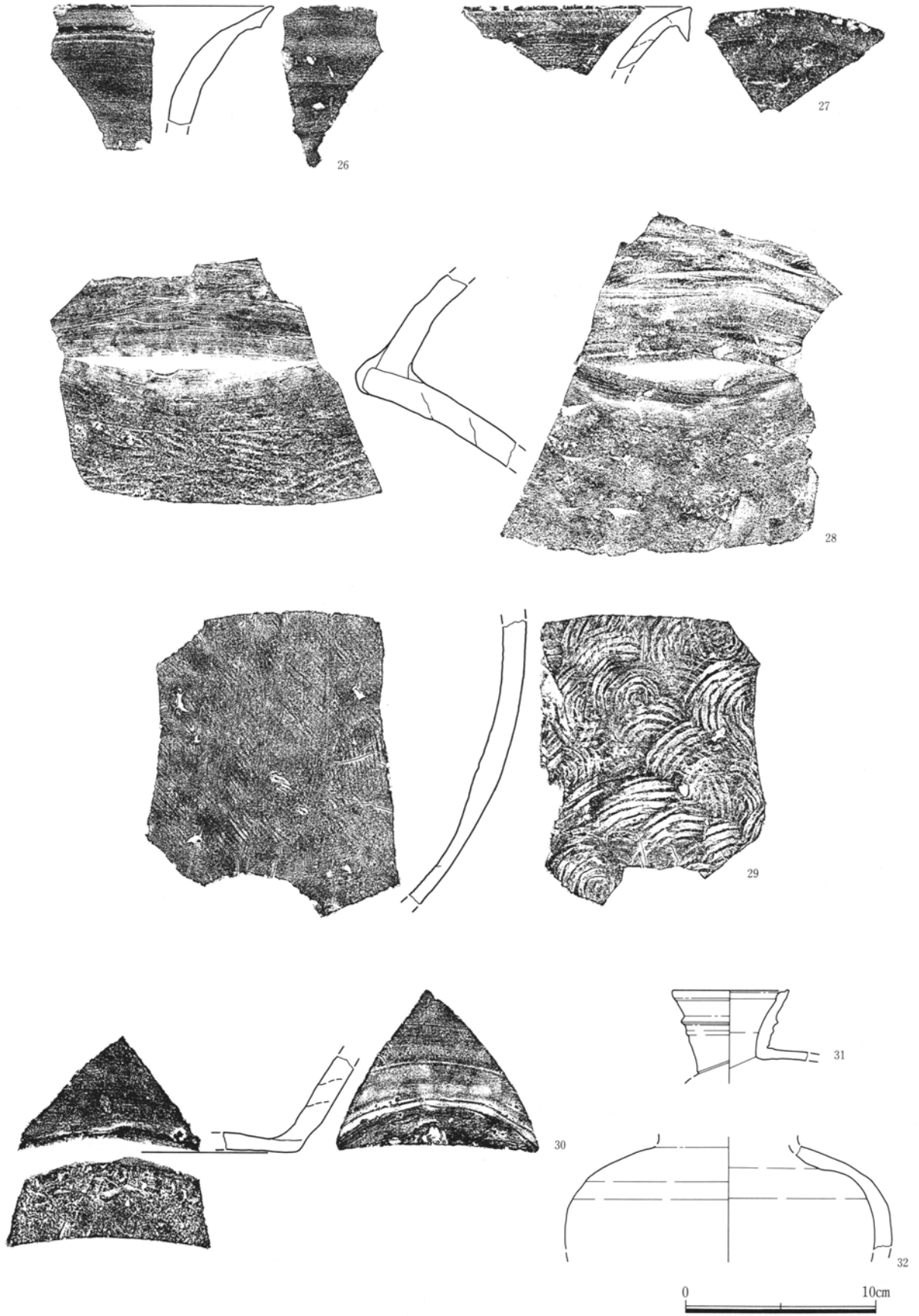
No.	検出状況	収納状況	箱数
1	長さ約60cm、幅約8cm。	直径5cmの丸材あり。篠状資料含む。	2
2	長さ約60cmの材の他複数。	幅広の板材あり。No22が混入か。	3
3	長さ約45cm、棒状を呈する。		×
4	長さ100cm以上、棒状を呈する。		×
5	70cmの範囲から複数個体出土。		×
6	No23と重複。	第27図90	×
7	木製品と長さ約20cmの小片。	第28図92・94を含む。	2
8	長さ約110cmの棒状を呈する。		1
9	長さ約90cm、幅約8cm。	3箱のうち1箱はNo13と混在。	3
10	長さ約50cmの棒状を呈する。	収納箱中にNo25と混在。	1
11	篠状、平行して10本以上が出土。		×
12	長さ約20cm、径約7cm。中央が細く、杵状を呈する。木製品か。		×
13	長さ約65cm。		×
14	長さ約150cm、径10cm以上か。		1
15	70×60cmの範囲内に6点出土。		1
16	篠状品と小片。		1
17	100×70cmの範囲中に4点以上出土。	第27図84～89の木製品が含まれる。	5
18	長さ約50cm。	図示の状況と比較して残存量少量。	1
19	No14と同一資料となるか。	直径3cmの丸材あり。	4
20	長さ約110cm以上の棒状品、他。	幅2cmの材あり。	1
21	長さ約70cm。	角状の材あり。	2
22	長さ約20cmの板状を呈する。		×
23	長さ約15cm、幅10cm。周囲に小片。	第28図93・95の木製品が含まれる。	1
24			×
25	長さ約190cm以上、幅10cm。	図示の状況と比較して残存量少量。	1
26	篠状品、7本以上検出。		1
27	長さ約150cm。	径4cmの丸材。幅4cm以上の板材。	2
28	長さ約75cm。	太径、小径混在。	2
出土地点不明の収納資料 篠状の炭化材（不明-1）、小破片収納の箱（不明-2・4・5）、木製品と考えられる容器（不明-3）、A-IV区注記資料あり。			4

7. その他



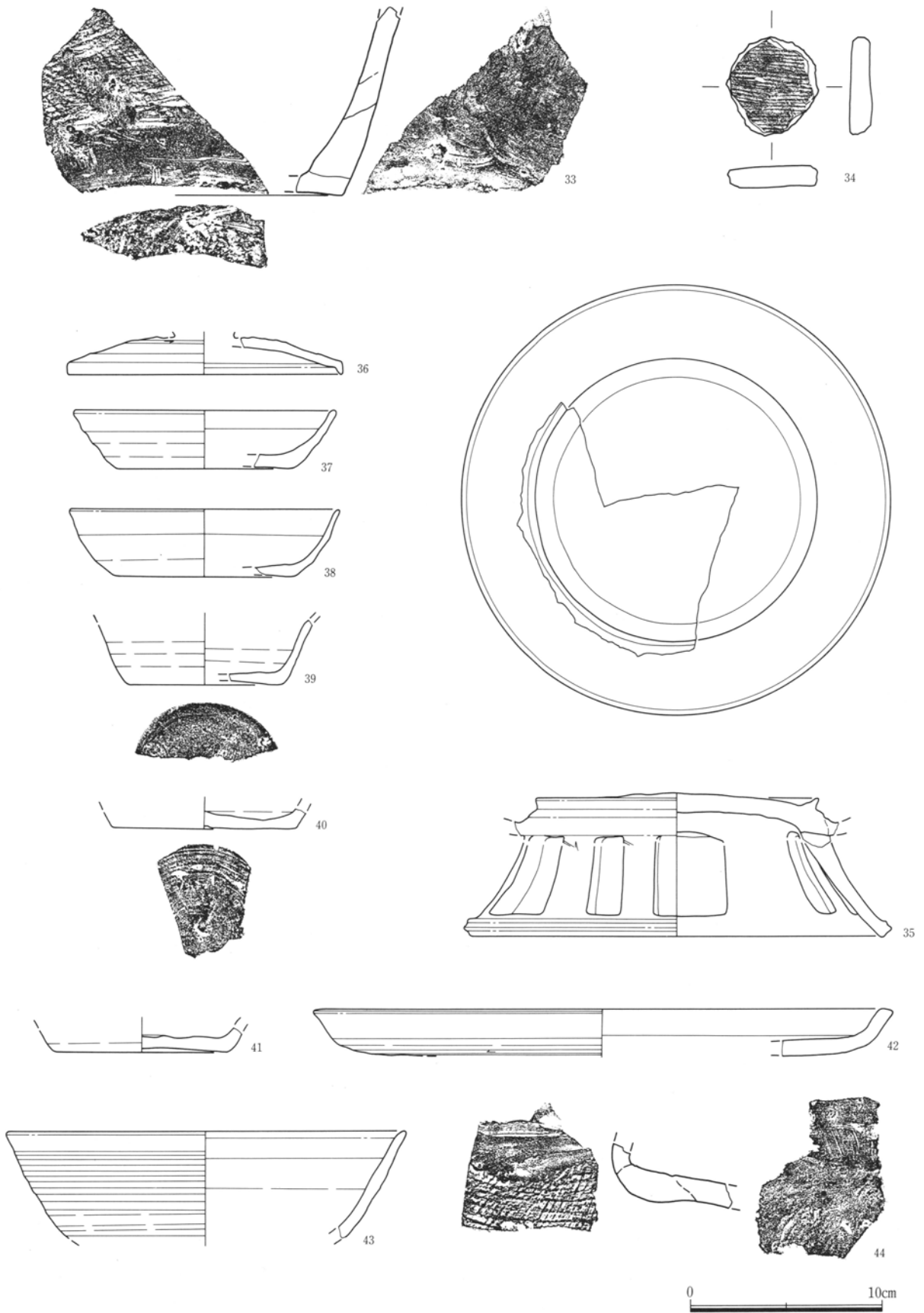
第38図 遺構外出土遺物 (1-須恵器)

V 遺物



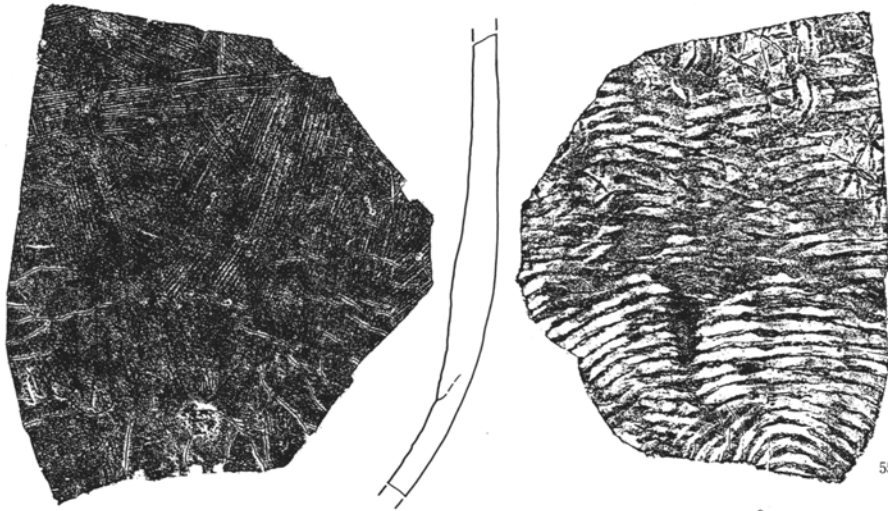
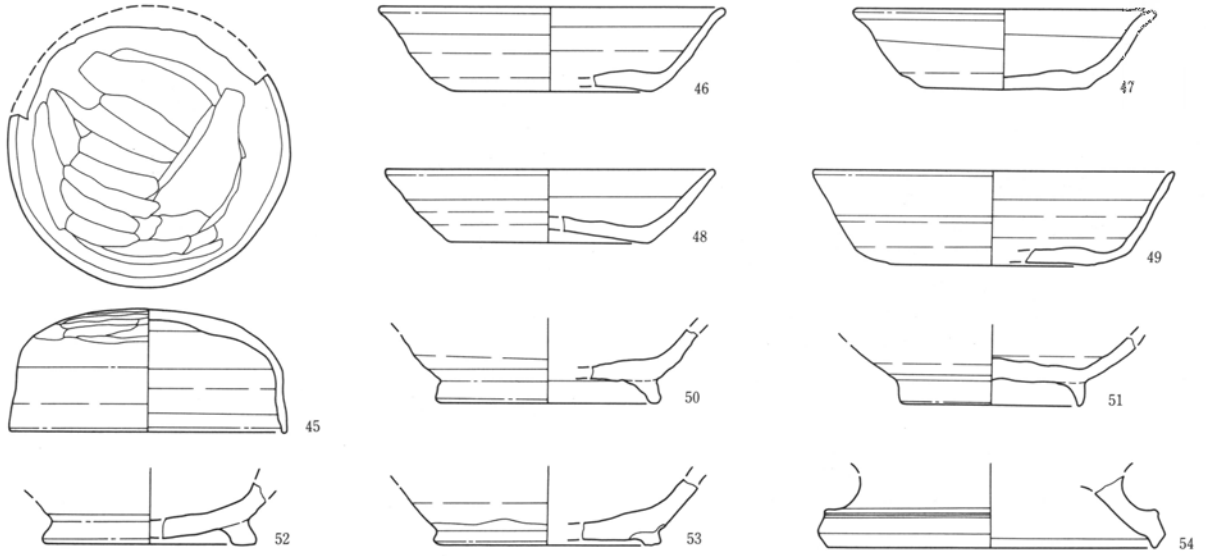
第39図 遺構外出土遺物（2-須恵器）

7. その他

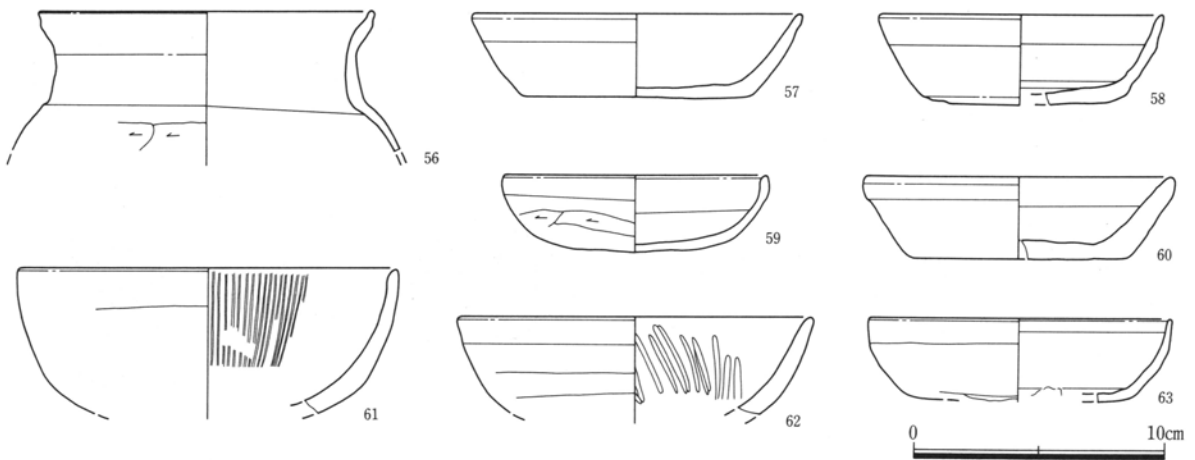


第40図 遺構外出土遺物（3-須恵器）

V 遺物



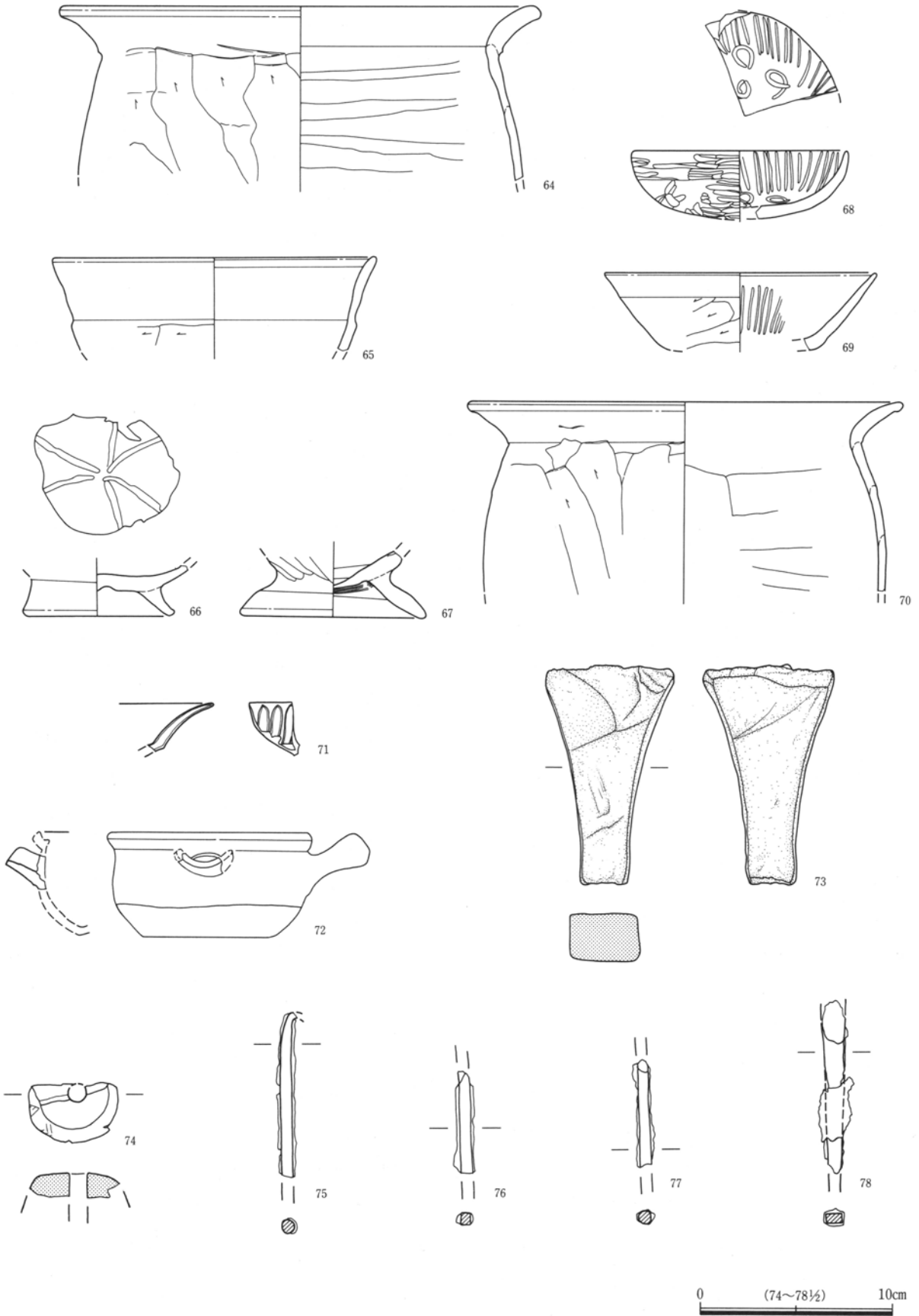
0 10cm



0 10cm

第41図 遺構外出土遺物（4-須恵器・土師器）

7. その他



第42図 遺構外出土遺物（5 - 土師器他）

8. 縄文時代の遺物

(1) 土器 (第43・44図、P L 29・30)

縄文土器は、調査区中の上位段、住居址の検出されたA区から多数の破片が出土した。これらの土器を包含する土層は、各調査区の黒色土中に集中している。他に、住居址埋没土中出土の資料も本項で取り扱っている。出土位置については第8表のとおりである。

第8表 縄文時代土器出土一覧

出土位置	掲載 No.
A-II区	103・115
A-III区	83・111・107・122
A-IV区	102・104・109・114
A-V区	89・112
第1号住居址	80・81・82・113
第3号住居址	79・87・91・92・94・105・108
第4号住居址	93・119
第5号住居址	86・88・90・95・96・98・99・100・106・110・120
不明	84・85・97・101・116・117・118・121・123・124

出土した土器の量は、遺物収納箱2箱分である。これらの土器は、縄文時代早期、前期、中期の資料であり、中期加曽利E式の資料が主体を占めていた。

79は、絡条体圧痕の土器で胎土中に繊維を含む。早期の資料である。

80～82は前期の資料である。80は、菱形の文様区画が認められ、RL縄文が施されている。胎土中に繊維を含む。関山式土器である。81は、半截竹管による平行沈線と爪形文が施されている。諸磯b式土器である。82は、斜行する集合条線が施されている。諸磯c式土器である。

83～92・94～100・110は、前期前葉の五領ヶ台式土器である。いずれも胎土中に金雲母を多量に含むことが特徴の一つである。

83・84は、縦方向の平行沈線と区画内を斜行する細い沈線が認められる。84は、残存部右縁に刺突文が施されている。85は、横方向の平行沈線が施されている。残存部下端には三角形の刺突文が加えられている。86は、波状口縁の破片である。口縁部直下に口縁形状に沿って2本の沈線を配し、この内側を斜方向の沈線で細分している。87は口縁部破片で、内面に弱い稜を有している。無文である。88も口縁

部破片で波状を呈する。先端は若干肥厚し、横位回転のLR縄文が施される。口縁部直下には口縁形状に合わせ、平行沈線が配される。部分的に押し引き沈線となっている。この下位にも沈線による曲線、垂線が施されている。区画内にはLR縄文が施される部分もみられる。89は、コの字状に沈線を描き、これと刺突文を組み合わせた文様構成がみられる。上位には横方向に刺突列が配されている。90は、狭い隆帯が垂下する。器面には縦位回転のRL縄文が施文される。91・92は、平行沈線とこれに沿って配された刺突文が認められる。94は、短い隆帯を横方向に貼付、ここから刻み目を有する隆帯が垂下する。器面には縦位回転のRL縄文を施文する。95は、横方向に貼り付けられた隆帯には爪形文が連続して加えられる。隆帯の上下には横方向に平行沈線が配されている。96・97は、沈線文と刺突文を組み合わせた方形の区画文が配置されていたのか。区画内には斜行する沈線が充填されている。98のくびれ部には刻み目を持つ短い隆帯が貼付され、平行沈線も数条加えられている。これより上位には縦横に走る沈線による区画がなされ、一部に横位回転のLR縄文が施文される。99・100・106は、いずれも縦方向の平行沈線による文様表現がなされる。また、沈線に沿って刺突文が配されている。110は縦方向の平行沈線が施されていることから、83・84と同様の文様構成がとられていたと考えられる。

93・101～105・107～109・111～124は、中期後半加曽利E式土器である。

101～105は、口縁部破片である。101は、口縁部先端の幅狭い無文帯を微隆帯で区画する。区画内には横位回転のRL縄文が残されている。102は、強く内彎して立ち上がる。波状を呈するか。口縁部直下には2列の円形刺突文が列をなす。以下にはLR縄文を縦位回転し地文とし、沈線により区画、区画内の縄文を磨り消している。103は、隆帯により楕円形文が区画されていたか。縄文はRLを横位回転している。104は、口縁部先端に無文帯が巡り、その下に沈線が施される。縄文は無節のLである。105は無

文帯部分の破片である。

93・107～109・111～119は胴部破片である。93は、R L縄文を縦位回転で施文後、縦方向の沈線で区画、区画内の縄文を磨り消している。107・108・111は、いずれも縦方向の条線が施されている。109は器面全体に無節L縄文が施されている。112は垂下する波状の条線がみられる。113は、R L縄文施文後、弧状の沈線により区画を行い、区画内の縄文を磨り消している。114は曲線の、115・116は平行に垂下する沈線による区画がなされ、区画内の縄文を磨り消している。縄文はいずれも縦位回転のR Lである。117はL R縄文を縦位に施文後、平行する2本の微隆帯により区画、区画内の縄文を消している。118は、器面全体にL R縄文が施文されている。119は、沈線区画内に縄文が施されているか。

120は口縁部の破片である。2本の微隆帯により、渦巻状の区画が構成されていたと考えられる。

121は、深鉢の上半部分である。器形は、外傾しながら直線的に立ち上がる。口径は、20.0cmに復元できた。平縁の口縁で、口縁部直下の幅の狭い無文帯を横方向の沈線で区画している。胴部には沈線区画によるH字状文が配されており、区画内の縄文は磨り消されている。縄文は縦位回転のL Rである。

122は胴部破片で縦方向の沈線区画がみられる。縄文は複節R L Rである。123は底部の破片で、網代痕が認められる。

124は、深鉢の口縁部から胴部中位にいたる大型破片である。胴部は中位でややくびれる。口縁部は平縁で、口径は23.8cmに復元できた。器面全体にわたり横位回転のR L縄文が施されているが、きわめて複雑な施文状況であった。

(2) 石器 (第45図、P L 30)

土器同様、トレンチ調査に際し各所から石器が出土したので掲載した。石器の計測値等は第9表のとおりである。これらの他に第5号住居址の埋没土中から黒曜石・チャートの剥片が出土している。

125は無茎の石鏃である。基部は彎曲、くびれている。両下端とも欠損している。残存長は1.3cm、重

第9表 縄文時代石器出土一覧

No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	出土地点
125	石鏃	<1.3>	<1.5>	0.3	0.31	黒曜石	不明
126	打製石斧	<9.6>	<5.8>	1.7	89	珪質頁岩	不明
127	打製石斧	<9.0>	4.5	2.0	81	黒色片岩	不明
128	打製石斧	<9.4>	4.7	3.2	149	珪質頁岩	A-IV区
129	打製石斧	9.4	4.5	1.8	71	変質安山岩	A-III西拡区
130	打製石斧	8.1	4.5	2.5	90	硬質泥岩	A-V区
131	打製石斧	8.8	4.5	1.2	61	珪質頁岩	第5号住
132	打製石斧	<4.4>	4.6	1.5	26	黒色頁岩	第5号住
133	打製石斧	6.3	3.5	0.9	24	珪質頁岩	第3号住
134	不明	6.5	<3.1>	1.4	29	頁岩	A-I・II区
135	不定形 石器	7.5	4.1	1.1	26	細粒輝石 安山岩	A-II区
136	石皿	28.1	23.0	7.0	6,710	細粒輝石 安山岩	不明

量は0.31gを測る。黒曜石製である。

126～133は打製石斧である。126は平面、撥形を呈しているが刃部は破断する。127・128は短冊形を呈している。128は器厚を有しているが刃部は欠損する。129・131はやや小振りである。いずれも刃部の磨耗痕はあまり顕著ではない。132は刃部の残存であろうか。133は長さ6.5cm、幅3.5cmと小型である。器面全体が磨耗きみである。

134は扁平な礫で、半分程が欠損している。側縁部に敲打によって生じたと考えられる痕跡が認められる。

135は不定形石器である。剥片の側縁部に調整加工が施されており、若干、器面の磨耗も認められる。

136は石皿である。磨り面には浅いくぼみが認められ、側縁部の一方に掃き出し口が設けられている。

9. 弥生時代の遺物(第46・47図、P L 31)

いずれの遺物にも出土地点を示す注記が無く、その詳細については不明である。「II 遺跡地の自然的・歴史的環境」の項でもふれられているが、愛宕山遺跡周辺には弥生時代遺跡の分布が少数知られている。松井田町の上人見遺跡では、中期前半の時期の再葬墓2基が調査され、壺3個体、甕2個体の出土が知られている。また、松井田町千駄木遺跡では中期後半の壺が出土している。大王寺遺跡でも中期後半の住居が検出されている。

V 遺物

137から146は、条痕文系あるいは、それと同時期に相当すると思われる資料である。掲載資料の他に小破片が10余片出土している。胎土中には礫、粗砂大のチャート、石英が目立った。他に白色の軽石粒を含むものも多かった。いずれも良好な焼成である。

137は甕の口縁部上位の破片である。弱く外反して立ち上がり、先端は尖る。外面に6本一単位の波状文が配される。138も甕の口縁部破片である。直線的に外反する。先端は弱い波状を呈する。外面には斜め横方向に条痕が施されている。139・140も口縁部破片である。先端は欠損する。ともに外面には単位の粗い工具による条痕が施されている。141は、甕の胴部破片である。わずかに丸味を有する。横線による区画と条痕文施文が認められる。142は、甕の口縁部破片である。先端は平坦である。外面は縦方向のハケメによる器面調整が行われ、これに山形の沈線文が重ねられている。143も口縁部上位の破片である。外面には横位回転のLR縄文が施されている。144も口縁部上位の破片である。壺の可能性も考えられようか。緩やかに外反して立ち上がり、先端に平坦面をなす。上位外面に縦位回転のRL縄文による文様帯が一周すると考えられる。145は壺の胴部破片と考えられる。やや太い沈線による区画内にLR縄文が充填される。沈線は、3条の横線の他に縦方向の部分にもみられる。146も壺の胴部破片と考えられる。横方向の沈線とLR縄文が組み合わされている。以上の資料は中期前半に位置づけられるものである。

147～166は沈線と縄文施文による文様構成がなされた資料である。器種は資料が小破片であるため判明しがたい状況にある。137～146の一群より後出で中期後半に位置づけられるものであろう。

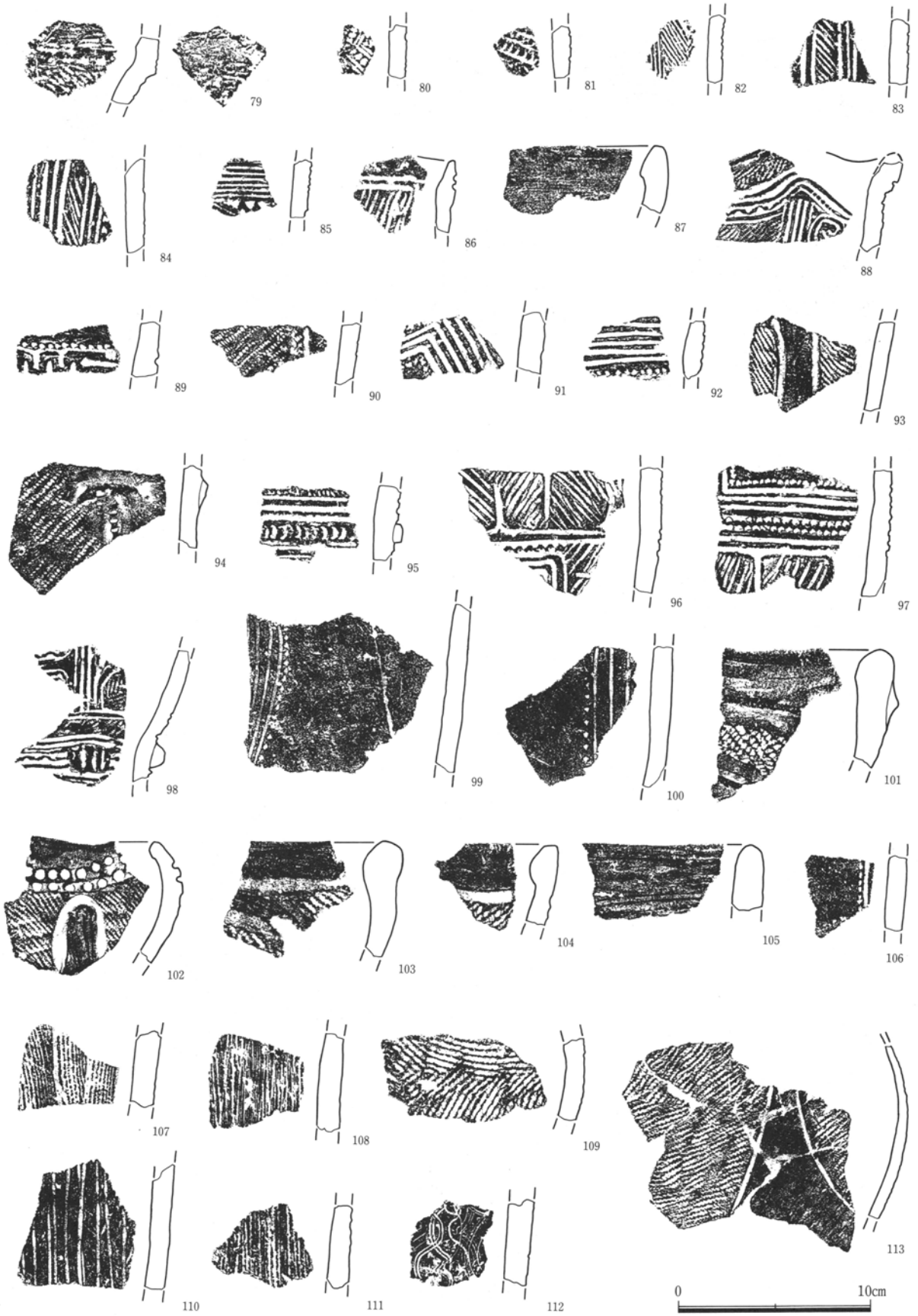
147は、平行する2条の沈線とLR縄文施文部分が認められる。148も2条の平行する沈線と区画内に施されたLRの縄文帯が認められる。149はLR縄文を地文とし、これに2条の平行する沈線が重ねられる。150は沈線による円形区画文内にLR縄文が充填される。151は沈線の一部とLR縄文がみら

れる。152は、3条の平行する沈線と上段の区画内を埋めるLR縄文がみられる。153は、口縁部破片である。口縁部先端は平坦面をなし、縄文が施文されている。154はRL縄文を地文とし、これに太い沈線文が重ねられている。155はLR縄文と横方向の沈線がみられる。156は、LR縄文と1条の沈線が残っている。157は、LR縄文と沈線による三角形の文様が配されるか。158は平行する沈線と区画内に充填されたLR縄文がみられる。159には沈線による文様が配されている。160にも山形の沈線文の一部が残されている。161は沈線による羽状文が施されている。162は、沈線による方形区画文が施されている。163にも沈線による文様が配されている。164には2本一単位の波状文がみられる。165は波状の沈線による区画と、ここに充填される条線がみられる。166には横方向の2条の沈線とLR縄文が施文される。

167は口縁部上位の破片である。ハの字に大きく外反して立ち上がる。外面には縦方向に器面調整のハケメが施されている。後期後半の所産と考えられる。

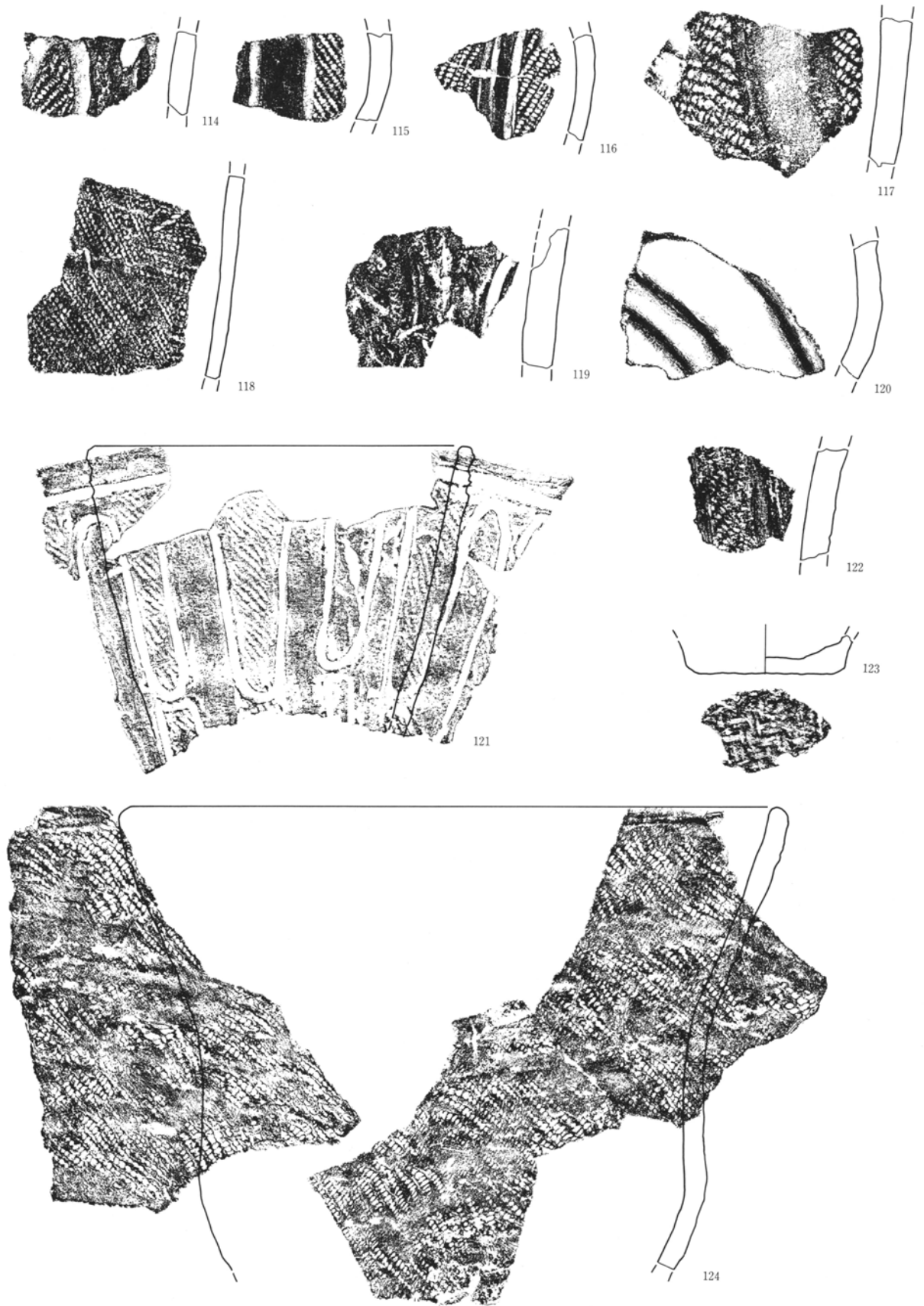
参考文献

- 『群馬県史』資料編2 1986
北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学
談話会『東日本における中期後半の弥生土器』1986



第43図 遺構外出土遺物 (6-縄文土器)

V 遺物



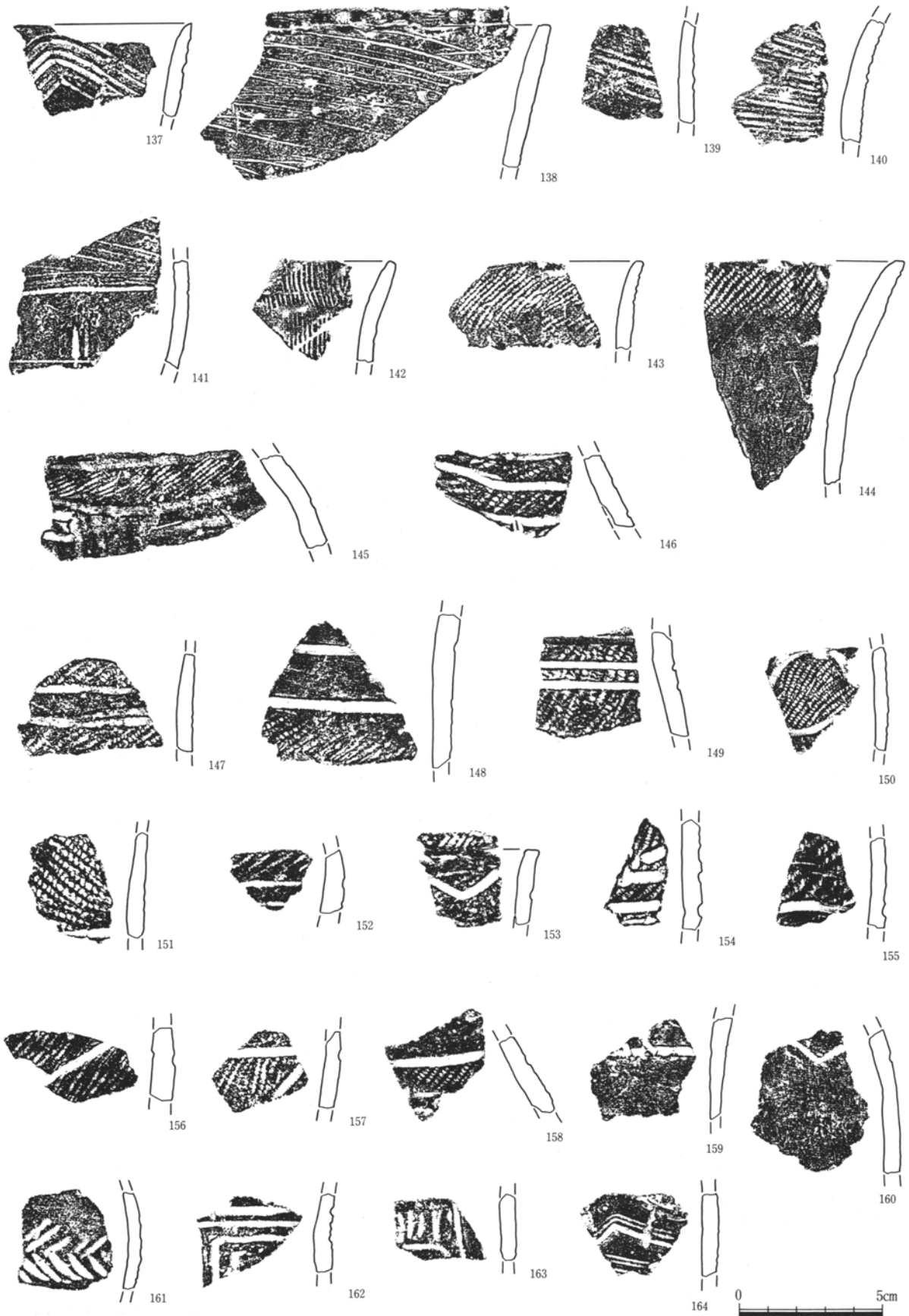
第44図 遺構外出土遺物（7-縄文土器）

0 10cm

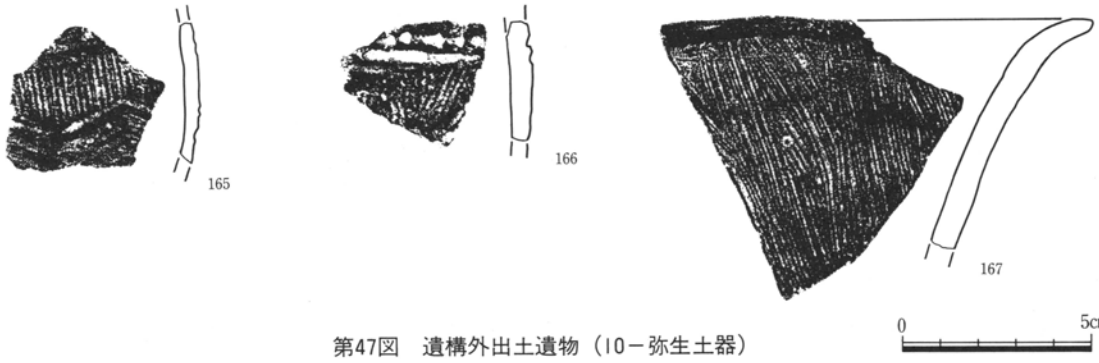


第45図 遺構外出土遺物 (8 - 縄文石器)

V 遺物



第46図 遺構外出土遺物 (9 - 弥生土器)



第47図 遺構外出土遺物 (10-弥生土器)

VI 分析

1. 愛宕山遺跡の第4号住居址出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

ここでは、古代(9世紀初頭)の竪穴住居址である第4号住居址から炭化状態で出土した、住居建築材や木製品・木製容器そして小刀の付着材などの樹種同定結果を報告する。当遺跡は、碓氷川と九十九川に挟まれた標高約340mの松井田丘陵の南東斜面に立地し、古代東山道の推定経路上に位置する奈良時代から平安時代の小規模な集落の一部と見られている。良好な状態で検出された第4号住居址は東壁の南寄りに竈があり、紡錘車・鋸などの木工具・萬年通寶・腰帯具・小刀など多数の金属遺物が検出され、当時の生活用品が多く保存されていた状態が目ざれている。建築材は住居中心部に向かい放射状に多数の比較的太い材とその間にはやや細い炭化材が検出され、上屋構造が床面に焼け落ちたものと見られる草本性の炭化物も検出された。また、住居址から出土した報告は意外と少ない木製品や木製容器も、当住居からは炭化状態で検出されている。これらの住居構築材や木製品・木製容器、そして小刀の柄部と鞘部の付着材などの樹種を明らかにすることは、当時の当地域における樹種利用を知る重要な資料となる。

(2) 炭化材試料と樹種同定の方法

試料は、採取地点ごとに遺物収納箱に納められていた。炭化材の量によっては複数の遺物収納箱に分割して採取されていた。主要な炭化材を中心に周辺部も含め採取されたようであり、ひとつの遺物収納箱には複数種類の異なる材の破片が含まれている可能性があった(第48図)。従って、炭化状態や破片の形状などに注目して、なるべく多数の炭化材を観察した。

樹種同定の決定は次の手順で行った。まず、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ・シイノキ属などは横断面の管孔配列が特徴的であり、実体顕微鏡下の観察で同定可能であるがそれ以外の分類群については3方向の破断面(横断面・接線断面・放射断面)を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定した。また前述の分類群でも、典型的ではない試料については、走査電子顕微鏡で組織を拡大し確認した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製JSM-T100型)で観察と真撮影を行った。

(3) 結果

各試料ごとの樹種同定結果を、第10表にまとめた。複数の分類群が検出された試料については、各分類群のおおよその量比を備考欄に表示した。また特に異なる形状の破片についても、備考欄に記入した。第11表は、各用途に応じた樹種選択性を知るために建築材・木製品・木製容器・小刀の柄と鞘・不明の試料ごとに検出樹種を比較した。第48図では、試料の位置・産状と検出樹種を示した。複数種類が検出された試料は、その周囲に複数の樹種が混在していたことを示していると思われる。以下に用途別に検出分類群の結果を示し、次に樹種同定の根拠とした材組織の観察結果を分類順に記載する。

[建築材]

クリ・ヤマウルシ・クヌギ節・ケンボナシ属・カエデ属の落葉広葉樹5分類群と、モミ属・カヤの針

葉樹2分類群の合計7分類群が検出された。クリは、ほとんどの試料から検出され量的にも多くを占めていたことから、最も主要な建築材であった事が判った。次に多く検出された分類群はヤマウルシであり、その次にクヌギ節がやや目立った。

上屋構造が床面に焼け落ちたものか、床の敷物の一部かもしれない単子葉類の稈は、タケ亜科とススキ属が検出された。タケ亜科は、No.26、No.25、不明-1から検出された。ススキ属は、No.19から検出された。

[木製品・木製容器]

No.17から出土した第27図84~89の木製品は、いずれもアカガシ亜属であった。また第28図92~94の3点は、クリ1点とケヤキ2点であった。

[小刀の柄部・鞘部付着材]

柄部付着材は、落葉広葉樹材のオニグルミに最も類似していたが、小片であり状況もあり良くないので断定はできない。鞘部付着材は、針葉樹のヒノキであった。

[不明]

採取位置不明とA-IV区から採取された各破片は、クリとカエデ属であった。

[検出樹種の材組織]

分類順に観察結果を記載する。

カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 図版1 3a-3c (No.27)

仮道管・放射柔細胞からなり、樹脂細胞はない。早材から晩材への移行はゆるやか。仮道管に2本が対になるらせん肥厚がある。分野壁孔は小さなヒノキ型が2~3個ある。

カヤは本州の宮城県以南・四国・九州の暖帯から温帯下部の山地に生育する常緑高木で、材は水湿に強く加工しやすい。

モミ属 *Abies* マツ科 図版2 4a-4c (No.27)

仮道管・放射柔細胞からなり、樹脂細胞はない。傷害樹脂道が出現する破片がある。早材から晩材への移行はゆるやか。放射柔細胞の壁は厚く、特に放射断面において接線細胞壁に数珠状肥厚が見られ、

1. 愛宕山遺跡の第4号住居址出土炭化材の樹種同定

上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型のスギ型からヒノキ型、1分野に1~4個、炭化材では孔口の大きさが不揃いに見える。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属は常緑高木の針葉樹で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. 図版1 1a-1c (小刀鞘部)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は極めて少ない。分野壁孔の輪郭は丸くその孔口は細い楕円形に開いていることからヒノキ型であることが判り、1分野におもに2個が水平に整然と配列している。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれ、加工面は平滑で美しい。

オニグルミ? *Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura? クルミ科 図版1 2a-2c (小刀柄部)

単独あるいは2~3個が複合した中型の楕円形の管孔が除々に径を減じながら散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースが顕著である。道管にらせん肥厚は認められない。放射組織はほぼ同性、主に3細胞幅。接線断面や放射断面で、軸方向柔細胞が多く観察された。小破片であるため十分な観察ができなかったが、オニグルミの材に最も類似している。

オニグルミは暖帯から温帯のやや湿った所に生育する落葉高木である。種子は食用になり、材は加工しやすく狂いが少ない。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版2 5a-5c (No.17)

集合放射組織を挟み小型~中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。道管の壁孔は小さく交互

VI 分析

状、穿孔は単一である。放射組織は同性、単列のもの集合状のものがあり、道管との壁孔の孔口は大きく開き柵状・交互状である。

アカガシ亜属は常緑性でドングリをつけるカシ類の仲間で、おもに暖温帯に分布する。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性がある。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q. subgen. Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版2 6a-6c(No27)

年輪の始めに大型の管孔が1~3層配列し、その後は小型・厚壁の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列のもの集合状のものがある。

クヌギ節は落葉性のドングリの仲間で、クヌギとアベマキが属する。いずれの種も暖帯の山林や二次林に普通の高木である。材は重厚で割裂性が良い。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版3 7a-7c(No14)

年輪の始めに中型~大型の管孔が密に配列し徐々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状や柵状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野や二次林に普通の落葉高木である。材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版3 8a-8c(No23-93・95)

年輪の始めに1層の大型管孔からなる孔圏部を形成し、孔圏外は小型から非常に小型の管孔が多数集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。

放射組織は主に平伏細胞からなり上下端や縁辺部に方形細胞や結晶細胞がある異性、1~5細胞幅、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅く、木目が美しい。用途は建築材や容器が多い。

ヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miquel ウルシ科 図版3 9a-9c(No17)

楕円形の大型管孔が単独または2~3個が複合して密に分布し、徐々に径を減じて行き、年輪界では小型から非常に小型の管孔となり主に放射方向に2~数個が複合する。道管の壁孔は大きく孔口も大きく開いており、内腔はチロースが発達し、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は、平伏細胞と方形細胞からなる異性、1~3細胞幅、接線断面においてその輪郭は不斉、細胞高は高い、結晶細胞が多い。

ヤマウルシは、温帯から暖帯の北海道から九州の山野や二次林に普通の落葉小木である。材はやや固いが、薪炭や杭・小細工物ぐらゐの用途しか知られていない。

カエデ属 *Acer* カエデ科 図版4 10a-10c(A-IV区)

小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合して分布し、年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔には細くて密に配列するらせん肥厚がある。放射組織は同性、1~5細胞幅の紡錘形、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

ケンポナシ属 *Hovenia* クロウメドキ科 図版4 11a-11c(No27)

年輪の始めに中型の管孔が主に単独で分布し徐々に径を減じてゆき、晩材部では単独または放射方向に2~3個複合した非常に小型で厚壁の管孔が散在し、周囲状・翼状の柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一。放射組織は異性、

1～4細胞幅、上下端に方形細胞・直立細胞が単列で伸び、結晶細胞がある。

ケンポナシ属は暖帯の山中に生育する落葉高木である。本州・四国に分布するケンポナシと北海道から九州に広く分布するケンポナシがある。材質は比較的よい。

タケ亜科 Gramineae subfam. Bambusoideae イネ科 図版4 12a-12b. 図版5 13a-13b (No26) 14a-14b (No25)

最大の厚みは約2mmある硬質の稈で、稈は円形で中心部は中空である。維管束は不整中心柱、ほぼ同心円状に多数が分布している。維管束は原生木部、その左右に後生木部の2個の管孔、篩部があり、全体としては4～3個の穴の集合に見える。維管束は維管束鞘に囲まれ、特に稈の外周に位置する維管束鞘は向軸側が特に厚く発達している。稈の節部には葉鞘が取り巻いていた痕があり、そのやや上部で稈は一旦膨らむ。節部には幼芽痕がある。横断面において、維管束鞘が非常に発達しており、外周部に維管束数が多いこと、稈が中空であることからタケ・ササ類を含むイネ科タケ亜科に類似性が高い。但し節部に明瞭な筋状の窪みが見られないのは、若い枝部であるためなのか、またはタケ亜科以外のイネ科の分類群である可能性も否定はできない。

タケ亜科はいわゆるタケ・ササの仲間12属が含まれ、中国や東南アジアから移入され栽培により広まったものが多い。ササ類は多くの野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があるといわれる。

ススキ属 *Miscanthus* イネ科 図版5 15a-15b (No19)

直径8mmの草本性の円形の稈で、節部には葉鞘痕があり、一箇所に幼芽痕らしいものも見られた。稈は中空ではなくスポンジ状の基本組織で埋まりその中に維管束が散在している。稈の外周には維管束が1または2層並び、維管束鞘は向軸側がやや発達している。内側に散在する維管束の維管束鞘は薄い。

ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ(茅)

1. 愛宕山遺跡の第4号住居址出土炭化材の樹種同定

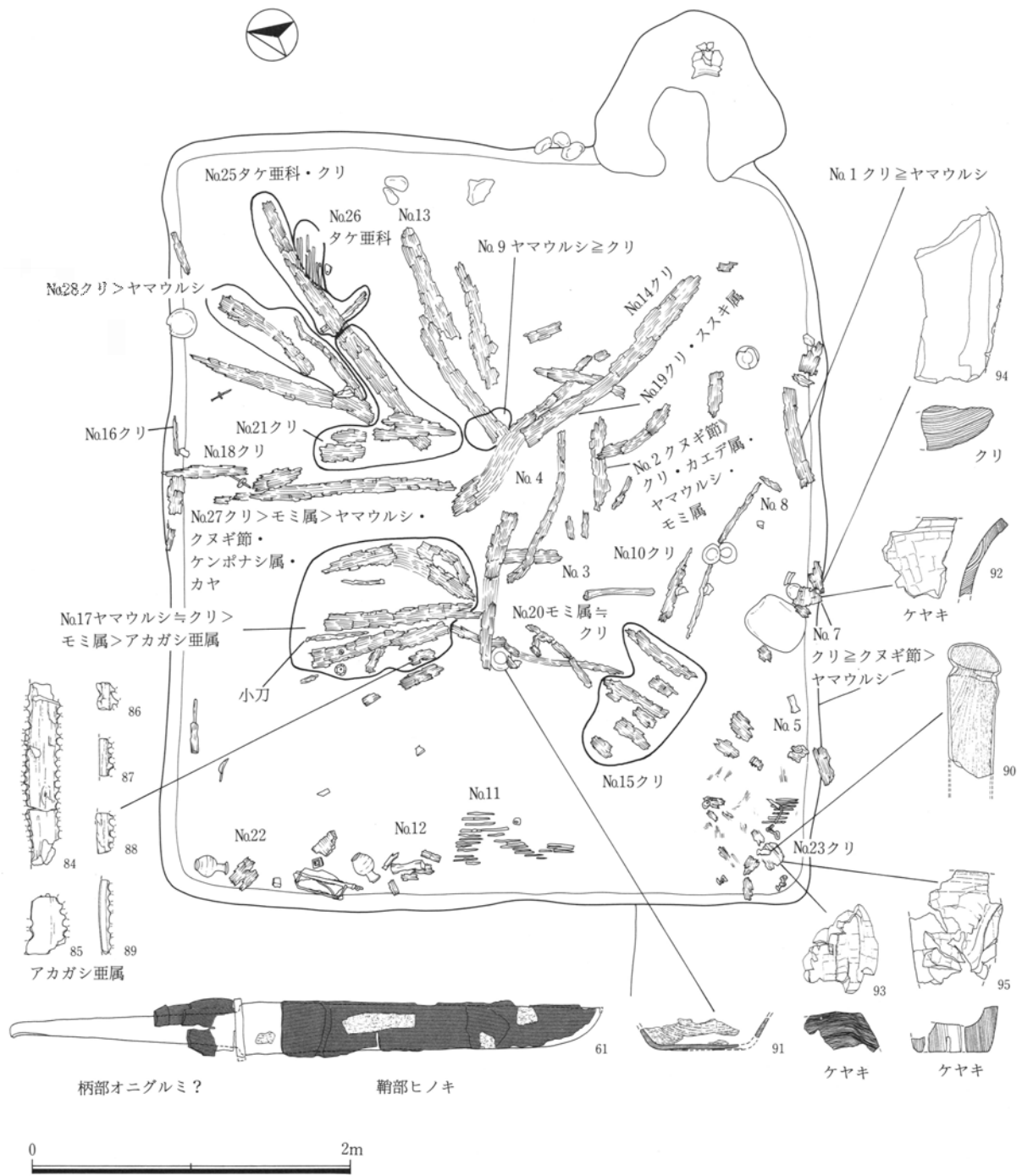
と呼ばれ、約7種ある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られ刈って屋根を覆く材料とされてきたススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北南部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがある。現時点では稈の組織から種を識別することはできていない。

(4)まとめ

建築材は、クリを主体としてほかにヤマウルシやクヌギ節などの複数の落葉広葉樹が使われ、針葉樹のモミ属とカヤも検出された。古代の竪穴住居址の炭化材樹種調査は、まだ情報の蓄積段階であるため時代の特徴などは充分には捕えられていない。群馬県内では、古墳時代の竪穴住居址ではクヌギ節やコナラ節が多用されていた事例が多い(山田、1993)。しかし古代の当住居では、クヌギ節の出土は意外と少なくコナラ節は検出されず、これら2分類群に変わってクリが多用されていたのが特徴的であった。古墳時代から古代に移行するに従いクリが多く利用されるように変化したのか、今後の同時期の資料蓄積が必要であろう。

木製品に使われていたアカガシ亜属の材質は非常に固く丈夫であることから、力を加えるような道具や恒久的に使用するような道具に利用されていたと推測される。アカガシ亜属は建築材としても利用度が高い樹種であるが、当遺跡の建築材試料ではNo17からわずかに検出されたただけであった。従って、当遺跡ではアカガシ亜属の材利用は、それほど大量な消費量ではなかったようである。木製容器は、クリとケヤキであり、よく知られた樹種利用と一致していた。クリは、最も多く検出された建築材樹種でもあり、当遺跡での利用度の高さと多様さが伺える。一方、ケヤキも建築材として有用材であるが検出されておらず、当時は建築材より容器材としての利用度が高かったのかも知れない。

小刀の柄部はオニグルミ?に最も類似する広葉樹材であり、鞘部はヒノキの針葉樹であった。主に古



第48図 愛宕山遺跡第4号住居址出土炭化材の産状と樹種

墳から出土した刀剣類の柄部には広葉樹材が使われ、鞘部には針葉樹材を使用する樹種選択性が知られている(林ほか、1993、鈴木・能城、1994)が、古代の当住居址から検出された小刀においても同様な樹種選択がなされていた事が判った。

引用文献

- 山田昌久、1993、日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史、1-242、植生史研究特別第1号。
- 林 昭三・島地 謙・福田さよ子、1993、石棺内出土刀剣類等の木質部の樹種、3-11、斑鳩 藤ノ木古墳 第2・3次調査報告書。
- 鈴木三男・能城修一、1994、千葉県上総地方古墳出土木質遺物の樹種、32-42、土筆第3号、土筆舎。

1. 愛宕山遺跡の第4号住居址出土炭化材の樹種同定

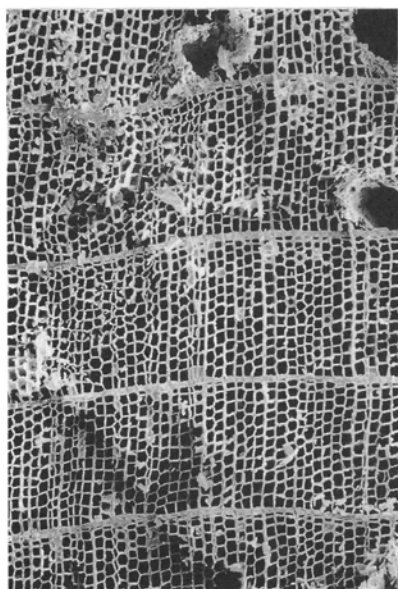
第10表 愛宕山遺跡第4号住居址出土炭化材樹種

用途	試料	検出樹種	備考
建築材	No.1	クリ ヤマウルシ	クリ≧ヤマウルシ
	No.2	クスギ節 クリ カエデ属 ヤマウルシ モミ属	クスギ節}クリ・カエデ属・ヤマウルシ・モミ属 ヤマウルシ：直径2cm半割れ細枝 モミ属：板目取の板材？
	No.7	クリ クスギ節 ヤマウルシ	クリ≧クスギ節>ヤマウルシ クスギ節：直径3cm丸木
	No.9	ヤマウルシ クリ	ヤマウルシ≧クリ
	No.10と25	クリ	
	No.14	クリ	
	No.15	クリ	
	No.16	クリ	
	No.17	ヤマウルシ クリ モミ属 アカガシ亜属	ヤマウルシ≧クリ>モミ属>アカガシ亜属 クリ：加工片？含む モミ属：約3cm角状 アカガシ亜属：約3cm角状
	No.18	クリ	
	No.19	クリ ススキ属	直径0.8cmの柔らかい程
	No.20	モミ属 クリ	モミ属≧クリ モミ属：約3cm角状
	No.21	クリ	
	No.23	クリ	
	No.25	クリ タケ亜科	直径0.8~1.2cmの固い程
	No.26	タケ亜科	直径1.3cmの固い程
	No.27	クリ モミ属 ヤマウルシ クスギ節 ケンボナシ属 カヤ	クリ>モミ属>ヤマウルシ・クスギ節・ケンボナシ属・カヤ
	No.28	クリ ヤマウルシ	クリ>ヤマウルシ
	不明-1	タケ亜科	直径0.6cmの柔らかい程 同一方向に多数集積
木製品	No.7 (94)	クリ	第28図
	No.23 (93・95)	ケヤキ	第28図
	No.7 (92)	ケヤキ	第28図
	No.17 (84~89)	アカガシ亜属	第27図
小刀 (61)	柄部	オニグルミ？	第25図
	鞘部	ヒノキ	
不明	不明-2	クリ	
	アタゴA-IV区黒色土	カエデ属	

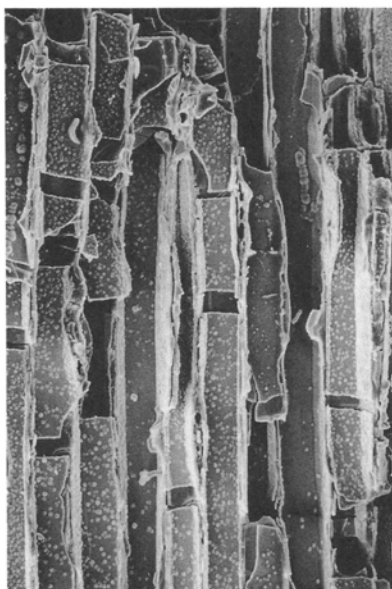
VI 分析

第11表 愛宕山遺跡第4号住居址出土炭化材の用途別樹種

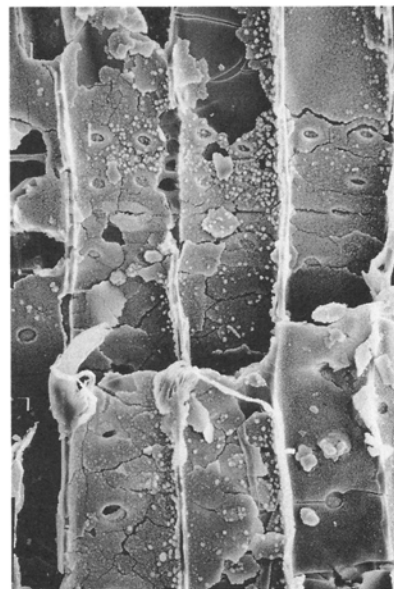
検出樹種	用途										木製品										小刀(61)		不明					
	1	2	7	9	10と25	14	15	16	17	18	19	20	21	23	25	26	27	28	不明-1	17(84~89)	7(94)	23(93・95)	7(92)	柄部	鞘部	不明-2	A-IV区	
クリ	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			○						○	
ヤマウルシ	●	○	○	●				●									○											
クスギ節		●	●																									
モミ属		○						○																				
カヤ											●																	
ケンボナシ属																												
カエデ属		○																										○
タケ亜科															○	○												
ススキ属										○																		
ヒノキ																									○			
オニグルミ?																								○				
アカガシ亜属									○																			
ケヤキ																												○



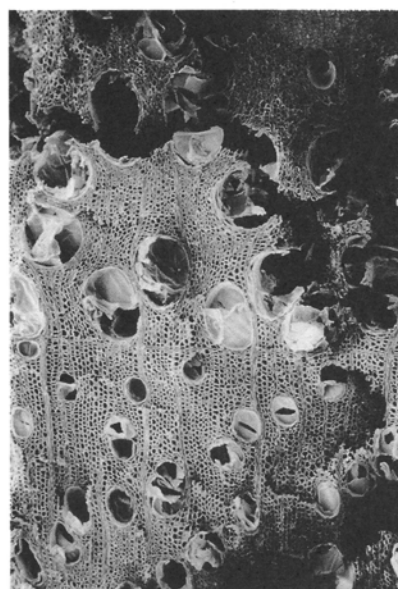
1a ヒノキ(横断面)
小刀鞘部 bar : 0.5mm



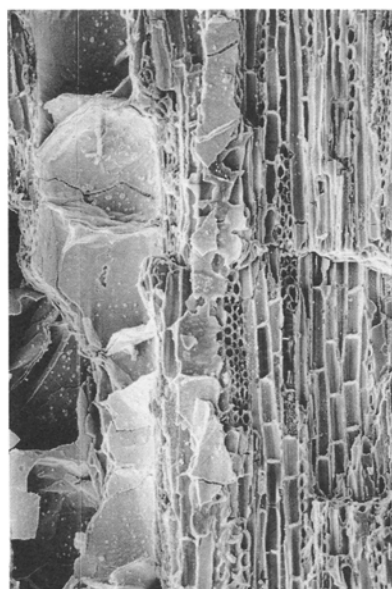
1b ヒノキ(接線断面)
小刀鞘部 bar : 0.1mm



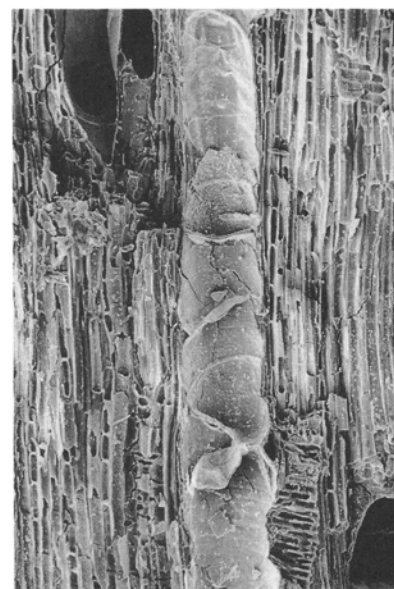
1c ヒノキ(放射断面)
小刀鞘部 bar : 0.05mm



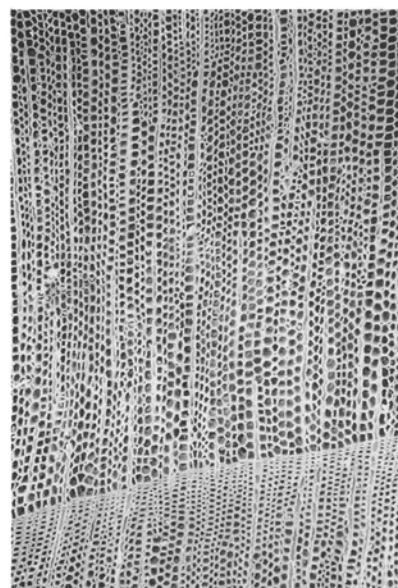
2a オニグルミ?(横断面)
小刀柄部 bar : 0.5mm



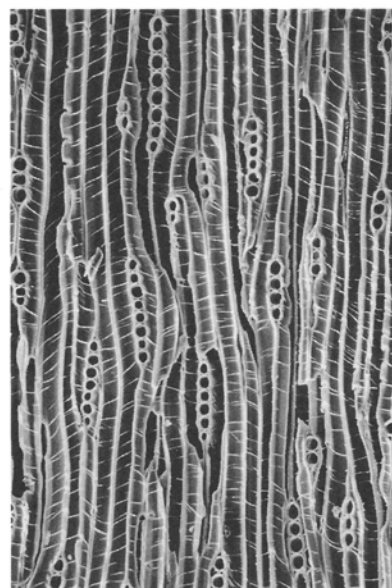
2b オニグルミ?(接線断面)
小刀柄部 bar : 0.1mm



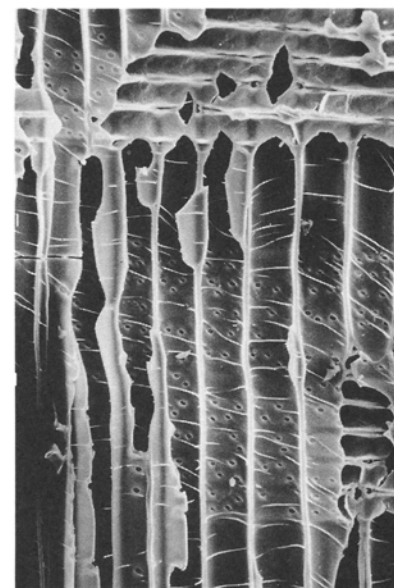
2c オニグルミ?(放射断面)
小刀柄部 bar : 0.5mm



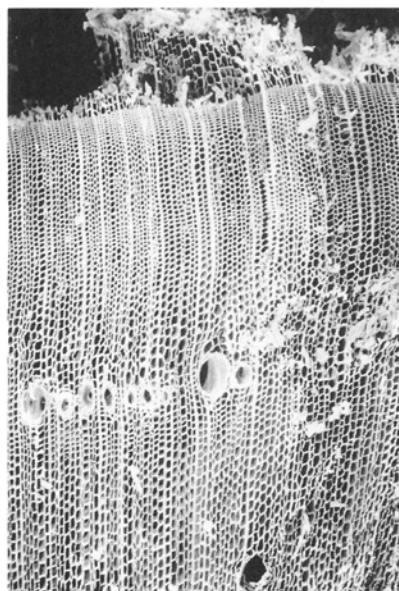
3a カヤ(横断面)
No.27 bar : 0.5mm



3b カヤ(接線断面)
No.27 bar : 0.1mm



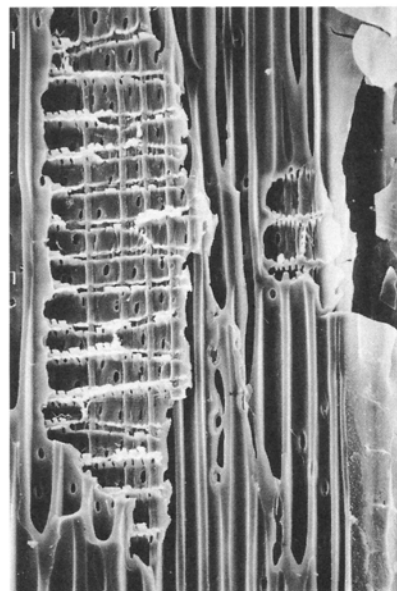
3c カヤ(放射断面)
No.27 bar : 0.1mm



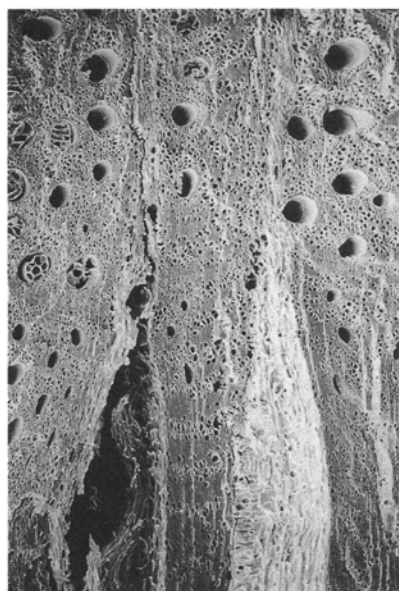
4a モミ属(横断面)
No.27 bar : 1.0mm



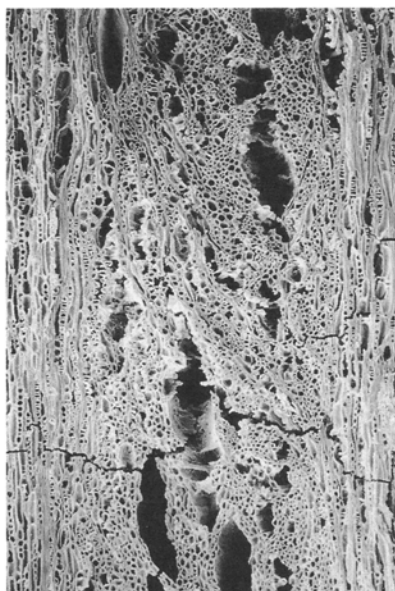
4b モミ属(接線断面)
No.27 bar : 0.5mm



4c モミ属(放射断面)
No.27 bar : 0.1mm



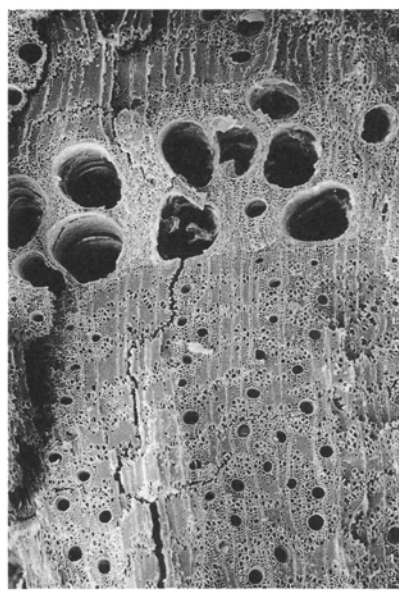
5a アカガシ亜属(横断面)
No.17 bar : 1.0mm



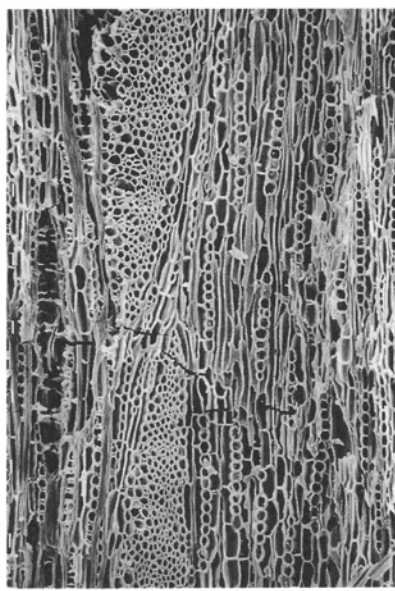
5b アカガシ亜属(接線断面)
No.17 bar : 0.5mm



5c アカガシ亜属(放射断面)
No.17 bar : 0.1mm



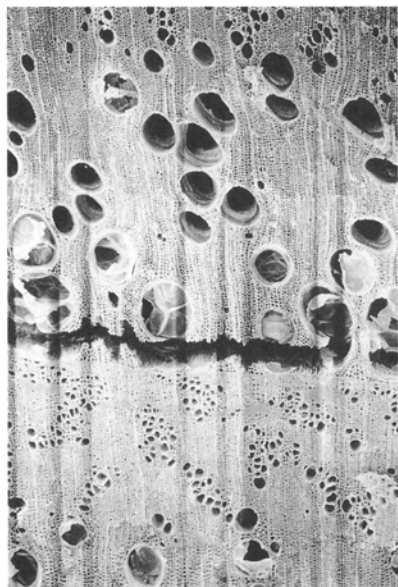
6a クスギ節(横断面)
No.27 bar : 1.0mm



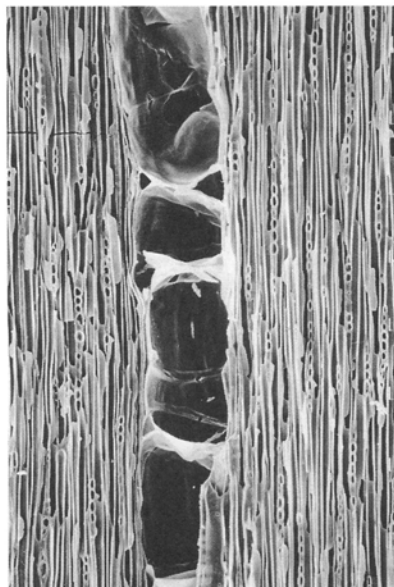
6b クスギ節(接線断面)
No.27 bar : 0.5mm



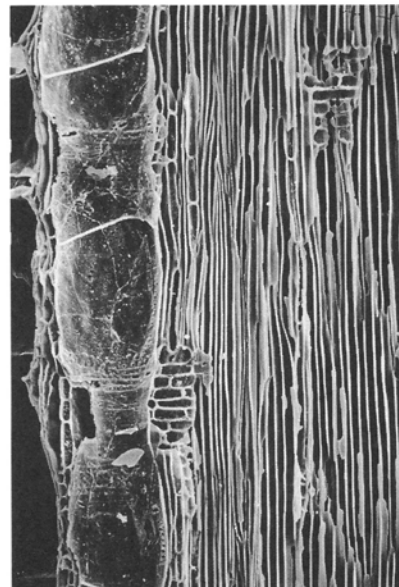
6c クスギ節(放射断面)
No.27 bar : 0.1mm



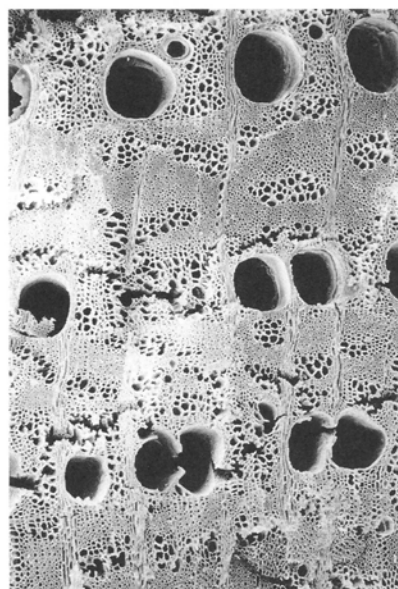
7a クリ(横断面)
No.14 bar: 1.0mm



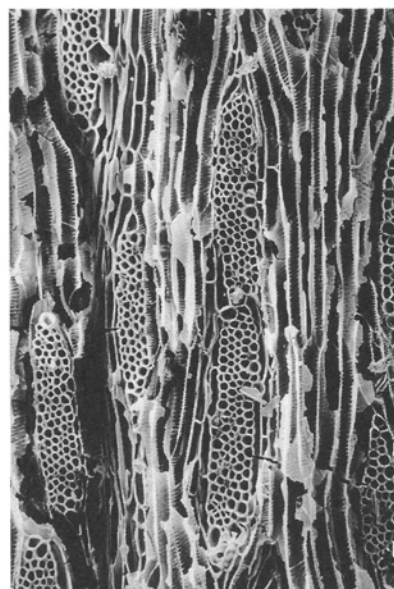
7b クリ(接線断面)
No.14 bar: 0.5mm



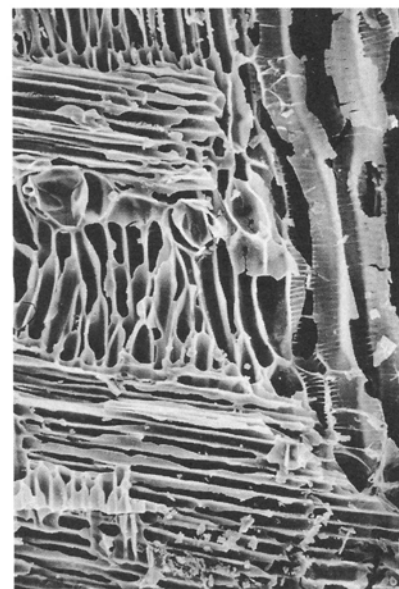
7c クリ(放射断面)
No.14 bar: 0.1mm



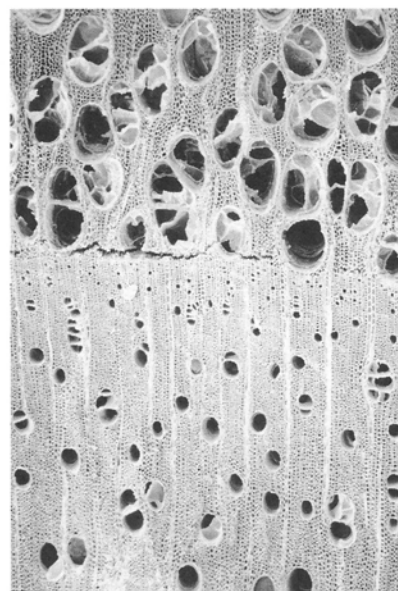
8a ケヤキ(横断面)
No.23(93・95)木製品 bar: 0.5mm



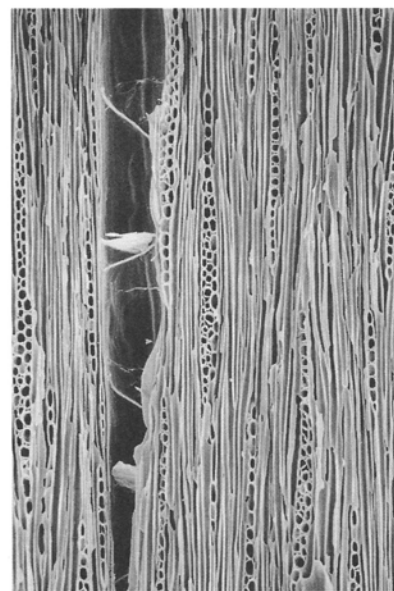
8b ケヤキ(接線断面)
No.23(93・95)木製品 bar: 0.1mm



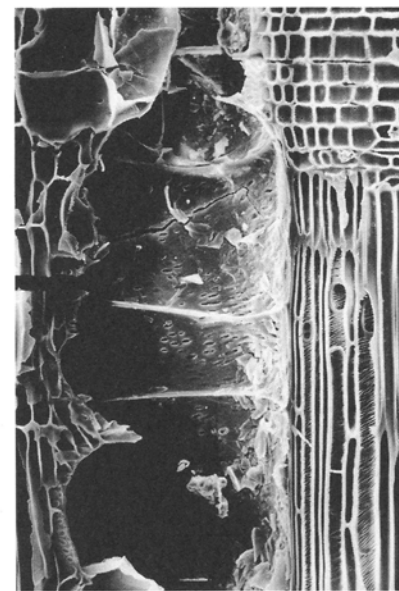
8c ケヤキ(放射断面)
No.23(93・95)木製品 bar: 0.1mm



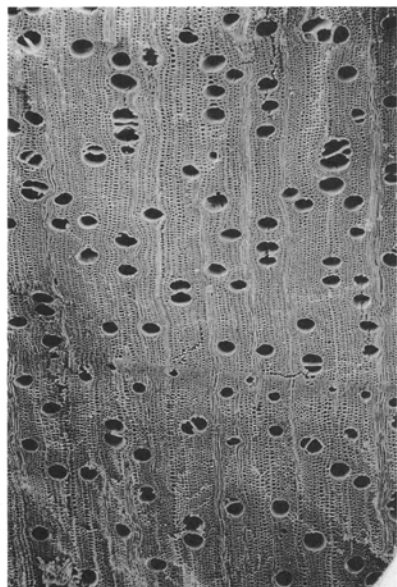
9a ヤマウルシ(横断面)
No.17 bar: 0.5mm



9b ヤマウルシ(接線断面)
No.17 bar: 0.1mm



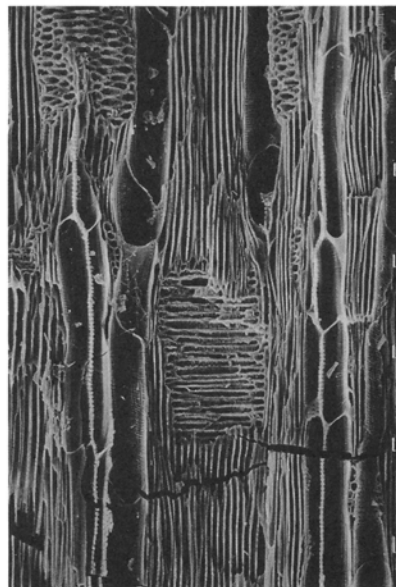
9c ヤマウルシ(放射断面)
No.17 bar: 0.1mm



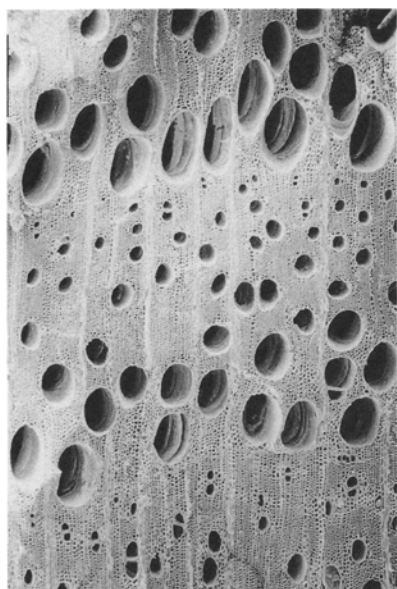
10a カエデ属(横断面)
A-IV区 bar: 0.5mm



10b カエデ属(接線断面)
A-IV区 bar: 0.5mm



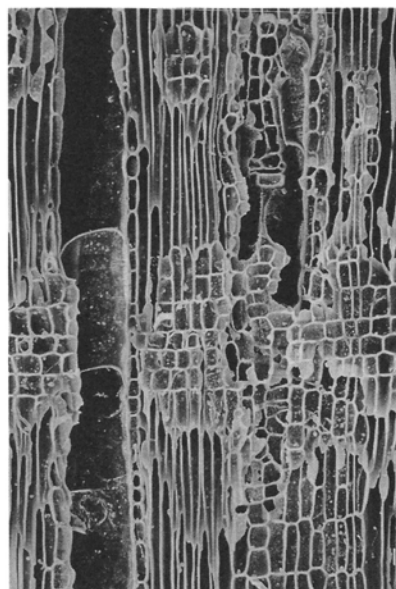
10c カエデ属(放射断面)
A-IV区 bar: 0.1mm



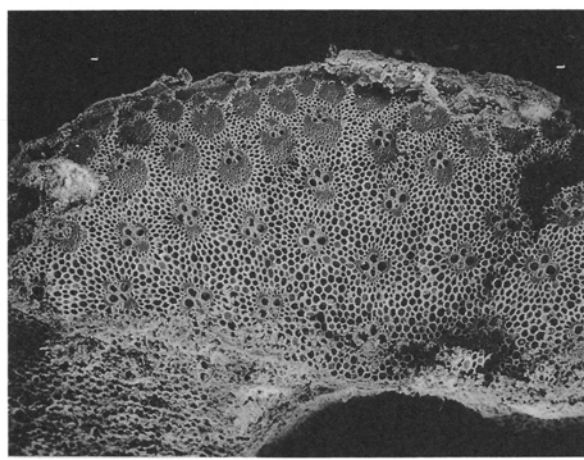
11a ケンポナシ属(横断面)
No.27 bar: 1.0mm



11b ケンポナシ属(接線断面)
No.27 bar: 0.5mm



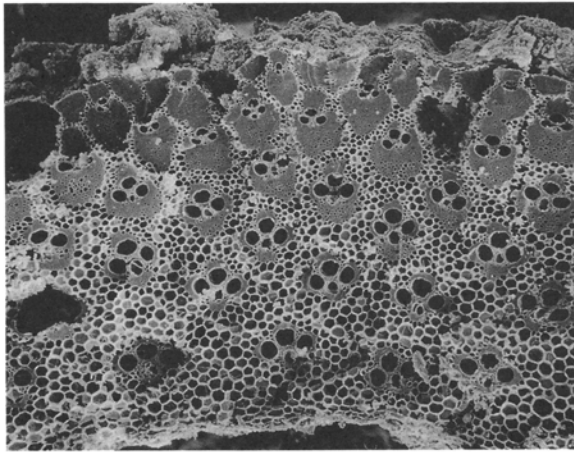
11c ケンポナシ属(放射断面)
No.27 bar: 0.1mm



12a タケ亜科(横断面)
不明-1 bar: 1.0mm



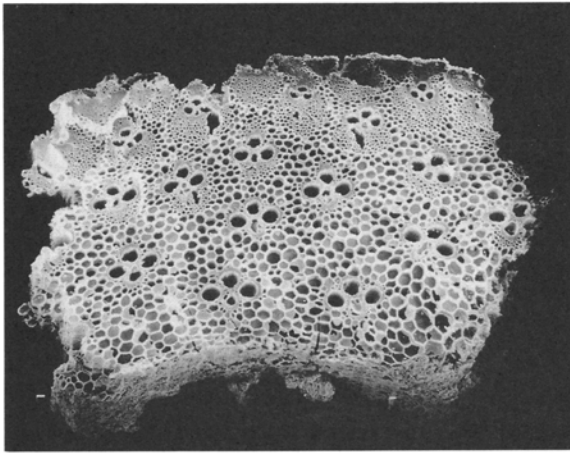
12b タケ亜科(外形)
不明-1 bar: 5.0mm



13a タケ亜科(横断面)
No.26 bar : 0.5mm



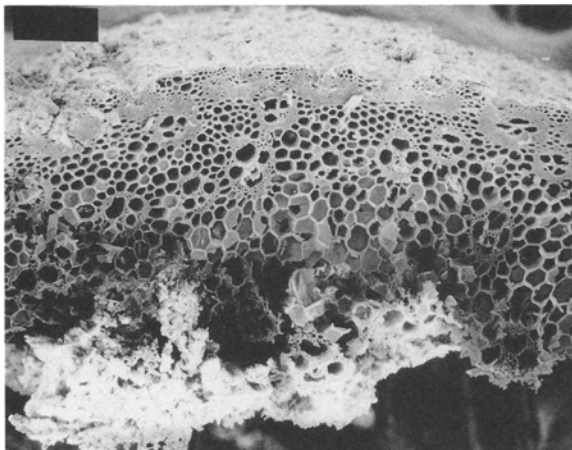
13b タケ亜科(外形)
No.26 bar : 5.0mm



14a タケ亜科(横断面)
No.25 bar : 0.5mm



14b タケ亜科(外形)
No.25 bar : 5.0mm



15a ススキ属(横断面)
No.19 bar : 0.5mm



15b ススキ属(外形)
No.19 bar : 5.0mm

2. 愛宕山遺跡出土繊維についての調査報告

石田一成（群馬県繊維工業試験場）

群馬県埋蔵文化財調査事業団より依頼のあった、愛宕山遺跡第4号住居址からの出土繊維の調査結果を報告する。

これらの出土繊維は全て炭化・断片化しているため、得られる情報には限界がある。なお、調査は次のような方法で行った。また、資料の呼称は、報告書の編集に際し付した第4号住居址所属遺物の通番をそのまま使用した。

調査内容および方法

試料の内容

織物、糸塊、糸、真綿その他を目視で判断した。

大きさ・数量

織物の場合は、たて糸方向・よこ糸方向の最大長を0.1cmまで測定し、たて×よことした。たてよこの区別の付かないものは長×短とした。糸塊等の場合で糸がほぼ直交していれば、糸の方向に沿って長さを測り長×短とした。糸の方向が分からないものは、最大径を長辺としそれに直交する方向を短辺とした。糸塊の場合は、大きさとして表すことは無意味であり、また他に適当な方法もないので、大きさの測定は行わず、全体で1点と数えた。

組織

目視、または拡大鏡・拡大映像計測システムなどを用いて観測した。炭化・損壊しており正確なところは不明だが、残存部の繰り返し単位を確認し、平織り・斜子織り等の推定を行った。

密度

目視で、または拡大鏡・拡大映像計測システムなどを用いて測定した。ある程度大きさのある試料については、1cm間でのたて糸とよこ糸の本数を3カ所程度計測しその平均値を密度とした。あまり大きさのない試料については1カ

所だけを測定し密度とした。たてまたはよこ方向の長さが概ね1cm未満の試料については、糸の本数とその占める長さを併記した。

撚り方向

拡大映像計測システムを用いて観測した。撚りの見られないものは無撚とし、撚りのあるものはS撚り（右撚り）・Z撚り（左撚り）とした。なお、下撚りがZで上撚りがSの場合、Z/Sと表記する。

撚りの程度

拡大映像計測システムを用いて3カ所以上を測定し、その平均値を記した。通常、現代の糸の撚りの程度は、解撚して単位長さあたりの撚りの回数で示す。今回はこの方法は不可能であり、見かけ上の角度で判断した。角度は、糸の長さ方向と撚りスジのなす角度であり、数字が大きいほど強く撚りがかかっていることを示す。

糸の直径

拡大映像計測システムを用いて、3カ所以上を0.01mmまで測定し、その平均値を記した。なお、糸の直径とは糸として利用されている状態の直径であり、糸にする前の繊維の太さではない。

材質

薄片を作成して光学顕微鏡で断面を観察、または金を蒸着して電子顕微鏡で断面・側面を観察し推定した。また、資料に含まれる元素についても分析を行った。なお、この項目の調査に限り破壊検査であり、糸を1～10mmほど消費した。

特徴

その他、各資料の特徴を記した。

使用機器

拡大鏡 実体顕微鏡SM5 (株) ニコン
 拡大映像計測システム
 マイクロスコープシステム：スコープマン
 MS-8000 TOWER (株) モリテックス
 パソコン：PowerMacintosh8500/180
 アップルコンピュータ(株)
 計測ソフト：MacSCOPE Ver. 2.32
 三谷商事(株)
 光学顕微鏡 VANOX オリンパス光学工業(株)
 電子顕微鏡 走査電子顕微鏡S2250N
 (株)日立製作所
 元素分析装置 エネルギー分散型X線分析装置
 EMAX-5770 (株)堀場製作所

資料97

概要	織物(平織り) 植物繊維 たて6.3×よこ2.6cm 1点
密度	たて(細)15.1本/cm (太)12.3 本/cm よこ 7.7本/cm
直径	たて(細)0.55mm (太)0.77mm よこ 0.68mm
撚り	たて(細)Z21.5° (太)Z26.8° よこ Z23.7°
特徴	・Z撚り単糸の使用 ・たて糸密度の差

今回の出土品の中では比較的大きな資料である。
 特記すべき点としては、第一に唯一のZ撚り単糸の資料であるということである。他の資料は全てS撚り単糸または無撚糸で地が出来ており、その違いに興味を持たれる。可能性の一つに、余った糸の有効利用ということが考えられる。上撚りがSの双糸を作る際にはZ撚りの糸を材料にするのだが、その際に余った材料を利用して織物にしたということが考えられる。

特記すべき点の第二には、たて糸に明らかに異なる種類の糸が用いられているということが上げられ

る。最初に断っておくが、この織物のたてよこの区別は、糸の密度の差によって判断した。今日織物を作る場合、作業効率の観点から密度の高い方をたてにするよう設計する場合が多い。この一般則が当時の織物に当てはまるのか確信は持てないが、この資料のたてよこの区別はこのように判断した。

話を元に戻して別種の糸が用いられていることの原因だが、可能性の第一として、やむを得ず異なる種類の糸を用いたことが考えられる。糸の直径が約1.4倍ということは、単純に考えれば糸の断面積は2倍ということであり、誤差の範囲とは考えにくい。よってこの二種類の糸は、撚った人が違うとか、細かい太いを作り分けていたとかそのような事情があったはずである。先程述べたように余りを用いたのなら、そのような異なる糸を混ぜて用いることもあると思われる。

別の可能性としては、そのような意匠を凝らして柄を織り出したということも考えられる。高級織物なら多数の綜統を必要とする綾や朱子を組織に用いるところだが、仮にこの生地が庶民用のものであったとするならばおそらく2枚綜統の織機で織ったものであろう。ならば、組織に変化を出すことは不可能である。そのようなことから、柄を出すために違う太さの糸を用いて織ったことが考えられる。

ところで、たて糸の密度の違いはどうやって出したのだろうか？ 現代の櫛状の箴では表現できない。箴より古い「刀状緯打具」(前田 1992)を用いていた可能性がある。糸の太さに応じて密度にも差を出したのだろうか。

資料98

概要	糸 植物繊維 1点
直径	0.60mm
撚り	S21.1°

資料99

概要	糸 植物繊維 1点
直径	0.50mm

VI 分析

撚り	S 23.4°
資料100	
概要	織物(平織り) 植物繊維 たて3.5×よこ6.3cm 1点
密度	たて 13.3本/cm よこ 11.2本/cm
直径	たて 0.54mm よこ 0.65mm
撚り	たて S 23.3° よこ S 26.4°
特徴	・「耳」の存在 ・糸の接続痕 (Z/S 双糸、2本入れ) たて10ヶ所 よこ3ヶ所

これもまた、今回の出土品の中では比較的大きな資料である。

第一の特徴は、織物の「耳」の存在である。このため、織物のたてよこがはっきりと区別できる。また、耳がはっきりしている部分をよく観察すると、一つの杼だけで製織されたように見える。

第二の特徴は、糸を接続したらしい痕跡が随所に見られることである。表側からだけの観察だが、以下の形状の痕跡が見られた。

- A Z/S 双糸-Z/S 双糸 たて2本 よこ1本
- B Z/S 双糸-2本入れ たて2本
- C Z/S 双糸-S 単糸 よこ1本
- D 2本入れ-S 単糸 よこ1本
- E 2本入れ-2本入れ たて4本
- F S 単糸-ひきそろえ-S 単 たて2本

(AおよびEは、糸が接続されているのではなく、同一の糸が同一の形状で生地を貫通している。)

接続痕は、短いものだと5~10mm程度であり、このくらいだと単に糸が変形しているだけということも充分考えられる。しかし、生地を貫通するほど長いものあり、全てが見間違えとは考えにくい。興味深いのは糸の結び目が観察されないことである。今日の機械織りでたて糸が切れた場合には、切れた一端では結び目を作らないがもう一端では結び目を作

る。同じような修復方法を採用なら生地に結び目があってもいいように思うが、この生地には見当たらない。また、単糸-2本入れ または 単糸-双糸いずれか一方の組み合わせが見られるのなら、一定の方法で接続が行われていることを示しているそれほど不自然ではないのだが、両方の組み合わせが見られるということになると理由がよく分らない。ほとんどこじつけだが、このような複雑なつなぎ方が見られる理由として、

- ・双糸は、意匠その他の理由で意図的に使われている (A)。また、双糸と単糸の接続も行われている (C)。
- ・その双糸が何らかの理由で途中でほどけ (B、E)、そのうち一本が単糸のように見えていたり双糸と単糸の接続の痕跡を残していたりしている (D)。
- ・単糸が割れているだけ (F)。
- ・糸が切れたりほどけたりする理由として、生地を炭化させる際の熱も考えられる。

このようなことを、一応、提起しておく。

資料101

概要	織物(平織り) 植物繊維 長2.3×短1.4cm 1点
密度	長 12.0本/cm (6本/0.5cm) 短 8.0本/cm (4本/0.5cm)
直径	長 0.53mm 短 0.63mm
撚り	長 S 24.9° 短 S 28.1°
特徴	・生地が積層 (4層?) ・Z/S 双糸の存在 (1本)

第一の特徴は生地が積層していることである。全体としては二層で、一部は更に生地が重なっているようである。二層目もその上の層も生地は端で接続しているが、二層目ではたてよこが揃っているのに対して、三層目では揃っていない。よって、この生

2. 愛宕山遺跡出土繊維についての調査報告

地は、折り畳まれた一枚の生地がふくれて開き、そのままつぶされたものと考えられる。意図的に二つに折り畳まれたものと考えられるが、なぜ折り畳まれたのか等については分からない。

もう一つの特徴である双糸は、「双糸(Z/S)―単糸(S)」の形状をしている。これも糸の接続のようだが、なぜ双糸と単糸を接続しているのかよくわからない。

資料102

概要	糸 植物繊維 1点
直径	0.57mm
撚り	S 22.0°
特徴	Z/S 双糸の存在 (3本)

多量の糸片であるが、その表面に双糸の断片が3本見られる。その内比較的長い1本は両端がほどけているが、生地中の糸ではないので接続のためにほどいたものではないだろう。炭化する際の熱で撚りがほどけることも、十分に考えられる。

資料103

概要	糸 植物繊維 1点
直径	0.48mm
撚り	S 16.6°
特徴	Z/S 双糸の存在 (1本)

これは少量の糸片だが、その表面に双糸が1本見られる。今回鑑定を依頼された中では最も長い双糸のひとつである。両端の撚りはほどけかけている。

資料104

104A

概要	糸塊 植物繊維 長4.2×短3.1cm 1点
密度	たて 12.0本/cm (6本/0.5cm) よこ 10.0本/cm (4本/0.4cm)
直径	たて 0.76mm よこ 0.60mm

撚り	たて 無 よこ 無
特徴	・糸が直交、積層 ・Z/S 双糸の存在 (塊に3本、周辺に2本)

糸が直交しており一見生地かと思わせるが、直交した糸同士は組織されていないので生地ではない。また、植物繊維と思われる太い糸のほとんどに撚りが見られない。素材の詳細は分からないものの、もしかしたら植物の茎をそのまま用いたのではないかという気がする。全体の印象としては、「糸を補強材として用いたもの」との感じを受ける。例えば、漆喰の壁に埋め込む藁や、塑像を制作するときに粘土に埋め込む繊維質のようなものである。

そのような糸塊の中に双糸が3本見られる。この3本は、これまで述べてきた多くの双糸とは異なり途中でほどけてはいない。この糸塊全体が補強材だとした場合、双糸は、それらを固定するような役割があったのかもしれない。

104B 代表的な3点について記す

104B1

概要	織物 (平織り) 絹 たて0.3×よこ0.2cm 1点
密度	たて 54.7本/cm (7本/0.128cm) よこ 計測不能
直径	たて 0.11mm よこ 0.11mm
撚り	たて 無 よこ 無
特徴	絹織物

104B2

概要	織物 (平織り) 絹 たて0.3×よこ0.2cm 1点
密度	たて 51.7本/cm (6本/0.116cm) よこ 計測不能
直径	たて 0.18mm よこ 計測不能
撚り	たて 無 よこ 無
特徴	絹織物

VI 分析

104B3

概要	織物（平織り） 絹 長0.3×短0.3cm 1点
密度	長 39.6本/cm（4本/0.101cm） 短 33.7本/cm（3本/0.089cm）
直径	長 0.12mm 短 0.13mm
撚り	長 無 短 無
特徴	・絹織物 ・真綿の付着

シャーレの小片を丹念に調べたところ、他の炭化資料に比べて明らかに細い糸で高密度に織られた生地の断片が見つかった。電子顕微鏡で観察したところ、繊維が一本ずつに孤立している様子や、繊維が炭化の際に膨張したと思われるものが観察された。一緒に鑑定した他の多くの炭化資料は植物繊維と思われるが、これらは、繊維同士が結束しており、炭化の際に膨張するようなこともない。また、植物繊維では撚りが入るはずだがこの資料にはないことなども勘案すると、これらの生地は絹で出来ていると判断できる。しかし、断面形状がはっきりしないので、生糸か練り絹かは判断できない。

104B1および104B2はたて糸の密度が高すぎてまるで筏のようであり、よこ糸の観察は出来なかった。104B3は、上記2点に比べるとたて糸の密度が低く、小さいながらも目の空いている粗い生地であった。この生地には真綿と思われる繊維塊が付着している。絹織物に真綿が詰められたのならば、これは高級衣料だった可能性がある。案外と貴重な資料なのかもしれない（中田 1990）。ただ、この104Bの資料全体について言えることだが、あまりに小さすぎて素材の鑑定が難しい（当場で行うと破壊検査になってしまう）。

104C

概要	真綿 絹 長0.2×短0.1cm 数点
直径	0.01mm
特徴	・真綿

・元素分析による銅の検出

シャーレの小片の中に、何かが溶融して泡を噴いたようなものが数点見出された。植物繊維では溶融するような炭化は起こらないが、絹を燃焼するとよく似た燃えかすが残る。実際、真綿を蒸し焼きにしてみたところ、このような溶融して泡を噴いたような様子を再現できた。よって、これらは絹だったであろうと判断できる。また、それらとは別に、他の繊維に比べて一桁細かい繊維よりなる塊も数点見出された。火加減を弱くして再び真綿の蒸し焼きを試みると、溶融状にならず繊維の形状をほぼそのまま残すことが確認された。炭化の際の微妙な火加減により形状に差が生じるが、これらはいずれも絹である。

ところで、この小片のうち1点の元素分析を行ったところ、他の資料ではほとんど検出されない銅が検出された。蚕の体内にこれだけの銅が存在したならおそらく死んでしまうので、元々絹に含まれていたとは考えにくい。もう1点分析を行ってみたがこちらからは銅は検出されなかった。出土状況が分からず何とも言えないが、可能性として以下のようなことが考えられる。

- ・すぐそばに銅製品があったか、銅を含む水に浸される状況にあった。
- ・炭化前の真綿の状態で、銅と接触するような使われ方をした（銅製品の梱包、拭き掃除等）。
- ・染色にあたり媒染剤として銅化合物を用いた。

資料105

105A

概要	織物（平織り） 植物繊維 長 0.9×短0.4cm 1点
密度	長 9.4本/cm（3本/0.320cm） 短 7.9本/cm（2本/0.258cm）
直径	長 0.75mm 短 0.64mm
撚り	長 S26.1° 短 S31.0°

105B

2. 愛宕山遺跡出土繊維についての調査報告

概要	織物（平織りまたは斜子織り） 植物繊維 長0.7×短0.4cm 1点
密度	長 13.8本/cm（5本/0.362cm） 短 11.0本/cm（4本/0.365cm）
直径	長 0.42mm 短 0.55mm
撚り	長 S22.3° 短 S28.7°
特徴	糸の接続または2本入れ
105C	
概要	糸塊 植物繊維 長1.3×短1.1cm 1点
直径	0.54mm
撚り	S36.2°

105Bの長方向に糸が2本密着して並んでいる箇所がある。これまで述べてきたものは明らかに1本の糸の位置を占めていたのだが、この資料では2本の別の場所の糸のようにも見える。だとすると、斜子織りの組織と言うことになるのだが、どちらかというなら1本の場所に2本入っているようであり、平織りと思われる。100に見られるような、糸の接続法の一つなのだろうか。

105Cはどう見ても糸塊だが、元は平織りだったかと思わせる構造がある。

資料106

概要	織物（平織り） 植物繊維 たて1.3×よこ0.7cm 1点
密度	たて 14.5本/cm（5本/0.344cm） よこ たてより粗
直径	たて 0.41mm よこ 0.42mm
撚り	たて S22.8° よこ 計測不能
特徴	生地が積層

第一の特徴は生地が積層していることである（少なくとも三層はあるように見える）。そのため、よこ糸の規則性がはっきりとは分からない。

資料107

概要	織物（平織り） 絹 たて0.8×よこ0.3cm 他2点
密度	たて 38.9本/cm（9本/0.221cm、 8本/0.216cm） よこ 28.7本/cm（10本/0.359cm、 8本/0.265cm、14本/0.500cm）
直径	たて 0.33mm よこ 0.31mm
撚り	たて 無 よこ 無
特徴	炭化していない絹織物

唯一炭化していない生地である。糸の太さに対して密度がかなり高く、表面に浮き出ている部分にはみ出し膨らんでいる。また、糸の上下運動も激しく、上下に直角に折り曲げられたような状態である。電子顕微鏡で観察すると、中空になった繊維が観察された。この中空部は植物繊維のルーメンにしては大きいように思える。また、よく見ると中空部が二つある繊維もあった。おそらく、この糸は絹で、精練していない生糸の状態で織物にされ、何らかの化学変成を経て内部のフィブロインが除かれ、外部のセリシンが残ったのだろう。

また、元素分析を行った結果、アルミニウム、ケイ素、リン（多量）、カルシウム、鉄（多量）、および銅が検出された。カルシウムは他の資料からも検出されているので特に興味は惹かない。また、アルミニウム、ケイ素、リンおよび鉄も土壌中の成分として一般的なものであり、炭化していない生地に染み込んでいても不思議ではない。興味深いのは銅であるが、104Cでも述べたように染色の際の媒染剤の可能性がある。真綿を染色するよりは、生地を染色したと考える方が自然である。なお、媒染剤としては、多量に検出された鉄も大いに考えられる。リンが多いのが気になるところだが、リン酸塩の形で存在するのだろうか？ だが、リン酸鉄、リン酸銅、リン酸アルミニウムのいずれも水には不溶性・難溶性であり、媒染剤として用いたとは考えにくい。土の中で、媒染剤の陰イオンがリン酸イオンで置換されたのかもしれない。

VI 分析

資料108

108A1

概要 織物（平織り） 植物繊維
長1.6×短0.9cm 1点
密度 長 8.4本/cm（4本/0.474cm）
短 9.0本/cm（3本/0.314cm）
直径 長 0.55mm 短 0.36mm
撚り 長S19.9° 短S22.6°
特徴 2本入れ（短）

108A2

概要 織物（平織り） 植物繊維
長1.3×短0.7cm 1点
密度 長 10.0本/cm（9本/0.9cm） 短
6.9本/cm（3本/0.436cm）
直径 長 0.51mm 短 0.45mm
撚り 長 S35.5° 短 S23.0°
特徴 2本入れ（長）

108A3

概要 織物（平織り） 植物繊維
長1.1×短0.9cm 1点
密度 長 計測不能 短 計測不能
直径 長 0.52mm 短 0.62mm
撚り 長 S25.4° 短 S23.7°

108A4

概要 織物（平織りまたは斜子織り）
植物繊維 長1.0×短0.9cm 1点
密度 長 計測不能 短 計測不能
直径 長 0.49mm 短 0.49mm
撚り 長 計測不能 短 S22.7°
特徴 ・Z/S双糸の存在（長1本、短1本）
・結び目の存在

108A5

概要 織物（平織り） 植物繊維
長1.4×短1.0cm 1点
密度 長 計測不能 短 計測不能
直径 長 0.62mm 短 0.56mm
撚り 長 計測不能 短 S32.0°

108A6

概要 織物（平織り） 植物繊維
長1.3×短1.2cm 1点
密度 長 8.5本/cm（3本/0.351cm）
短 10.0本/cm（4本/0.400cm）
直径 長 0.55mm 短 0.50mm
撚り 長 S23.7° 短 S20.3°
特徴 ・Z/S双糸（長1本、短1本）
・Z/S双糸—単糸接続（短）

108A7

概要 織物（平織り） 植物繊維
長1.4×短1.0cm 1点
密度 長 10.0本/cm（5本/0.5cm）
短 10.0本/cm（7本/0.7cm）
直径 長 0.43mm 短 0.43mm
撚り 長 S16.2° 短 S16.0°

108A8

概要 織物（平織り） 植物繊維
長1.4×短0.7cm 1点
密度 長 10.80本/cm（3本/0.279cm）
短 7.9本/cm（4本/0.505cm）
直径 長 0.46mm 短 0.58mm
撚り 長 S25.2° 短 S11.5°

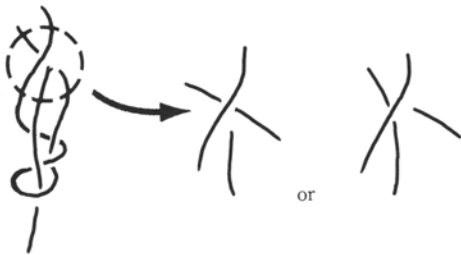
108A1, 2には1本の場所に2本の糸を入れたかのような糸が見られる。計4本いずれもS撚りであり、双糸がほどけたという可能性は低い（S/Z双糸という可能性も否定しきれないが）。糸の接続の痕跡であろう。ところで、108A4短方向には、2本の糸が密着して入っているところがある。糸の太さ、占めるスペース、そして2本の糸が単糸と双糸であり、接続されたような痕跡も見当たらないことなどから、この生地が斜子織りである可能性は高い。

108A4, A6には双糸が二本見られ、それがたてよこに入っていて交差している。100にもそういう箇所はあったが、このように小さく密度も低い生地に2箇所も現れるというのは興味深い。また、糸が短いということもあるが、双糸の端がほとんどほどけずに残っている。しかし、最も注目すべきは、108A

2. 愛宕山遺跡出土繊維についての調査報告

6の短方向の双糸が双糸-単糸接続で糸を絡めている様子までしっかり残していることである。

もう一つの特徴は、108A4に糸の結び目らしいものが存在することである。これは他の資料にはなく、(この一連の資料の中では) 珍しい。100のところでも述べたが、結び目でない糸の接続の数に対して、結び目がこれ一つというのは少なすぎる気がする。糸の絡み方は第49図に記す。



第49図 資料108A 4糸の絡み方

108B1	概要	織物(平織り)	植物繊維
		長1.6×短0.9cm	1点
	密度	長 13.3本/cm (8本/0.6cm)	
		短 10.0本/cm	
	直径	長 0.49mm	短 0.60mm
	撚り	長 S29.7°	短 S18.96°
	特徴	2本入れ(長)	
108B2	概要	織物(平織り)	植物繊維
		長0.7×短0.6cm	1点
	密度	長 9.7本/cm (4本/0.395cm)	
		短 10.1本/cm (3本/0.310cm)	
	直径	長 0.57mm	短 0.49mm
	撚り	長 計測不能	短 S21.0°
108B3	概要	織物(平織り)	植物繊維
		長0.8×短0.7cm	1点
	密度	長 10.7本/cm (3本/0.280cm)	
		短 12.4本/cm (5本/0.404cm)	

直径	長 0.46mm	短 0.41mm
撚り	長 S26.6°	短 S33.5°
特徴	2本入れ(短)	

1本の糸の占めるべきところに2本の糸が入っている接続部が108B1, 3に併せて2箇所あった。B3では2本の糸は資料をほぼ貫通しているが、B1では中程で途切れている。似たような構造でも、108A4では斜子織りの可能性が高いとした。しかし、B1, 3では2本の糸の占めるスペースが1本分に見えるので、斜子織りではなく2本入れであろう。

108C

概要	糸	植物繊維	1点
直径	0.41mm		
撚り	S20.9°		

108D1

概要	糸塊	植物繊維	長2.9×短1.2cm
	1点		
直径	0.34mm		
撚り	無		

108D2

概要	糸塊	植物繊維	長3.5×短0.8cm
	1点		
直径	0.38mm		
撚り	S26.5°		

108D1にはS撚りに見えるものもあるが、はっきりとは分からない。

108D2は結び目のように見えるが、構造は分からなかった。

資料109

概要	糸塊	植物繊維	長2.5×短2.4cm
	1点		
直径	たて 0.90mm		
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・糸が直交、積層 ・Z/S双糸の存在(表に1本、裏に3本) 		

VI 分析

104Aとよく似た資料である。一見生地かと思わせるが、直交した糸同士は組織されていないので生地ではない。また、植物繊維と思われる太い糸のほとんどに撚りが見られない。しかし、糸だけで出来ていることがはっきりしている点で、104Aとは異なる。104Aほどには「補強材」との印象は薄い。

双糸が裏表併せて4本見られ、この点でも104Aと似ている。この4本もまた直交しており、かつ途中でほどけておらず、他の糸を固定するような役割があったのかもしれない。

資料110

110A

概要 糸塊 植物繊維 長2.2×短1.5cm
1点
直径 長 0.47mm 短 0.31mm
撚り 長 無 短 無
特徴 一部に平織りのような構造も見える

110B

概要 織物(平織り) 植物繊維
たて2.1×よこ0.9cm 1点
特徴 「耳」の存在

以下に代表的な3ヶ所について記す。

110B1

密度 たて 13.7本/cm (3本/0.219cm)
よこ 11.6本/cm (4本/0.345cm)
直径 たて 0.29mm よこ 0.28mm
撚り たて 無 よこ 無
特徴 部分的にS撚りの糸あり

110B2

密度 たて 計測不能 よこ 計測不能
直径 たて 0.41mm よこ 0.36mm
撚り たて S16.2° よこ 計測不能

110B3

密度 たて 計測不能 よこ 計測不能
直径 たて 0.34mm よこ 0.42mm
撚り たて 無 よこ 計測不能

110C

84

概要 織物(平織り) 植物繊維
長2.7×短1.7cm 1点

特徴 積層

以下に代表的な2ヶ所について記す。

110C1

密度 長 計測不能 短 計測不能
直径 長 0.27mm 短 0.33mm
撚り 長 無 短 計測不能

110C2

密度 長 計測不能 短 計測不能
直径 長 0.31mm 短 0.30mm
撚り 長 無 短 計測不能

110D

概要 糸塊 植物繊維 長2.5×短2.2cm
1点
直径 長 0.56mm 短 0.54mm
撚り 長 無 短 無

110E

概要 織物(平織り) 植物繊維
長2.6×短1.8cm 1点
特徴 積層、一部剥離(E3)

以下に代表的な3ヶ所について記す。

110E1

密度 長 11.4本/cm (8本/0.7cm)
短 11.0本/cm
直径 長 0.54mm 短 0.46mm
撚り 長 S18.7° 短 無
特徴 Z/S双糸1本

110E2

密度 長 計測不能 短 計測不能
直径 長 0.46mm 短 0.36mm
撚り 長 無 短 S27.5°

110E3

大きさ 長0.8×短0.8cm
密度 長 8.6本/cm (6本/0.7cm)
短 10.9本/cm (6本/0.55cm)

2. 愛宕山遺跡出土繊維についての調査報告

直径	長 0.48mm 短 0.47mm	1 点
撚り	長 S27.8° 短 S29.9°	直径 測定不能
特徴	E 1、E 2 からの剥離片	撚り 無
110 F		
概要	糸塊 植物繊維 長2.0×短1.0cm	1 点
直径	0.44mm	直径 0.39mm
撚り	無	撚り 無
特徴	撚り糸が一本 (S撚り)	
110 G		
概要	糸塊 植物繊維 長0.8×短0.6cm	1 点
直径	0.51mm	直径 測定不能
撚り	計測不能	撚り 無
110 H		
概要	織物 (平織り) 植物繊維 長1.0×短0.8cm 1点	1 点
密度	長 10.0本/cm (5本/0.5cm) 短 10.0本/cm (3本/0.3cm)	直径 0.38mm
直径	長 0.47mm 短 0.50mm	撚り S21.5°
撚り	長 S24.0° 短 S40°	
110 I		
概要	糸塊 植物繊維 長1.7×短1.3cm	1 点
直径	0.47mm	直径 0.54mm
撚り	S29.4°	撚り 無
110 J		
概要	糸塊 植物繊維 長1.3×短0.9cm	1 点
直径	測定不能	直径 計測不能 0.36mm、0.48mm
撚り	無	撚り 無
特徴		特徴 結び目
110 K		
概要	糸塊 植物繊維 長1.8×短1.2cm	1 点
直径		直径 0.37mm
110 L		
概要	糸塊 植物繊維 長2.0×短1.2cm	1 点
直径		直径 0.39mm
撚り		撚り 無
110 M		
概要	糸塊 植物繊維 長1.4×短0.9cm	1 点
直径		直径 測定不能
撚り		撚り 無
110 N		
概要	糸塊 植物繊維 長1.0×短0.9cm	1 点
直径		直径 0.38mm
撚り		撚り S21.5°
110 O		
概要	糸塊 植物繊維 長0.9×短0.7cm	1 点
直径		直径 0.54mm
撚り		撚り 無
110 P		
概要	糸塊 植物繊維 0.9×0.7、0.4× 0.3、0.4×0.2 (長×短cm) 3 点	1 点
直径		直径 計測不能 0.36mm、0.48mm
撚り		撚り 無
特徴		特徴 結び目
110 Q		
概要	糸塊 植物繊維 長2.8×短1.6cm	1 点
直径		直径 0.37mm

VI 分析

撚り S27.5°

110R

概要 糸塊 植物繊維 長1.7×短1.0cm
1点
直径 0.22mm
撚り 無

110Aは一部に平織りらしい組織が見えるが、乱れているため組織に関する測定はほぼ不可能である。110Dには、その上積層もあるようで糸の直径の測定しか出来なかった。110Cはどうやら平織りらしいが、組織が全体的に乱れてかつ積層しており、糸の観察が容易であるにもかかわらず組織の観察は行えなかった。110Bは長辺が「耳」らしく、平織りの組織も他よりはいくらかよく観察できた。3ヶ所観察した限りではそれぞれ別の生地の可能性が高い。

110Eは生地の跡がよく残っている資料である。観察中にE3が剥離してしまい、元々どこに付着していたのか正確にはわからないが、110E2にそれらしい跡がある。剥がれたのがそこからだとすると、E2とE3目をほぼ揃えて積層していたようである。なお、E1とE2の向きは全く揃っていない。110Hも目がはっきりしており、もしかすると元々はEの一部だったのかもしれない。

110E1には双糸が1本観察される。一端は隠れて観察できないが、もう一端は特にほどけてはいない。

110J、K、Mなどは乱れている割には糸が並んでいるように見え、撚りもないので、糸同士の境目がパソコン画面上で認識しづらく、糸の直径さえ測定できなかった。

110Pの小片二つは糸が複雑に絡まっていて、構造を調べたかったのだが不可能だった。

110資料箱中の小片を電子顕微鏡で観察したところ、空洞になった小部屋が多数見られた。これらはおそらく師管なので、小片は植物の韌皮組織よりなる糸ではなく、木片であろう。このことから、110A、

C、D、L、Mなどは純粋な繊維塊ではなく、木片に繊維片が付着している可能性も考えられる。

参考引用文献

- 中田節子 『矢田遺跡 平安時代住居跡編(1)付篇 1』
群馬県教育委員会 1990
前田亮 『図説手織機の研究』 青人社 1992.5.1
布目順郎 『目で見える繊維の考古学 繊維遺物資料集成』
染織と生活社 1992.5.25

言葉の解説

報告書で用いた分かりにくい語、混同しやすい語について、簡単に説明する。

1. 糸

生地を構成する、細長い形状のもの。繊維よりなる。ここでは、手作業できる程度の大きさ、つまり太さが0.1mm以上程度のものをいう。

2. 繊維

糸を構成している、細長い形状のもの。ここでは、顕微鏡等で観察する程度の大きさ、つまり0.1mm以下程度のものをいう。電子顕微鏡写真に見られる、円筒状をした最小単位のものであり、それがそれである。

3. 単糸、双糸

単糸は、撚り合わせておらず、2本以上の糸を引きそろえたのでもない糸。双糸は、2本の糸を撚り合わせた糸。単糸を直接構成するのは繊維だが、双糸を直接構成するのは糸（ここでは単糸）である。

4. S撚り、Z撚り

糸を縦に置いた場合、撚りスジが向かって右下がりになるのがS撚り、右上がりになるのがZ撚り。それぞれのアルファベット文字の中央付近の線の方向が呼び方の由来。

5. 上撚り、下撚り

2本の単糸よりなる双糸では、双糸にかかっているのが上撚りで、単糸にかかっているのが下撚り。通常、上撚りと下撚りの方向（ZやSのこと）は異

なる。

6. 生糸、練り糸

蚕が繭作りのため吐いた糸を顕微鏡で観察すると、二本の糸が何かに包まれて一本になっているのが観察される。内部の二本の糸をフィブロインと言い、いわゆる絹である。フィブロインを包んでいるのは、セリシンという膠状の物質である。生糸とは、繭から糸をほぐしただけでセリシンを落としていない糸であり、練り絹とは生糸を精練してセリシンを落とした絹のことである。練り絹には柔らかさや光沢があり、一般にはこの形で用いる。

7. 耳

織物の幅の両端に、全長に渡って0.2～0.5cmの丈夫な部分があり、この部分を耳という。単純に織物の横糸が方向を変える部分のことも指し、この報告書では後者の意味。

8. 平織り

平織りは、1本おきのたて糸と、1本おきのよこ糸とが、交互に浮沈して組織された、最も単純で基本的な組織である。平滑でしっかりした布目となる。第52図参照。

9. 斜子織り

斜子織りは、たて糸よこ糸ともに数本を並べて平織りにし、平織り組織を縦横に引き延ばした状態の織り方である。第53図参照。

10. 媒染剤

少数の例外を除いて天然染料は繊維に直接は染着しないので、染料と結合して染着の仲立ちをする葉剤を用いる。これが媒染剤で、一般に、水溶性の金属塩類である。

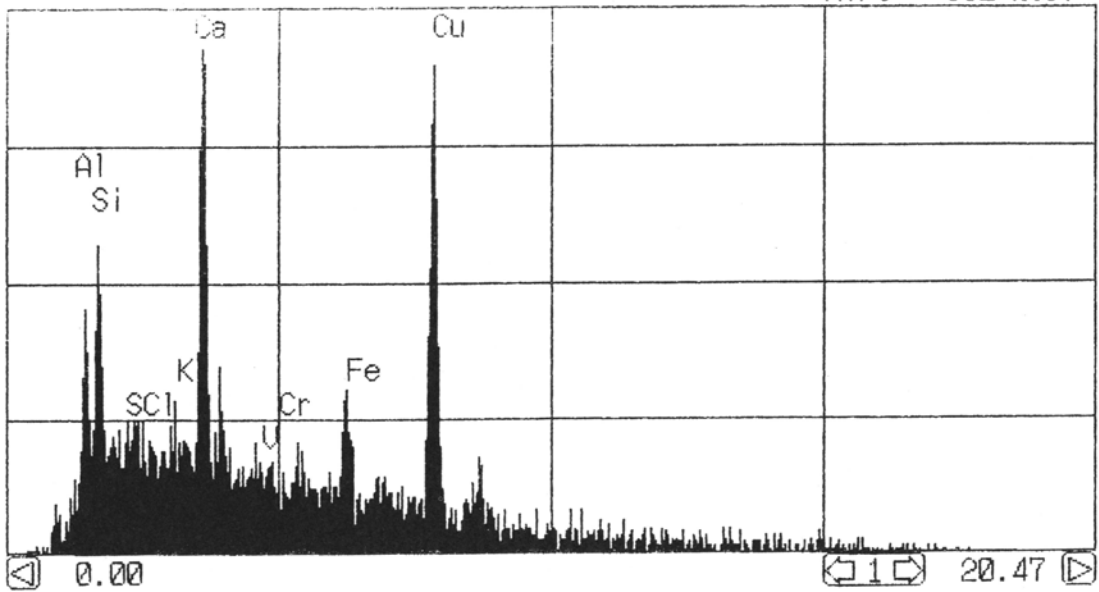
参考

- JISハンドブック54 『繊維』 日本規格協会 2000.4.24
柚木沙弥郎 監修 『図解染織技術事典』 理工学社 1990.4.10
文化服装学院 編 『アパレルの素材と製品』 文化出版局
1987.6.28

1:4092C

測定時間: 180 s

AUFS: 152 カウント

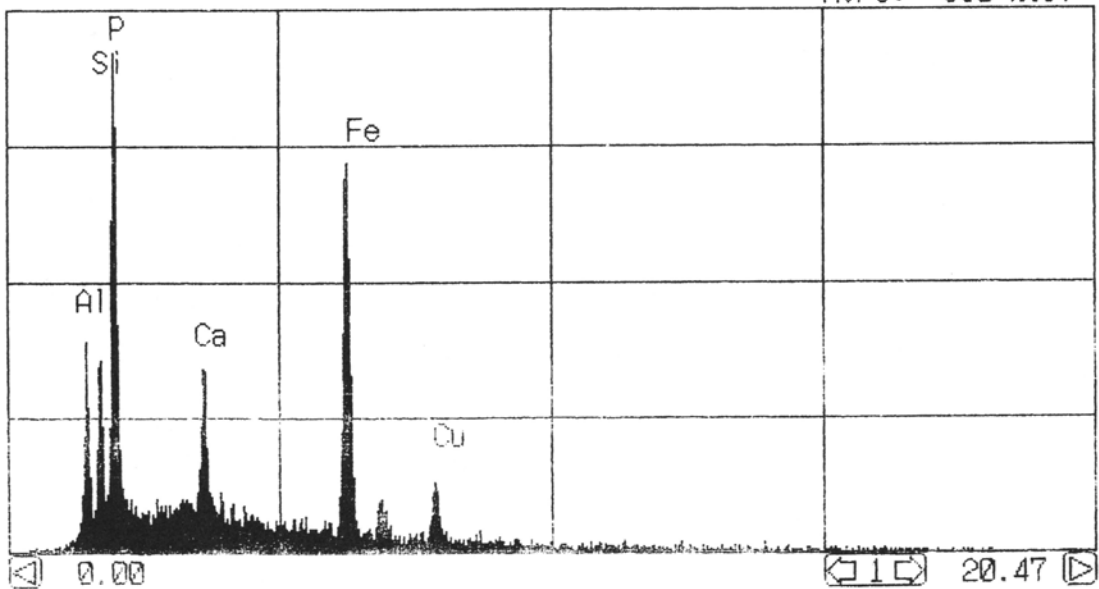


第50図 元素分析の結果、資料104

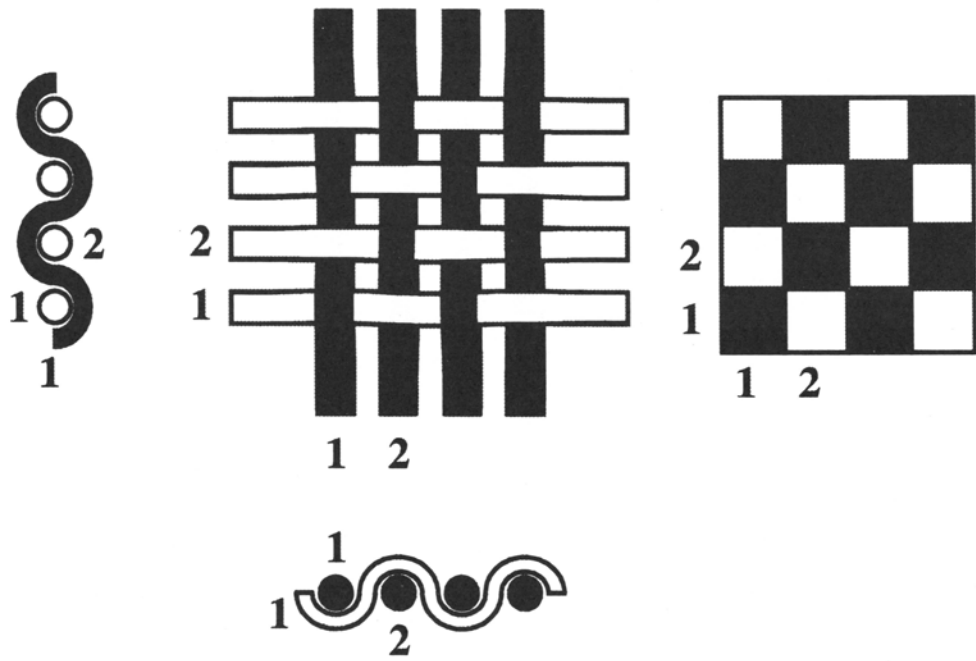
1:4095

測定時間: 180 s

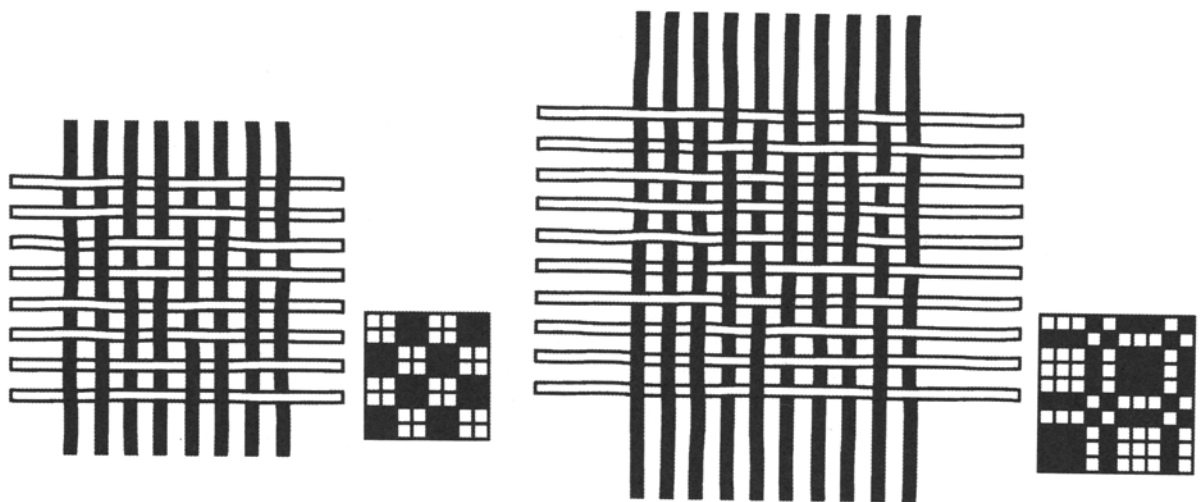
AUFS: 660 カウント



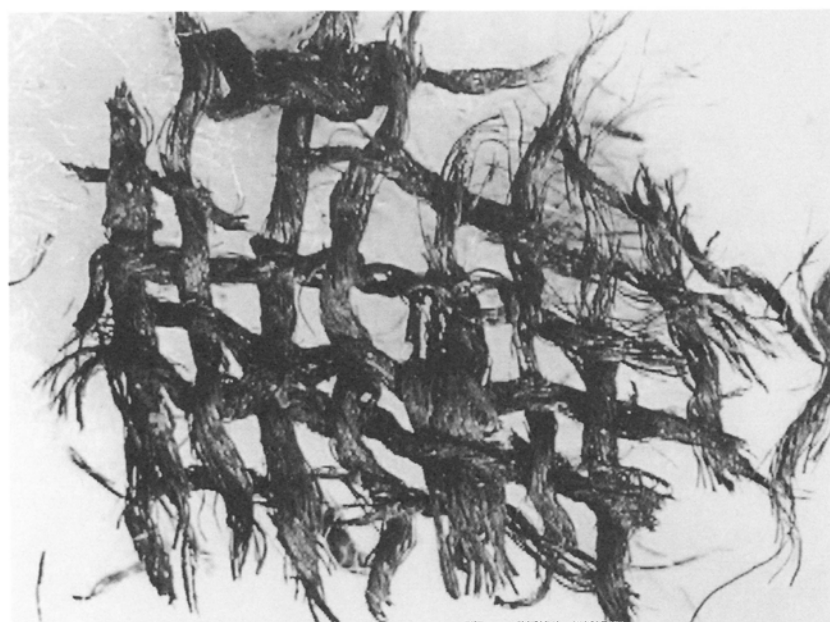
第51図 元素分析の結果、資料107



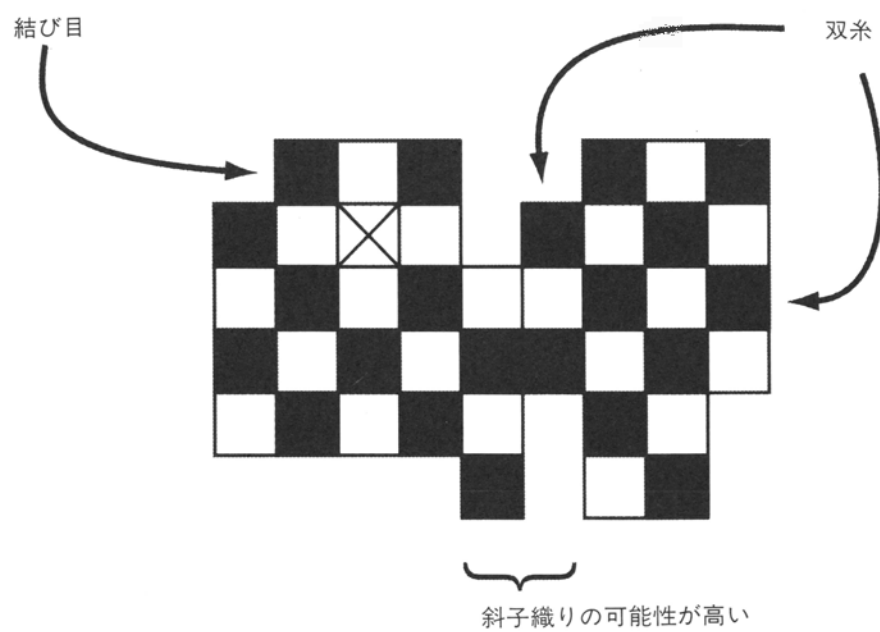
第52図 平織りの構造と組織図



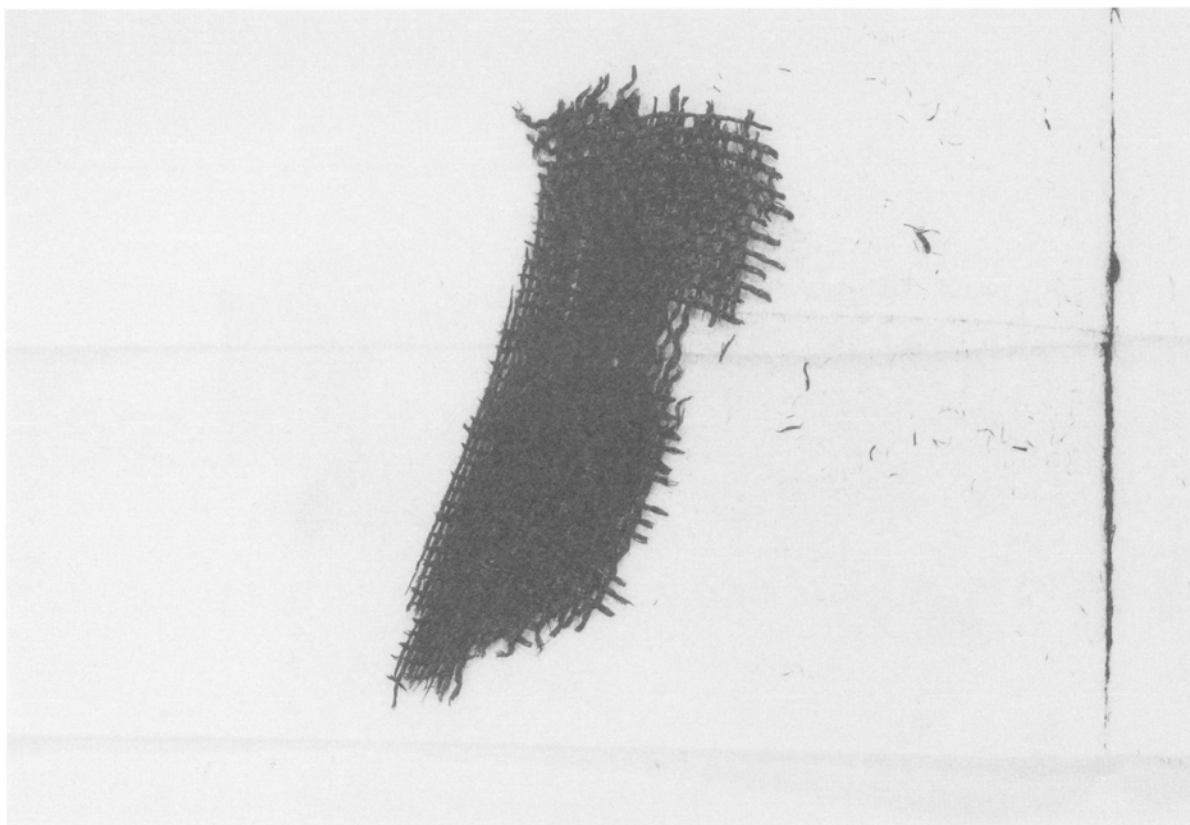
第53図 斜子織りの例



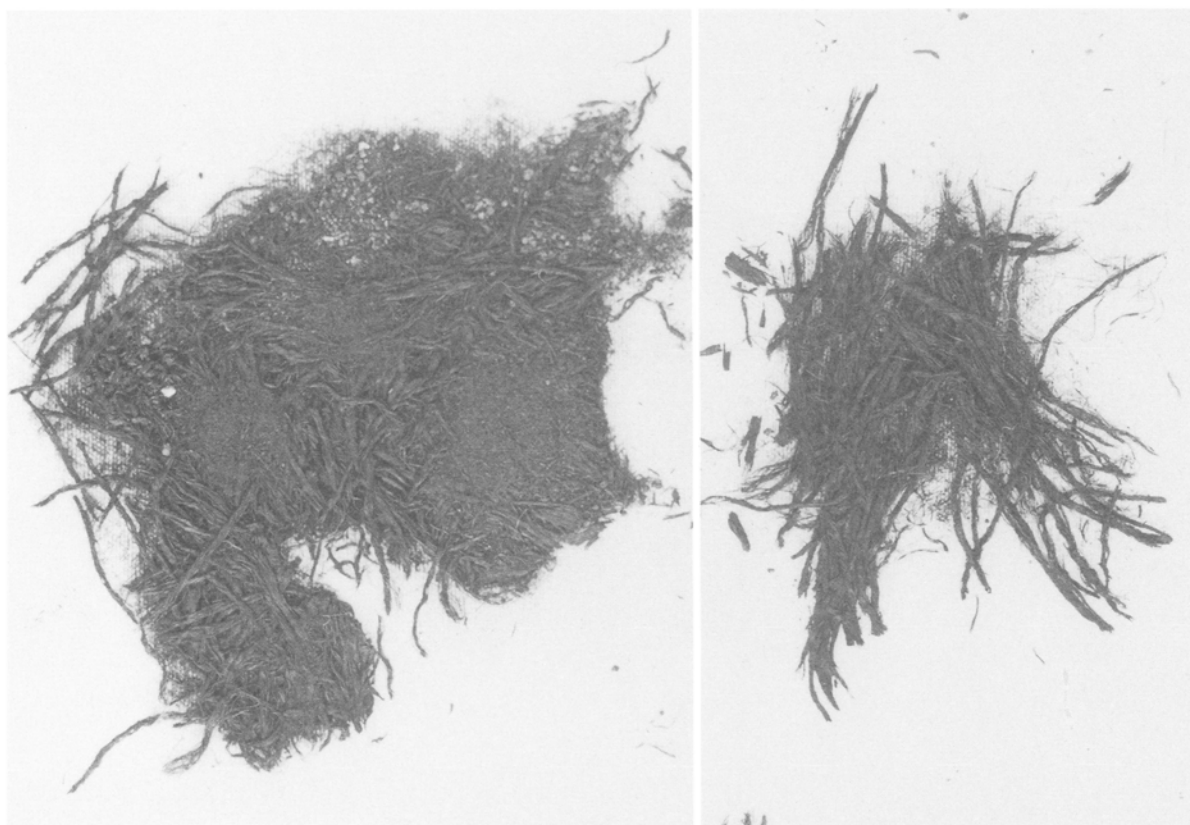
資料104



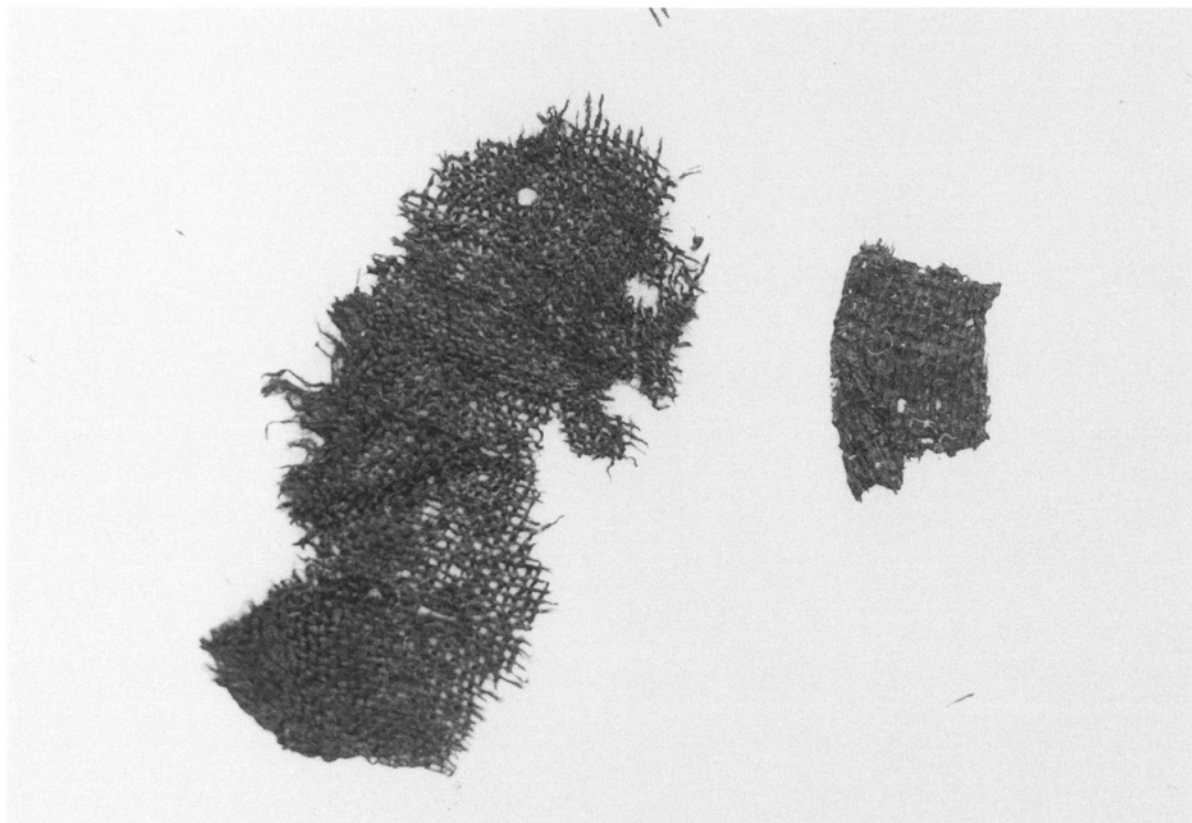
第54図 資料104の組織図



資料 97



資料 98 (向かって左)および資料99 (同右)



資料 100 (向かって左) および資料 101 (同右)



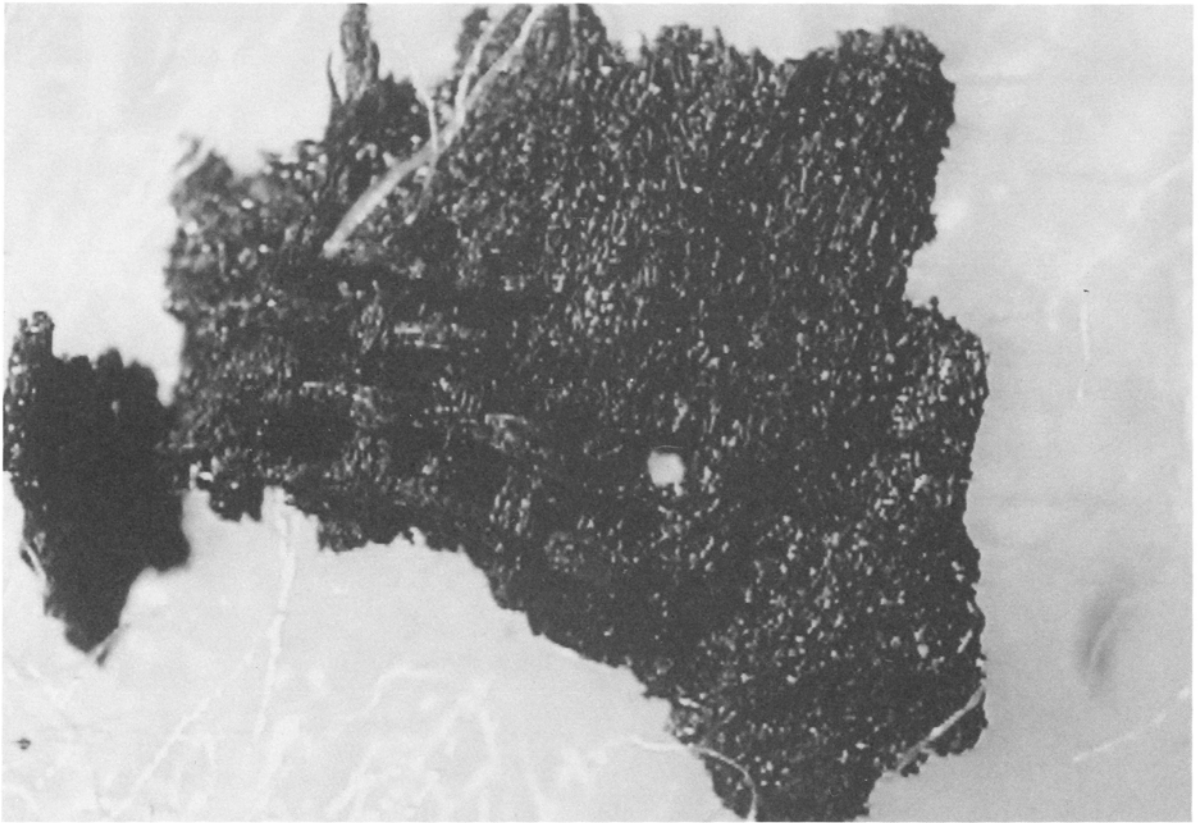
資料 102



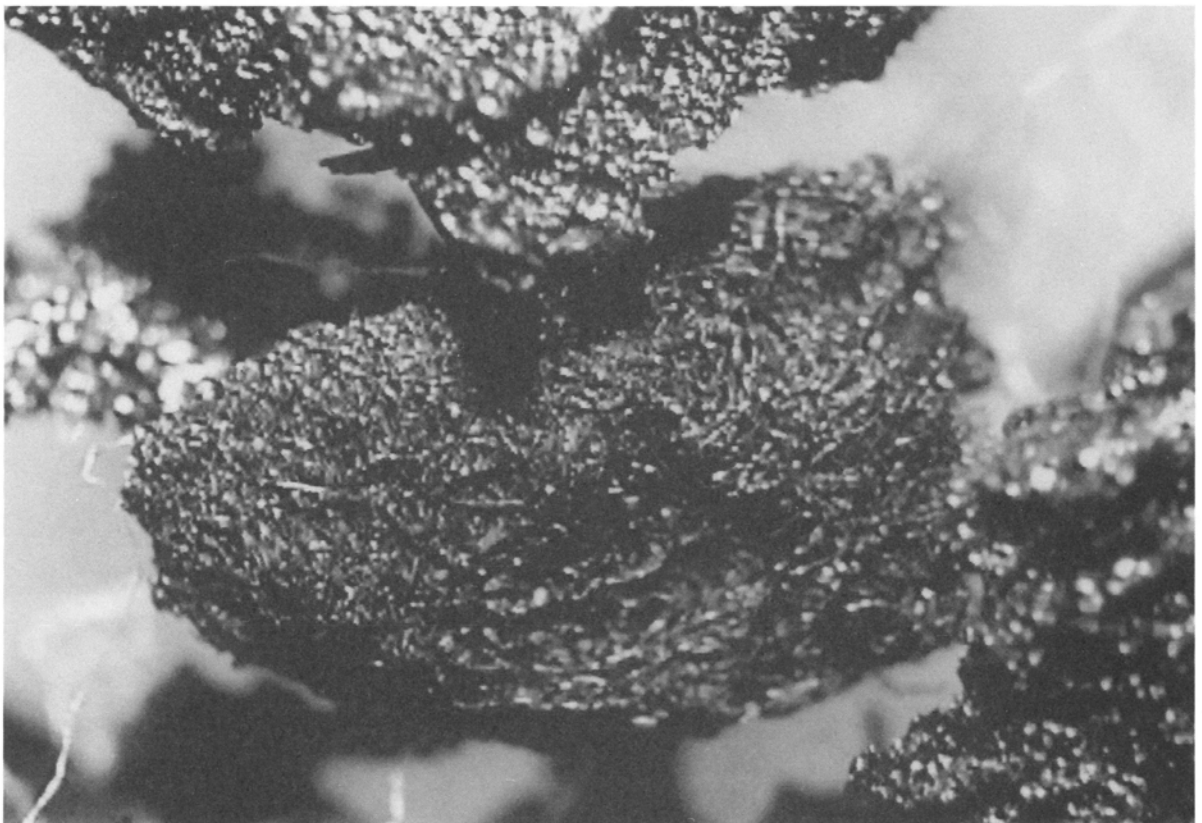
資料 103



資料 104 A. B. C



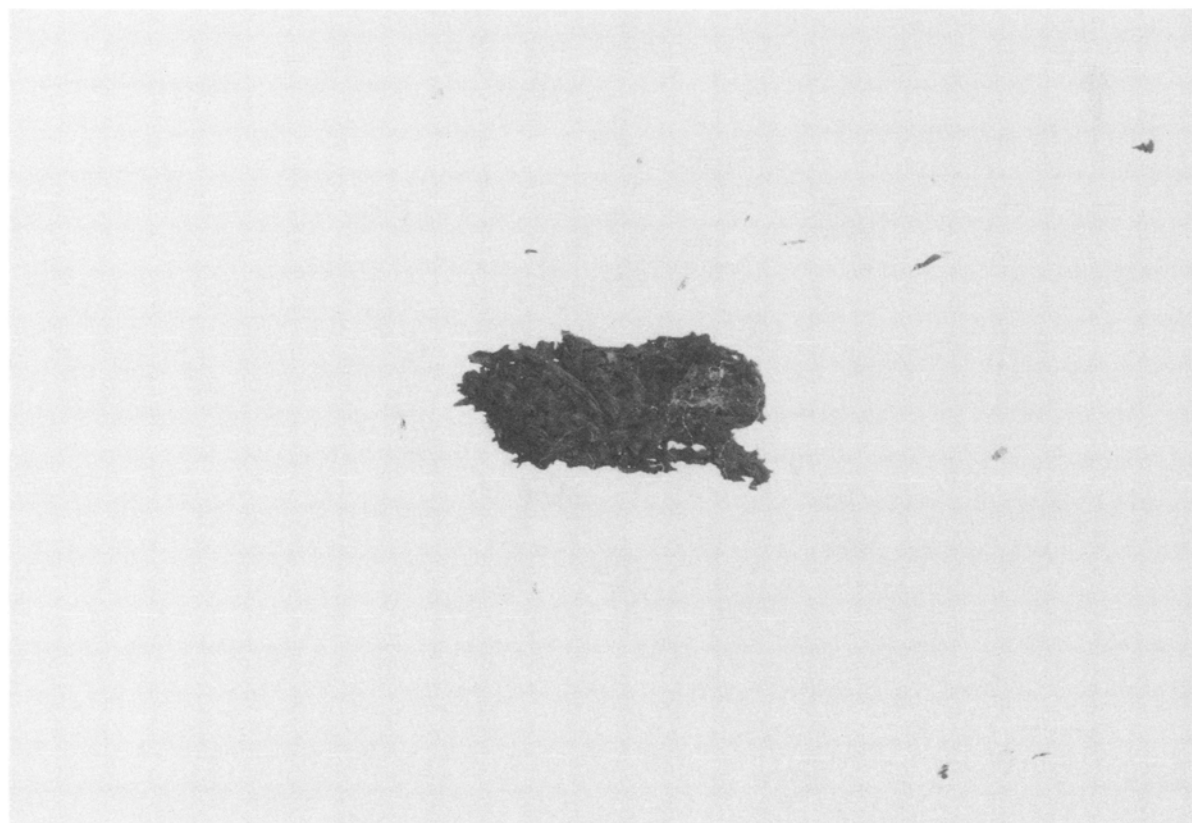
資料 104 B



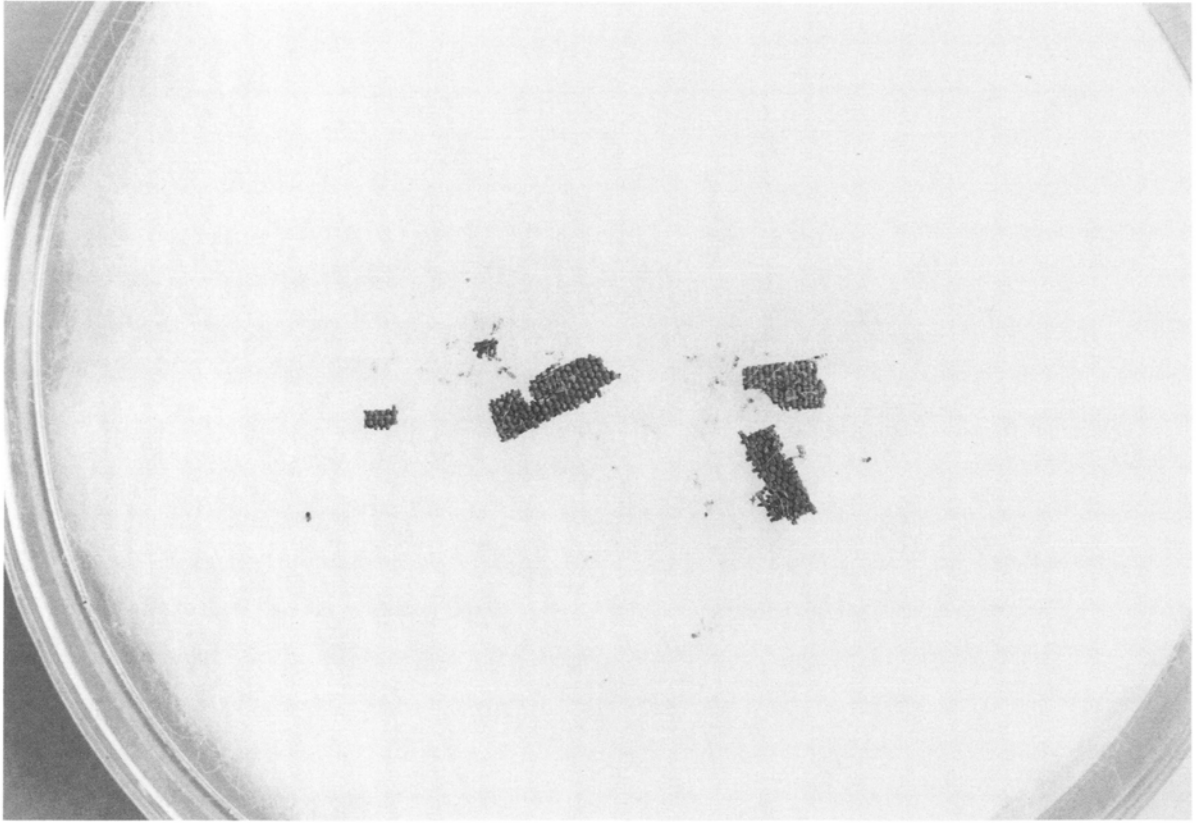
資料 104 C



資料 105



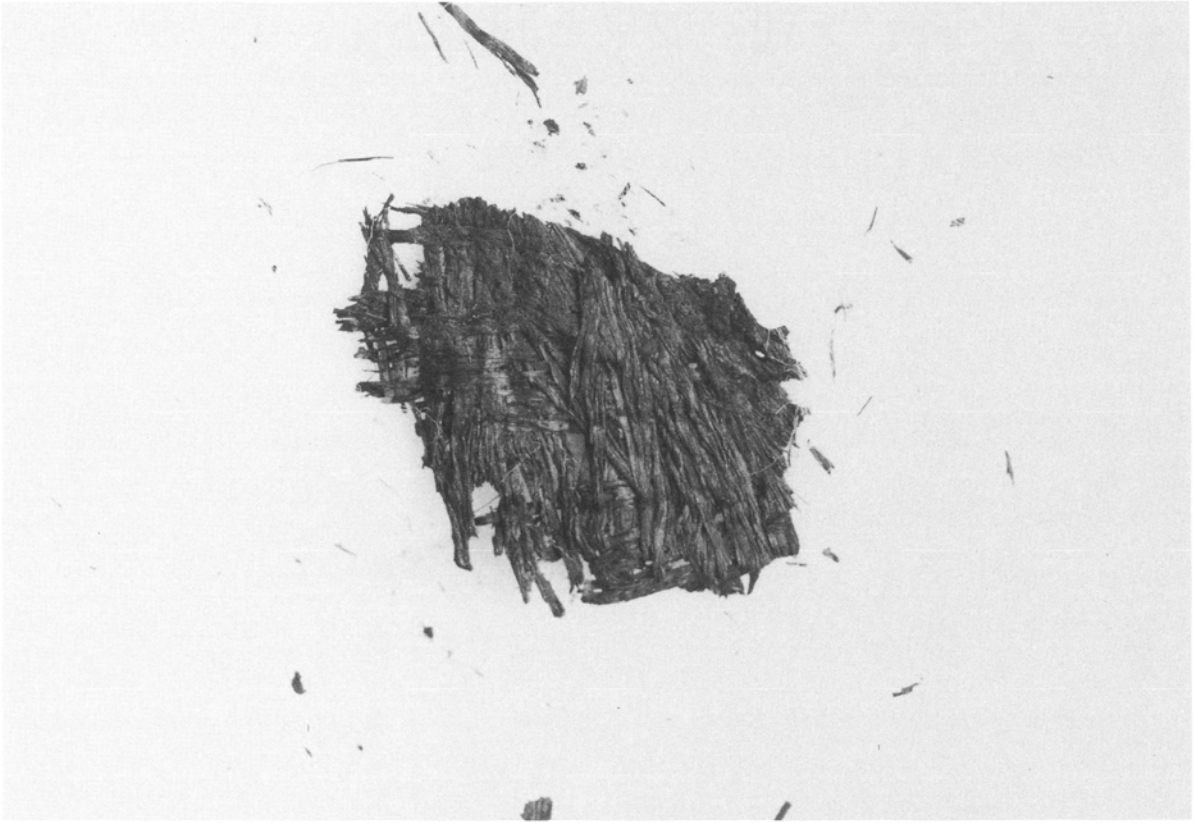
資料 106



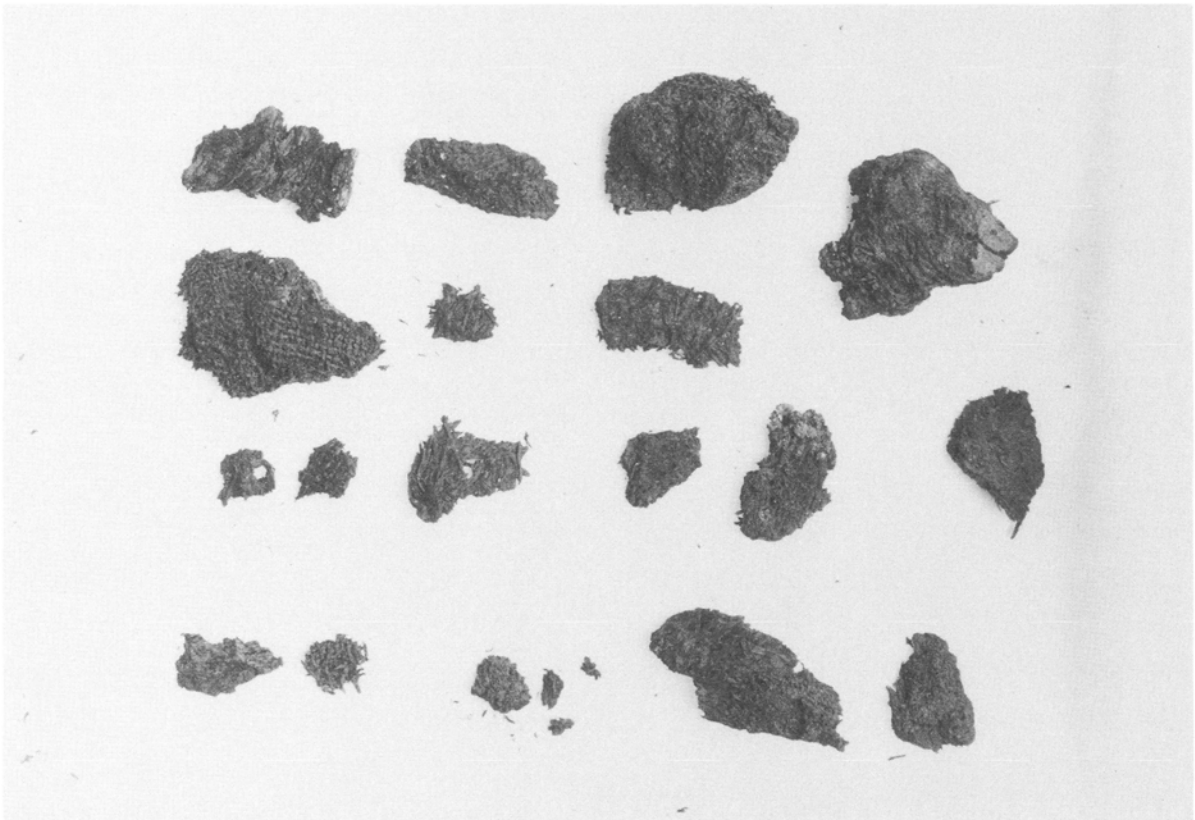
資料 107



資料 108



資料109



資料110

VII 成果と問題点

1. 愛宕山遺跡第4号住居址出土土器の再検討

桜岡正信

愛宕山遺跡第4号住居址(以後愛宕山4住と略)の出土土器は、皇朝十二銭の一つである「萬年通寶」が共伴していることから注目され、県内では早くから実年代を推定する定点として使われてきた資料である。現在は8世紀末～9世紀初頭に位置付ける考え方が一般的であるが、萬年通寶の初鑄年に近い8世紀中頃に位置付けようとする考え方も出されており現在まで確定するには至っていない。一見不動の年代決定の定点であるかのように多くの研究者によって扱われてきた愛宕山4住土器の年代観が、どのような経緯で決められてきたのか簡単に研究史を振り返りながらその問題点を抽出し、年代の妥当性について再検討してみたい。

愛宕山4住の土器を最初に取り上げたのは、1978年の井上唯雄氏による「群馬県下の歴史時代の土器」と題する論考(註1)である。井上氏は愛宕山4住の土器の中から須恵器坏6点、土師器坏1点、須恵器蓋1点、須恵器小型長頸瓶2点を選択的に提示し、「III類の土器」としていくつかの特徴をあげている。須恵器坏については、底部がすべて糸切り無調整であることや、体部が直に開くものと内湾ぎみに開くものがあること、蓋についてはリング状摘みをもつ扁平な小型品であることや、口縁部が稜をもつて短く外傾することを上げている他、長頸瓶についても触れている。また、図示されていないが、土師器甕についても触れ、頸部のしまりが少ない体部から大きく開く口縁部をもつとしている。年代的検討では、住居の年代として床面から出土した萬年通寶の初鑄の天平宝字四年(760)を遡ることはなく、また、皇朝十二銭が使用禁止となる永延元年(987)を下ることはないというものであり、少なくとも土器の年代を萬年通寶からは決めてはいない。土器の年代につ

いては、須恵器坏底部の糸切り無調整の技法が、奈良時代と平安時代を画するメルクマールであり8世紀終末から9世紀初頭に出現すること、及び須恵器坏の器形がヘラ調整主体の奈良時代のものに酷似し、これと時期的に隔たりを経ないとの想定から8世紀終末から9世紀初頭以降で、IV類の土器に想定した9世紀中葉までの時間幅で捉えている。

1981年には中沢 悟氏が清里・陣場遺跡出土土器の検討(註2)の中で「貨幣に伴う須恵器坏・塊の年代」として、井上氏の紹介した資料から須恵器9点を取り上げている。中沢氏は、「貨幣を伴う土器は、その貨幣より新しいということが、通常の場合考え得る」という前提のもとに、萬年通寶の初鑄が760年としながらも、これらの土器に8世紀末～9世紀初頭の年代観を与え、清里・陣場遺跡の第1期類の土器が類似するとしている。

1986年には遺跡調査を担当した松島榮治氏によって遺跡の概要が県史資料編(註3)に紹介された。土器に関しては井上氏の提示した資料とまったく同じものであったが、金属製品や石製品など豊富な遺物が初めて図示された。資料編という性格から土器についての詳細な検討は行われていないが、住居の時期として「萬年通寶鑄造の年760年を上限とし、その下限は土器などの特色により九世紀初頭」との見解を示している。

同年、坂口 一・三浦京子両氏は、中尾遺跡出土土器を主な分析対象として「奈良・平安時代の土器の編年」(註4)を著した。両氏は各段階の年代推定に飛鳥・藤原宮の年代観などを援用し、7世紀から9世紀まで四半世紀刻みの年代を与えている。ここでは「県下において実年代を推定し得る」資料として愛宕山4住の土器が取り上げられ、須恵器坏の形

態と技法が中尾遺跡のVII段階に当たるが、VII段階は9世紀第1四半期であり万年通寶の初鑄年と土器の年代に年代差があることを指摘している。

同年、中沢氏は村主遺跡出土土器の年代推定(註5)で再度愛宕山4住の土器を取り上げた。笠懸窯跡から上野国分寺創建瓦と近接して出土した須恵器坏との器形・底部調整技法などを比較して、笠懸窯跡出土須恵器坏を国分寺創建の8世紀中頃とし、これに後続する愛宕山4住の須恵器坏に8世紀第3四半期～第4四半期の時期を想定している。

1987年に桜岡は上野国分僧寺・中間地域出土土器の検討(註6)に際して愛宕山4住の須恵器坏に近似する土器がV期にあるが、愛宕山4住出土須恵器坏の底部が回転糸切り後無調整であるのに対し、V期の須恵器坏の底部は回転ヘラ切り無調整のものがあることからより古相として捉え、愛宕山4住の土器より万年通寶の初鑄年に近い8世紀後半を想定し、後続するVI期を愛宕山4住の土器に対応させた。

1988年には愛宕山4住の土器の年代観について二つの違った考え方が提示された。一つは中沢・飯田陽一両氏による「奈良時代の須恵器について」(註7)である。両氏は愛宕山4住の須恵器坏の底部がすべて糸切り無調整であるが、計測値とプロポーシオンには古い様相があることや、万年通寶について埋納資料などに比べて製作から廃棄までの時間幅を考慮する必要が少ないことをあげ、埼玉県の前内出窯の坏などとの比較を通して万年通寶の初鑄年により近づけた年代観を提示した。こうした考え方は、埼玉編年に刺激された動きであると共に中沢氏が村主遺跡の分析で示した見解を押し進めた結果であることに注目しておきたい。一方、綿貫邦男と小林敏夫の両氏は、別稿ではあるが同じく愛宕山4住出土の銚帯に注目し出土土器の年代観について独自の視点から見解を提示した。

綿貫氏は鳥羽遺跡出土土器の年代想定(註8)の検討に際して、「松井田町愛宕山遺跡出土遺物」という項目を立て年代観の提示と問題提起をしている。愛宕山4住の出土遺物の中には上限年代の推定可能

な資料として万年通寶の他に石製銚帯と銅製銚帯があり、銚帯の着装が慶雲4年(707)に定められ、これが延暦15年(796)に石製に代わったとされていることから、その年代としては796年を取るべきではないかとしている。また、これまでの愛宕山4住の土器の年代観の想定方法について、「純粋に貨幣の初鑄年代と土器類の対比から導き出されたものとは思われず、むしろある時間幅を持って設定された編年序列から逆に付与」されたとしている。

小林氏は「群馬県出土の腰帯具について」(註9)で愛宕山4住の銚帯について触れ、銅製銚帯と石製銚帯の共伴するタイミングが、銅製銚帯の使用の終わる810年と石製銚帯の使用の始まる796年の間であると、愛宕山4住の年代が8世紀末～9世紀初頭というこれまでの年代観に妥当性があるとしている。

1989年、外山政子氏は下佐野遺跡の報告の「土器について」(註10)で、下佐野遺跡II期の須恵器が坂口・三浦編年で愛宕山4住の須恵器に対応させたVII期(9世紀第1四半期)と器種構成や形態、技法で共通するにもかかわらず、II期の須恵器と愛宕山4住の須恵器を比較すると計測値や技法上に齟齬があり、暗に土器の対比の仕方に無理があることを指摘した。

同年、桜岡は「群馬県内出土の暗文土師器について」(註11)で、愛宕山4住の土師器の甕に注目し、これらの土師器甕の形態が黒笹14号窯式期の灰釉陶器と共伴する土師器甕に近似することから、年代的に中沢氏等が想定する8世紀中頃まで上げ得ないことを指摘した。

1990年、小林氏は長根羽田倉遺跡の報告「出土土器について」(註12)で、愛宕山4住の須恵器坏を第VII期後半段階に対応させ、これを9世紀初頭と位置付けた。

同年、綿貫氏は愛宕山4住出土の銚帯を再度取り上げ、銅製銚帯の使用禁止、石製銚帯の使用禁止など度重なる規定の変更から、銅製銚帯と石製銚帯が同一遺構内で出会うタイミングとして796年、807年、

VII 成果と問題点

810年の3回ある可能性を指摘した。この他にも愛宕山4住の土器に触れた論考(註13)が幾つかあるが、そのほとんどは愛宕山4住の土器を段階設定中の土器に対応させ、年代的根拠として扱っているものである。

これまでの研究史を振り返ってみると幾つかの問題点が指摘できるのではないだろうか。その一つは、愛宕山4住の年代観が、萬年通寶という実年代がわかる資料の共伴によって決められたものではないということである。井上氏は、土器の年代を底部糸切り無調整技法の出現時期と器形が古相であることに求めており、土器研究の進展によっては一定幅の中で年代が動く要素があったということを認識しておかなければならない。それでは、中沢・飯田両氏が主張しているように愛宕山4住の土器の年代観を8世紀中頃まで上げることに妥当性があるのであろうか。結論を先に述べれば、愛宕山4住土器の年代観は当初に想定された8世紀末～9世紀初頭から大きく動くとは考えられない。それは綿貫・小林両氏が銅製銚帯と石製銚帯の同時存在するタイミングから検討した結果が一つの大きな根拠であることは言うまでもないが、他にも土師器甕から想定することが可能である。第55図に示したのは井上氏が提示した愛宕山4住の土器と、これらと同じ段階と報告されている他遺跡の資料である。この対応にも若干の問題があることについては後述するが、それぞれ土師器甕の器形に注目してほしい。ここに提示した土師器甕は「武蔵型」と呼ばれているものであるが、口縁部形態は完成期の「コ」の字状になる前々段階のものである。愛宕山4住から出土している土師器甕は、これらよりも完成期の「コ」の字状に近いものでありより新しい段階として捉えられるのである。完成期の「コ」の字状口縁の土師器甕の年代を直接に求めることはできないが、前述した黒笹14号窯式期の製品と共伴事例(註14)があることと、皇朝十二銭の一つの「富寿神宝」(弘仁九年(818)初鑄)との共伴事例が参考となる。富寿神宝と「コ」の字状口縁の土師器甕との共伴事例は、県内では中畦遺跡1

号住居と上野国分僧寺・尼寺中間地域G区77号住居の2例(第55図)がある。銭貨との共伴から年代を決めることの難しさは愛宕山4住でも明らかであるが、共伴する土器群の中でより古い様相を示す例を求めることで銭貨の持つ年代に近づけていくことができるはずである。こうした前提からこの2例を検討すると、土師器甕の形態からは中畦遺跡1号住居の甕が上野国分僧寺・尼寺中間地域の甕に先行(註15)することは明らかであり、中畦遺跡1号住居に818年により近い年代が想定できることになる。したがってこの中畦遺跡1号住居から出土している土器がこの年代に近い時期に存在していたと考えられ、完成期に近い「コ」の字状口縁の土師器甕の年代も、少なくとも9世紀第1四半期からあまり下らない時期が想定されるのである。つまり、この完成期に近い「コ」の字状口縁の土師器甕の出土している愛宕山4住の土器にもこれに近い年代が想定されるのであり、また、前述のように黒笹14号窯式段階の灰釉陶器坏と共伴する完成期直前段階の「コ」の字状口縁の土師器甕の年代が9世紀第1四半期中で考えられるとすれば、これまで想定されてきた年代観を現状では改める必要はないと考えられるのである。

もう一つ問題点としてあげておきたいことは、年代的定点として多くの土器と対比されてきた愛宕山4住の土器が実は出土土器のほんの一部であったということである。本報告で明らかなように出土土器にはバラエティがあり、井上氏が提示した土器だけを基準にしてきたこれまでの対比は実態を見誤っていた可能性がある。特に、井上氏が愛宕山4住の須恵器坏の底部は糸切り無調整であると報告したことによって、これが土器を対比するときの大きなファクターになっていったような気がしており、実態とは違っている一例と言えるであろう。第56図は、井上氏が最初に提示した愛宕山4住の土器セットと、これらを元にして対比させそれぞれの段階の中に位置付けた資料であるが、これを見ればわかるように須恵器坏を根拠にしたものは必ずしも同じ土器相に

1. 愛宕山遺跡第4号住居址出土土器の再検討

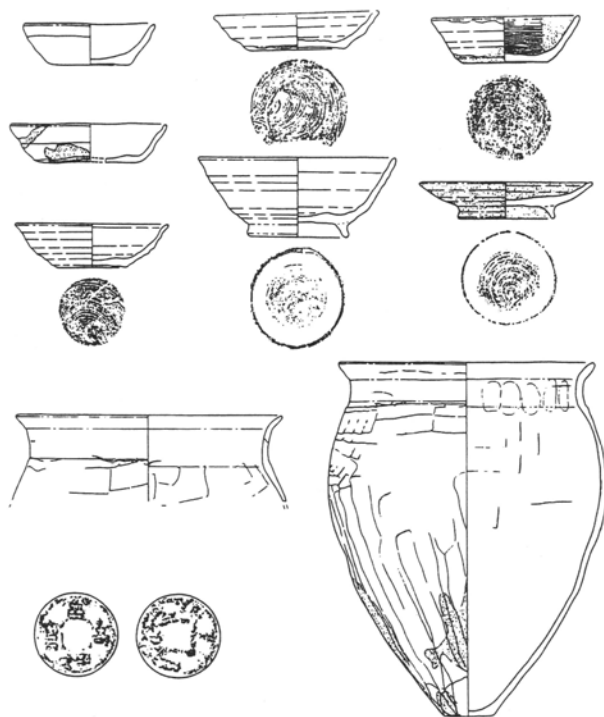
対応していないのではないだろうか。この点については外山氏が違和感を感じ端的に指摘(註10)しているとおりである。

以上述べてきたように、愛宕山4住の土器に与えられた年代観は、けして確定したものではなく今後の研究の進展によってはまだ変更される可能性があるものである。綿貫氏らによって年代的補強がされたとはいえ、すでに確定した年代であるかのようにこれまで筆者も含めて無批判的に年代根拠として使用してきたことは反省されなければならない。年代資料として使用する場合は、様々な角度からの再検討が必要であろうし、常に新しい資料によって根拠を補強していく必要がある。また、今回本報告で愛宕山4住出土土器の全貌が提示されたので、これまで多くの遺跡において愛宕山4住段階として捉えてきた段階が、総体として対比されるのかどうかについて再検討してみなければならぬだろう。

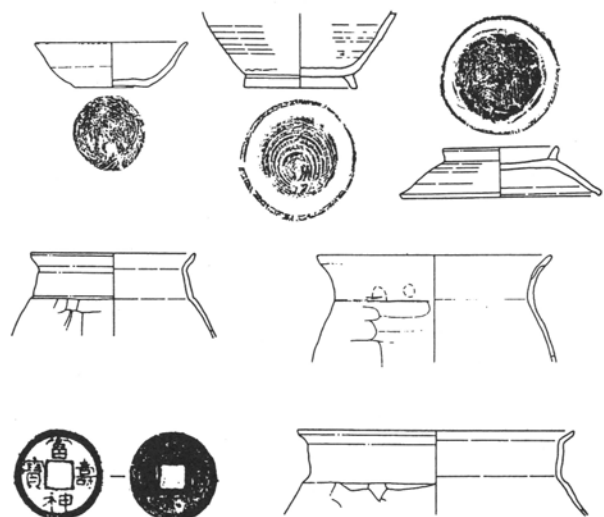
- 註1 井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究8』群馬県史編さん委員会1978
 註2 中沢 悟「貨幣に伴う須恵器坏・碗の年代」『清里・陣馬遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1981
 註3 松島榮治「愛宕山遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』群馬県史編さん委員会1986
 註4 坂口 一・三浦京子「奈良・平安時代の土器編年」『群馬県史研究24』群馬県史編さん委員会1986
 註5 中沢 悟「年代観について」『大原II遺跡 村主遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1986
 註6 桜岡正信「年代観について」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1987
 註7 中沢 悟・飯田陽一「奈良時代の須恵器について」『研究紀要5』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988
 註8 綿貫邦男「松井田町愛宕山遺跡出土遺物」『鳥羽遺跡I・J・K区』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988
 註9 小林敏夫「群馬県出土の腰帯具について」『群馬の考古学』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1988
 註10 外山政子「土器について」『下佐野遺跡 I地区・寺前地区(3)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1989
 註11 桜岡正信「群馬県内出土の暗文土師器について」『群馬県史研究30』群馬県史編さん委員会1989
 註12 小林敏夫「出土土器について」『長根羽田倉遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1990
 註13 岸田治男「成果と問題点」『上栗須寺前遺跡群I』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1993 など
 註14 上野国分僧寺・尼寺中間地域I区217号住居からは黒笹14号窯式段階の灰釉陶器碗が出土しているが、この住居に所属すると考えられる土師器甕に完成期の一段階前の「コ」の字状口縁の壺

がある。灰釉陶器の年代的位置付けにも問題が提起されているので動く要素はあるものの、黒笹14号窯式段階は9世紀第1四半期の中で考えられていることから、この土師器甕も9世紀第1四半期を遡らないものと考えられる。

註15 「武蔵型」土師器甕の口縁部形状の変化は、「く」の字状の上部に屈曲が現れることから「コ」の字状へと変化し、完成期の「コ」の字状を経て器厚を増しながら口縁部下部が開くようになり「く」の字状口縁へと回帰することがわかっている。



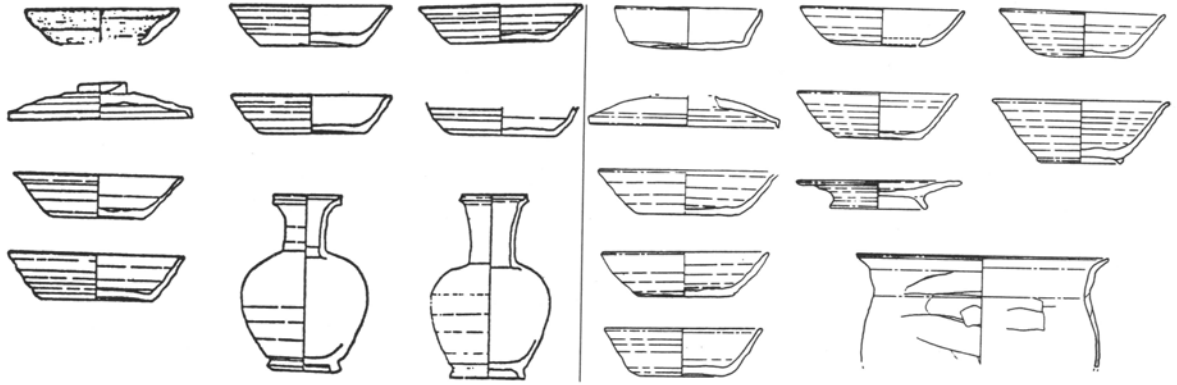
上野国分僧寺・尼寺中間地域G区77住出土遺物



中哇遺跡I住出土遺物

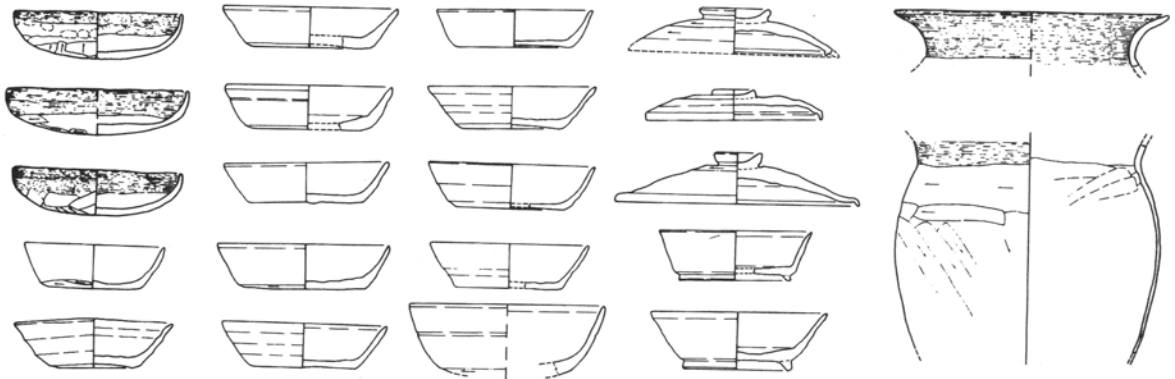
第55図 「富寿神宝」との共伴事例(1/6)

VII 成果と問題点

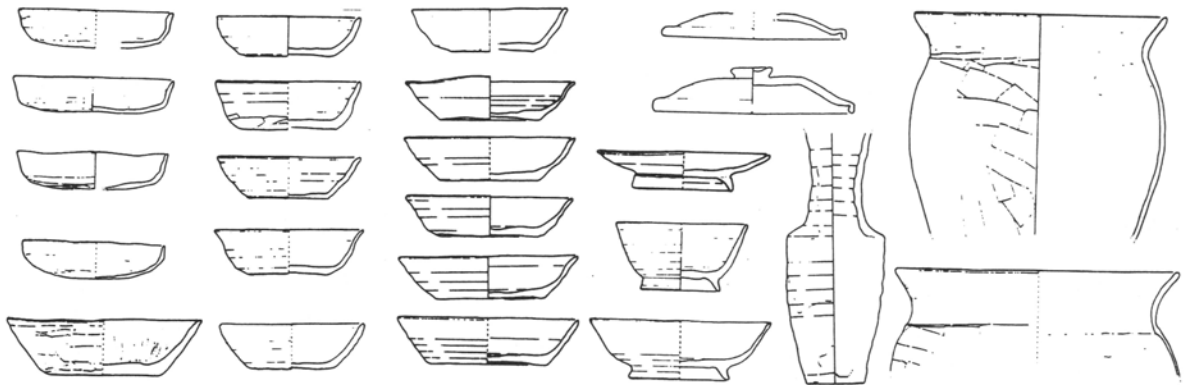


愛宕山遺跡4住出土土器(井上)

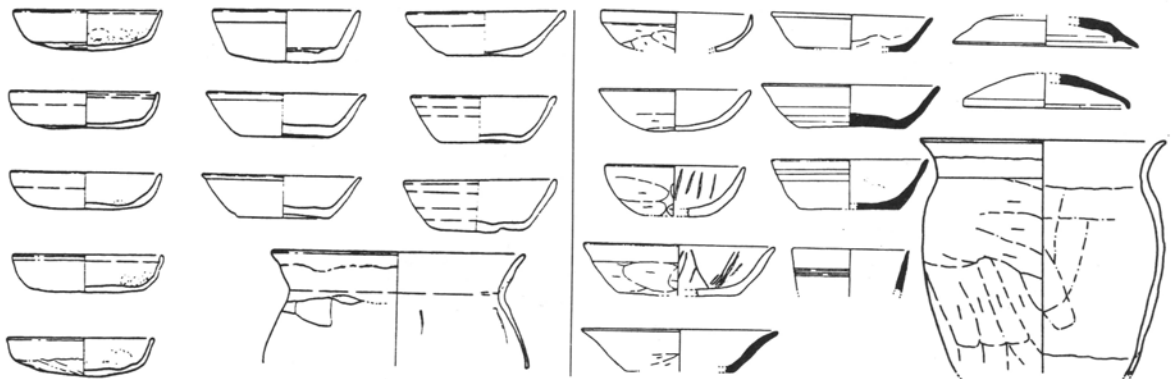
上野国分僧寺・尼寺中間地域VI期土器(桜岡)



村主遺跡第2期類土器(中沢)



鳥羽遺跡第15段階土器(綿貫)



VII段階土器(坂口・三浦)

長根羽田倉遺跡第VII期土器(小林)

第56図 愛宕山遺跡第4号住居址出土土器と相当する土器群(1/6)

2. 愛宕山遺跡の調査成果

松島榮治

(1) 立地から見た集落の特異性

遺跡は、碓氷川とその支流の九十九川との間に挟まれた西高東低の、いわゆる松井田丘陵の先端部南側に位置する通称愛宕山（標高340メートル）の東南斜面に所在する。この地は、北側に松井田丘陵の山並みを背負い、南方は丘陵裾部の僅かな斜面を経て、碓氷川左岸の河岸段丘面上を国道18号（中山道）に沿って、ほぼ東西方向に続く松井田町の家並みを見る。そして、その南側に接しては碓氷川とその流域を指呼のうちに望むことができる。

遺跡地周辺の地形は、丘陵高所から延びる小規模の張出と、段丘面から入り込む小谷によって複雑に構成され、随所に小独立丘的な高まりが見られる。愛宕山はその一つではあるが、特に目立つ山容を形成しているわけではない。しかし、丘陵縁辺部にあるため、碓氷川に面する南側は、かなり急斜面になっているのに対して、東南面は比較的傾斜の緩い斜面を形成するという特質が見られる。遺跡は、その東南斜面の中腹から上部にかけて発見された。国道18号線に沿う松井田町の家並みからの比高は、約30メートルである。

発掘調査の時点で、遺跡の所在する愛宕山の東南斜面の耕地は、上・中・下の3段に大きく区分されていたが、発掘調査は、この道路建設予定地を便宜上、上段から漸次A・B・C区と呼称して行われた。

このうち、住居址の発見された区域は、A区すなわち上段耕地にあたる部分であり、B・C区においては縄文土器片あるいは土師器破片及び須恵器破片等の出土はあったが、住居址等の遺構は確認されなかった。

A区において確認された住居址は6戸で、その時期は

第1号住居址 8世紀（第4号住居址に切られている）

第2号住居址 7世紀後半以降（第3号住居址

に重なる）

第3号住居址 7世紀後半（第6号住居址に切られている）

第4号住居址 9世紀初頭

第5号住居址 8世紀

第6号住居址 8世紀

とみられ、7世紀後半から9世紀初頭のいわゆる律令体制期における比較的高所に営まれた小規模集落の一部と見られる。そして、その性格は、農耕不適な特異な立地条件と、併せて後述するような鋸をはじめとする木工具、紡織具とみられる特殊な遺物を出土させている第4号住居址などからして、技術者集団の存在を思わせるものがある。

(2) 第4号住居址の上屋の構造

第4号住居址床面上には家屋材などが、炭化してはいたが良好な状態で出土した。炭化材は住居の各隅から中央部に向かって、比較的太い材があり、その間にやや細い材が多数入り組んでいた。炭化材中一部太いものは桧が用いられていたが、大部分は広葉樹であると推定された。住居址の西南隅よりの部分からは、屋根に使用されたとみられる萱が炭化した状態で発見された。また、床面の壁に沿って、部分的に萱もしくは篠を簾状に編んだ敷物と推定されるものが、やはり炭化した状態で発見された。さらに、南壁のやや西よりの位置には最大幅36×30cmの川原石が置かれてあり、この付近からは、櫟、樫などの堅い木材と、それに加工を加えた痕跡を残す炭化材が集中して認められた。

建築用材は、群馬県の高埴時代の堅穴住居跡においては、クヌギ節やコナラ節が多用されているとされるが、本住居跡では、クリを主体としてヤマウルシやクヌギ節など複数の落葉広葉樹が使用され、ほかに針葉樹のモミ属とカヤが検出された。

かかる状態から本住居は、上屋に使用された木材

Ⅶ 成果と問題点

等の種類と、それらが上屋のどの部分を構築していたかを考察でき、当時の建物構造を知る上で、その資料的価値は極めて高いものがある。

(3) 第4号住居址出土の一括遺物

第4号住居址から発見された主な遺物には次のような物がある。

・土製品

土師器 長甕破片(1)
須恵器 長頸瓶(2) 坏(6) 蓋(1)

・鉄製品

鋸(1) 鑿(1) 鎌(2) 紡錘車(3)
斧(1) 小刀(1) 刀子(1) 吊手金具(3)

用途・名称不明品(2)

・石製品

紡錘車(1) 石錘(1) 楔形石製品(1)
砥石(2)

・木製品

杯(1)

・腰帯具

巡方(1) 丸鞆(2)

・銅貨

萬年通寶(1)

火災により焼失した第4号住居址の一括遺物は、そこに使用されていた生活用品が驚くほどの良好な状態で遺存されていた。それは、この地域の9世紀初頭の生活文化と社会生活を彷彿させるものがある。

その主なことを記すと

- ① 木工具のうち鋸は、その形態が特殊であると共に他に出土例は無い。また、保存状態も良く、古代史・考古資料として貴重である。
- ② 巡方・丸鞆を着装した帯は、律令制度下においては官人が使用していたとされる。

本住居において、石製帯具を着装した腰帯があったかどうか別として、こうした巡方・丸鞆が出土したことは、巡方・丸鞆の性格、

あるいは律令体制下の地方の状況を示すものとして注目される。

- ③ 「萬年通寶」の出土も注目される。萬年通寶は、西暦760年に鑄造されたものであるが、こうした貨幣の住居跡からの出土例は少なく、貨幣の流通を知る上でも貴重である。また、考古学上では、遺構の年代を考察する資料として重要である。

- ④ 発見された繊維は全て、炭化・断片化していたが、その検討資料は57点に達した。これらは、平織りを主体に稀に魚子織りを含む織物、糸および糸塊、そして真綿などであった。そして、それらの素材の多くは植物繊維であったが、絹の使用も認められた。

- ⑤ 本第4号住居址出土の生活用具は、鎌を除いて農具らしき物は見当たらない。代わって、木工用具、紡織用具などの存在が目立つ。このことは、遺跡の立地および諸遺物などと併せて、本住居の住人は、木工、紡織などの生産活動に盛んに従事していたものと見られる。

以上により、第4号住居址を含む愛宕山遺跡は、本県はもとより我が国の古代史・考古学研究の資料として、また、文化財として極めて重要な遺跡の一つと考えられる。

引用及び参考文献

1. 松島榮治「愛宕山遺跡」『群馬県史』資料編2 群馬県 1986
2. 大江正行「愛宕山遺跡」『群馬県遺跡大辞典』上毛新聞社 1999
3. 松井田町誌編さん委員会『松井田町誌』 1985
4. 松井田町遺跡調査会『五料平(五料I)遺跡 五料野ヶ久保(五料II) 五料稻荷谷戸(高墓)遺跡』 1997
5. 松井田町教育委員会『国衙遺跡群II』 1992
6. 綿貫邦男「群馬県における歴史時代の土器について—年代基準資料の現状—」『群馬考古学手帳』Vol. 3 群馬土器観会 1992
7. 桜岡正信「群馬県内出土の暗文土師器について—在地産を中心として—」『群馬県史研究』30 群馬県史編さん委員会 1989
8. 桜岡正信「7世紀代以降の土師器杯の画期とその要因について—群馬県地域を中心として—」『群馬考古学手帳』Vol. 2 群馬土器観会 1991
9. 大胡町教育委員会『堀越中道遺跡』 1997
10. 鳩山窯跡群遺跡調査会、鳩山町教育委員会『鳩山窯跡群III』工人集落編(1) 1991
11. 中沢 悟「関東地方出土皇朝十二銭の様相—土器年代を探る第一歩として—」『研究紀要7』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
12. 吉川金次『鋸』法政大学出版局 1976
13. 赤沼かおり、福井幸子「日本近世以前における鋸の使用法」『竹中大工道具館研究紀要』第9号 竹中大工道具館 1997
14. 群馬県埋蔵文化財調査事業団『冷水村東遺跡・西国分新田遺跡・金子北十三町遺跡』 1998
15. 群馬県埋蔵文化財調査事業団『白倉下原・天引向原遺跡V』 1997
16. 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『大屋敷遺跡IV』 1996
17. 北武蔵古代文化研究会・千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会『東日本における中期後半の弥生土器』 1986

遺物觀察表

第1号住居址(第8図、PL15)

No.	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土調成 ②色 ③焼	特徴	備考
1	須恵器杯	①南西隅焼土内	残 ほぼ完形 口 13.3 高 3.5	①黒色鉱物。発泡・融解②灰白2.5Y7/1③還元	口径に比して底径が大きい。口縁部はやや内彎気味に斜め上方に立ち上がる。左回転ロクロ成形。底部は糸切り離し後無調整。	
2	須恵器杯	①埋没土	残 1/2弱 口 (10.2) 高 3.7	①細砂少量②灰白5Y7/1③還元	口縁部は傾斜弱く斜め上方に向かって立ち上がる。先端は尖る。右回転ロクロ成形。底部はヘラ切り離し。	
3	土師器杯	①埋没土	残 破片 口 (14.0) 高 <4.6>	①粗砂少量。白色鉱物粒②にぶい黄橙10YR6/4③酸化	口縁部は丸底の底部から彎曲して立ち上がる。口縁部はヨコナデによりごくわずかな稜を成す。底部外面ヘラケズリ。一部に成形時の器面を残す。	
4	須恵器蓋	①埋没土	残 破片 口 (33.6) 高 <6.9>	①粗砂・細砂少量②灰白7.5Y8/1③還元、やや軟質	大径。天井部は深く、丸味を有する。端部にかえりを有する。右回転ロクロ成形と思われる。天井部外面の一部にヘラケズリ。	
5	土師器甕	①埋没土	残 破片 口 (11.0) 高 <5.1>	①細砂(粒径はそろっている)②橙5YR6/6③酸化	小型甕の破片である。器肉は薄い。口縁部は直立気味に立ち上がり、中で屈曲、上半は外反する。胴部外面は横方向のヘラケズリ。	
6	土師器甕	①埋没土	残 破片 口 (21.0) 高 <4.6>	①礫、粗砂。結晶片岩、赤色粘土粒②橙5YR6/6③酸化	長胴甕の口縁部破片である。先端が大きく外反して立ち上がる。胴部外面は縦方向のヘラケズリ。	

第3号住居址(第11~14図、PL15・16)

No.	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土調成 ②色 ③焼	特徴	備考
1	土師器杯	①埋没土	残 破片 口 (12.0) 高 <2.8>	①粗砂。輝石②橙5YR6/6③酸化	口縁部は短く、丸底の底部から内彎して立ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部外面はヘラケズリを施す。	
2	土師器杯	①埋没土	残 破片 口 (11.8) 高 <3.8>	①精選②にぶい橙5YR6/4③酸化	口縁部は、丸底の底部から稜を成して斜め上方に向けて立ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部外面はヘラケズリと考えられるが器面が磨耗している。	
3	土師器杯	①埋没土	残 破片 口 (11.0) 高 <3.3>	①粗砂少量②橙7.5YR6/6③酸化	口縁部は、丸底の底部との間に明瞭な境をなせず斜め上方に立ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部外面は不定方向のヘラケズリを施す。	破片からの復元のため、口径は大きくなる可能性がある。
4	土師器杯	①埋没土	残 1/2 口 (15.8) 高 5.4	①精選。赤色粘土粒少量②にぶい橙7.5YR7/3③酸化	口縁部は斜め上方に向かって直線的に立ち上がる。底部は浅い丸底。内外面ともいねいに器面を調整している。内面には棒状工具による暗文が施されている。口縁部には放射状の文様が3~4mm間隔で施される。みこみ部分から口縁部下半にかけては螺旋暗文が4段配されている。	外面は磨滅。
5	土師器鉢	①床面中央	残 破片 口 (20.0) 高 <4.7>	①細砂②明黄褐10YR6/6③酸化	口縁部はヨコナデ。底部外面は横方向のヘラケズリ。内面はヨコナデ後棒状工具による放射状のミガキを重ねる。	
6	土師器杯	①埋没土	残 破片 口 (15.4) 高 <3.9>	①精選。細砂少量②橙5YR7/6③酸化	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。内外面とも器面は荒れているが、内面には棒状工具による放射状の暗文(ミガキ)が施されている。	
7	須恵器杯	①埋没土	残 1/3 口 (12.0) 高 <4.0>	①細砂大量。白色鉱物粒②褐灰10YR6/1③還元	小径である。口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。底部は丸味を有する。右回転ロクロ成形。底部は手持ちヘラケズリによる調整。	内面に自然釉がかかる。

遺物観察表

No.	器種	出土位置 ① 平面 ② 垂直	法 量 (cm)	① 胎 土 ② 色 調 ③ 焼 成	特 徴	備 考
8	土師器 甕	①西壁寄	残 口縁～ 胴部上半 1/4 口 (30.6) 高 <14.2>	①礫多量。チャート、片岩 ②にぶい橙5YR6/4③酸化	口縁部は胴部から屈曲して立ち上がる。胴部は丸味を有しているか。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は下から上方向にヘラケズリ。内面は横方向のナデを施す。	器形は歪んでいる。
9	土師器 高 杯	①床面中央 ②床直	残 杯部 口 (15.4) 高 <7.7>	①粗砂。軽石、輝石②橙7.5YR7/6③酸化	脚部は欠損する。杯部の口縁部は緩やかに彎曲して立ち上がる。口縁部外面は短い範囲をヨコナデ。以下は観察できない。内面は器面調整後横方向にミガキを充填していると考えられる。	
10	土師器 甕	①床面中央	残 口縁部 先端欠損 口 22.0 高 33.0	①粗砂大の軽石、赤色粘土粒②にぶい黄橙7.5YR7/3③酸化	口縁部は緩やかに外反して立ち上がり先端は面をなす。胴部は中位やや上寄りに最大径を有し丸く張る。底部は丸底。器面は荒れて状態は悪いが、口縁部ヨコナデ後やや間隔を保って棒状工具によるミガキが施される。胴部外面も器面調整後、部位ごとに方向を変えてミガキが重ねられている。底部近くにはヘラケズリが認められる。口縁部内面は横方向のミガキが施されていたか。内面はヘラナデが施され、下位の一部に接合痕を消すためヘラケズリが加えられている。	
11	土師器 甕	①床面中央	残 口縁～ 胴部1/3 口 (23.0) 高 <31.6>	①粗砂大の軽石。細砂は多量②にぶい黄橙10YR6/4③酸化	口縁部は屈曲して斜め上方に立ち上がる。胴部は上位に最大径を有し、以下、底部に向かって徐々に細くなる。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は2・3回に分けて斜縦方向のヘラケズリを施す。内面は横方向のナデ。	
12	土師器 甕	①西壁寄、 竈右側 ②床直	残 底部欠損 口 17.8 高 <26.3>	①粗砂多量②にぶい褐7.5YR6/3③酸化	小型。形状は砲弾形を呈する。口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。胴部は上位に最大径を有し、以下、下位に向かって徐々に細くなる。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は中位から上位が縦方向、下位が斜横方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
13	土師器 甕	①埋没土	残 口縁～ 胴部破片 口 (21.2) 高 <17.3>	①粗砂大量。チャート、軽石②橙5YR6/8③酸化	口縁部は胴部からくの字状に屈曲、短く直線的に立ち上がる。胴部は丸味を有し、最大径は中位にあったか。胴部外面は下から上に縦方向のナデを施す。内面は横方向にヘラナデを施す。	
14	土師器 甕	①西壁寄、 竈左側 ②床直	残 ほぼ完形 口 22.6 底 6.1 高 37.8	①粗砂多量。結晶片岩②にぶい橙7.5YR6/4③酸化	口縁部は外反して立ち上がる。胴部は長胴で、中位に最大径を有する。底部は狭小な平底を呈するが水平をなしていない。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は3回に分けて縦方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデを施している。	
15	土師器 甕	①西壁寄、 竈左側 ②床直	残 口縁～ 胴部1/2 口 21.6 高 <36.4>	①礫多量。結晶片岩②にぶい黄橙10YR6/4③酸化	口縁部は大きく外反して立ち上がり、先端は水平方向を向く。胴部は長胴で、上位から中位にいたるまで直径がほとんど変化しない。中位には粗雑なナデが重ねられる。底部は欠損するが狭小なものと考えられる。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は縦方向の長いタッチのヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
16	石製品 紡錘車	①床面中央	残 完形 上面径 2.4×2.1 下面径 3.5×3.3 厚 2.4		本文参照。材質は砥沢石。重量40g。	
17	鉄製品 刀子	①竈内	残 茎部欠損 長 <9.6>		本文参照。現重量7g。	
18	土師器 甕	①西壁寄 ②床直	残 胴部1/3 高 <17.3>	①礫、粗砂多量。チャート②橙7.5YR6/6③酸化	丸味を呈する胴部破片であるが、口縁部、底部ともに欠損する。外面は部位により方向を変えてヘラケズリを施す。内面は下位がいていねいなナデ、中位、上位は横方向のナデを施す。	
19	石製品 砥 石	①床面中央	残 完形 長 11.9 幅 5.8 厚 5.0		本文参照。材質は角閃石安山岩。重量233g。	
20	須恵器 蓋	①埋没土	残 鈕部1/3 高 <1.5>	①黒色鈹物粒。融解・発泡②灰5Y6/1③還元	鈕部は幅広であるが扁平である。径は7.4cmに復元できる。右回転クロコ成形で、天井部の成形後鈕部を貼付しヨコナデを施す。	20～27は混入品か。

No	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
21	須恵器 蓋	①埋没土	残 破片 口 (18.0) 高 <2.1>	①灰色鉾物粒 ②黄灰2.5Y6 /1③還元	口縁部先端はくの字状に屈折する。右回転ロクロ成形。天井部外面は回転を伴うヘラケズリ。口縁部先端はヨコナデ。	
22	須恵器 蓋	①埋没土	残 破片 口 (19.6) 高 <2.8>	①黒色鉾物粒 ②灰白2.5Y8 /2③還元	鈕部は欠損する。口縁部先端はくの字状に屈折する。右回転ロクロ成形。天井部は鈕部寄りに回転を伴うヘラケズリを施す。口縁部先端はヨコナデ。	
23	須恵器 蓋	①埋没土	残 1/4 口 (14.7) 高 <2.5>	①黒色鉾物粒 ②灰5Y6/1③ 還元	小径ながら天井部はやや高さを有する。先端は短く、くの字状に屈折する。右回転ロクロ成形。天井部外面、鈕部寄りには回転を伴うヘラケズリを施す。	
24	須恵器 高台付 杯	①西壁寄	残 高台部 1/4 台 (12.7) 高 <1.5>	①黒色鉾物粒 少量②灰白5 Y7/1③還元	高台部は低く、断面方形を呈する。左回転ロクロ成形。底部は回転を伴うヘラケズリ調整で、高台部取り付け後周縁にヨコナデを加えている。	
25	土師器 高台付 椀?	①床面中央	残 1/4 口 (19.0) 高 <7.3>	①粗砂②にぶ い黄橙10YR6 /3③酸化	口径は大きく、深みを有する。口縁部の先端は弱く尖る。外面の先端はヨコナデ。以下は横、縦方向のヘラケズリ。内面は棒状工具によるミガキが充填されている。	内面、黒色 処理。外面 の一部にも 炭素吸着。
26	須恵器 杯	①埋没土	残 1/4 口 (13.4) 高 3.7	①粗砂少量。 輝石②にぶ い黄橙10YR7/4 ③還元	口縁部は短く、彎曲気味に斜め上方に向けて立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。内面は、全面に棒状工具によるミガキを施す。	内面、黒色 処理。
27	須恵器 椀	①埋没土	残 破片 口 (16.0) 高 <5.4>	①精選②黄灰 2.5Y6/1③還 元	口縁部は深みを有する。高台部を付していたか。右回転ロクロ成形。口縁部先端には粗雑なヨコナデを施す。	

第4号住居址 (第19~28図、P L17~23)

No	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
1	須恵器 杯	①床面中央 ②床直	残 完形 口 13.3 底 8.6 高 3.1	①精選。比重 重い②灰5Y6 /1③還元、堅 緻	口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。器内は他に比して全体的に厚い。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	内面全面、 外面の口縁 部下端は磨 耗が著しい。
2	須恵器 杯	①埋没土	残 完形 口 12.8 底 7.2 高 3.0	①精選②灰白 5Y7/1(外)、 黄灰2.5Y5/1 (内)③還元	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	器面、磨耗。 胎土は1に 類似。
3	須恵器 杯	①床面中央 ②床直	残 完形 口 13.5 底 8.4 高 3.3	①粗砂。細砂 少量②灰白5 Y8/1(外)、灰 5Y4/1(内)③ 還元	口縁部は外傾著しく立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。口縁部外面にはロクロ目を明瞭に残す。	須恵器(1) ・木製容器 (91)と重な って出土。
4	須恵器 杯	①南壁寄 ②床直	残 ほぼ完形 口 13.5 底 7.4 高 3.4	①黒色粘土粒 少量②灰白2. 5Y8/2③還元	口径に比して底径が小さいため、口縁部は外傾著しく立ち上がる。先端はさらに外反する。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。口縁部外面にロクロ目を明瞭に残す。	内面、磨耗。 内外面とも 一部に炭素 吸着。
5	須恵器 杯	①南壁寄	残 2/3 口 (13.8) 底 7.2 高 3.4	①粗砂②灰5 Y5/1③還元	口縁部は外傾して立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。底部外面は成形後、周縁に押圧痕やナデの痕跡が重なり、不良である。	内面、磨耗。
6	須恵器 杯	①埋没土	残 2/3 口 12.7 底 7.9 高 3.1	①粗砂少量② 灰白2.5Y8/1 ③還元	口縁部は外傾して立ち上がり、先端部はさらに外方に延びる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	外面は磨減。 内面は磨耗。
7	須恵器 杯	①埋没土	残 1/2 口 (13.0) 底 7.8 高 2.9	①粗砂少量② 灰白2.5Y8/1 ③還元	口径に比して器高が低い。口縁部は外傾著しく立ち上がり、先端はさらにつままれたように外方に延びる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	外面、磨減。 内面、磨耗。

遺物観察表

No	器種	出土位置 ① 平面 ② 垂直	法 量 (cm)	① 胎 土 ② 色 調 ③ 焼 成	特 徴	備 考
8	須恵器 杯	①埋没土	残 1/2 口 (12.4) 底 7.4 高 3.3	①粗砂少量② 灰白2.5Y8/1 ③還元	口縁部は外傾して立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	内面、磨耗。
9	須恵器 杯	①埋没土	残 完形 口 13.2 底 7.8 高 3.3	①粗砂少量② 灰5Y6/1③還 元	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	器面は磨耗著しい。底部外面に炭素吸着。
10	須恵器 杯	①南壁寄 ②床直	残 完形 口 13.0 底 8.0 高 3.2	①白色鉾物粒、 黒色鉾物粒少 量②灰5Y6/1 (外)、灰白2.5 Y7/1(内)③ 還元	口縁部は外傾著しく立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	内面は磨耗している。
11	須恵器 杯	①埋没土	残 1/2 口 (13.5) 底 8.5 高 3.7	①黒色鉾物粒。 発泡・融解② 灰5Y6/1③還 元	口縁部は外傾して立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	外面、磨滅。 内面、磨耗。
12	須恵器 杯	①埋没土	残 1/2 口 (12.0) 底 7.1 高 3.4	①粗砂少量② 灰N5/③還元	口縁部は外傾して立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。糸切りは粗雑で複数回くりかえしている。口縁部外面にロクロ目を残す。	
13	須恵器 杯	①南壁寄	残 完形 口 13.1 底 8.1 高 3.0	①白色鉾物粒 ②灰白5Y8/1 ③還元	口縁部は外傾著しく立ち上がり、先端はさらに外方に延びる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。口縁部外面にはロクロ目を良く残す。底部外面に「立寺」の墨書有り。	内外面とも炭素吸着。 内面は磨耗する。
14	須恵器 杯	①埋没土	残 完形 口 12.6 底 8.0 高 4.0	①細砂多量② 黄灰2.5Y6/1 ③還元	口縁部は彎曲気味に斜め上方に向けて立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	
15	須恵器 杯	①南壁際 ②床直	残 1/2 口 (12.8) 底 8.2 高 3.4	①粗砂少量② 灰白5Y7/1③ 還元	口縁部は外傾して立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。口縁部外面にはロクロ目を明瞭に残す。	内外面とも磨滅。
16	須恵器 杯	①埋没土	残 完形 口 12.1 底 6.2 高 3.3	①白色鉾物粒 多量(細砂大)。 黒色鉾物粒少 量(細砂大)② 灰5Y6/1③還 元	口径に比して底径が小さく、口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。口縁部先端にはヨコナデを加える。	底部外面に炭素吸着。
17	須恵器 杯	①埋没土	残 1/2 口 (13.1) 底 8.0 高 3.3	①粗砂②暗灰 N3/③還元	口縁部は外傾して立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	器面は炭素が吸着するとともに磨耗している。
18	須恵器 杯	①埋没土	残 1/2 口 12.8 底 3.2 高 9.2	①黒色鉾物粒 ②灰白5Y7/2 ③還元	口径に比して大きな底径を有する。口縁部は弱く外傾して立ち上がる。先端は尖る。右回転ロクロ成形。底部は回転を伴うヘラケズリ。	一部に自然釉付着。
19	須恵器 杯?	①埋没土	残 口縁部 1/4 口 (12.0) 高 <2.5>	①白色鉾物粒 ②褐灰10YR4 /1③還元	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がり、先端はさらに外反する。右回転ロクロ成形。	
20	須恵器 杯	①埋没土	残 底部2/3 底 7.2 高 <2.2>	①粗砂少量② 灰白5Y7/1③ 還元	右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	内面、磨耗。
21	須恵器 蓋	①埋没土	残 1/3 口 (16.0) 高 <3.3>	①粗砂大のチ ャート②灰白 5Y7/1③還元	天井部はやや膨らみを有する。中央に直径4.6cmのリング状の鈕を有する。右回転ロクロ成形。天井部中央を回転糸切り離し後鈕部を取り付ける。天井部の鈕部寄り外面には回転を伴うヘラケズリが施される。	

No.	器種	出土位置 ① 平面直 ② 垂直	法量 (cm)	① 胎土調成 ② 色 ③ 焼	特 徴	備 考
22	須恵器 蓋	①埋没土	残 ほぼ完形 口 17.1 高 3.6	①黒色鈹物粒 少量②灰白5 Y8/1③還元	天井部はやや膨らみを有する。中央に直径3.8cmの鈕が付く。先端はくの字に屈曲する。右回転ロクロ成形。天井部中央を回転糸切り離した後鈕部を取り付ける。天井部外面の中央寄りには回転を伴うヘラケズリが施される。	
23	須恵器 蓋(硯)	①北壁際	残 ほぼ完形 口 15.1 高 2.7	①粗砂少量② 灰白5Y7/1③ 還元	天井部は膨らみがなく扁平である。中央に直径3.9cmのリング状の鈕が付く。先端はくの字状に折れる。右回転ロクロ成形。天井部中央を回転糸切り離した後鈕部を取り付けるが糸切り痕が一部残る。天井部外面、鈕部寄りには回転を伴うヘラケズリが施される。 硯として二次利用されており、内面が磨面として利用されており、中央部分を中心に磨耗が顕著である。墨は内面全面に付着しており、一部、外面にまで及んでいる。口縁部の欠失は旧時のものである。	内外面の一部に炭素吸着。
24	須恵器 高台付 椀	①埋没土	残 ほぼ完形 口 16.1 台 6.2 高 8.5	①黒色鈹物粒 ②灰5Y6/1③ 還元	口縁部は彎曲しながら斜め上方に向かって立ち上がる。高台部は比較的高い。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離した後高台部を取り付け、周縁にヨコナデを施す。	内面みこみ部分は磨耗。高台部外面に炭素吸着。
25	須恵器 高台付 椀	①埋没土	残 完形 口 12.6 台 8.0 高 4.4	①黒色鈹物粒 ②黄灰2.5Y6 /1③還元	小径。口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がる。先端は内面がそがれて尖る。高台部はハの字状を呈する。右回転ロクロ成形。底部を回転糸切り離した後高台部を取り付け。周縁にヨコナデを加える。	
26	須恵器 高台付 椀	①埋没土	残 口縁部 1/3 口 (17.2) 高 <4.2>	①黒色鈹物粒 ②灰5Y6/1③ 還元	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。右回転ロクロ成形。外面にはロクロ目を明瞭に残す。	
27	須恵器 高台付 椀	①埋没土	残 高台部 破片 台 (9.2) 高 <2.3>	①黒色鈹物粒 少量②灰5Y5 /1③還元	高台部は断面ハの字状を呈する。右回転ロクロ成形。底部を回転糸切り離した後高台部を取り付け。周縁にヨコナデを施す。	
28	須恵器 高台付 椀	①埋没土	残 1/2強 口 12.6 台 7.7 高 4.7	①黒色鈹物粒 少量②灰白2. 5Y8/1③還元	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。高台部は断面ハの字状を呈す。右回転ロクロ成形。底部を回転糸切り離した後高台部を取り付け、周縁にヨコナデを加えている。	内面、磨耗。口縁部外面に墨書有り。
29	須恵器 長頸瓶	①西壁寄	残 ほぼ完形 口 5.6 台 5.9 高 14.0	①粗砂少量。 白色鈹物粒② 黄灰2.5Y4/1 ③還元	胴部最大径は30とほぼ同数値であるが器高が低く、口縁部基部が細いため、胴部が丸く張って見える。口縁部は直立気味に立ち上がり、上半にいたり大きく外反する口縁部の外面に面をなし、内面は受け口状を呈する。高台部は低く、いわゆる角高台である。右回転ロクロ成形。底面は回転糸切り離した後ナデを施し高台部を取り付ける。胴部外面の下位に回転を伴うヘラケズリを施す。	
30	須恵器 長頸瓶	①西壁寄	残 ほぼ完形 口 5.5 台 6.2 高 15.0	①粗砂少量② 灰5Y6/1③還 元	胴部は肩部に最大径を有し丸く張る。頸部は長く緩やかに外反して立ち上がる。口縁部は先端が薄く尖り、外面に精美な面をなし、内面は受け口状を呈す。高台部は低いハの字状に延びる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離した後高台部を取り付け。外面、胴部下半には回転を伴うヘラケズリ。	内外面に黒色の付着物。墨か。胴部下半にヘラ描き。
31	須恵器 甕	①埋没土	残 破片 口 (29.6) 高 <7.7>	①細砂②灰5 Y5/1(外)、灰 白5Y8/2(内) ③還元	口縁部は短く胴部から緩やかに外反して立ち上がる。先端は外側がそがれるようにして断面形が尖る。外面はロクロ使用によるナデ調整を施す。	炭素吸着。
32	須恵器 甕	①埋没土	残 破片 底 (12.0) 高 <6.9>	①黒色鈹物粒。 粗砂②灰白2.5 Y8/1③還元	器肉が厚く、大型品となるか。平底を呈する。ロクロ使用による成・整形が施される。	
33	須恵器 甕?	①埋没土	残 破片 高 <8.4>	①黒色鈹物粒、 白色鈹物粒② 灰5Y5/1③還 元	胴部下半の破片か。上位に向かって徐々に径を増している。ロクロ成形。外面の一部にケズリが施されている。	
34	須恵器 甕	①埋没土	残 破片 高 <4.2>	①粗砂少量、 比較的夾雑物 少ない②灰5 Y6/1③還元	平底を呈する。器肉が厚い。内面にはロクロ使用によるナデと思われる調整が施される。外面にはナデの他に叩目が残る。	

遺物観察表

No	器種	出土位置 ① 平面 ② 垂直	法量 (cm)	① 胎土 ② 色調 ③ 焼成	特 徴	備 考
35	須恵器 甕	①埋没土	残 破片 高 (9.0)	①石英。白色 鉱物粒②黄灰 2.5Y6/1③還元	大甕の口縁部破片である。大きく外反して立ち上がる。先端は断面山形を呈し、尖る。外面に8本1単位の櫛状工具による波状文が3段配されている。	
36	須恵器 広口 短頸壺	①埋没土	残 底～胴部 1/3 底 高 (16.3) 高 (26.3)	①白色鉱物粒 ②灰5Y4/1③ 還元	胴部上位と中位から高台部とは直接の接点がなく、図上で器形を復元した。胴部は上位、いわゆる肩部に最大径を有し、以下、底部に向かって徐々に径を細める。断面四角形の高台部は低く、ハの字状に胴部に取り付く。器面はロクロ使用により成・整形がなされる。胴部下端に一部ヘラケズリが認められる。	内外面に自然釉付着。
37	土師器 甕	①埋没土	残 口縁部 1/4 口 (22.0) 高 (8.6)	①粗砂、赤色 粘土粒②明赤 褐5YR5/6③ 酸化	口縁部はラッパ状に外反するが短い。口縁部に最大径を有すると思われる。口縁部ヨコナデ。胴部は外面ヘラケズリ、内面は横方向のナデ。	
38	土師器 杯	①埋没土	残 口縁部 1/4 口 (12.5) 高 (3.4)	①粗砂。チャ ート②にぶい 橙7.5YR7/4 ③酸化	器内は厚い。口縁部は直線的に斜め上方に向かって立ち上がる。底部は平底と考えられる。口縁部の先端はヨコナデ。底部寄りにヘラケズリが施され、中位にはナデの面を残す。	
39	土師器 杯	①埋没土	残 破片 口 (12.3) 高 (2.9)	①粗砂②橙7. 5YR6/6③酸 化	口縁部は斜め上方に立ち上がると思われる。口縁部の先端はヨコナデ。以下にはヘラケズリが施されている。	
40	土師器 甕	①埋没土	残 破片 口 (10.6) 高 (4.4)	①精選。細砂 少量②明赤褐 5YR5/6③酸 化	小型である。口縁部は先端が強く外反する。口縁部はヨコナデ。胴部外面は横方向のヘラケズリ。	
41	土製品	①埋没土	残 完形	①細砂②灰黄 褐10YR4/2③ 酸化	土製円板。器内の薄い甕の胴部破片を調整して転用、縦3.6cm、横3.1cmの長円形に形作っている。	
42	土師器 甕	①埋没土	残 破片 口 22.0 高 (21.6)	①細砂。赤色 粘土粒②橙5 YR6/8③酸 化	口縁部は外反して立ち上がる。先端は斜め上方を向く。胴部は上位に最大径を有し、口径を上回って張る。胴部外面はヘラケズリ。上位は横方向を向く。内面にはナデを施すが、器面を整えた指頭による圧痕を多く残す。	
43	土師器 甕	①埋没土	残 口縁～ 胴部1/3 口 (20.2) 高 (21.8)	①細砂②橙2. 5YR6/6③酸 化	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。胴部の張りは弱い。口径をしのいでいる。胴部外面は上位が斜横方向のヘラケズリ。中位以下は斜縦方向のヘラケズリである。内面は横方向のナデ、指頭圧痕が認められる。	
44	土師器 甕	①埋没土	残 破片 口 (22.2) 高 (20.4)	①粗砂少量。 細砂多量②橙 5YR6/6③酸 化	口縁部は緩やかに外反して立ち上がり、中位で転換、上半は外方へ大きく延びる。胴部はやや丸味をもって張る。胴部外面はヘラケズリ。最上位は斜横方向を向く。内面は横方向のナデ。一部に指頭圧痕を残す。	
45	土師器 甕	①埋没土	残 口縁～ 胴部1/3 口 (21.4) 高 (17.2)	①粗砂多量② 橙5YR6/6③ 酸化	口縁部は直立気味に立ち上がり上半にいたって斜め上方に外反する。胴部は弱く張る。口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面は斜横あるいは斜方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
46	土師器 甕	①埋没土	残 破片 口 (21.1) 高 (9.1)	①細砂②橙2. 5YR6/6③酸 化	口縁部は外傾弱く立ち上がるが先端にいたり受け口状に外方へ延びる。口縁部はヨコナデ。胴部外面は横方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
47	土師器 甕	①埋没土	残 口縁～ 胴部上位 1/4 口 (22.0) 高 (9.4)	①細砂②褐灰 10YR4/1(外)、 にぶい橙5YR 6/4(内)③酸 化	口縁部は外傾弱く立ち上がり、中位で屈曲、上半は外反著しい。口縁部はヨコナデ。胴部上位の外面はほぼ横方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
48	土師器 甕	①埋没土	残 破片 口 (20.2) 高 (6.2)	①細砂②明赤 褐5YR5/6③ 酸化	口縁部は外傾弱く立ち上がる。口縁部はヨコナデ。胴部外面は横方向のヘラケズリ。	
49	土師器 甕	①埋没土	残 破片 口 (20.2) 高 (4.9)	①細砂②にぶ い橙5YR6/4 ③酸化	口縁部は屈曲気味に斜め上方に向かって立ち上がる。口縁部ヨコナデ。胴部外面は横方向のヘラケズリ。	
50	土師器 甕	①埋没土	残 破片 口 (25.0) 高 (9.7)	①細砂②橙5 YR6/6③酸 化	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。口縁部はヨコナデ。胴部外面は横方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	

No	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
51	土師器 甕	①埋没土	残 破片 口 (17.8) 高 <7.0>	①細砂②にぶ い赤褐5YR5/ 4③酸化	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。口縁部はヨコナデ。胴部外面は横方向のヘラケズリ。	
52	土師器 甕	①埋没土	残 破片 口 (19.2) 高 <5.2>	①細砂②にぶ い赤褐5YR5/ 4③酸化	口縁部は中位に器形の変換点を有し、上半は弱い受け口状を呈する。口縁部ヨコナデ。	
53	土師器 甕	①埋没土	残 破片 口 (18.2) 高 <5.4>	①精選、雲母 ②灰褐7.5YR 4/2③酸化	口縁部は短く、屈曲して斜め上方に直線的に延びる。先端は丸い。口縁部ヨコナデ。胴部外面は斜方向のヘラケズリ。	
54	鉄製品 紡錘車	①北壁寄	残 一部欠損 軸長 <21.4> 円盤径 5.4×5.2		本文参照。軸部の両先端を欠損する。軸部の直径は5mm。現重量48g。	布附着。天地不明。
55	鉄製品 紡錘車	①埋没土	残 軸部1/2 軸長 <6.8> 円盤径 5.1		本文参照。軸部の両先端を欠損する。軸部の直径は5mm。現重量38g。	天地不明。
56	鉄製品 紡錘車	①北壁寄	残 軸部1/2 軸長 <12.1> 円盤径 5.3		本文参照。軸部の両先端を欠損する。残存する軸部は変形している。軸部の直径は5mm。現重量31g。	天地不明。
57	鉄製品 鉄 斧	①南壁寄	残 完形 長 9.2 刃幅 4.0		本文参照。現重量123g。	
58	鉄製品 鋸	①西壁際	残 完形 長 40.8		本文参照。柄木は一部を除き欠落している。材の種類はカツラか。歯をはじめ処々に歪みが生じている。現重量293g。	
59	鉄製品 鎌	①西壁際	残 ほぼ完形 長 22.5 幅 4.2		本文参照。現重量123g。	60と重なって出土。
60	鉄製品 鎌	①西壁際	残 1/2 長 <13.0> 幅 3.1		本文参照。装着部は欠損する。現重量47g。	
61	鉄製品 小 刀	①床面中央 ②床直	残 ほぼ完形 長 36.8 刃長 22.6 茎長 14.2		本文参照。柄木・鞘木の一部が残存する。柄木はオニグルミか。鞘木はヒノキである。現重量232g。	
62	鉄製品 鑿	①北壁寄	残 ほぼ完形 長 <16.7>		本文参照。茎尻は欠損。柄木は一部が残存する。樹種は不明。現重量52g。	
63	鉄製品 鑿状 工具	①埋没土	残 ほぼ完形 長 <11.7>		本文参照。茎尻は欠損。現重量22g。	
64	鉄製品 錐状 工具	①埋没土	残 先端部破 片 長 <8.0>		本文参照。先端の断面は半円形。幅0.4cm。基部の幅は0.5cmである。64・65の現重量14g。	
65	鉄製品 錐状 工具	①埋没土	残 先端部破 片 長 <10.8>		本文参照。先端の断面は半円形で幅0.6cm。基部は円形で直径0.6cmである。	
66	鉄製品 錐状 工具	①埋没土	残 先端部破 片 長 <9.1>		本文参照。中位の断面は円形で直径0.5cm。基部の断面形は四角形である。現重量5g。	
67	鉄製品 鈍	①北壁寄	残 完形 長 10.2 茎長 5.3		本文参照。現重量16g。	
68	鉄製品 刀 子	①西壁寄	残 破片 長 <11.1>		本文参照。刀身と茎部の2片に分離。現重量9g。	
69	鉄製品 工 具	①埋没土	残 破片 長 <6.8>		本文参照。先端は尖る。茎部は欠損。現重量5g。	
70	鉄製品 不 明	①埋没土	残 破片 長 <5.2>		棒状品で弧状をなす。残存長は5.2cm。中位での断面形は円形で、直径0.45cmを測るが、端部は先細りとなり、扁平となる。現重量6g。	天地不明。
71	鉄製品 不 明	①埋没土	残 破片 長 <3.5>		棒状品。両端とも欠損する。残存長3.5cm、断面は四角形で一辺0.3cmを測る。現重量3g。	天地不明。

遺物観察表

No.	器種	出土位置 ① 平面 ② 垂直	法 量 (cm)	① 胎 土 ② 色 調 ③ 焼 成	特 徴	備 考
72	鉄製品 不明	①埋没土	残 破片 長 <2.9>		残存長2.9cmを測る棒状品。両端は欠損する。断面形は円形で、直径0.4cmを測る。現重量0.5g。	天地不明。
73	鉄製品 吊手 金具	①西壁寄 ②床直か	残 完形 長 4.5		本文参照。現重量46g。	
74	鉄製品 吊手 金具	①南壁寄	残 完形 長 4.0		本文参照。現重量47g。	
75	鉄製品 吊手 金具	①西壁寄	残 完形 長 4.7		本文参照。現重量52g。	
76	銅製品 腰帯具 巡 方	①西壁寄 ②床直か	残 完形 縦 3.3 横 3.6 高 0.7		本文参照。現重量18g。	77と重なって出土。
77	石製品 腰帯具 丸 柄	①西壁寄 ②床直か	残 完形 縦 2.4 横 3.4 厚 0.6		本文参照。材質は蛇紋岩。重量7g。	火熱を受け変色。
78	石製品 腰帯具 丸 柄	①西壁寄	残 完形 縦 2.3 横 3.4 厚 0.5		本文参照。変質しているが蛇紋岩と思われる。重量4g。	
79	石製品 楔 形	①西壁寄	残 完形 長 6.2 頭部幅4.6		本文参照。器面平滑。材質は砥沢石。重量104g。	火熱を受け変色。
80	石製品 石 錘	①西壁寄	残 完形 長 4.7 幅 3.6 厚 2.8		本文参照。上位に小孔を穿つ。材質は粗粒輝石安山岩。重量50g。	
81	石製品 紡錘車	①床面中央	残 完形 厚 1.9		本文参照。法量は、上面径4.5cm、下面径5.7cmを測る。器面に木質付着。材質は不明。重量71g。	火熱を受け変色。
82	石製品 砥 石	①東壁寄	残 完形 長 6.1 幅 3.7 厚 1.6		本文参照。上位に小孔を穿つ。側部4面に使用痕が認められる。左右の側面には線状の削痕が残る。材質は砥沢石。重量47g。	
83	石製品 砥 石	①埋没土	残 完形 長 3.8		本文参照。二次利用か。割れ口にも使用痕あり。材質は砥沢石。重量24g。	火熱を受け変色。
84	木製品	①床面中央	残 破片 長 <11.3>		本文参照。84から89は同一個体の可能性が高い。樹種はアカガシ亜属である。	84～95、炭化状態。
85	木製品	①床面中央	残 破片 長 <3.7>		本文参照。	
86	木製品	①床面中央	残 破片 長 <1.7>		本文参照。	
87	木製品	①床面中央	残 破片 長 <2.3>		本文参照。	
88	木製品	①床面中央	残 破片 長 <2.6>		本文参照。	
89	木製品	①床面中央	残 破片 長 <4.6>		本文参照。	
90	木製品 板状品	①南壁寄	残 破片 長 <8.4>		本文参照。幅2.9cm、厚0.5cm。樹種は不明。	
91	木製品 容 器	①床面中央 ②床直	残 1/2 高 <2.9>		本文参照。杯状を呈していた。器肉は薄い。樹種は不明。	現存しない。
92	木製品 容 器	①南壁際	残 破片 高 <10.0>		本文参照。鉢状を呈していた。樹種はケヤキである。	
93	木製品 不明	①南壁寄	残 一部欠損 長 <11.1>		本文参照。現存幅9.3cm、厚さ6.3cm。一面は舟底状を呈し加工面をもつ。もう一面は削り込みが施される。樹種はケヤキである。	
94	木製品 不明	①南壁際	残 一部欠損 長 <21.4>		本文参照。現存幅11.0cm、厚さ5.5cm。側部に加工痕を有する。樹種はクリである。	

No	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
95	木製品 不明	①南壁寄	残 一部欠損 長 <14.0>		本文参照。現存幅11.5cm、厚さ6.3cm。一面には割り込みがなされる。もう一面は平坦面をなす。芯持ち材を使用している。樹種はケヤキである。	
96	萬年 通寶	①床面中央	残 完形 直径 2.6 厚 0.1		本文参照。現重量3g。	P L22

第5号住居址 (第30~32図、P L24・25)

No	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
1	土師器 杯	①南壁寄 ②床直	残 完形 口 11.8 高 3.3	①粗砂多量② 橙5YR6/6③ 酸化	口縁部は丸底の底部から彎曲して短く立ち上がる。口縁部ヨコナデ。底部外面は、中央部分を一方向からヘラケズリ後周縁にケズリを施す。	
2	土師器 杯	①埋没土	残 1/2弱 口 (10.4) 高 3.3	①粗砂少量② にぶい黄橙10 YR7/3③酸化	口縁部は短く、丸底の底部から彎曲して立ち上がる。底部は下半にヘラケズリを施すが、上半には成形後のナデの面を残す。	底部外面に 炭素吸着。 器面は磨滅 している。
3	土師器 杯	①埋没土	残 破片 口 (10.0) 高 <1.9>	①精選。赤色 粘土粒少量② 橙5YR7/6③ 酸化	小径、器高も浅い。口縁部は丸底の底部から彎曲して立ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部外面には不定方向のヘラケズリを施す。	
4	土師器 杯	①埋没土	残 破片 口 (13.2) 高 <2.3>	①白色鈹物粒 ②橙7.5YR6/ 6③酸化	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。口縁部はヨコナデ。丸底の底部外面にはヘラケズリを施す。	
5	土師器 杯	①床面中央	残 1/3弱 口 (11.4) 高 <4.2>	①赤色粘土粒 少量②にぶい 褐7.5YR6/3 ③酸化	口縁部は丸底の底部から上方に向かって立ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部外面は大半にヘラケズリを施す。	器面は磨滅 している。
6	土師器 杯	①埋没土	残 破片 口 (14.0) 高 <4.0>	①赤色粘土粒 少量②橙7.5Y R6/6③酸化	口縁部は丸底の底部から斜め上方に向かって立ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部外面は大半に不定方向のヘラケズリを施す。	
7	土師器 鉢	①埋没土	残 破片 口 (12.0) 高 <3.6>	①精選。赤色 粘土粒少量② 橙7.5YR6/6 ③酸化	口縁部は底部との間に弱い稜をなし、斜め上方に外反して立ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部は横方向のヘラケズリを施す。	
8	土師器 鉢	①埋没土	残 破片 口 (13.6) 高 <4.3>	①精選。赤色 粘土粒少量② にぶい橙7.5Y R6/4③酸化	口縁部は底部との間に弱い稜をなし、斜め上方に弱く外反する。口縁部はヨコナデ。底部外面は横方向のケズリを施す。	
9	須恵器 蓋	①埋没土	残 破片 口 (21.0) 高 <4.6>	①黒色鈹物粒 ②灰白2.5Y8 /1③還元、や や軟質	口縁部先端の内面には弱いかえりが付く。鈕部は剥落している。右回転ロクロ成形か。天井部外面には回転を伴うヘラケズリが施される。	
10	須恵器 蓋	①埋没土	残 破片 口 (11.6) 高 <1.9>	①精選。黒色 鈹物粒微量② 灰黄2.5Y6/2 ③還元	小径。口縁部の先端内面に形骸した弱いかえりが付く。右回転ロクロ成形。天井部は鈕部寄りの外面に回転を伴うヘラケズリを施す。	
11	須恵器 蓋	①埋没土	残 破片 口 (12.0) 高 <1.5>	①精選。白色 鈹物粒少量② 黄灰2.5Y5/1 ③還元	小径。口縁部の先端内面に形骸した弱いかえりが付く。右回転ロクロ成形。鈕部寄りの天井部には回転を伴うヘラケズリを施す。	
12	須恵器 杯	①埋没土	残 破片 口 (9.2) 高 <3.9>	①白色鈹物 粒、黒色鈹物 粒少量②灰白 5Y7/1③還元	小径。口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。底部は浅い丸底を呈す。右回転ロクロ成形。底部外面は手持ちヘラケズリを施す。	内面に自然 釉。
13	須恵器 壺	①埋没土	残 高台部 破片 台 (5.0) 高 <1.4>	①灰色鈹物粒 少量②灰5Y5 /1③還元	小型品の高台部分と考えられる。高台部は断面四角形を呈する。右回転ロクロ成形。高台部取り付け後周縁をナデている。	外面に自然 釉がかかる。

遺物観察表

No.	器種	出土位置 ① 平面 ② 垂直	法 量 (cm)	① 胎 土 ② 色 調 ③ 焼 成	特 徴	備 考
14	須恵器 盤	①埋没土	残 破片 高 <1.6>	①粗砂大の白色鈹物粒、黒色鈹物粒、輝石②灰白2.5Y8/1③還元、やや軟質	口縁部は緩やかに彎曲して立ち上がる。右回転ロクロ成形。外面には回転を伴うヘラケズリが施される。	
15	須恵器 蓋	①埋没土	残 破片 口 (33.6) 高 <2.5>	①黒色鈹物粒少量②灰白5Y8/1③還元、やや軟質	先端には受け部が付く。ロクロ成形であるが回転方向は判別できない。	
16	須恵器 甕	①床面中央 ②床直	残 破片 高 <11.3>	①白色鈹物粒②灰5Y6/1③還元	外面は叩目の上に筋状に横方向のナデを施す。内面には波状の当目が残る。	
17	土師器 甕	①床面中央 ②床直	残 口縁～ 胴部 口 25.2 高 <33.9>	①粗砂多量。軽石、白色鈹物粒②橙5YR6/8③酸化	口縁部は大きく外反して立ち上がる。胴部は長胴で最大径を上位に有する。口縁部はヨコナデ。胴部外面は3回以上に分けてヘラケズリを施す。内面はていねいな横方向のナデを加えている。	
18	土師器 甕	①床面中央 ②床直	残 口縁～ 胴部 口 22.2 高 <32.7>	①礫少量。粗砂。雲母②赤褐5YR4/6③酸化	口縁部は強く外反して立ち上がる。胴部は長胴で、最大径を上位に有する。口縁部はヨコナデ。胴部外面は縦方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデを施す。	
19	土師器 甕	①床面中央 ②床直	残 口縁～ 胴部 口 22.5 高 <32.2>	①礫少量。粗砂。チャート②明赤褐5YR5/6③酸化	口縁部は大きく外反して立ち上がる。胴部は長胴で、最大径は口縁部直下であり、弱く張る。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は縦方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
20	土師器 甕	①床面中央 ②床直	残 口縁～ 胴部 口 22.4 高 <28.5>	①礫少量。粗砂。チャート②にぶい橙5YR7/4③酸化	口縁部は大きく外反して立ち上がる。胴部は長胴で、底部に向かって徐々に径を細める。口縁部はヨコナデ。胴部外面はヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
21	土師器 甕	①床面中央 ②床直	残 口縁～ 底部 口 (25.6) 底 (5.3) 高 <33.3>	①礫少量。チャート②橙7.5YR6/6③酸化	口縁部は大きく外反して立ち上がる。胴部は上位に最大径を有し、底部に向けてその径を細めている。底部は狭小で不安定。口縁部はヨコナデ。胴部外面は縦方向のヘラケズリ。下半は斜方向。内面は横方向のナデ。	
22	土師器 甕	①床面中央 ②床直	残 破片 口 (22.4) 高 <14.8>	①粗砂。赤色粘土粒、軽石②橙5YR6/6③酸化	口縁部は大きく外反して、先端を外方に向ける。胴部は長胴である。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は縦方向のヘラケズリ。内面はヘラ状工具による横方向のナデ。	
23	土師器 甕	①床面中央 ②床直	残 破片 口 (20.4) 高 <11.9>	①粗砂。チャート、軽石、赤色粘土粒②橙5YR6/6③酸化	口縁部は外反して立ち上がる。胴部は長胴である。口縁部はヨコナデ。胴部外面は縦方向のヘラケズリ。内面はヘラ状工具による横方向のナデ。	
24	石製品 滑石製 模造品	①埋没土	残 1/2 長 4.2 幅 4.5 厚 0.95		不整形の板状品である。裏面は中央が大きくえぐられている。中央に直径7mmの小孔が穿たれている。表面には、直径2mmほどのくり込みが3箇所認められる。重量12g。	
25	石製品 滑石製 模造品	①埋没土	残 1/2 長 2.5 幅 2.3 厚 0.4		不整形板状を呈していたか。中央に直径5mmほどの小孔が穿たれている。重量2g。	
26	鉄製品 刀 子	①埋没土	残 破片 長 <4.0>		刃部の破片である。刃部の断面形は長二等辺三角形で、幅0.95cmを測る。背の厚さは0.2cmである。現重量3g。	
27	鉄製品 不 明	①南壁寄	残 破片 長 <5.0>		板状品の破片である。平面形は大刀の鋒部分と類似するが器肉は一定で刃部は存在しない。現重量5g。	
28	鉄製品 不 明	①位置不明 ②床直	残 破片 長 <3.7>		厚さ0.1～0.2cmの板状品である。現重量3g。	

No	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
29	土製品 鋳型	①埋没土	残 破片 長 3.9 幅 3.7 厚 1.7		本文参照。	
30	土製品 鋳型	①A-II区	残 破片 長 6.0 幅 5.0 厚 1.6		本文参照。	参考資料。 第5号住居 址出土では ない。

第6号住居址(第34~36図、PL25)

No	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
1	鉄製品 刀子	①竈焚口部	残 破片 長 <3.3>		刃部の切先寄りが長さ3.3cm残存する。断面は長二等辺三角形で、幅0.95cm、背の厚さ0.2cmを測る。現重量2g。	
2	土師器 杯	①竈左袖上 部	残 破片 口 (13.0) 高 <3.4>	①細砂②明黄 褐10YR6/6③ 酸化	口縁部は斜め上方に立ち上がるか。	内外面とも に磨滅。
3	土師器 甕	①竈燃焼部	残 口縁部 破片 口 (23.0) 高 <6.3>	①粗砂少量。 細砂大の雲母 ②にぶい赤褐5 YR5/4③酸化	口縁部は胴部からくの字状に屈曲して立ち上がる。胴部は長胴を呈するか。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は上から下に縦方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
4	土師器 甕	①竈煙出部 構築材	残 口縁~ 胴部 口 22.6 高 <21.6>	①礫少量。粗 砂②橙5YR6/ /6③酸化	8と類似する形状である。口縁部は屈曲後、外傾著しく立ち上がる。胴部は上位に最大径を有し、以下、徐々に径を細める。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は斜縦方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
5	土師器 甕	①竈構築材	残 底部一部 欠損 口 23.6 高 31.7	①粗砂多量② にぶい黄褐10 YR5/3③酸化	口縁部は強く屈曲して外傾著しく立ち上がる。胴部は器高に比して胴部の直径が大きい。底部は狭小の平底を呈する。口縁部はヨコナデ。胴部外面は縦方向のヘラケズリ。内面は、縦方向のナデを施している。	
6	土師器 甕	①竈構築材	残 完形 口 23.4 高 30.7	①粗砂。石英 ②橙7.5YR6/ 6③酸化	口縁部は大きく外反して立ち上がる。胴部は上位で弱く張る。底部は不安定である。内面には成形時の凹凸が良く残る。口縁部はヨコナデ。胴部外面は上半が縦方向、下半が斜横方向のヘラケズリ。内面はヘラ状工具による横方向のナデ。	口縁部の一 部の器形が 重み片口状 を呈するが 意図的なも のであると の判断は困 難。
7	土師器 甕	①竈構築材	残 底部欠損 口 22.4 高 <28.3>	①粗砂多量② 橙5YR6/6③ 酸化	口縁部は屈曲、斜め上方に立ち上がる。胴部は最大径の位置が低く、全体が緩やかな弧を描く。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面はヘラケズリ。最上位のケズリの方向は傾きを増しつつある。内面は横方向のナデ。	外面はやや 磨滅。
8	土師器 甕	①竈燃焼部	残 口縁~ 胴部 口 25.0 高 <26.6>	①粗砂。チャ ート、石英、 長石、雲母② 橙7.5YR7/6 ③酸化	口縁部は屈曲後外傾強く立ち上がる。胴部は長胴で、底部に向けて徐々に細くなっている。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は斜縦方向にヘラケズリ。内面は指頭による横方向のナデをくりかえす。	
9	土師器 甕	①竈構築材	残 口縁~ 胴部1/4 口 (20.0) 高 <25.6>	①粗砂少量。 細砂状の雲母 ②橙7.5YR6/ 6③酸化	口縁部は外反して立ち上がり、先端の断面形状は丸味をおびる。胴部は上位に最大径を有する。口縁部はヨコナデ。胴部外面は上位から中位が斜縦方向の、下位が横方向のヘラケズリを施す。内面は横方向のナデを施す。	内面は器面 が磨耗して いる。
10	土師器 甕	①竈構築材	残 胴部 高 <26.6>	①粗砂多量② 橙7.5YR7/6 ③酸化	他と比較して器高を有する割に胴部の径が細い。胴部外面は斜縦方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
11	土師器 甕	①埋没土	残 口縁~ 胴部1/4 口 (22.0) 高 <23.5>	①細砂多量② 明赤褐5YR5/ 6③酸化	器肉が薄い。口縁部は緩やかに立ち上がり、上位にいたり大きく外反する。胴部は上位に最大径を有して張り、以下は底部に向けて急速に細くなる。口縁部は内外面ともヨコナデ。胴部外面は3回ほどに分けてヘラケズリ。内面は横方向のナデを施すが、指頭による押さえの痕跡を器面上に残す。	

遺物観察表

No.	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土調成 ②色 ③焼	特徴	備考
12	土師器 甕	①竈構築材	残 胴～底部 底 6.8 高 <25.8>	①礫少量、粗砂。チャート ②橙5YR6/6 ③酸化	長胴を呈すると思われる。底部は狭小な平底である。胴部外面は上位が縦、下位が斜方向のヘラケズリ。底部外面もヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	

遺構外出土遺物（第38～42図、P L 26～28）

No.	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土調成 ②色 ③焼	特徴	備考
1	須恵器 杯	①A-I区	残 1/4 口 (13.4) 高 3.3	①黒色鈳物粒 ②灰白2.5Y8/2 ③還元	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。口縁部外面にロクロ目を残す。	
2	須恵器 蓋	①A-III区	残 破片 口 (11.0) 高 <2.9>	①黒色鈳物粒 ②灰白5Y7/1 ③還元	小径。口縁部の先端は内側に小さく屈曲する。左回転ロクロ成形。天井部は回転を伴うヘラケズリ。	外面、口縁部先端に炭素吸着。
3	須恵器 蓋	①A-III西 拡張区	残 口縁部 破片 口 (13.2) 高 <2.1>	①精選②灰5Y6/1 ③還元、良好	小径であるが、口縁部の先端内面には長いかえりが付く。右回転ロクロ成形と思われる。	
4	須恵器 蓋	①A-III西 拡張区	残 鈕～天井 部破片 高 <2.0>	①細砂少量② 灰黄2.5Y7/2 ③還元	天井部の中央に直径4.0cmの鈕が付く。右回転ロクロ成形。天井部中央を回転糸切り離し後無調整。鈕部の周辺に糸切り痕を残す。天井部外面は回転を伴うヘラケズリ。	
5	須恵器 杯	①A-III西 拡張区	残 口縁～ 底部1/3 口 (13.0) 底 (8.0) 高 3.5	①礫少量②灰5Y6/1 ③還元	口縁部は斜め上方に直線的に立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	外面、磨滅。 内面、磨耗。
6	須恵器 杯	①A-III区	残 破片 口 (11.7) 底 (8.0) 高 3.7	①黒色鈳物粒 ②灰白5Y7/1 ③還元	口縁部は底部から移行直後の下位に弱い稜をもつ。その後は直線的に斜め上方に向かって外傾する。底部はヘラ切り離し。	
7	須恵器 杯	①A-III西 拡張区	残 口縁～ 底部1/4 口 (12.0) 底 (8.2) 高 3.0	①精選。黒色鈳物粒少量② 灰Y6/1 ③還元	口縁部は斜め上方に向けて直線的に立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	
8	須恵器 杯	①A-III区	残 底部1/4 底 (6.8) 高 <1.8>	①精選②灰白5Y7/1 ③還元	左回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	底部外面に墨書。内面、磨耗。
9	須恵器 杯	①A-III区 ・A-III 西拡張区	残 口縁～ 底部2/3 口 13.7 底 9.1 高 3.3	①精選②灰7.5Y5/1(外)、 灰7.5Y6/1(内) ③還元	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	外面、炭素吸着。内面、磨耗。
10	須恵器 杯	①A-III西 拡張区	残 1/4 口 (12.8) 底 (7.4) 高 3.6	①粗砂少量。 白色鈳物粒② 灰5Y6/1 ③還元	成形が粗雑で器形が歪んでいる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。内面みこみ部分にロクロ目を良く残す。	器形は大きく歪んでいる。胎土は4住12に類似。
11	須恵器 高台付 椀	①A-III区	残 口縁部 下半～ 高台部 台 (8.0) 高 <2.5>	①黒色鈳物粒 ②灰7.5Y6/1 ③還元	高台部は低く未発達。口縁部は底部から彎曲して斜め上方に立ち上がると考えられる。右回転ロクロ成形。底部回転糸切り離し後高台部取り付け。周縁にヨコナデを加える。	高台部端部は磨耗している。
12	須恵器 蓋	①A-IV区	残 破片 口 (12.0) 高 <2.2>	①黒色鈳物粒 ②黄灰2.5Y6/1 ③還元	口縁部の先端は小さく折れ、断面三角形を呈す。右回転ロクロ成形。天井部外面は回転を伴うヘラケズリ。	外面の一部に自然釉付着。
13	須恵器 杯	①A-IV区	残 破片 口 (9.0) 底 (5.0) 高 3.4	①白色鈳物粒 ②黄灰2.5Y4/1 ③還元	口縁部は底部から彎曲して立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部外面は手持ちヘラケズリ。	

遺構外出土遺物

No	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土調成 ②焼 ③焼	特 徴	備 考
14	須恵器杯	①A-IV西 拡張区	残 破片 口 (10.8) 底 (7.6) 高 4.1	①黒色鈳物粒 ②灰5Y6/1③ 還元	小径。口縁部は外傾弱く立ち上がる。左回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	
15	須恵器杯	①A-IV西 拡張区	残 1/2 口 12.8 底 7.4 高 3.3	①白色鈳物粒 ②灰5Y6/1③ 還元	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。内外面ともロクロ目を顕著に残す。	内面、磨耗。
16	須恵器杯	①A-IV西 拡張区	残 破片 口 (13.6) 底 (8.6) 高 3.0	①白色鈳物粒、 黒色鈳物粒② 灰白5Y6/1③ 還元	口縁部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	外面に自然 釉付着。
17	須恵器杯	①A-IV区	残 底部1/4 底 (8.0) 高 <1.1>	①黒色鈳物粒、 白色鈳物粒② 灰5Y6/1③還 元	左回転ロクロ成形。底部の切り離しは回転ヘラ切り。	
18	須恵器碗	①A-IV区	残 口縁部 1/4 口 (17.2) 高 <5.4>	①精選②灰白 2.5Y8/2③還 元、軟質	左回転ロクロ成形か。外面にはロクロ目を顕著に残す。	
19	須恵器高台付碗	①A-IV区	残 高台部 台 (7.4) 高 <2.2>	①細砂②灰白 5Y8/1③還元	高台部は断面三角形に近い形状である。左回転ロクロ成形。底部を回転糸切り離し後高台部を取り付け。周縁をナデる。	内面、磨耗。
20	須恵器杯	①A-IV東 拡張区	残 底部1/3 底 (7.4) 高 <1.0>	①黒色鈳物粒 ②灰白5Y8/1 ③還元	右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後、無調整。	底部外面に 墨書「十」。
21	須恵器高台付碗	①A-IV西 拡張区	残 口縁～ 高台部 口 (10.4) 台 (6.0) 高 5.1	①白色鈳物粒、 黒色鈳物粒② 灰Y6/1③還 元	小径。口縁部は外傾弱く立ち上がる。高台部は全体の器高に比して発達、ハの字状に開く。右回転ロクロ成形。底部を回転糸切り離し後高台部を取り付け。周縁にヨコナデを重ねる。	内外面に自然 釉付着。
22	須恵器高台付碗	①A-IV区	残 高台部 1/3 台 (9.0) 高 <2.0>	①精選。黒色 鈳物粒②灰5 Y6/1③還元	高台部はハの字状を呈する。右回転ロクロ成形。底部を回転糸切り離し後高台部を取り付け、周縁にヨコナデを加える。	
23	須恵器高台付碗	①A-IV区	残 破片 台 (7.0) 高 <2.4>	①精選。白色 鈳物粒②黄灰 2.5Y5/1③還 元	高台部は薄く、ハの字状に取り付く。右回転ロクロ成形。底部を回転糸切り離し後、高台部を取り付け。周縁にヨコナデを行う。	
24	須恵器瓶?	①A-IV区	残 高台部 1/4 台 (8.8) 高 <4.2>	①白色鈳物粒 ②暗灰黄2.5 Y5/2③還元、 堅緻	胴部下半の残存である。高台部は低く、断面四角形である。左回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後高台部を貼付する。	内面に自然 釉付着。
25	須恵器盤	①A-IV区	残 破片 口 (27.0) 高 <3.8>	①精選②灰5 Y5/1③還元、 堅緻	器形は弧をなし斜め外方に向けて立ち上がる。先端はシャープな平坦面をなす。	
26	須恵器甕	①A-IV区	残 破片 高 <6.1>	①白色鈳物粒 ②灰5Y6/1③ 還元	口縁部は外反して立ち上がり、先端は尖る。外面は稜をなし、面を形作る。	
27	須恵器甕	①A-IV東 拡張区	残 破片 口 (12.0) 高 <3.1>	①白色鈳物粒 ②灰5YR5/1 ③還元	口縁部破片である。先端の外面に平坦な面をなす。内外面ともロクロ回転によるナデを施す。	
28	須恵器甕	①A-IV区	残 破片 高 <10.0>	①白色鈳物粒、 黒色鈳物粒② 灰5Y6/1③還 元	大型で口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。外面に線刻状の文様が施される。粘土紐を巻き上げによる成形。外面の叩目は消されている。内面には押圧状のナデか認められる。	
29	須恵器甕	①A-IV東 拡張区	残 破片 高 <14.6>	①礫少量。チャート、粗砂 ②褐灰10YR6/1③還元	丸味を有する。外面には叩目を、内面には同心円文状の当目を残す。	

遺物観察表

No	器種	出土位置 ①平面直 ②垂直	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
30	須恵器 甕	①A-IV東 拡張区	残 破片 高 <5.0>	①粗砂②灰5 Y6/1(外)、灰 白5Y8/1(内) ③還元	底部から胴部下位の破片で、大型品となるか。平底。内外面ともロクロ調整が施されている。	
31	須恵器 平瓶	①A-IV区	残 破片 口 (6.0) 高 <4.5>	①白色鉾物粒 ②灰N6/③還 元	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。中位には断面三角形の突帯が付き、沈線を伴う。胴部はロクロ成形。袋状に器形を成形後、ロクロ成形時の中軸からずれた位置に新たに穿孔し口縁部を接合している。	
32	須恵器 瓶?	①A-IV区 ・A-V 区	残 破片 高 <5.3>	①白色鉾物 粒、黒色鉾物 粒②灰白2.5 Y7/1③還元	肩部の張る形状か。右回転ロクロ成形と思われる。	外面に自然 釉付着。
33	須恵器 甕	①A-IV東 拡張区	残 破片 高 <9.7>	①白色鉾物粒 ②灰5Y5/1③ 還元	胴部下位から底部にいたる破片である。平底。外面には斜格子状の叩目と横方向のナデ、ケズリがみられる。内面は当目をナデ消している。	
34	土製 円板	①A-IV区	残 完形 径 6.8×6.4 厚 1.5	①白色鉾物粒 ②灰5Y6/1③ 還元	須恵器の大甕と思われる個体の破片を整形、二次利用している。外面には平行方向の叩目を、内面には当目をその上からナデた調整痕がみられる。	
35	須恵器 硯	①A-IV西 拡張区	残 硯面部 1/4 硯面部径 (14.6) 高 <2.8>	①黒色鉾物粒、 白色鉾物粒② 灰白5Y7/1③ 還元	円面硯の圈足硯に分類されるものである。陸部分の破片である。硯面の外縁には断面三角形の低い堤が巡る。外堤部分は欠損している。硯面の直径は約14cmに復元できる。脚部はほとんど欠損しているが長方形の透かしが配されていた痕跡が認められる。透かしの幅は一定でなく、1.8cmと4.2cmの2種類が確認できる。	陸部に自然 釉付着。硯 面に磨耗が みられない ことから未 使用か。
36	須恵器 蓋	①A-V区	残 破片 口 (14.2) 高 <1.9>	①白色鉾物粒 ②灰5Y6/1 (外)、灰N6/1 (内)③還元	小径。口縁部の先端はくの字状に内側に屈折する。右回転ロクロ成形。天井部外面に回転を伴うヘラケズリを施す。	
37	須恵器 杯	①A-V区	残 破片 口 (13.6) 底 (9.0) 高 3.0	①白色鉾物粒 ②灰5Y6/1 (外)、灰5Y8/ 1(内)③還元	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	内面、磨耗。
38	須恵器 杯	①A-V区	残 破片 口 (14.0) 底 (9.4) 高 3.4	①細砂②灰白 5Y7/1③還元	口縁部は彎曲気味に斜め上方に向かって立ち上がる。左回転ロクロ成形か。底部は回転糸切り離し後無調整。	内面、磨耗。
39	須恵器 杯	①A-V区	残 破片 底 (8.0) 高 <3.3>	①白色鉾物粒 ②灰5Y6/1③ 還元	小径。口縁部は外傾弱く立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後ナデ調整を施す。	
40	須恵器 杯	①A-V区	残 破片 底 9.6 高 <1.0>	①粗砂少量② 黄灰2.5Y6/1 ③還元	右回転ロクロ成形。底部は回転ヘラ切り離し。	
41	須恵器 杯	①A-V拡 張区・A 区	残 底部3/4 底 8.8 高 <1.2>	①細砂②灰白 2.5Y8/2③還 元	右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	内面、磨耗。 器面の一部 に炭化物付 着。
42	須恵器 盤	①A-V区	残 口縁部 破片 口 (30.0) 高 <2.4>	①黒色鉾物粒、 白色鉾物粒② 灰5Y5/1③還 元	口縁部は外傾弱く立ち上がる。先端は平坦な面をなす。左回転ロクロ成形か。受け部外面には回転を伴うヘラケズリを施す。	
43	須恵器 椀	①A-V区	残 破片 口 (20.7) 高 <5.5>	①細砂②灰黄 2.5Y6/2③還 元	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がるか。先端は内側が弱くそげる。右回転ロクロ成形。外面にはほぼ全面にわたり、カキ目状の横線がめぐる。	
44	須恵器 甕	①A-V区	残 破片 高 <3.2>	①白色鉾物粒 ②灰5YR6/1 ③還元	肩部の破片である。外面には斜格子状の叩目、粗雑なナデを、内面には粗雑なナデを施す。	
45	須恵器 蓋	①不明	残 口縁~天 井部1/2 口 11.0 高 4.8	①白色鉾物粒、 黒色鉾物粒② 灰5Y5/1③還 元	口縁部は直線的に垂下する。天井部は膨らみを有し弧をなす。右回転ロクロ成形。天井部は不定方向の手持ちヘラケズリ。	

No.	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土調成 ②色 ③焼	特 徴	備 考
46	須恵器杯	①不明	残 1/4 口 (13.7) 底 (8.0) 高 <3.3>	①白色鈹物粒 ②浅黄2.5Y8/3③還元	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。先端はさらに外方に延びる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	内外面、磨減。
47	須恵器杯	①不明	残 1/4 口 (12.0) 高 3.1	①黒色鈹物粒。発泡②灰5Y6/1③還元	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がり、先端はさらに外反して延びる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	内面、磨耗。
48	須恵器杯	①不明	残 1/2 口 (13.0) 底 (8.0) 高 <2.9>	①黒色鈹物粒、白色鈹物粒②灰5Y6/1③還元	口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がる。底部は回転糸切り離し後無調整。	
49	須恵器杯	①不明	残 破片 口 (14.2) 底 (8.3) 高 3.7	①白色鈹物粒、黒色鈹物粒②灰白2.5Y8/2③還元	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。底部は回転を伴う糸切り離し後無調整。	
50	須恵器高台付椀	①不明	残 破片 台 (8.9) 高 <2.8>	①黒色鈹物粒②灰白2.5Y7/1③還元	高台部はハの字状に延びる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後高台部を取り付け。周縁にヨコナデ。	内面、磨耗。
51	須恵器高台付椀	①不明	残 高台部 1/3 台 (7.2) 高 <2.6>	①粗砂少量②灰7.5Y6/1③還元	高台部は外傾弱く延びる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離し後高台部を取り付け。周縁にヨコナデを施す。	
52	須恵器高台付瓶か	①不明	残 破片 台 (8.4) 高 <2.4>	①精選②灰白2.5Y7/1③還元	高台部は断面四角形で、底面は平坦な面をなす。底部回転糸切り離し後高台部を取り付け。周縁にヨコナデ。胴部外面にはヘラケズリが認められる。	内面に自然釉付着。
53	須恵器高台付瓶か	①不明	残 破片 台 (9.0) 高 <2.5>	①精選②灰5Y4/1③還元	高台部は断面四角形のいわゆる角高台で低い。左回転ロクロ成形か。胴部外面は回転を伴うヘラケズリを施す。	底面、磨耗。
54	須恵器高台付壺	①A区	残 高台部 1/4 台 (13.0) 高 <2.8>	①白色鈹物粒、黒色鈹物粒②灰N6/③還元	ハの字状に外反する。先端は尖る。外面の下端は断面三角形の稜をへて面をなす。右回転ロクロ成形か。	
55	須恵器甕	①不明	残 破片 高 <18.1>	①精選。白色鈹物粒②黄灰2.5Y6/1③還元	胴部の大型破片で器形は弧状を呈す。外面は成形後不定方向のハケメを重ねている。内面には成形時の当目が半円状に重なって残存する。当目の一部には「米」字状の刻み目が施されている。	
56	土師器甕	①A-I区	残 破片 口 (13.2) 高 <5.4>	①粗砂少量②橙5YR6/6③酸化	口縁部は直立気味に立ち上がり中位で変換、受け口気味に斜め上方に延びる。口縁部は上半にヨコナデを施すが下半にはナデ調整の面を残す。胴部外面は横方向のヘラケズリ。	
57	土師器杯	①A-III区	残 破片 口 (13.0) 高 3.3	①粗砂少量②にぶい橙5YR1/4③酸化	口縁部は直線的に斜め上方に向かって立ち上がる。先端は弱く抓まれる。平底。口縁部の先端はヨコナデ。口縁部下端と底部外面はヘラケズリ、口縁部内面はナデ。	底部外面に黒色の付着物。墨書か。
58	土師器杯	①A-III区・A-III西拡張区	残 口縁～ 底部1/2 口 (11.2) 底 (7.5) 高 3.6	①赤色粘土粒②橙7.5YR7/6③酸化	口縁部は彎曲気味に斜め上方に向かって立ち上がる。底部は平底である。口縁部上半はヨコナデ。下半にはヘラケズリが施されたか。	外面は磨減。
59	土師器杯	①A-III区	残 口縁～ 底部1/4 口 (10.4) 高 3.0	①粗砂少量②橙5YR7/6③酸化	口縁部は短く、丸底の底部から内彎気味に立ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部外面は不定方向のヘラケズリ。	外面は磨減している。
60	土師器杯	①A-IV区	残 口縁～ 底部1/2 口 (12.2) 底 (8.4) 高 3.2	①粗砂少量②橙7.5YR6/6③酸化	口縁部は斜め上方に直線的に延びる。底部は平底。器内は厚い。口縁部の先端はヨコナデ。中位から下位はナデあるいはヘラケズリか。	器面、磨減。
61	土師器杯	①A-IV東拡張区	残 破片 口 (14.8) 高 <5.7>	①粗砂少量②橙7.5YR7/6③酸化	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。底部は丸底。口縁部との間に弱い稜を有する。口縁部外面の先端はヨコナデ。以下はヘラケズリか。内面は器面全体にミガキを施した後、口縁部に間隔狭く、放射状暗文を施す。	外面、磨減。

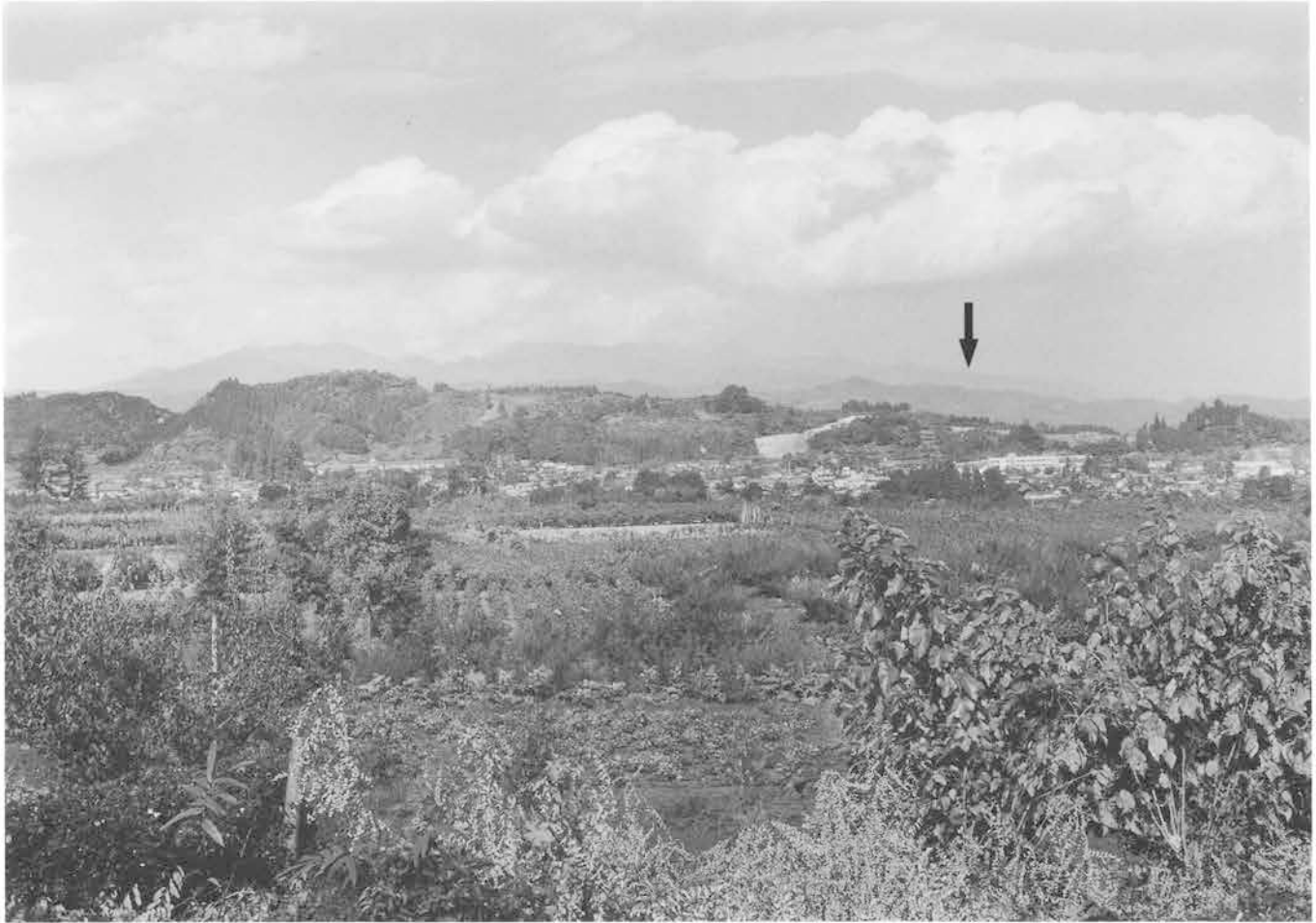
遺物観察表

No	器種	出土位置 ①平面 ②垂直	法量 (cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	特 徴	備 考
62	土師器 杯	①A-IV区	残 破片 口 (14.0) 高 <3.8>	①粗砂②にぶ い橙7.5YR6/ 4③酸化	口縁部はやや彎曲しながら斜め上方に向かって立ち上がる。内面はヘラ状工具によるヨコナデ後、放射状暗文を施す。	
63	土師器 杯	①A-IV区	残 破片 口 (12.0) 底 (9.0) 高 3.3	①粗砂少量② 明赤褐5YR5/ 6③酸化	口縁部は彎曲しながら斜め上方に向かって立ち上がる。底部は平底か。口縁部の先端はヨコナデ。下半には器形成後の粗いナデ残す。	
64	土師器 甕	①A-IV東 拡張区	残 破片 口 (25.0) 高 <8.9>	①粗砂。赤色 粘土粒②にぶ い橙7.5YR6/ 4③酸化	口縁部は胴部から屈曲、大きく外反する。口縁部はヨコナデ。胴部外面は縦方向のヘラケズリ。内面は横方向のナデ。	
65	土師器 鉢	①不明	残 口縁部 破片 口 (16.8) 高 <4.8>	①粗砂②橙7. 5YR6/6③酸 化	口縁部は強いヨコナデ。胴部外面はヘラケズリ。内面はナデ。	
66	土師器 高台付 椀	①A-V区	残 底部 底 7.9 高 <2.5>	①粗砂②明赤 褐2.5YR5/6 ③酸化	高台部はハの字状に外反する。内面、みこみ部分を中心に棒状工具による暗文状のミガキが6方向に延びる。	
67	土師器 甕	①A-V区	残 破片 底 (9.6) 高 <3.4>	①粗砂②橙5 YR6/6③酸化	台付甕の台部破片である。低い外方に大きく延びる。胴部と台部の接合部分には粗雑なナデがくりかえされている。胴部内面はヘラナデ。	
68	土師器 杯	①C-II区	残 破片 口 (11.0) 高 3.5	①精選。粗砂 少量②橙5YR 6/6③酸化	口縁部は丸底の底部から彎曲して立ち上がる。外面は口縁部先端がヨコナデ。以下はヘラケズリであるがこれに不定方向のミガキが重ねられる。内面は口縁部に放射状の暗文が、みこみ部分に螺旋状の暗文が施されている。	
69	土師器 杯	①C-II区	残 破片 口 (14.0) 高 <4.0>	①精選。粗砂 少量②橙7.5 YR7/6③酸化	口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁部先端はヨコナデ。外面の中心以下にはヘラケズリ。内面には放射状暗文が施される。	
70	土師器 甕	①不明	残 破片 口 (22.6) 高 <9.7>	①粗砂少量② 明赤褐5YR5/ 6③酸化	口縁部は短く、外反して立ち上がる。口縁部はヨコナデ。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のナデ。	A-III西拡張区、あるいはA-IV西拡張区出土。
71	磁 器 青 磁	①不明	残 破片 高 <2.4>	①細砂状の黒 色鈳物粒少量 ②灰白10Y7/ 2③還元	口縁部は下位に稜をなした後大きく外反して立ち上がる。内面に陰花文が施される。15・16世紀、中国産と考えられる。	
72	陶 器 片 口	①A-IV東 拡張区	残 片口部 破片 長 <2.4>	①石英、長石 ②にぶい黄橙 10YR7/4③還 元	短い筒状の片口部分の破片である。雪平状を呈するか。内面に釉がかかる。江戸時代末期、下仁田焼。	
73	石製品 砥 石	①A-V区	残 完形 長 11.2		本文参照。平面形は一方の小口面に向かってバチ状に開く。材質は不明。側部の4面に使用痕がみられる。	現存しない。
74	石製品 紡錘車	①A-IV区	残 破片 厚 <0.7>		本文参照。上位の2分の1ほどが残存する。材質は黒色片岩。器面に線刻が施されるか。重量3g。	
75	鉄製品 不 明	①不明	残 破片 長 <5.7>		棒状品である。両端とも欠損するが、図示上端はカギの手状に曲がっていたものと思われ、紡錘車の鉄軸であった可能性が高い。断面形は円形で、直径は0.4cm前後である。現重量4g。	天地不明。
76	鉄製品 不 明	①不明	残 破片 長 <3.6>		棒状品である。両端とも欠損する。断面は四角形を呈しており、一辺は0.4cmを測る。現重量1g。	天地不明。
77	鉄製品 不 明	①不明	残 破片 長 <3.7>		棒状品である。両端とも欠損する。断面は円形で、直径は0.45cmを測る。紡錘車の鉄軸か。現重量1g。	天地不明。
78	鉄製品 不 明	①不明	残 破片 長 <6.0>		棒状品で両端は欠損する。断面形は長方形で、中位において幅0.55cm、厚さ0.3cmを測る。現重量10g。	天地不明。

写 真 图 版



愛宕山遺跡の位置（○印）



1 愛宕山遺跡遠景（碓氷川右岸から、矢印）



2 愛宕山遺跡遠景（調査前、東から）

右 1 A-I区~II区
(南東から)



左 2 A-I区
(南東から)



3 A-II区
北壁土層断面 (西から)



4 A-II区
北壁土層断面 (南東から)





左 1 A-III区・IV区
各拡張区付近
(北西から)

右 2 A-I区
(西から)



3 A-III区・IV区
各拡張区付近(北西から)



4 A-IV区・V区・VI区付近
(北西から)



1 B-II区～C-I区
北壁土層断面（西から）



2 B-II区
土層断面（南東から）



左 3 C-I区
（南東から）



右 4 C-II区
（南東から）



1 第1号住居址全景（北東から）



2 第1号住居址土層断面（東から）



3 第2号住居址全景（南西から）



1 第3号住居址全景（南東から）



2 第3号住居址遺物出土状況（南東から）



4 第3号住居址竈検出状況（東から）



3 第3号住居址遺物出土状況（南東から）



5 第3号住居址竈検出状況（北西から）



1 第4号住居址全景（北から）



2 第4号住居址全景（南から）



1 第4号住居址炭化材・遺物出土状況（東から）



2 第4号住居址炭化材・遺物出土状況（東から）



1 第4号住居址遺物出土状況（鋸周辺、東から）



2 第4号住居址遺物出土状況（鎌、腰帯具巡方・丸柄、西から）



1 第4号住居址遺物出土状況（小刀周辺、北から）



2 第4号住居址遺物出土状況（吊手金具周辺、南から）



1 第4号住居址竈検出状況(南から)



2 第4号住居址竈検出状況(南西から)



3 第4号住居址遺物出土状況(吊手金具周辺、南から)



4 第4号住居址遺物出土状況(須恵器杯4、北から)



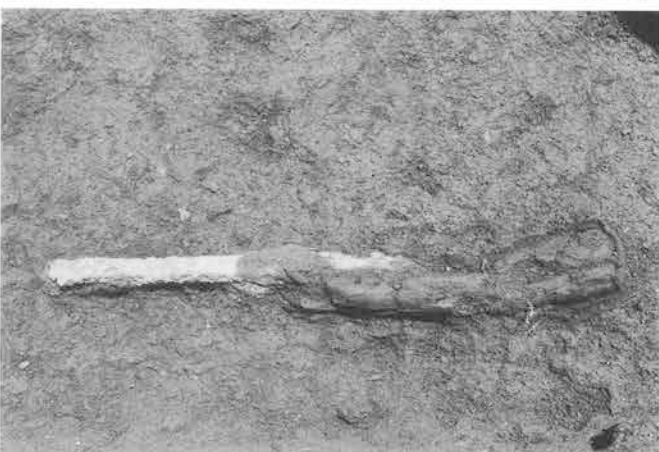
5 第4号住居址遺物出土状況(万年通寶周辺、南東から)



7 第4号住居址遺物出土状況(鍬・鍬、北から)



6 第4号住居址遺物出土状況(万年通寶、東から)



8 第4号住居址遺物出土状況(鍬、北から)



1 第4号住居址遺物出土状況(須恵器杯16)



2 第4号住居址遺物出土状況(須恵器長頸瓶29、東から)



3 第4号住居址遺物出土状況(鉄製紡錘車54、西から)



4 第4号住居址遺物出土状況(腰帯具丸鞆78、西から)



5 第4号住居址遺物出土状況(鉄製紡錘車56、南西から)



6 第4号住居址遺物出土状況(鉄斧、北から)



7 第4号住居址遺物出土状況(刀子、南東から)



8 第4号住居址遺物出土状況(石錘周辺、西から)



1 第5号住居址全景
(南から)



2 第5号住居址
遺物出土状況(北から)



3 第6号住居址
竈検出状況(南東から)

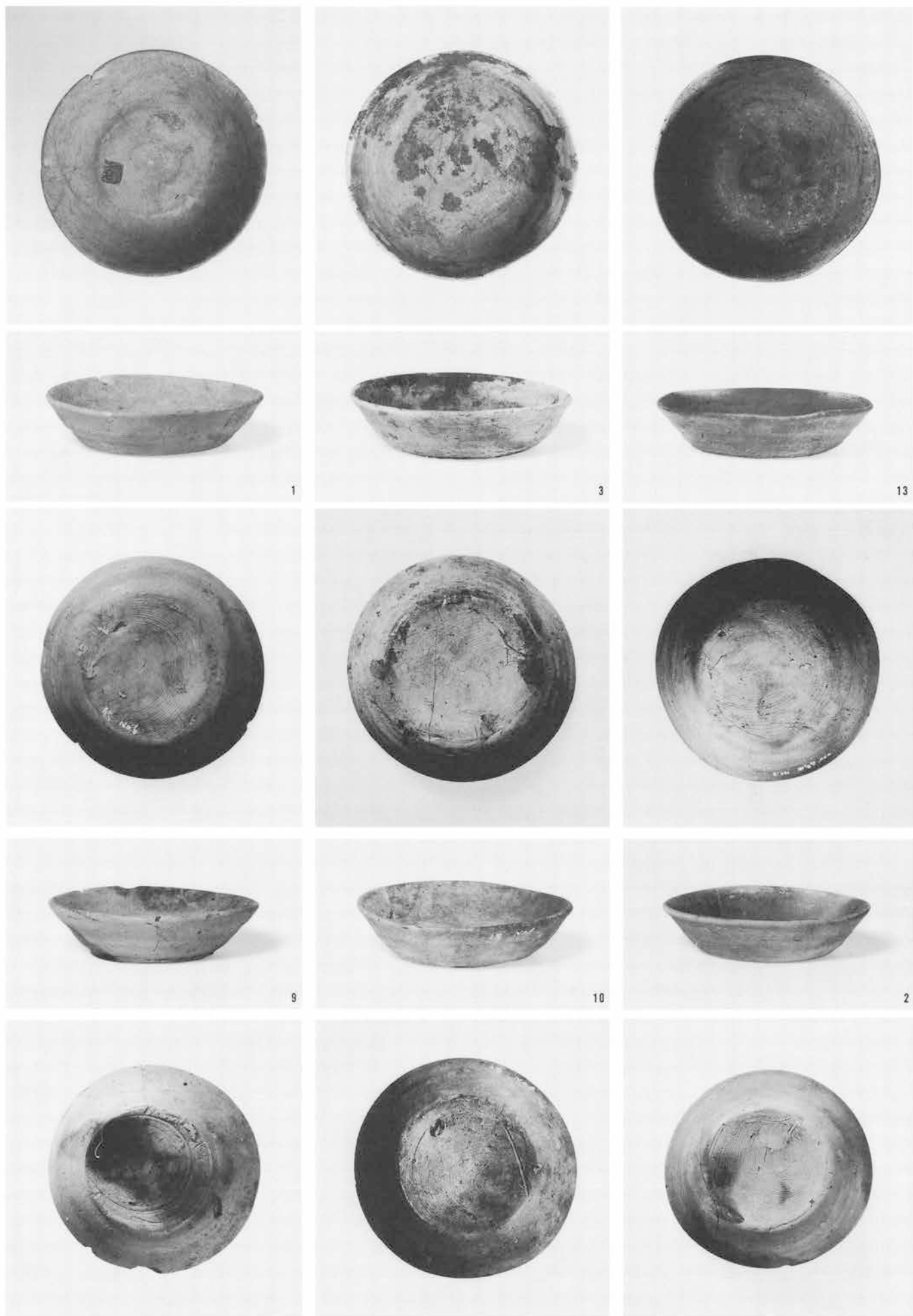


1 第1号住居址出土遺物



2 第3号住居址出土遺物





第4号住居址出土遺物（土器）



14



26



12



11



18



4



7



15



17



8



5



6



20 墨書



13 墨書



28

第4号住居址出土遺物(土器)



24

25



22



23



29



30



第4号住居址出土遺物（土器）



21



35



36



31



33



38



39



42



44



43



50



46



45



47



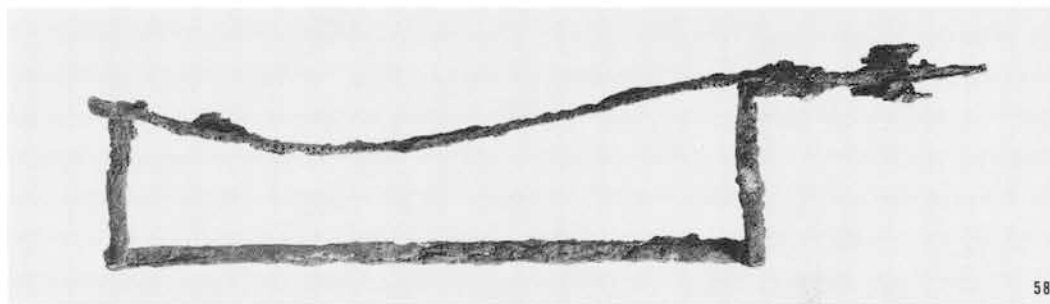
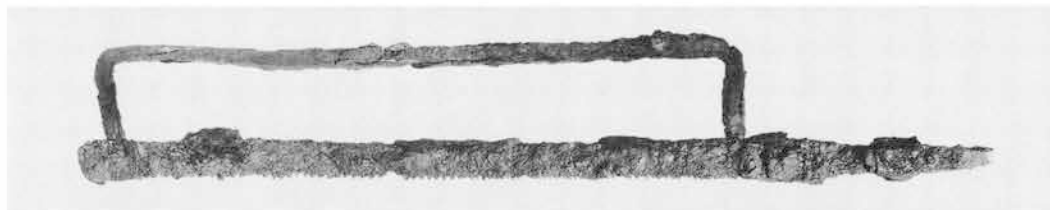
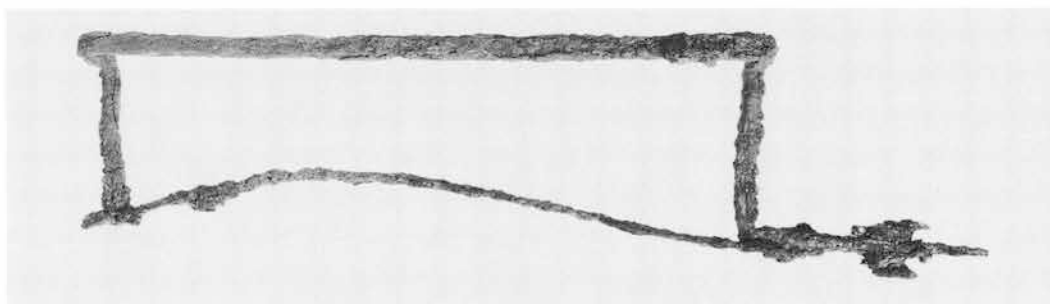
37



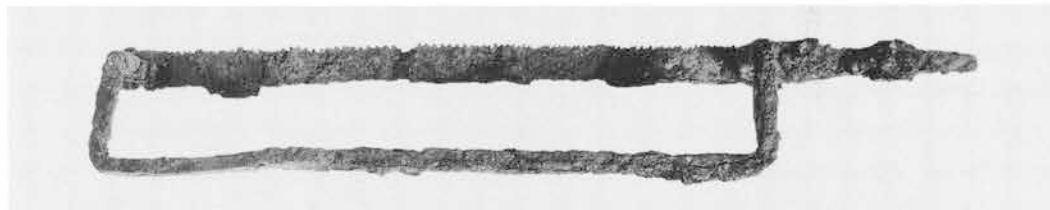
41



58



58



61



54



59



60



56



55



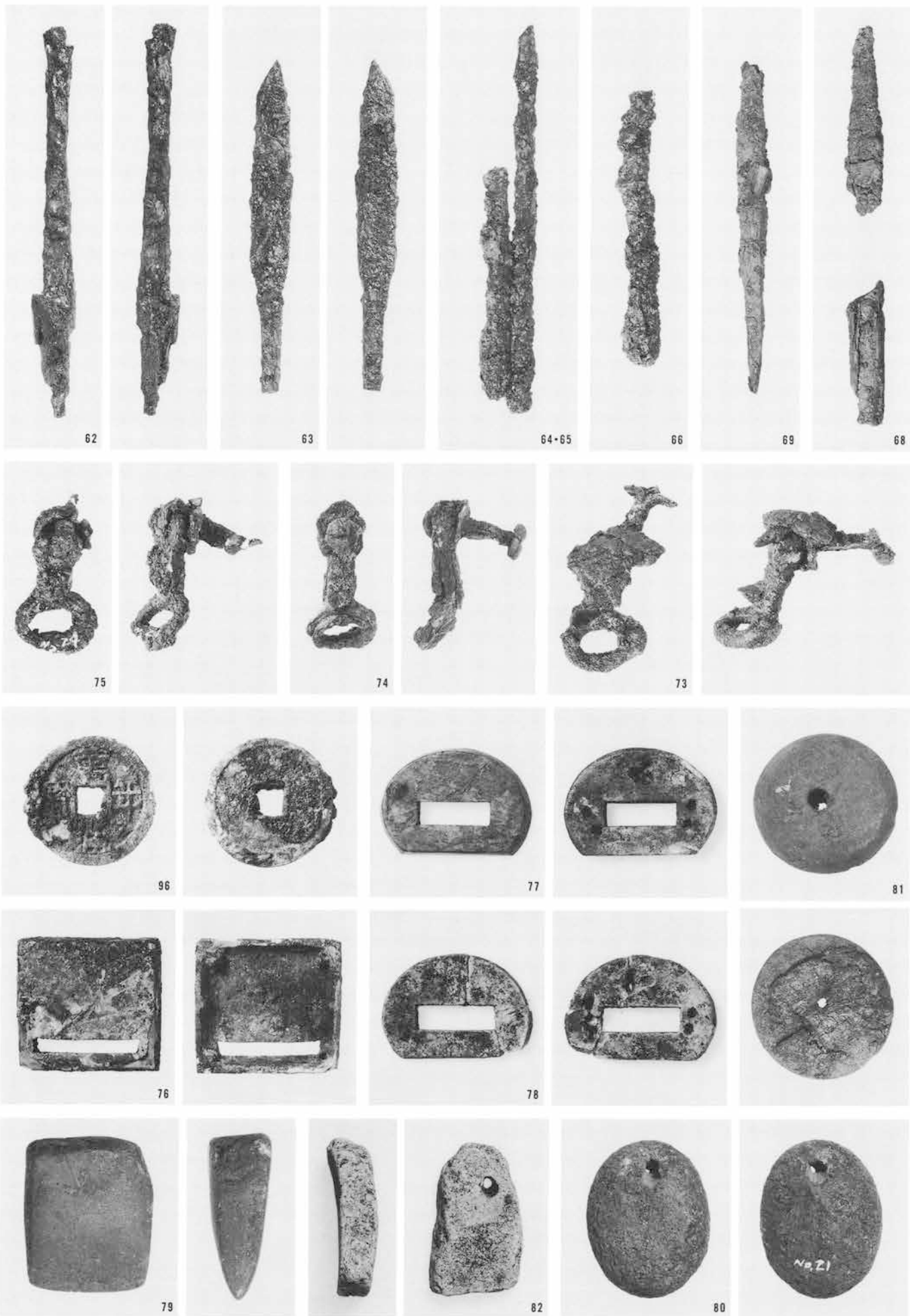
57



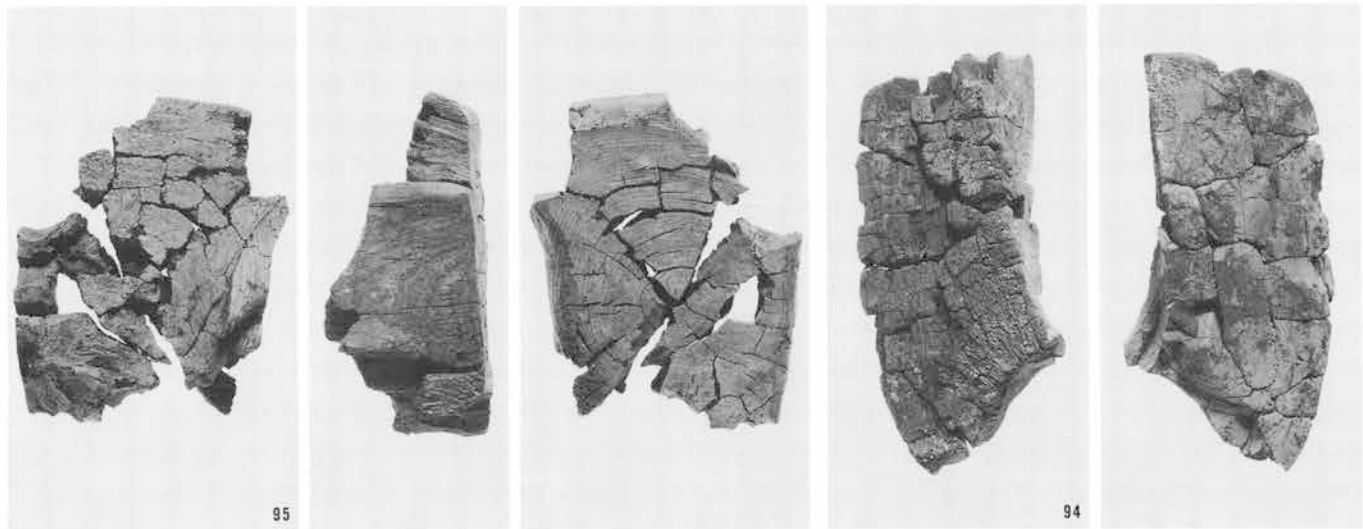
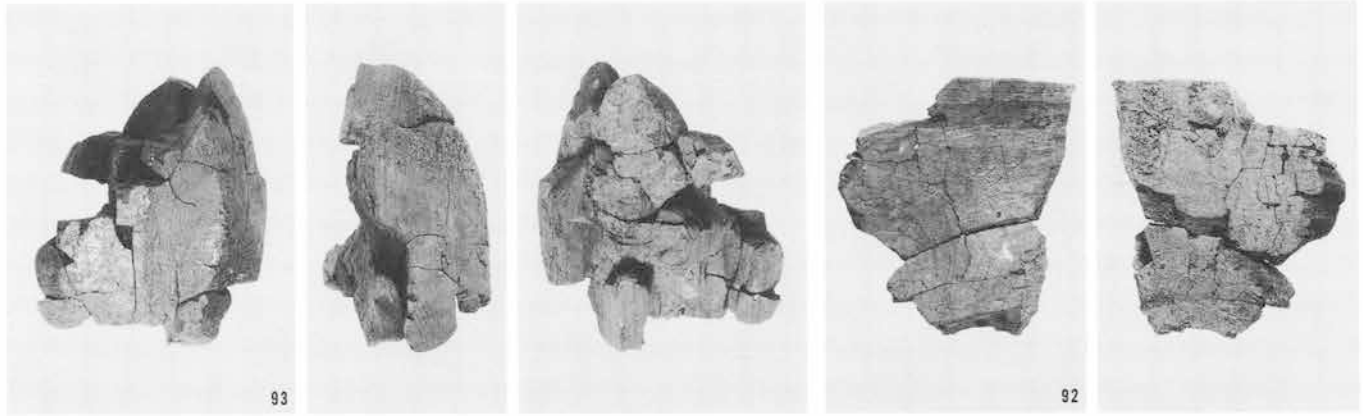
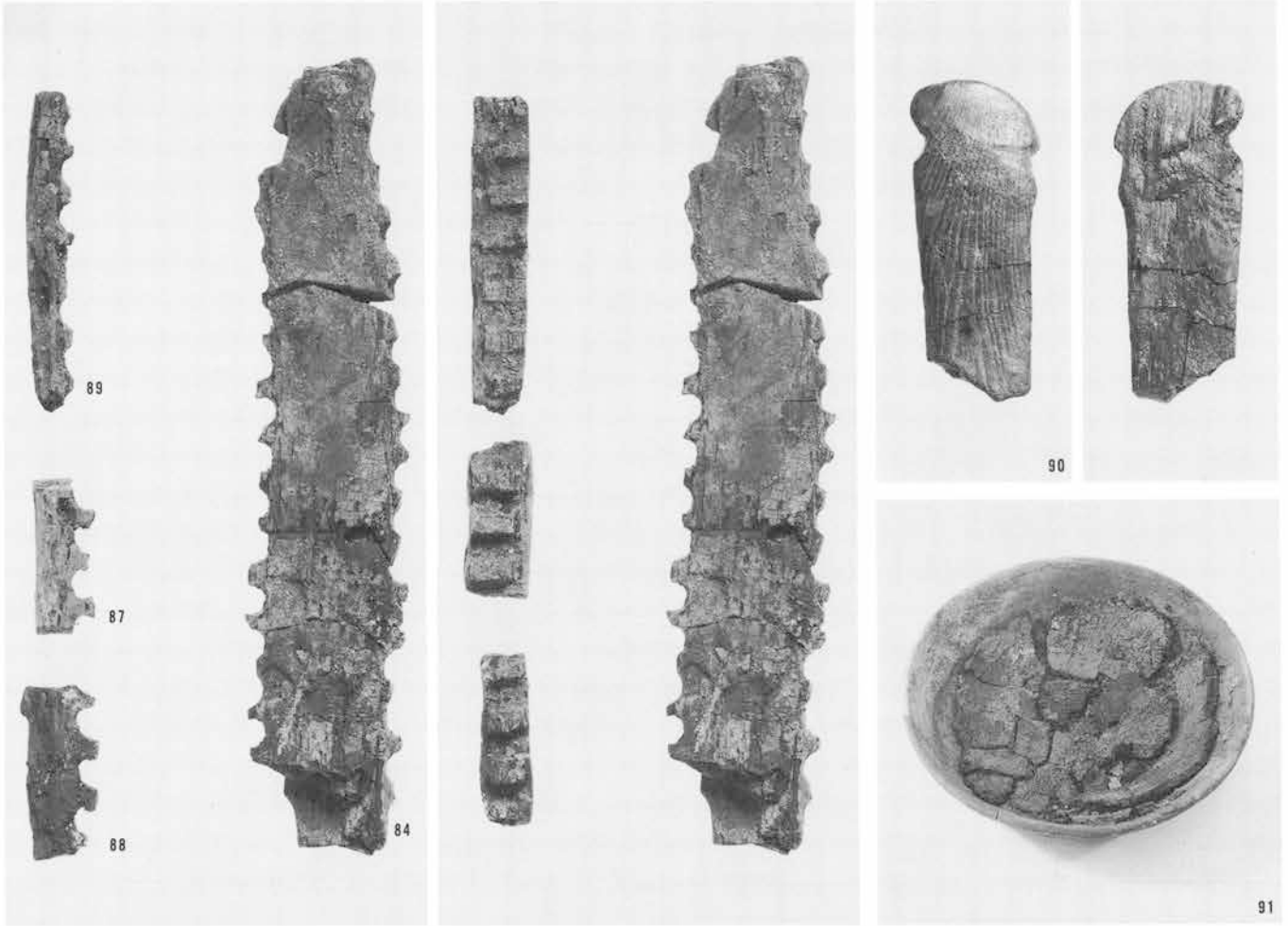
67



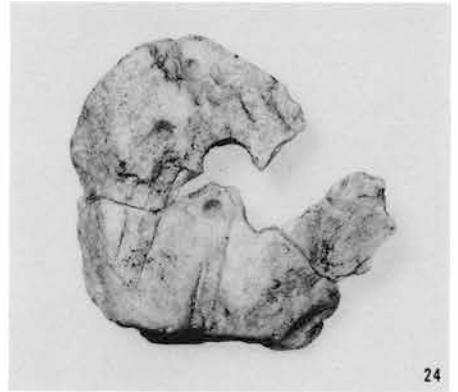
第4号住居址出土遺物（金属製品）



第4号住居址出土遺物（金属製品・石製品）



第4号住居址出土遺物（木製品）





26



30



29

1 第5号住居址出土遺物



6



5



7



8



4



10



3



1

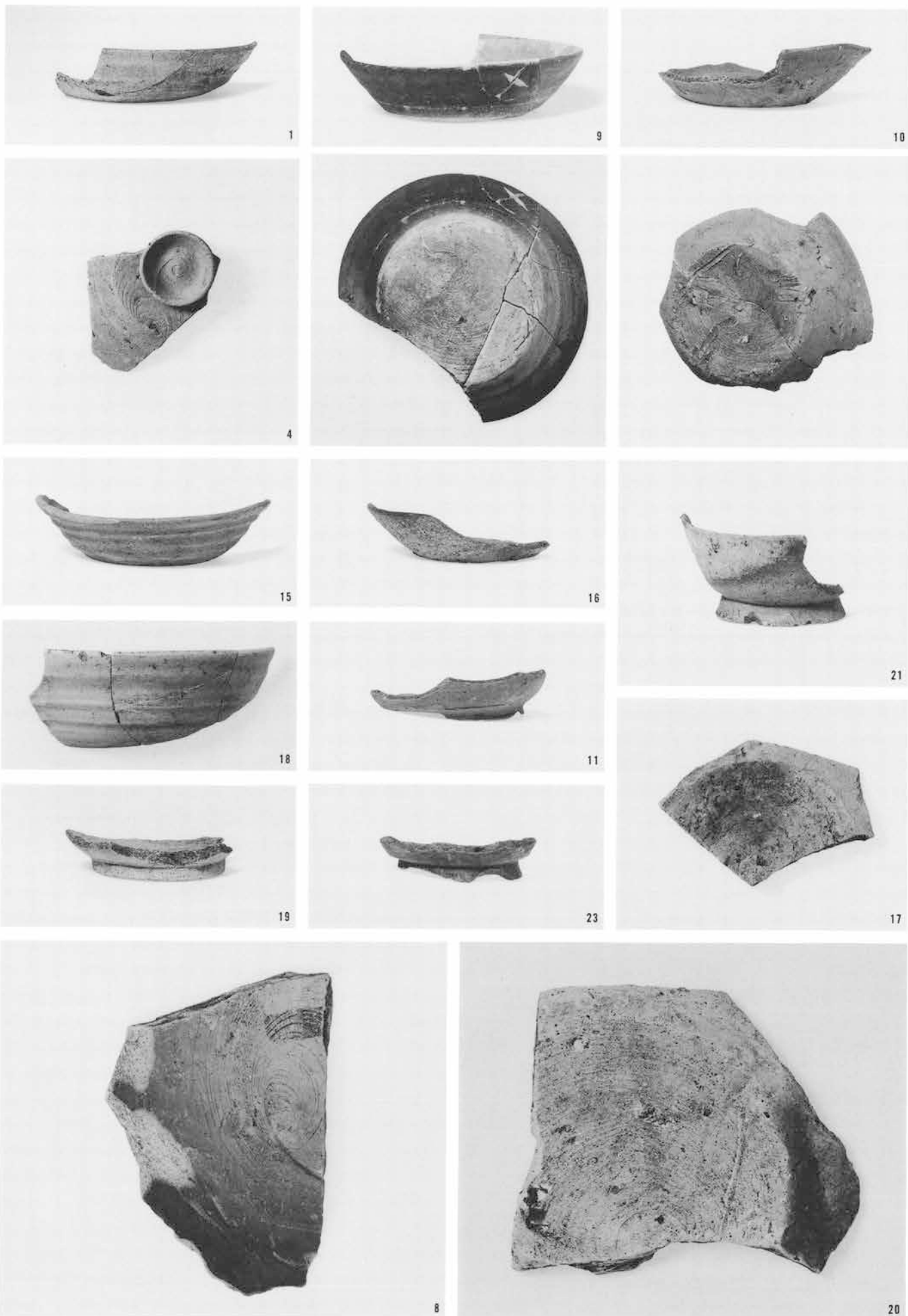


9

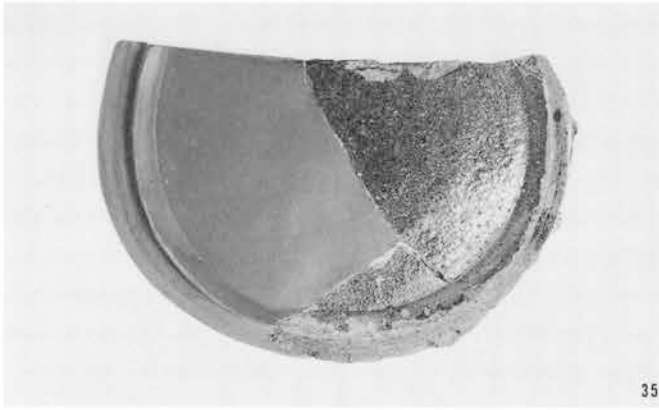


12

2 第6号住居址出土遺物



遺構外出土遺物（須恵器）



35



28



29



31



32



34



43



37



46



47



48



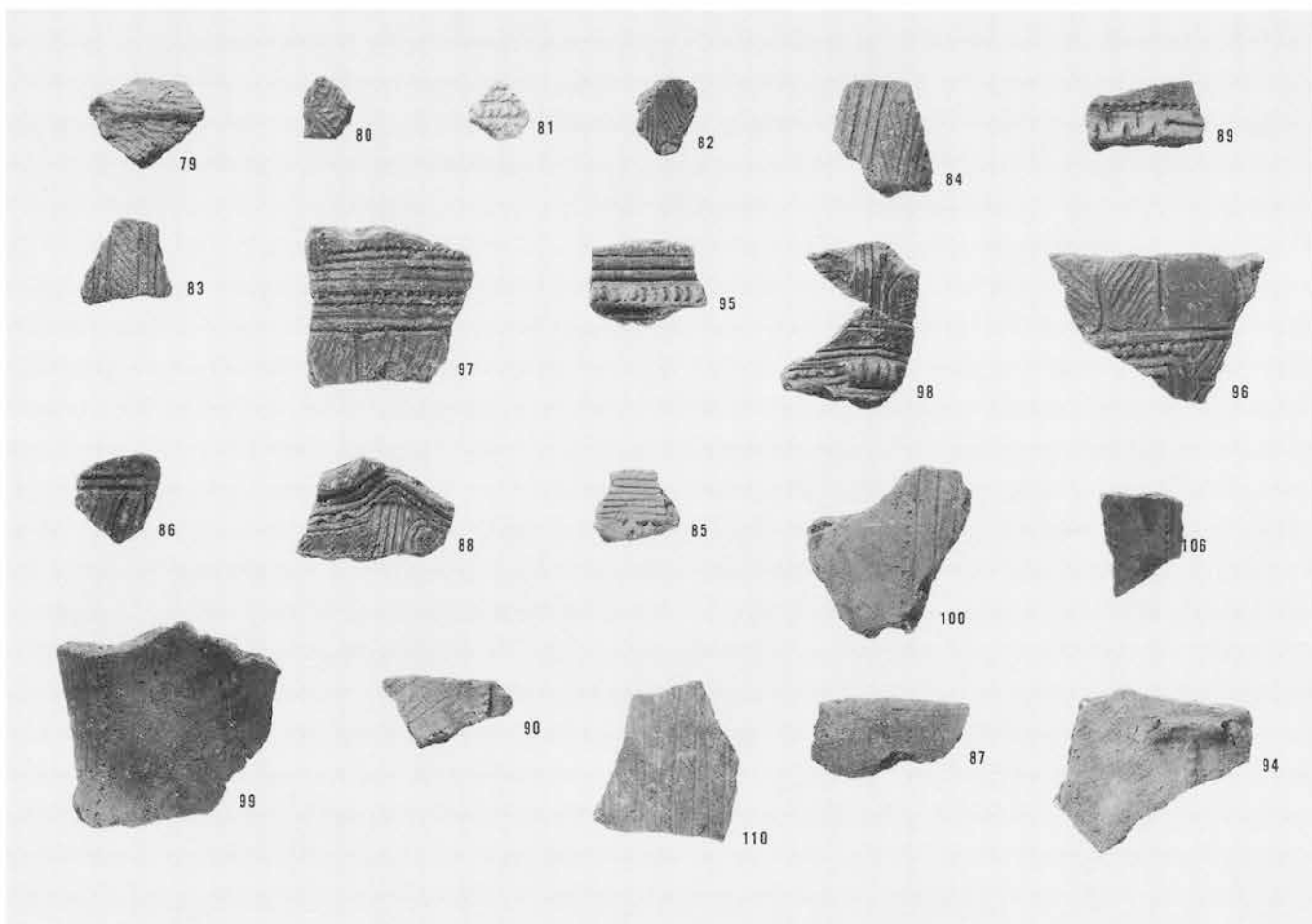
49



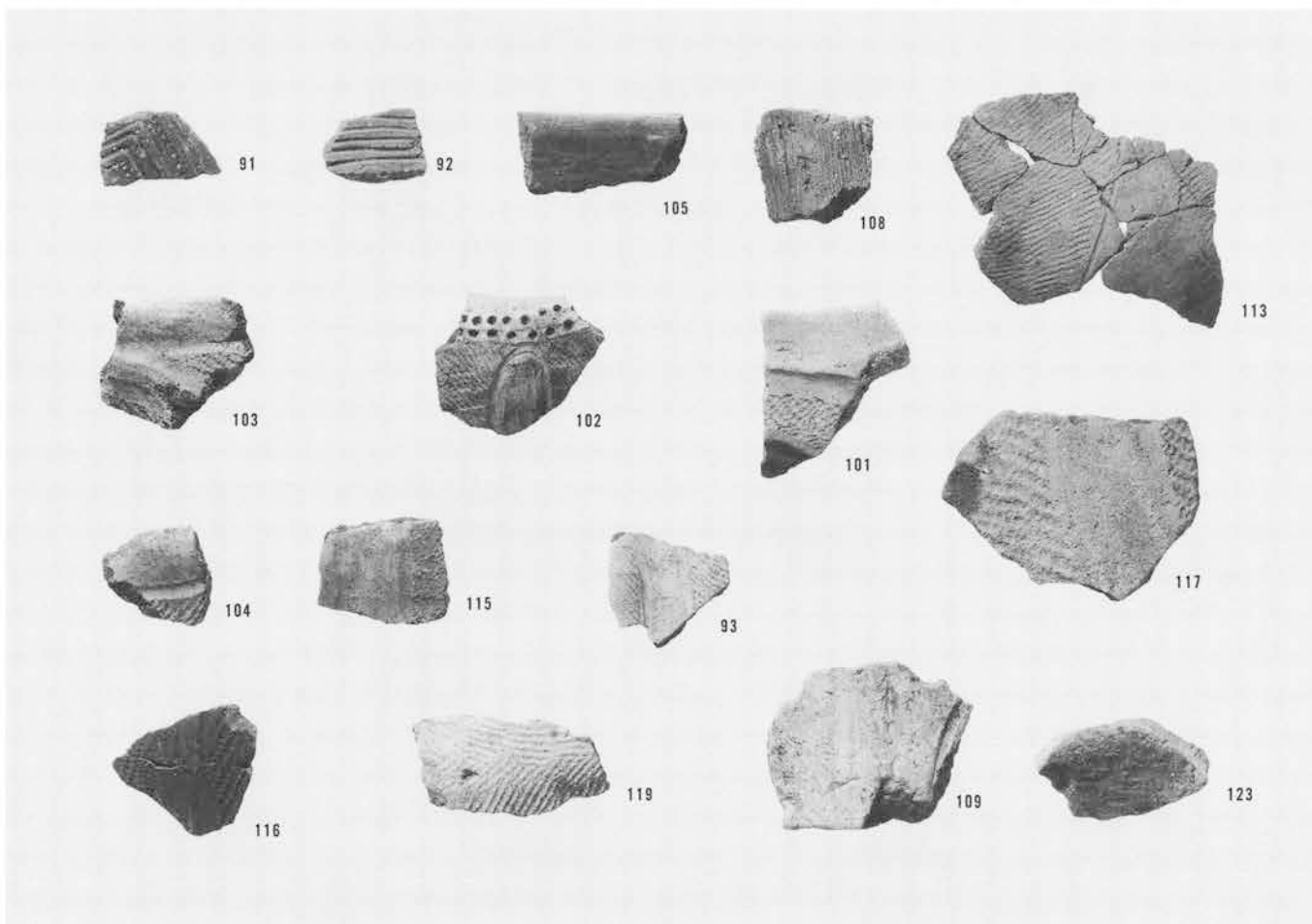
45

遺構外出土遺物 (須恵器)

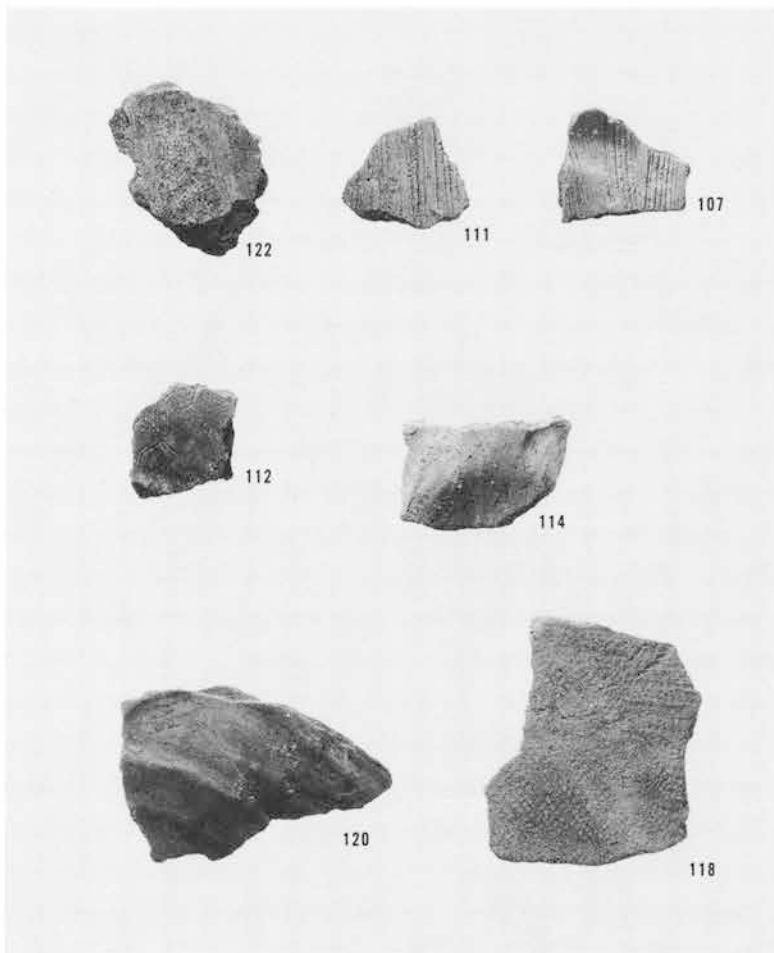


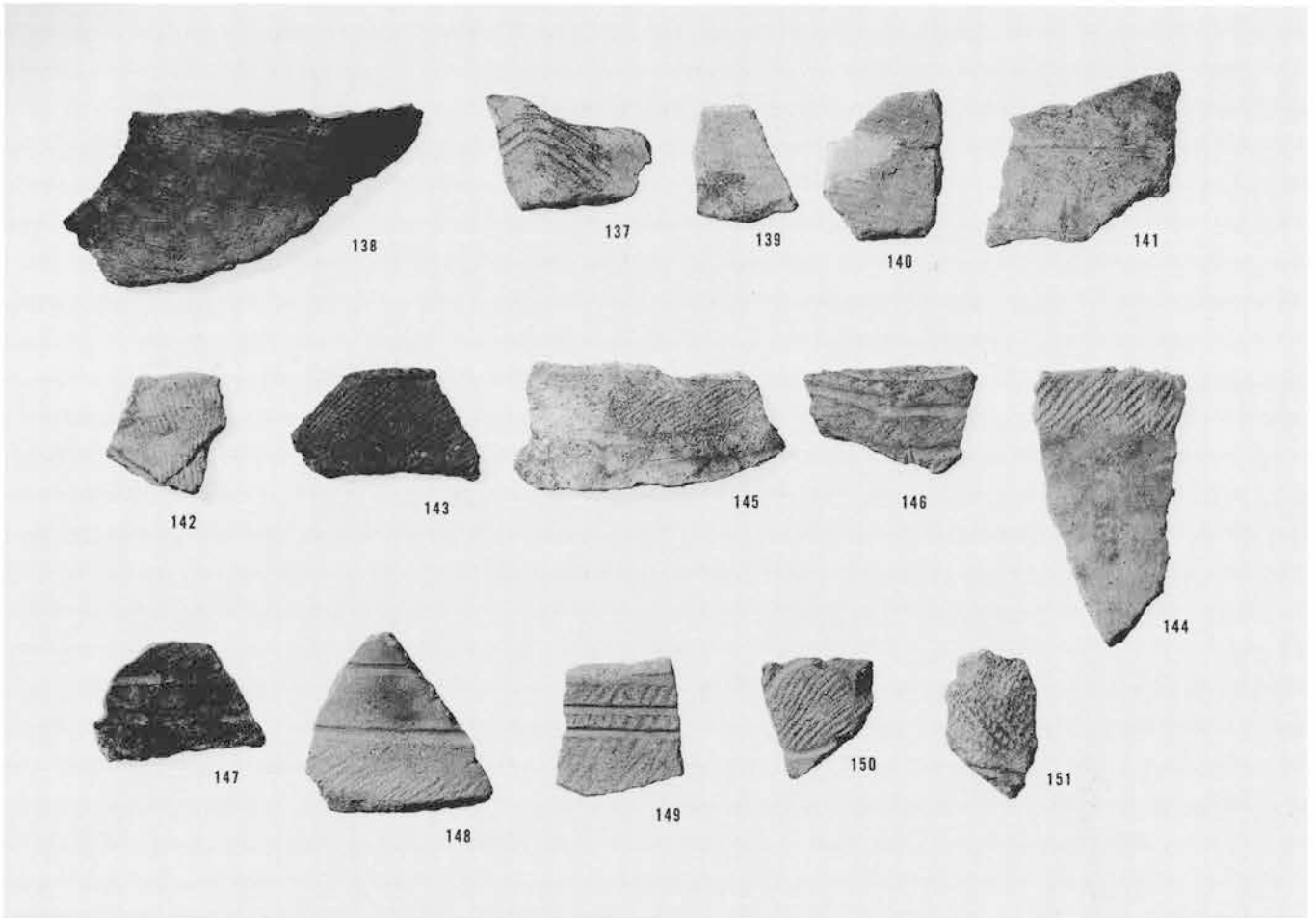


1 遺構外出土遺物（縄文土器）

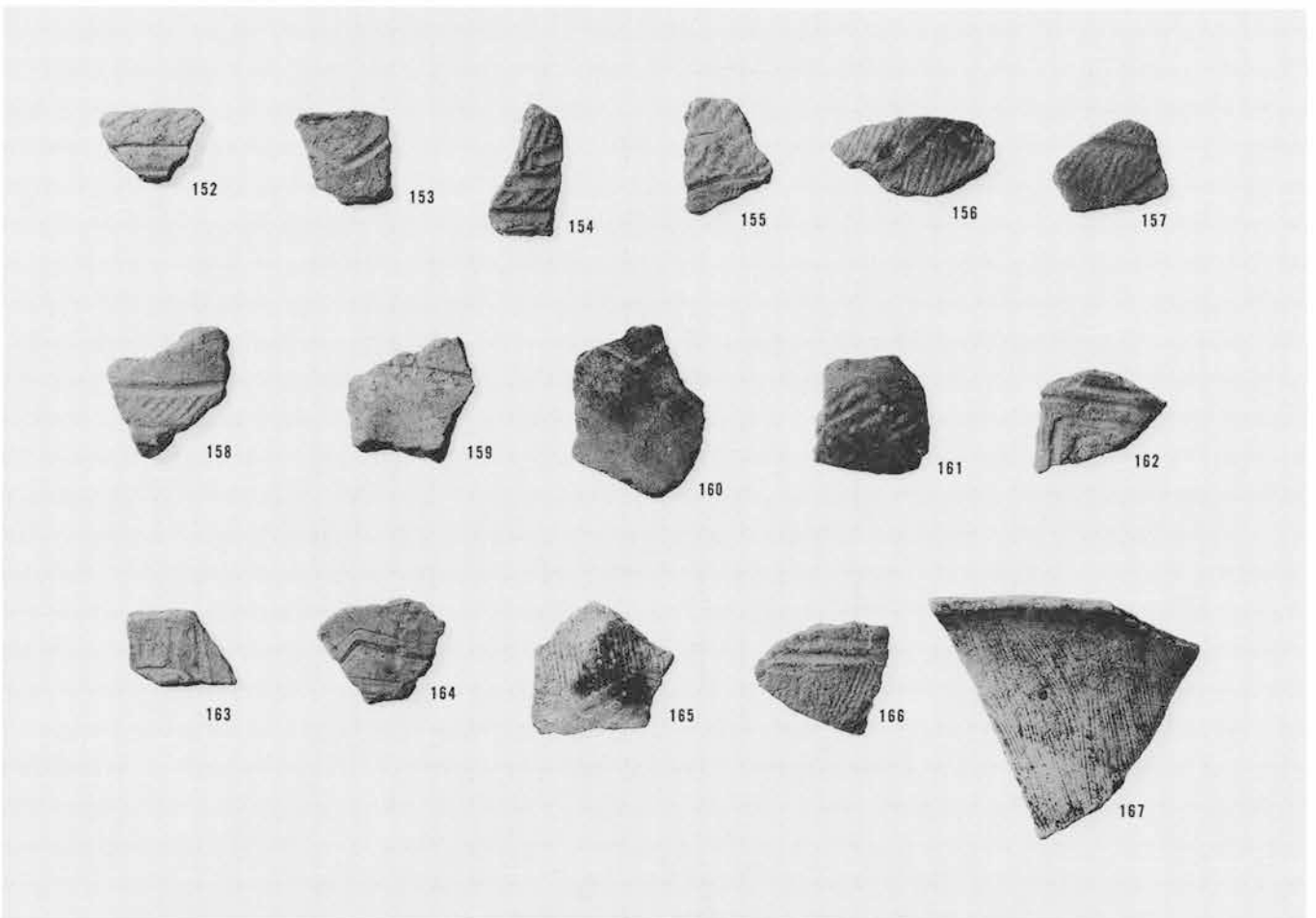


2 遺構外出土遺物（縄文土器）





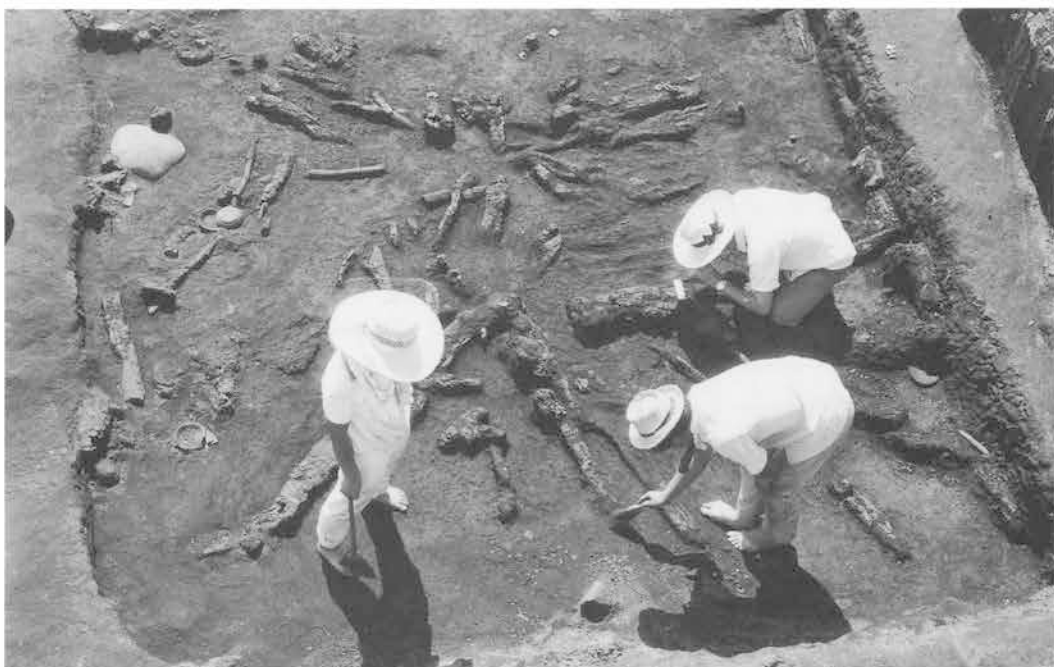
1 遺構外出土遺物 (弥生土器)



2 遺構外出土遺物 (弥生土器)



1 バイパス開通後の遺跡
(2000年7月)



2 作業風景



3 作業風景

報告書抄録

ふりがな	あたごやまいせき
書名	愛宕山遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第276集
編著者名	松島榮治・神保侑史・桜岡正信・植田弥生・石田一成・徳江秀夫
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年月日	2001年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あたごやまいせき 愛宕山遺跡	まついだまち 松井田町大字 まついだ あたごやま 松井田字愛宕山 1060他	10401		36° 19′ 15″	138° 48′ 31″	1971.07.21 ～08.09	約4,000㎡	国道18号（松 井田バイパス） 改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
愛宕山遺跡	集落	古墳時代後期 ～平安時代	竪穴住居 6 軒	土師器・須恵器 鉄器・石製品 木製品	第4号住居址は平安時代の所産。焼 失家屋のため土師器・須恵器の他、 鋸・小刀・紡錘車等の鉄製品、腰帶 具・万年通寶・木製品・布・建築部 材を出土。

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書第276集

愛宕山遺跡

一般国道18号（松井田バイパス）改築
工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成13年2月23日 印刷

平成13年2月28日 発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2

電話（0279）52-2511

印刷／上毎印刷工業株式会社